AREA CAMPUS MOGAMI

エリアキャンパスもがみ
研究年報２０１９

山形大学
Yamagata University

エリアキャンパスもがみ
研究年報　２０１９

「エリアキャンパスもがみ研究年報２０１９」発刊にあたって

エリアキャンパスもがみキャンパス長　玉手　英利

「エリアキャンパスもがみ」は、最上広域圏 8 市町村と山形大学が協力して最上地域における教育の発展と地域振興に資するための事業として 2005 年 3 月にスタートしました。以来、15 年にわたり多くの学生が最上地域において地域の皆様のご指導とご協力のもとで様々な学習をしてきました。「エリアキャンパスもがみ」の中心となる「フィールドラーニング―共生の森」の授業を履修した学生は累計で 3,471 名になり、地域社会のなかで若者を育てる山形大学の特徴ある教育プログラムとなっています。

この研究年報は 2019 年度の「エリアキャンパスもがみ」の活動を記録したもので、今回が第 14 号となります。第 1 部は事業内容の概要、第 2 部は「フィールドラーニング―共生の森もがみ」を受講した学生が作成した授業記録です。2019 年度の授業では前期に１６プログラム、後期に１０プログラムが実施され、新庄市、金山町、最上町、舟形町、真室川町、大蔵村、鮭川村、戸沢村で、学生が地域の皆様のもとで様々な学習を行いました。授業記録には学生が自らの活動を振り返って、学んだこと、感じたこと、考えたことが率直に記述されています。それぞれのプログラムで設定された課題に対して、若者らしい発想と視点で取り組むなかで、地域社会に対する理解が深まったことが見て取れます。このような教室の座学では得られない貴重な学習体験は、これからの彼らの人生において必ず糧になるものと信じております。

「エリアキャンパスもがみ」は最上広域圏での高等教育に対する最上広域圏 8 市町村の皆様の熱い思いと、地域創生・次世代形成を掲げる山形大学の教育理念が呼応して進められてきました。近年、運営費交付金の減少や人員の削減、大学の活動評価における評価指標の変化など、地方国立大学を取り巻く状況が厳しさを増しておりますが、「エリアキャンパスもがみ」に対する学生と地域の皆様の期待に応えるべく、これからも本事業に取り組んでまいりますので、どうか変わらぬご支援を賜りますようにお願い申し上げます。

目　次

「エリアキャンパスもがみ研究年報2019」発刊にあたって
エリアキャンパスもがみキャンパス長　玉 手 英 利 ・・・・ 2

第一部　研究年報

第1章　エリアキャンパスもがみ令和元年度事業の概要 ・・・・・・・・・・・・・・ 5

第2章　初年次教育　フィールドラーニング－共生の森もがみ ・・・・・・・・・ 8

第3章　もがみ専門科目 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

第4章　もがみ活性化事業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

第5章　今後の展望 ・・ 30

第二部　授業記録

前期プログラム「フィールドラーニング－共生の森もがみ」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

後期プログラム「フィールドラーニング－共生の森もがみ」 ・・・・・・・・・・・・・・ 154

エリアキャンパスもがみ関係者名簿 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 211

第一部　研究年報

第１章　エリアキャンパスもがみ 令和元年度事業の概要

Ⅰ　エリアキャンパスもがみの概要

１　はじめに

山形大学は、過疎化の進む最上広域圏全体をキャンパスに見立てて教育・研究・地域貢献を展開する「エリアキャンパスもがみ」を平成 16 年度に発足させた。

エリアキャンパスもがみでは、「自然と人間の共生」をキーワードに、大学と最上広域圏双方の人材育成と活性化を図ることを目的に、自然や伝統文化を活用した実践的活動について、その知識や知恵、ノウハウを、最上広域圏全体で共有・活用するだけでなく、地域の教育資源として教育活動に活用している。

特に教育活動については、本学の初年次教育の展開に活用しており、本学の学生は、社会性や課題探求能力を身につけるために、地域の講師と子供から老人までの幅広い世代の住民を交えた現地体験型授業や課外活動に参加している。

２　これまでの経緯

県の北東部に位置する最上広域圏は、南西に最上川が流れ、一部盆地を含む大部分が山岳・丘陵地帯の自然豊かで市町村毎に独自の文化を有する農山村地帯である。その一方で、8 市町村のうち 6 町村が「過疎地域自立促進特別措置法」に基づく過疎地域に指定されている状況にある。

また、最上広域圏は大学・短大が一つもない県内唯一の広域圏であり、山形大学は、平成 16 年度に最上広域圏の 8 市町村と包括協定を締結し、広域圏全体をキャンパスとする「山形大学エリアキャンパスもがみ（以下、ＹＡＭ）」を設立し、総合大学として組織的な地域貢献の挑戦を開始した。

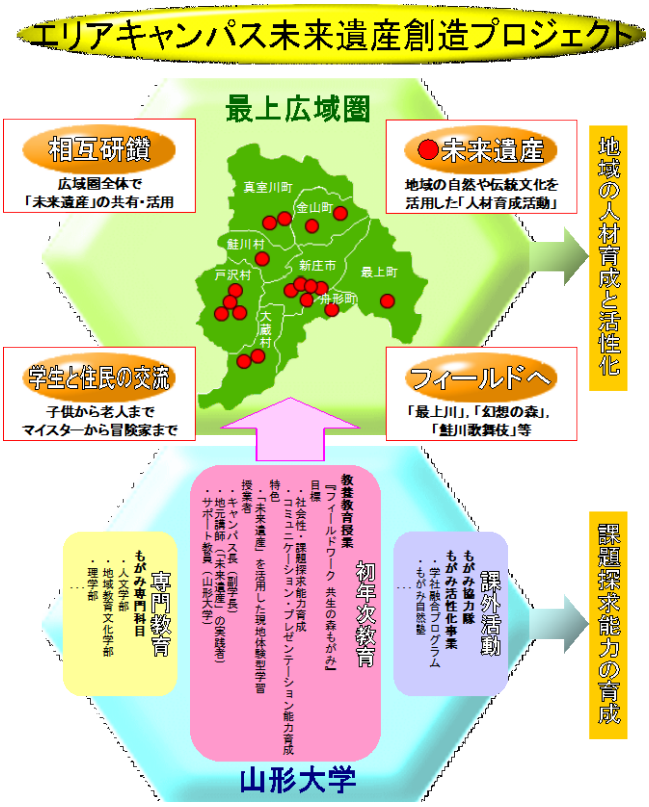
ＹＡＭは、地域の自然や伝統文化などを教育資源として活用し、学生自らが現代社会の課題を発見し、探求し、解決するためのフィールドとして好適な場である。ＹＡＭの開設以降、最上広域圏を活性化する様々な事業（以下、それらを総称して「もがみ活性化事業」と呼ぶ）を立ち上げ、多くの学生が課外活動として参加し、学生と住民の交流の中から、地域活性化の新たなシーズが生み出されてきた。

平成 17 年、大学は、ＹＡＭのこれまでの活動を振り返り、学生に社会性を持たせ、広い視野の下、課題探求能力を伸ばしていくには、柔軟性に富んだ初年次の学生を対象とした基盤教育の授業を立てることが必須である、と考えた。

そこで、地域からの申し出もあり、地域の方を講師として、学生と住民、特に子供たちが現地で一緒に活動することができる初年次の全学生を対象とした基盤教育授業『フィールドワークー共生の森もがみ』を平成 18 年度から開講することとした。

この初年次の基盤教育授業を骨格として、それに学部の専門教育の授業と課外活動を連携することによって、地域に根ざした実践的な課題探求能力を育成することになった。

なお、これらの取組については、「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト」として、平成 18 年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代ＧＰ)」に採択された。



「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト概念図」

３　目標

エリアキャンパスもがみでは、次の 2 点を目標に掲げ活動を行っている。

（１）大学生に対する教育

①過疎化、少子高齢化、環境などの現代社会が直面する課題発見・探求・解決能力を向上する。②社会性を向上する。③コミュニケーション能力を向上する。④プレゼンテーション能力を向上する。⑤豊かな地域社会の建設に関わる人材を輩出

する。

（２）最上広域圏の人材育成と活性化

①未来遺産の共有・活用・発展を図る。②地域の自然や文化を子供たちに伝える。③子供たちの地元に対する誇りを抱かせる。④情報発信力を向上する。⑤豊かな地域社会の建設に関わる人材を輩出する。

４　運営体制

ＹＡＭの運営体制は、小白川キャンパス長がエリアキャンパスもがみのキャンパス長を務めており、ＹＡＭの運営の中核をなす「運営会議」は、山形大学と最上広域圏から選出された委員で構成されている。

山形大学の運営委員は、キャンパス長、教員 8 名、事務職員２名、で構成されており、最上広域圏の運営委員は、各市町村の教育長８名、芸術や産業など各分野の代表５名で構成されている。

また、現地に最上広域圏の事務職員が常駐する「最上事務局」を設置し、ＹＡＭを円滑に運営するための、橋渡し役を担っている。

本プロジェクトの関連経費は、各事業の内容に応じて大学と各自治体で応分に負担している。また、地元講師の謝金等は市町村が負担する寄付授業となっている。

５　教育改革への有効性

（１）教育課程、教育方法等の創意工夫

「フィールドワークー共生の森もがみ」は、正規の授業を地域の人材育成活動と連結させている点に特色があり、学生は、初年次の授業で地域に出て、社会性と課題探求能力を身に付け、それを大学の在籍期間を通して、専門教育と課外活動で伸ばしていくことができる。そのために、本授業では、次のような創意工夫を行っている。

①授業そのものが地域のニーズに基づいたもので構成され、地域の活性化に直接結びついている。

②現地で行う体験型学習となっている。

③現地にいるその道の達人が講師として直接指導に当たる。

④開講日を土・日曜日にすることによってたくさんの住民が参画できる。

⑤学生は子供の指導に関わることによって責任感を持つ。

⑥この授業は､「大学コンソーシアムやまがた」の単位互換協定に基づき県内の大学・短大生が履修できる。

（２）期待できる成果等の教育改革への有効性

地域活動が活発になればなるほど、教育面での受益者は増すという相乗効果が期待できる。授業「共生の森もがみ」で、学生は世代の異なる住民と交流することによって、社会性が増し、「過疎化」「少子高齢化」「環境」などの現代的な問題群と向き合うこととなる。多くの学生にとって、このような日本が直面している現代的な問題に対峙し、それを考えることは、これからの我が国の発展のために大きな意義がある。

Ⅱ　事業実施計画

１　基本的な年間スケジュール

４月　もがみ担当者会議
　　前期授業｢フィールドラーニングー共生の森もがみ」と「もがみ活性化事業」開始

７月　エリアキャンパスもがみ運営会議
　　前期フィールドラーニング活動報告会

９月　もがみ担当者会議

10 月　後期授業の開始
　　エリアキャンパスもがみ懇談会

２月　後期フィールドラーニング活動報告会

３月　エリアキャンパスもがみ運営会議
　　研究年報刊行

２　令和元年度実施事業

（１）教育活動　※事業詳細は第４章を参照

①初年次教育

「フィールドワークー共生の森もがみ」

【前期】16 プログラム

【後期】10 プログラム

②主なもがみ専門科目

・地域教育文化学部「教育実践実習」新庄市

・大学院教育実践研究科（教職大学院）

「学社融合の実践と課題」戸沢村

など

（２）もがみ活性化事業

①山形大学見学旅行

・真室川町立真室川あさひ小学校

(4 年生10 名) 6 月26 日（水）

・新庄市立新庄小学校

(4 年生53 名) 6 月28 日（金）

・新庄市立萩野学園
　　(4年生32名) 6月28日（金)

②学習支援ボランティア活動
・舟形町立舟形中学校
　　7月 31 日(水)～8月 2 日(金)3名参加

③フィールドラーニング応用編

（３）学生支援事業
吉田奨励金（エリアキャンパスもがみ後援会）
　地域教育文化学部２年　大泉　有理紗

（４）広報事業
・エリアキャンパスもがみ研究年報 (3月)

第２章　初年次教育
フィールドラーニングー共生の森もがみ

Ⅰ　意義

本授業は、山形大学の全学共通教育である基盤教育の正規の授業として開講された。本授業の特色は、①初年次教育、②全学共通教育、③現地体験宿泊型学習、④少人数教育、⑤山形大学の理念「自然と人間の共生」の具現化、⑥自然豊かな農山村地の活用、⑦現地講師による指導、である。

初年次教育は、通常、アメリカで初年次の学生の退学を防ぐことを目的として、大学への適応を意図した教育プログラムを指す。初年次学生の退学者が少ない日本ではおかれている情況がアメリカとは大きく異なっており、そこから必然的に初年次教育はアメリカのそれと異なったプログラムとなる。

我々がこの授業を初年次教育として強く意識しているのは、本学の学生は一年目に基盤教育を受講し、その後は各学部で専門課程を受講することから、専門に入る前に学問の専門性を超えた社会に対する問題意識を持ってもらいたいということである。

混沌とした社会においては、これが問題ですよというように、はっきりとしたかたちでは現れてはくれない。急激に変化する時代にあって、我々の知恵と感受性で問題を主体的に拾い出していくしかない。それが現代の市民に求められている。社会に主体的に関わっていくためには、自分で問題を発見していく能力を養っていかなければならないのだ。この授業の教育目標は、社会の様々な事象の中から学生自らが問題を発見することにある。

山形大学は 6 学部からなる総合大学であるが､6 学部の学生が交流する機会はそれほど多くない。学生は学生の交流の中から自らを発見していく。本授業は全学共通教育の特性を活かして、学部を越えた学生の交流を図っている。

現代の若者は体験が少なくなっている。大学教育において意図的にこの体験を増やしていくしかない｡リアルな体験を通して､学生の思考を深め、社会性を涵養させ、行動的にしていくことが求められている｡そこでこの体験を濃密にするために、現地体験宿泊型学習を導入した。土・日曜日の宿泊型にすることによって、平日の授業と競合することがない。また、食事や宿泊を共にすることによって、人間関係が濃密になる。

この授業は 10 名程度の少人数教育となっており、地域の講師の人々との交流が密になり、教育効果もあがるように設計されている。

山形大学の理念である「自然と人間の共生」を教育に反映するために、この自然豊かな「エリアキャンパスもがみ」を活用する。しかし、同時に、そこは少子高齢化、過疎化の進む現代の課題の先進地域でもある。こうして、学生が多くのことを考える場になっている。

この授業の大きな特色は、現地の達人を講師とし、この達人を中心とした授業を地元の方と大学で設計し、実施している点にある。大学という学問に立脚した知の拠点が、学問的知を越境し、社会的、日常的、実践的な知に踏み込む教育活動でもある。このことは教育の主役を教員から学生に重心移動したことの一つの表れでもある｡つまり、学生にいま必要なことは何なのかを問い詰めていけば、授業において様々な可能性を試していかなければならない時代に入ったということが考えられる。学生は現地講師を通して、コミュニティということを意識し、故郷や家庭、そして自己を再考するきっかけとなっている。

本授業のもう一つの重要な側面は、この授業を学生教育だけでなく地域活性化のために活用するという点にある。では、この大学の授業が地域活性化にどのように貢献するのであろうか。

一つには、大学がなく若者があまりいない地に学生が入るだけで活性化される。学生が入ることは授業でなくてもいいのだが、正規授業でもなければ学生が観光地でもない遠隔地に集団で入ることはまずない。

二つ目は、授業の中に子どもを含めた地域住民との交流が入っており、学生と地域住民との交流が密になる。そこには、大学生による地域の子どもたちの指導なども組み込まれている。

三つ目は、全国から集まった大学生の新鮮な眼によって、地域が再発見されていく。そのことによって、地域の人々に地元の誇りが醸成される。

四つ目は、学生によってまちおこしなどの具体的な提言がなされる。

この授業によって上記のような地域活性化が考えられるが、実際にはことはそううまくは運ばない。授業に参加する学生は一年生であって、学問的な専門性を身につけているわけではない。そこで、専門的な視点からの提案を求めることはほとんど不可能である。また、現実には熱意のない学生が参加することも十分に考えられる。

この授業を大学と地域の双方に利益がある形に高めていくためには、これからのたゆまぬ授業改善が必要である。特に、上記の特性を踏まえた綿密な授業設計が重要である。このことは最終章で再考する。

Ⅱ　令和元年度シラバス

【前期】フィールドラーニングー共生の森もがみ
（領域：山形から考える）
【後期】フィールドラーニングー共生の森もがみ
（領域：学際）
【担当教員】阿部宇洋、小田隆治
（教育開発連携支援センター）
【授業概要】
・授業の目的
自然豊かな最上広域圏でのフィールドラーニングを通して、地域の文化や歴史、自然等だけでなく、過疎化、少子高齢化等の現代日本が直面する諸問題を地域の人たちと共に学び、実践的な視点から知識を獲得し、山形から日本、世界及び過去から、現在、未来の空間及び時間軸で現象を把握する力を養う。
・授業の到達目標
課題発見能力、課題探求能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、行動力、社会性の基礎的な力を身につけること。
【授業計画】
・授業の方法
この授業は、各自が以下のプログラムから１つを選択して受講します。各プログラムはオリエンテーションから始まり、事前学習の後、1 泊 2 日のフィールドラーニング×2 回と中間学習、事後学習を行います。2 回目のフィールドラーニング終了後に最終レポートを提出してもらいます。また、フィールドラーニング終了後には、学びの成果を示す「活動報告会」を行います。これら全ての活動が成績評価の対象となります。

〔前期プログラムリスト〕
①「新庄まつりとオレ」～日本一の山車行列～（新庄市）
②「作陶に挑戦！」新庄東山焼の世界（新庄市）
③地域の資源を活かし山屋の魅力を探る（新庄市）
④マルシェ“本活プロジェクト”～本と人をつなげる出前図書館～（新庄市）
⑤山間地で感性を豊かにしよう（金山町）
⑥歴史的地域資源の保存と活用を考える（金山町）
⑦森と人との共存を考えるⅠ～山間地の歴史を探り地域振興へ【地域マップ作り】～（金山町）
⑧最上町の人・自然・文化に触れよう①（最上町）
⑨里地里山の再生Ⅰ（舟形町）
⑩中村湿原のみらいを考える～環境保全と観光利用の両立～（真室川町）
⑪子どもの自然体験活動支援講座①（真室川町）
⑫大蔵村の生活と伝統の継承（大蔵村）
⑬鮭川歌舞伎今昔物語～地歌舞伎の歴史と未来を考える～（鮭川村）
⑭戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生き様に学ぶ（戸沢村）
⑮里山保全と山菜料理（戸沢村）
⑯伝承野菜栽培と角川のパワースポット巡り（戸沢村）
以上、16 プログラム

〔後期プログラムリスト〕
①七所明神伝説と地域活動のあり方を探る（新庄市）
②新庄伝統の民俗文化を体験しよう～隠明寺凧と昔語り～（新庄市）
③謎を解き郷土料理を作ろう＆商店街のオリジナルマップ作り（新庄市）
④森と人との共存を考えるⅡ～山間地の文化を探り地域振興へ～（金山町）
⑤最上町の人・自然・文化に触れよう②（最上町）
⑥里地里山の再生Ⅱ（舟形町）
⑦子どもの自然体験活動支援講座２（真室川町）
⑧人と自然をつなぐ環境保全活動（鮭川村）
⑨里山保全とキノコ料理（戸沢村）
⑩創作太鼓と冬の里山ぐらし体験（戸沢村）
以上、10 プログラム

・授業日程
① プログラムの紹介・プログラム選択希望調査
前期　4 月 8 日（月）16:30～　221、222 教室
後期 10 月 8 日（火）16:30～　221 教室

② オリエンテーション班編制・顔合わせ・フィールドラーニングの心構えについて
前期　4 月 23 日（火）16:30～　112 教室
後期 ①10 月 16 日（水）16:30～　124 教室
②10 月 28 日（月）16:30～　111 教室

③ フィールドラーニング活動実施
前期　5 月 11 日～ 7 月 14 日
後期 10 月 26 日～ 1 月 12 日

④ 活動報告会
前期　7 月 26 日（金）16:30～　112 教室
後期　1 月 31 日（金）16:30～　112 教室

【学習の方法】
・受講のあり方
1) 安全第一を心がけ、積極的に活動に参加してください。
2) 専門分野の方法論や数値的なデータだけではなく、フィールドラーニング（あるく・みる・きく）で集めたデータをもとに考えるよう心がけてください。「現場で考える」「体で考える」（もちろん頭も使います）ことが合言葉！そして、自分の想像力を大事にしてください。
・授業時間外学習へのアドバイス
1) オリエンテーションで配布される「しおり」

を熟読し、内容を理解して授業に臨んでください。

2) オリエンテーションでの詳細説明に基づき、①事前学習、②中間学習、③最終レポートに取り組んでください。また、フィールドラーニング中はこまめに記録ノートを作成するよう努めてください。

3) フィールドラーニング終了後、活動報告会に向けて準備を進めてください。方法については説明会を開催し､発表指導を2回行います。

4) 後期科目（応用と学際）と連続して取得することも可能です。そのため、四季を通して最上広域圏を比較体験することができます。

【成績評価】

・基準

1) 地域での活動により課題を発見し、探求により深め、活動報告会の発表により他者に伝える事が出来たかどうかを評価の基準とします。

2) 一連のグループ学習の中でコミュニケーション能力や主体的学習力、社会性などを発揮できる事を評価の基準とします。

・方法

フィールドワーク活動への参加度　３０％
活動報告会での発表の完成度　２０％
現地講師による活動評価　４０％
受講生による相互評価　１０％

【テキスト・参考書】

オリエンテーションで配布する「しおり」を参照するほか、活動中に地域で配布される資料を活用してください。

【学生へのメッセージ】

最上広域圏は、学生諸君を温かく迎え入れてくれるでしょう。是非、もがみを見て、聞いて、感じて（味わって）、「共生の森」のパワーを体全体で吸収してきてください。本授業は宿泊や実技体験を伴いますので、参加費が必要となります。（詳細は、プログラム説明会の際に説明します。）

【オフィスアワー】

調査研究等で不在になる場合があります。適宜対応致しますが、事前にアポイントをとっていただくことを推奨します。

Ⅲ　受講者数

プログラムNo.	前期開講プログラム	受講者
1	「新庄まつりとオレ」～日本一の山車行列～	12 人
2	「作陶に挑戦！」新庄東山焼の世界	11 人
3	地域の資源を活かし山屋の魅力を探る	10 人
4	マルシェ“本活プロジェクト”～本と人をつなげる出前図書館～	10 人
5	山間地で感性を豊かにしよう	9 人
6	歴史的地域資源の保存と活用を考える	8 人
7	森と人との共存を考えⅠ～山間地の歴史を探り地域振興へ【地域マップづくり】～	10 人
8	最上町の人・自然・文化に触れよう①	10 人
9	里地里山の再生Ⅰ	10 人
10	中村湿原のみらいを考える～環境保全と観光利用の両立～	10 人
11	子どもの自然体験活動支援講座①	14 人
12	大蔵村の生活と伝統の継承	14 人
13	鮭川歌舞伎今昔物語～地歌舞伎の歴史と未来を考える～	7 人
14	戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生き様に学ぶ	15 人
15	里山保全と山菜料理	12 人
16	伝承野菜栽培と角川のパワースポット巡り	12 人

プログラムNo.	後期開講プログラム	受講者
1	七所明神伝説と地域活動のあり方を探る	10 人
2	新庄伝統の民俗文化を体験しよう～隠明寺凧と昔語り～	5 人
3	謎を解き郷土料理を作ろう＆商店街のオリジナルマップ作り	9 人
4	森と人との共存を考えⅡ～山間地の文化を探り地域振興へ～	10 人
5	最上町の人・自然・文化に触れよう②	5 人
6	里地里山の再生Ⅱ	6 人
7	子どもの自然体験活動支援講座２	12 人
8	人と自然をつなぐ環境保全活動	5 人
9	里山保全とキノコ料理	11 人
10	創作太鼓と冬の里山ぐらし体験	10 人

Ⅳ　活動報告会

１　前期フィールドラーニング－共生の森もがみ

日時：7月26日(金)16:30～
場所：基盤教育1号館112教室

２　後期フィールドラーニング－共生の森もがみ

日時：1月31日（金）16:30～
場所：基盤教育1号館112教室

Ⅴ　授業改善アンケート結果について

本年度に実施した授業改善アンケートについて、前期 158 人（回収率 90.8%）及び後期 82 人（回収率 100%）から回答があった。

アンケート結果については、表のとおりであり、基盤共通教育科目全体の平均値と比較してみると、総じて学生の満足度が高いことが読みとれる。

表：「前期フィールドラーニング－共生の森もがみ」および「後期フィールドラーニング－共生の森もがみ」の授業改善アンケート結果と基盤教育科目全体の平均値との比較

①前期

質問項目	FW	全体平均
この授業を意欲的に受講しましたか	4.7	4.3
この授業の内容を理解できましたか	4.7	4.3
考え方、能力、知識、技術などは向上しましたか。	4.7	4.3
自ら学ぶ意欲は湧きましたか。	4.6	4.1
自ら進んで課題を発見し、探求する力が身につきましたか。	4.6	4.1
教員に熱意は感じられましたか。	4.5	4.5
考え方（教授法）はわかりやすかったですか。	4.4	4.4
教員の一方的な授業ではなく、コミュニケーションはとれていましたか。	4.5	4.2
板書や配布物、提示資料は読みやすかったですか。	4.3	4.2
教員は教室内の勉学の環境を良好に保つよう、配慮していましたか。	4.3	4.4
この授業を総合的に判断すると良い授業だと思いますか。	4.6	4.4

②後期

質問項目	FL	全体平均
この授業を意欲的に受講しましたか	4.8	4.4
この授業の内容を理解できましたか	4.8	4.3
考え方、能力、知識、技術などは向上しましたか。	4.7	4.3
自ら学ぶ意欲は湧きましたか。	4.7	4.1
自ら進んで課題を発見し、探求する力が身につきましたか。	4.6	4.0
教員に熱意は感じられましたか。	4.8	4.6
考え方（教授法）はわかりやすかったですか。	4.6	4.4
教員の一方的な授業ではなく、コミュニケーションはとれていましたか。	4.8	4.4
板書や配布物、提示資料は読みやすかったですか。	4.5	4.3
教員は教室内の勉学の環境を良好に保つよう、配慮していましたか。	4.7	4.4
この授業を総合的に判断すると良い授業だと思いますか。	4.7	4.5

「フィールドラーニング
ー共生の森もがみ」コラム
民族的の視点～巨大な民族から見た山形～

山形大学　学術研究院　阿部宇洋

2019 年 11 月、私は中国雲南地域に少数民族の調査に同行することになった。詳しい経緯は省略するが、中国には少数民族とよばれる部族が５５族いるといわれ、日本で政治的に報道されるチベットウイグル族もまた、中国の少数民族である。

雲南の少数民族の生活は現在の日本に比べると前時代的である。たとえば物の運搬には背負子を利用していたり、馬の背に乗せて運搬したりしている。

日本に帰国してその調査写真を友人に見せたとき、「日本の江戸時代はこんな感じだったのだろう」とつぶやいたのが印象的であった。

写真　荷馬（中国雲南省紅河県にて）

現地での話に戻るが、中国現地で講演した際、自己紹介で「日本の東北地方、山形県にある山形大学から来ました。」と伝えても当然知らない。そこで、「阿信（おしん）のふるさとからきました」というと通じるのだから「おしん」というコンテンツの偉大さに驚く。講演が終わり、手土産で持参した「原方刺子（※１）」のコースターを進呈すると、現地の先生に「あなたも少数民族ですか」と質問されたのである。原方刺子は米沢藩下級武士の妻が編み出した技術とされ、伝承され地域も限られている。

そのとき、気づかされた事がある。中国という巨大な、またその多くを占める漢民族から見れば、日本の山形、４地域（庄内、最上、村山、置賜）などは少数民族の分布に見えるということを。

少数民族の定義は、多様に存在するが、民俗的ではなく民族的な視点で見ると、山形県も食文化、伝統文化、宗教など簡単に少数民族のカテゴリーに分類できるのではないだろうか。県民性の研究に近い視点であろう。

山形県の４地域に至っては、近世からの支配制度が大きく影響しているのは間違いないが、その支配というのが江戸幕府による直轄統治で、全てを一色に染めることではなかった。明治大正昭和と大日本帝国として近代化、一色化が進んだとはいえ、生活の基盤になっていた食や生活文化はその地域の風土に根ざしながらあまり変わることなく今も受け継がれている。

都市化や近代化というモダンなフレーズに踊らされずに、地に足ついて風土にあわせた生活が特色や魅力を創出するために不可欠なのだと実感する。

最上地域での活動においても、みずからの特徴を精錬されるにも、様々な視点から光をあてることは自明であるが、少数民族としての最上人として考えると面白い味方になりそうである。

　さて、おしんの件にはまだ続きがある。「あんなに貧しい所から、、、。いらっしゃったのですか。大変でしたね。」が必ずつくのであるが、その発言の背景には貧しくもたくましく生きるおしん（山形人）への羨望があることは間違いない。と思いながら異国での講演を終えたのであった。

※１　山形県米沢市に伝わる刺子。

第３章　もがみ専門科目

Ⅰ　地域教育文化学部
“新庄市での教育実習（もがみ教育実習）”

山形大学大学院教育実践研究科　江間史明

１　「もがみ教育実習」の 13 年の歩み

新庄市での教育実習プログラムは、学生が、実習期間中（3 週間）、新庄市内に合宿して実習を行うという現地滞在型の教育実習である。「小規模から中規模までの学校を実習校に選べる」「地域の人々を交えた懇談会の開催」など、学校での授業実習に加えて、広く地域と関わって教育実習を行えるという特徴を持つ。新庄市教育委員会の全面的なバックアップによるものである。

この教育実習は、平成 18 年度にスタートし、次の表１のように実習生が参加してきた。

表１　新庄市の教育実習実施状況

年 平成	2 年基礎実習 (1 週間)	3 年実践実習 (3 週間)	栄養 実習	合計 (人)
18	8			8
19	18	10		28
20	15	11		26
21		14		14
22		14		14
23		12		12
24		18(4 年生含)		18
25		20	2	22
26		25	4	29
27		20	6	26
28		24	4	28
29		12	6	18
30		16	6	22

平成 21 年度から、基礎実習(1 週間)は、附属学校で実施することになり、新庄市教育実習では実施しなくなった。山形大での栄養教諭の養成は、2019 年度で終わる。栄養教育実習は、平成 25 年度より平成 30（2018）年度までの実施であった。

この教育実習で学んだ学生からこれまで 8 名が最上地域の市町村で初任教師として第１歩を踏み出している。地域と大学が連携し、地域を担う教師を育てるという取組が、具体的成果を生みつつあると言える。

以下、2019（令和元）年度、14 回目をむかえた新庄市での教育実習について報告する。

２　新庄市教育委員会からの申し入れと実習生

平成 30 年 12 月 7 日付で、新庄市教育委員会よりエリアキャンパスもがみのキャンパス長あてに「山形大学地域教育文化学部教育実習の新庄市での実施について（要望）」（新学発第 5516 号）という文書が、提出された。

要望書は、平成 30 年度教育実習において、「実習校においても、教育実習生を受け入れることを大きな刺激として受け止め」ていたことを述べて、「新庄市ならではの少人数指導、小中一貫教育、地域と密着した教育活動」を活かし、平成 31 年度も引き続き新庄市での教育実習を継続して実施できるよう要望していた。新庄市教委は、平成 25 年度より教育実習の宿泊施設である山屋セミナーハウスの使用料（一人あたり 1 人 600 円×20 泊）を予算化して、充実した教育実習ができるように、宿泊施設の環境改善も行っている。

2018 年 12 月の学生オリエンテーションでこの実習への参加者を募り、2019 年度の新庄市の教育実習生は、最終的に次のようになった。

3 年生　21 名（小学校 16 名、中学校 5 名、）

３　2019 年度 教育実習への準備と指導体制

2019（令和元）年度の新庄市の教育実習は、次のように行われた。

○教育実践実習Ａ（3 年生、3 週間、小 16 名）
○教育実践実習Ｂ（3 年生、3 週間、中 5 名）
2019 年 8 月 26 日（月）～9 月 13 日（金）

小学校実習校は、7 校（新庄小、沼田小、北辰小、日新小、萩野学園（前期）、本合海小、升形小）、中学校実習校は、4 校（新庄中、日新中、明倫中、萩野学園（後期））であった。

この実習への準備として、7 月 31 日（水）に「山形大学エリアキャンパスもがみ教育実習打合会」を、わくわく新庄（新庄市生涯学習センター）で行った。大森桂学部長と江間が実習生と参加した。ここが、学生と実習校との顔合わせの場所になる。全体打合せのあと、学生は、自分が実習を行う学校を訪問して打合せをした。その後、宿泊場所の見学を行い、実習への準備をすすめた。

このプログラムは、現地滞在型（3 週間）の教育実習であるため、その宿泊先を確保する必要がある。この点については、新庄市教育委員会の特段のサポートにより、2019 年度は、女子学生は、新庄南高校同窓会館を利用することができた。

打ち合わせ会の様子

合宿形式の教育実習であるため、学生は、実習校から戻ると、自分たちで食事の準備をしつつ、互いの授業準備を協力して行う。新庄市教育委員会指導主事の学習指導案等の個別指導もあり、学生には充実した実習環境となった。

教育実習期間中、3 年生の実践実習については、地域教育文化学部の教員が研究授業を参観し、事後研究会にも可能な限り参加した。山形市など村山地域の実習校と同様の指導体制をとった。

４　「地域懇談会」の実施

地域懇談会は、9 月 6 日（金）の夕方に実施された。新庄市は、「小中一貫教育」を地域ごとに進めている。懇談会には、新庄市教育委員会、各実習校の校長および保護者代表者が参加し、大学側からは、江間が参加した。

今年の懇談会のテーマは、「地域とのつながりを大切にした活動」であった。学校区ごとに 10 グループに分かれて協議を行った。協議では、学校長からは､学校における地域についての学習や、地域とのつながりのある活動等が紹介され、保護者代表からは、地域とのつながりにおいて学校に期待することや未来の教師に期待することが述べられた。これに対して、実習生は、自分の小中学校時代における地域連携の紹介や実習校での地域連携の活動についての感想を述べていた。

以上の協議を通じて、学校と地域の連携について多様な姿が語られた。第一に、見守り隊や地域の踊りの伝承、相撲大会など地域の人との関わりが学校を支えていることである。この一方で、地域の人が声をかけても「不審者」と誤解される可能性があることも指摘された。第二に、そうした学校に関わることが、地域の人に生きがいになっていたり、新庄にある企業を生徒に知ってもらいたいという思いがあったりすることが語られた。第三に、保護者から、（実習生の）先生を目標にして先生になりたいと子どもが希望するような先生になってほしいという期待が語られた。現在、メディアでは教職についての否定的な報道が多い。実際に教員志望者も減りつつある。そうしたなかで、教師という仕事への具体的な期待が保護者から語られたことは、学生にも励みになるものと言える。

５　今後の課題

資料 3-1 の実習生の今回のアンケートは、回収数 21（回収率 100%）であった。アンケートからは、次の 3 点を指摘できる。

第１点。実習の前と後で、教職への意欲・関心（問２）が、「大幅に高まった」11 名（52.4%）「少し高まった」8 名（38.1%）とする学生がいたことである。教職への強い意欲を示した点で、本実習が、教師を目指す学生に対して高い教育効果を持ったことを指摘できる。

第２点。実習を体験して勉強になった点（問 4）について、「②授業の進め方（板書・発問・展開・等々の仕方）」を回答者の 85.7%が勉強になったとしている。これにあわせて、「⑥個々の児童生徒の理解と受容の仕方」を回答者の 76.2%が勉強になったとしている。これは、実習生が、授業の基本的な進め方とあわせて、個々の児童生徒へ向き合い方を、同時に学んだことを示している。単純に、授業のやり方が上手くなればよいというわけではないことの気づきである。

後述の実習生の文章にも、「子どもたちの発言や気づきを教員として楽しみながら、子どもと一緒に学んでいけるようになりたい」（石澤さん）や、「児童の思考を予測した上で授業を組み立てなくては、児童にあった学びをもたらすことはできない…（略）…日頃児童と接する中で児童理解を深め、実態を把握しておくことが必要です。」（渡辺さん）とある。学生が、児童理解と授業づくりを両輪と捉えていることを指摘できる。

第３点。もがみ実習の内容でよかったことについて（問 10）、最上地域の学校で実習できたことを 85.7%の学生があげている。自由記述には、「主要科目だけでなく、全ての教科を何度でもやらせてもらえる」ことをあげた学生もいた。学生がやる気をもってのぞめば、可能な限りそれに応えてくれる体制がもがみ実習にはある。

一方、新庄市の実習は、合宿をしながらの実習である。女子学生の宿舎については、鍵の管理などの課題が指摘されている。今回は、地域懇談会

の時期についての指摘もあった。引き続き、検討していきたい。

実習校からのアンケート（資料 3-2）をみると、実習生の意欲を肯定的に受け止めていただいている。他方、指導体制については次の指摘があった。

「小研・特研と大学から２回来校して授業を参観していただきました。事後研には、事前にメールで参加できないというお知らせでしたが、無理を言わせていただき、指導をお願いいたしました。実習生のためにも、ぜひご指導をお願いいたします。」「大学の先生の来校のタイミングについて、小研の日にくるのか、個別のタイミングでくるのかを明確にしていただくとありがたい。」

指摘された課題については、次年度の検討課題としていきたい。

資料１

新庄市での教育実習を通して学んだこと

児童教育コース　３年　石澤美卯子

私は今年度、新庄市立新庄小学校で３週間の教育実習をさせていただきました。授業をさせていただいたり、子どもたちと関わったりしながらたくさんのことを学ばせていただき、とても充実した３週間でした。この実習を振り返り、授業づくり、地域とのつながりの２点から、学んだことや感じたことを述べさせていただきます。

1 点目は授業づくりについてです。教育実習の前半では、先生方が実際に行っている授業をたくさん見学させていただきました。自分の学級以外の授業まで見学させていただき、様々な学年の子どもたちの様子や授業の進め方を知ることができました。授業の様子を見ていて、先生からの問いかけと子どもたちが話す場面がとても多いことに気づきました。先生が子どもの発言を拾い、「それってどういうこと？」「友だちが言っていることはどういうことかわかった？」と子どもたちに問いかけ、子どもたちが次々と発言をつなげている様子が多く見られました。子どもの気づきや疑問をきっかけに、学びが広がり、深まっていく様子を見て、こういった授業が大学で学んだ「主体的・対話的で深い学び」であるのだと実感することができました。そして、そのきっかけを作りつなげていくことが教員の役割であると学び、授業を行う際には子どもたちの発言を大切にしながら授業を進めるように意識しました。しかし、授業を行ってみると予想していなかった発言に戸惑ってしまったり、子どもの発言を深められなかったりしてしまい「主体的・対話的で深い学び」の授業を行う難しさを感じました。これらを今後の自分の課題として、子どもたちの発言や気づきを教員として楽しみながら、子どもと一緒に学んでいけるようになりたいです。

2 点目は地域とのつながりについてです。今回の実習の中で、地域懇談会を開いていただき、PTA 会長さんからお話をお聞きしたり、新庄市の学校が地域に根ざした教育を行っていることを知ったりすることができました。PTA 会長さんの、「新庄市には様々な企業があるのに、それを子どもたちが知らないまま新庄市から出ていってしまうのはもったいない」というお話がとても印象に残りました。校長先生も子どもたちに「地域の良さを語れるようになってほしい」とおっしゃっており、子どもたちに地域の良さを知ってほしいという思いは地域の方も学校も同じであるということを強く感じました。そして、学校は、地域の良さに目を向けさせる教育を行わなくてはいけないと学びました。そのために、まずは教員を目指す私自身が、地域の良さに目を向けて、子どもたちに伝えられるようにならなくてはいけないと感じました。

私はこの教育実習を通し、教員という仕事のやりがいを強く感じることができました。3 週間という短い間でしたが、その中でも子どもたちはどんどん成長していき、小さな変化が見られた時にはとてもうれしく感じました。子どもたちが楽しそうに学んでいる姿、悩みながら一生懸命考えている姿に元気や勇気をもらいました。また、私は子どもとの関わりや授業を行う上でたくさんの悩みや不安がありましたが、お忙しい中でも一緒に悩み、励ましてくださった実習校の先生方のおかげで前向きに実習に取り組むことができ、教員になりたいという思いが強くなりました。合宿所では仲間と悩みや学んだことを語り合ったり、励ま

し教え合いながら教材づくりをしたりと、毎日のコミュニケーションが想像以上に自分のエネルギーになっていました。この教育実習を振り返り、私は新庄小学校の子どもたちや先生方、合宿所の仲間など周りの人々に支えて頂いていたのだと感じました。新庄市で教育実習を行い、本当に多くのことを学び、教員という仕事のすばらしさをより強く感じることができました。

最後になりますが、お忙しい中ご指導してくださった新庄小学校の先生方や子どもたちをはじめ、新庄市の教育委員会の皆さま、地域の方々、保護者の皆様に深く感謝申し上げます。この実習で学んだことや感謝の気持ちを忘れず、これからも教員という夢に向かって学び続けたいです。

資料２

もがみ実習を振り返って

児童教育コース３年　渡辺ひかり

私は、今年度、萩野学園（前期）で３週間教育実習をさせていただきました。初めは無事に実習を終えることができるか不安も大きかったですが、たくさんの方や環境に支えられ、有意義な実習になったと感じています。新庄市での教育実習で学んだことを主に二つ述べたいと思います。

一つ目は、児童の年齢や実態を把握した上で働きかけを行っていくことの大切さです。私は、２年生のクラスで実習させていただきました。低学年の児童を指導することは想像以上に難しく感じました。３週間の実習の中で複数の授業を担当させていただきましたが、あらかじめ計画を立てて授業をしても、自分が思った通りには進まない授業もありました。例えば、算数の授業では、計算の工夫について授業をしました。しかし、実際に授業をしてみると、立式段階でつまずいてしまう児童がたくさんおり、授業の本題であった計算の工夫について学習する時間的余裕がなくなってしまいました。また、国語の授業では、私が出した指示通りに動けない児童がおり、意図が伝わっていないと感じることもありました。このような経験から、児童の思考を予測した上で授業を組み立てなくては、児童にあった学びをもたらすことはできないのだと痛感させられました。児童の思考を予測するためには、日頃児童と接する中で児童理解を深め、実態を把握しておくことが必要です。指導教員の先生の授業を見学する中で児童の理解度を確認したり、休み時間に一緒に遊び性格を知ったりすることで、少しずつ児童の実態をつかむことができたように思います。実習後半の授業では、児童の実態にあった授業を計画し、意味の通りやすい言葉遣いが意識することができました。

新庄市の学校は、山形市の学校より比較的学級あたりの人数が少ない学校が多いことを特徴として挙げられます。３週間という限られた時間の中で、児童との関係を深めるべき実習生にとって、それは大変ありがたい環境であると思います。規模の小さい学校も多い新庄市での実習であったからこそ、一人ひとりの児童と向き合う時間が増え、児童にあった実践を検討することができたのだと感じています。

二つ目は、地域と学校が連携することの大切さです。新庄市での教育実習で印象的だったのは、地域の方々が学校に対して協力的だということです。毎朝の児童の登校時には、地域の方があいさつ運動を行っていました。笑顔であいさつする方々の温かさに、地域の子どもたちをみんなで見守ろうとする雰囲気を感じました。私が実習させていただいた学校では、地域学習にも力を入れており、日頃の授業でも地域の方が先生となって授業を行っていることがありました。私は、生活科の町探検に同行しましたが、地域の古くからの建造物を地域のお年寄りがガイドしてくださったり、地域でよく採れる農産物について農家である保護者の方が仕事の様子を見せて説明してくださったりしていました。目の前で地域のことをよく知る方が教えてくださることで、児童の関心も高まり、次々に質問している様子が見られました。そんな児童の様子から、ただ地域のものを見学させるにとどまらず、地域の方と連携して授業を行うことで、児童の学びにも深まりが生まれるのではない

かということを感じました。地域と学校が連携し、地域に根ざした教育を行っていくことで、地域のことを好きだと思える子どもが増えると思いました。地域の中でみんなで子どもたちを育てようとする環境があれば、子どもたちは自ずと心豊かに成長するのだということを実感しました。

最後になりましたが、私が学びの多い実習を経験できましたのも、指導してくださった実習校の先生方をはじめ、実習を支えてくださった方々全てのおかげだと感じています。心より感謝申し上げます。これからも、今回の教育実習で得たものを心に留め、理想の教員像を追求していきたいと思います。

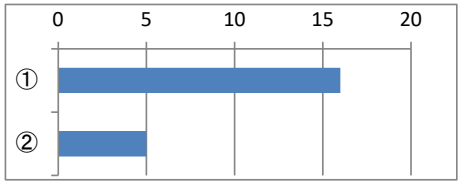
教育実習に関するアンケート
（地域教育文化学部3年次・もがみ教育実習）結果

以下の質問について該当する選択肢に☑してください。

1. あなたはどこで教育実践実習(以下「実践実習」)を行いましたか。

□①小学校
□②中学校

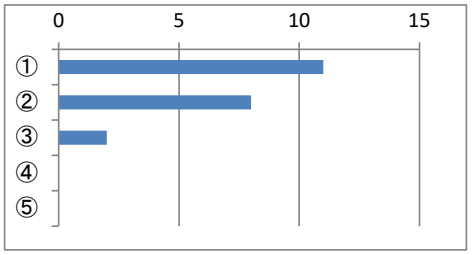
①	16
②	5
計	21



2. 教育実践実習（以下、「実践実習」）体験後の教職への意欲・関心の変化

□ ①実習前より大幅に高まった。
□ ②実習前より少し高まった。
□ ③実習前とあまり変わらない。
□ ④実習前より少し下がった。
□ ⑤実習前より大幅に下がった。

①	11
②	8
③	2
④	0
⑤	0
計	21

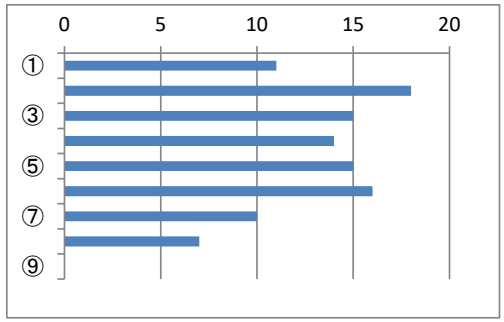


3. 問2で④または⑤を選択した方は，その理由を記入してください。（自由記述）

4. 実践実習を体験してどんなところが勉強になりましたか。（複数選択可）

□ ①教科・道徳の指導案の書き方
□ ②授業の進め方（板書・発問・展開・等々の仕方）
□ ③教材研究の方法
□ ④学級経営の仕方（個性に合わせた指導の仕方・学級会やHRの進め方など）
□ ⑤児童生徒集団の理解の仕方
□ ⑥個々の児童生徒の理解と受容の仕方
□ ⑦教具・教育機器の活用の仕方
□ ⑧特別活動（児童会・生徒会活動・クラブ活動・学校行事）の指導の仕方
□ ⑨その他（　　）

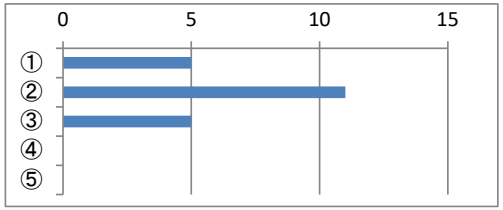
①	11
②	18
③	15
④	14
⑤	15
⑥	16
⑦	10
⑧	7
⑨	0
計	106



5. 実践実習体験後の大学の授業への意欲・関心の変化

□ ①実習前より大幅に高まった。
□ ②実習前より少し高まった。
□ ③実習前とあまり変わらない。
□ ④実習前より少し下がった。
□ ⑤実習前より大幅に下がった。

①	5
②	11
③	5
④	0
⑤	0
計	21



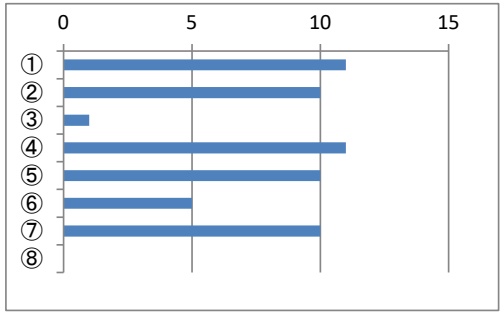
6．問5で④または⑤を選択した方は，その理由を記入してください。（自由記述）
教師という仕事のやりがいを強く感じたから。

7．大学の授業の効果について
小研・特研を行った教科と，役立ったと思う授業科目名を記入してください。
道徳
教育実践Ⅱ（社会）
国語 教育実践Ⅱ（国語）
小研：体育、体育の基礎
特研:美術 鑑賞、美術科実践演習、道徳教育の理論と実践
小研：国語、教育実践Ⅱ（国語），教育実践(社会）
国語　教育実践Ⅱ（国語）
算数
特研：道徳　道徳教育の理論と実践
美術 道徳 学活
小研・図画工作 特研・国語
保健体育の教材分析A,B
小研:保健体育 サッカー
小研　算数
特研 算数
特研:国語 特になし
小研:社会 教育実践Ⅱ（社会）
小研 国語 教育実践Ⅱ 国語
保健体育科　保健体育科の教材分析A・B

8．その他実践実習で役立ったと思う授業科目名を記入してください。
生徒指導・進路指導
生徒指導・進路指導
生徒指導・進路指導、特別支援教育総論、教育経営学、漢文学講読
生徒指導・進路指導
生徒指導・進路指導，教育経営学
生徒指導・進路指導、教育経営学、教育実践Ⅱ（算数）、道徳教育の理論と実践
教育実践Ⅱ（算数）　生徒指導・進路指導
生徒指導 ICTの活用
生徒指導・進路指導、英語の教材分析B
特別活動
生徒指導進路指導
教育経営学

9. それらの授業が役立ったところはどんな点ですか。（複数回答可）

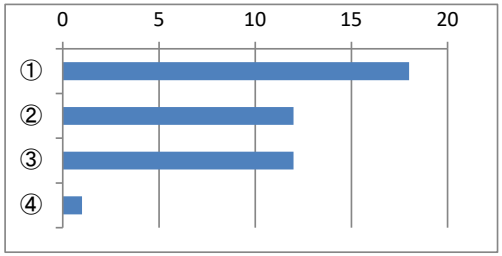
□①教科の内容の理解	①	11
□②教科・道徳の指導案の書き方	②	10
□③学級経営案の書き方	③	1
□④児童生徒集団の理解の仕方	④	11
□⑤個々の児童生徒の理解と受容の仕方	⑤	10
□⑥教材研究の仕方	⑥	5
□⑦授業の進め方（板書・発問・展開等々の仕方）	⑦	10
□⑧その他（　　）	⑧	0
	計	58



10.「もがみ教育実習」の内容で、よかったのはどんな点ですか。（複数選択可）

□ ①最上地域の学校で実習ができたこと	①	18
□ ②保護者や地域の人を交えた懇談会	②	12
□ ③指導主事による学習指導案等への指導	③	12
□ ④その他（　　）	④	1
	計	43

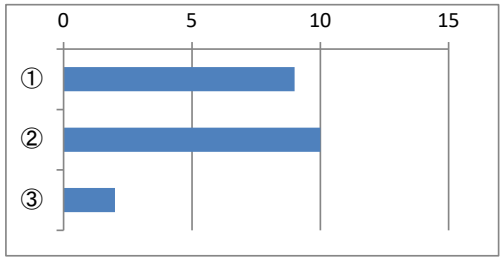
主要科目だけでなく、全ての教科を何度もやらせてもらえる点



11.「基礎実習」（2年次）の効果について

（あなたは，「基礎実習」の経験が役立ったと思いますか。）

□①大いに役立った	①	9
□②少し役立った	②	10
□③あまり役立たなかった	③	2
	計	21

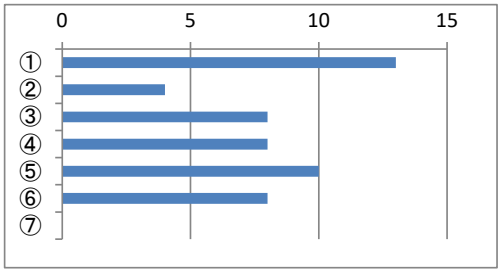


12. 問11で答えた理由・改善して欲しい点など（自由記述）

基礎実習で授業がうまくできなかったから、ある程度心構えして実習に臨めた。基礎実習が附属であったため先輩の様子を見ることができて、自分の想像ができた。
3週間やっていけるか不安があったが、去年1週間は過ごせたということで少し自信になったから。
教師という仕事の魅力ややりがいを非常に感じ、今後の学びへのモチベーション向上へ繋がったから。
1週間では生活リズムと学校の流れに慣れるのに精一杯で、学びに割く時間が少ない。
附属の学校に通う生徒と公立に通う生徒では学習に取り組む意識や雰囲気が全く違ったから

13．「基礎実習」の経験で役立ったところはどんな点ですか。（複数選択可）

□①教科・道徳の指導案の書き方	①	13
□②学級経営案の書き方	②	4
□③児童生徒集団の理解の仕方	③	8
□④個々の児童生徒の理解と受容の仕方	④	8
□⑤教材研究の仕方	⑤	10
□⑥授業の進め方（板書・発問・展開・等々の仕方）	⑥	8
□⑦その他（　　）	⑦	0
	計	51



14．実践実習の前に，学習・準備しておくとよいと思ったことについて自由にご記入ください。

実習先の学校の概要
体育や音楽、図工などは大学の授業では足りない。自分で指導案を書く経験をするといい。
道徳の授業の進め方・指導案の書き方
教育実習の目標を自分の中で持っていると、特に頑張ることが設定しやすく、終わった後にも達成感が生まれて良いと思った。学習においては、指導案の書き方を理解しておけば良いと思う。
指導案書き方
指導案作る際に留意すべきことを把握すべきだった
道徳の授業についてもっと知っておくべきだったと思う。

15．もがみ教育実習について、改善すべき点等があればご意見をお聞かせください。

すずかけ館の鍵の管理。雨の日の通勤の方法。

①地域懇談会は、一週目の金曜日または二週目の前半にしてほしい。二週目の金曜日は、小研や一日担任などの準備で忙しい。その日に放課後早く学校を出なければならないと、話し合いができず、せっかくの土日に準備を半分も進められなかった。
②すずかけ館の鍵を日新小学校または沼田小学校が持つようにしてほしい。新庄小学校が持つと、取りに行かなければならない。新庄小学校はほぼ毎日、帰宅が遅かった。

実習内容とは関係ないが、新庄小学校と新庄中学校の実習生が、南高校に受験等について話をしに行く時、今回はAO入試で合格した方がいた。話を聞きに来る生徒は一般入試の方が多いと思う。今回もそうであったのだが、回答者側も答えられることが少なく大変そうにしていたし、質問者側もその人に対して何を質問したらいいか悩んでいた。実習者の入試形式等について把握した上で、話に行く人を選んだ方が良いのではないかと感じた

スーツで新庄祭りに行くこと

2週目の金曜日に地域懇談会があったため、来週の授業の打ち合わせをすることができなかった。可能であれば1週目か3週目に開催してほしいと思った。

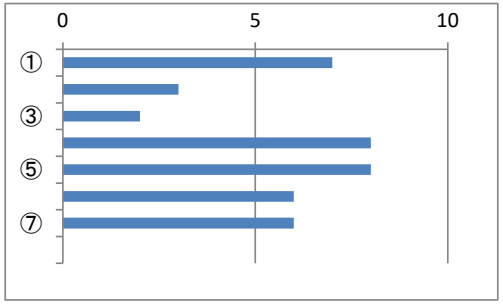
鍵を新庄小のみに置くこと。新庄小以外の小学校の方が早く帰ることが大半でいちいち取りに行く手間があった

鍵の管理を見直してほしい。

私は実家生だったので、そんなに気にならなかったが、同窓会に泊まっている人たちで鍵がなくて入らないという人がたくさんいたので、鍵の管理についてもっと工夫した方がいいと思う。

16．以下は，来年度教育実習予定者のみ回答してください。
教育実習を終えて，来年度の教育実習までに重点的に取り組む必要があると感じたことはどんな点ですか。
（複数選択可）

□ ①教える教科の内容をより深めること	①	7
□ ②教科・道徳の指導案の書き方	②	3
□ ③学級経営案の書き方	③	2
□ ④児童生徒集団の理解の仕方	④	8
□ ⑤個々の児童生徒の理解と受容の仕方	⑤	8
□ ⑥教材研究の仕方	⑥	6
□ ⑦授業の進め方（板書・発問・展開・等々の仕方）	⑦	6
□ ⑧その他（　　）	⑧	0
	計	40



教育実習アンケート【実習校】　山形大学附属学校教育実習委員会

1　実習生を指導してみて、実習前に特にどのような指導が必要と思われますか。

・担当指導教官へのアンケートでは、特に要望は挙げられませんでした。事前に十分な準備を整え、実習に臨んだものと思います。
・研究授業の他にも実践授業の回数が多く、特に小研の研究授業の際には指導案作りに多く時間を取られている様子が感じられました。指導案を作成する授業については、事前に担当教官と電子メールなどで連絡し合い、教科と単元の教時を事前に相談し、その時間の目標や学習の流れなどについて情報を得たり、指導書を参照したり、既存の指導案を検索したりして、それに基づいて自分なりの指導案の素案（アウトライン）を大まかな形でも作るなり考えるなりの準備をしておくと、実習期間中の指導案作成の負担も軽減されるかと思います。

・事前指導が行き届いており、しっかりした態度で実習に臨んでいた。
・こちらで指導する内容だとは思うが、授業を参観する前の「お願いします」の挨拶や参観後にお礼を言う姿勢が見られるとさらに良いと思われる。次年度以降の指導内容に盛り込んでほしい。

・実習打合せの際に、実習期間の予定や授業研究会などの打ち合せの時間を持つことができた。そこで、一日の流れと学級の様子、研究授業のイメージを話し合うことができ、スムーズに実習に入ることができたのがよかった。

・実習生2名とも、事前の打ち合わせの時から、明るくはきはきとした受け答えが大変好印象を受けた。
・また、小研で何をやりたいかも、2名とも明確に持っており、その希望に沿って実習計画を作成することができた。
・大学側の実習前の指導は、十分に行われていると感じたので、現在の事前指導で十分だと思われる。

・社会人として常識的なことを身に付けて、どの学生さんにも実習に臨んでほしい。
・現代の学生さん特有なのか、人の話のメモを取り、それを生かすということが少し足りないと感じた。メモを取らずに、「スマホで写真を撮っていいですか？」と聞かれたときは時代を感じた。

・実習の目的や内容、注意事項等について事前に指導されていることが実習生の態度、様子から伝わってきました。とても重要なことですので今後も指導をお願いするとともに、「子供とふれあうことが楽しみだ」と、関わり合うことに期待を寄せるような指導も大切ではないかと感じました。

・授業研究に向けて授業案を作りましたが、評価項目が平成21年度版の学習指導要領に沿ったものとのことでした。実習生は平成29年度版の学習指導要領を持っていましたが、21年度版は持っていませんでしたので文科省のホームページからダウンロードして使いました。今回の改訂で保健体育の評価の観点が大きく変わりましたので、その違いを確認しながら指導案を作っていました。移行期と言えばそれまでなのですが、これから役立つ平成29年度版での実習の方が実践的でなかったと思います。実習生との事前確認が必要かと思いました。

・授業を見る視点や指導案の書き方については、事前にきちんと指導されていると思いました。特別支援の子どもについて、「LD」「ADHD」「ASD」の子どもはどの教室にも在籍しているので、そのような子どもの特徴や困り感、声がけの仕方など特別支援教育の実践的なものを指導していただきたいと思います。（専門的な知識は学んでいるとは思いますが。）
・授業を見学するだけでなく、分からない児童に個別に支援したり、グループの話し合いに助言したり関わることで学ぶことも多くあると思います。担当なさる先生でそれぞれ考えがあると思いますが、授業の中でも進んで児童と関わることをぜひ指導していただきたいです。
・教室内などで子どもと接する時、全体の様子を見て、自分からどんどん声をかけられる積極性がほしいと感じました。限られた実習期間の中で、より有意義に過ごすためにも必要だと思いました。

2　今年の学生の印象をお聞かせください。

・三人共、非常に真面目で礼儀正しく、子供に優しく丁寧な言葉遣いで接しておりました。休み時間には子供と一緒に遊ぶ姿なども見られ、子供に慕われている様子が感じられました。担当教員の指導の許、毎日遅くまで教材研究や授業の準備に励み、授業実践にも真摯に取り組んでおりました。
・三人共仲が良く、また、他大学からの実習生も同期に実習していたのですが、その実習生とも気軽に話し合い、社交性のある学生達だと感じました。担当教官以外に対しても、わからないことは素直に質問し、学ぶ意欲の高さを感じました。

・何事にも一生懸命で、学ぶ姿勢が前向きであった。教職員にも積極的に質問し、言葉遣いや挨拶もしっかりしていた。教室でも明るい笑顔で児童に接し、進んで声をかけながら一人一人の理解に努めていた。

・非常に真面目な態度で、子どもたちとも積極的に関わりを持とうとしていた。担当の話もしっかりと聞くことができ、教育実習に向かう姿勢ができていた。

・今年度は、2名の実習生を受け入れたが、2名という事で、お互いに励まし合い、刺激し合い実習を行っていた印象があり、複数名での実習を行う良さを感じた。
・授業づくりをはじめ、実習全般について、2名とも前向きで、アドバイスされたことを着実に次に生かそうとする素直さがあった。
・また、9月1日（日）に行われた相撲大会では、本校職員同様に、朝早くからボランティアとして協力してくれ、大変ありがたかった。

・優しく丁寧に子供たちと接していた。かける言葉も、発達段階に応じて配慮していた。時間の許す限り、子どもたちと触れ合い、信頼関係を築いていた。
・授業実践では、毎時間しっかり指導案を作って授業に臨んでいた。担当学年の1・2年だけでなく、専門分野の外国語活動まで積極的に学ぼうとする姿が見られた。学習プリントなども、自作で準備していた。
・優しい言葉がけはもちろん必要だが、時と場に応じた、めりはりのある話し方などもできるとさらに良いと思う。

・前向きに、またとても真剣に実習に取り組んでいました。

・実習生は県でもトップレベルのアスリートでしたが生徒にとって接しやすく、生徒目線に立って陸上競技の指導にも熱を入れてくださいました。指導書やマニュアルに従って授業を組み立てるのではなく、自作で様々なアイディアを出して授業を考える姿勢が素晴らしかったです。前時の授業での成果と課題を次の授業に役立てようとする研究熱心さに感心しました。

・まじめで、良くも悪くも冷静。場合によっては情熱という部分も必要か。

・とても礼儀正しく、真面目でしっかりと実習を行うことができました。また、生徒とのかかわりにおいても、はじめは緊張していた感じはありましたが、自主的に声をかける姿が見られました。
・授業研究会においても自分の考えを伝えたり、話し合いの中で出たことを次の授業に生かしたりするなど前向きな姿勢が見られました。

・とても一生懸命で子どもたちにも穏やかに接してくれ、クラスの子どもたちは実習生が大好きでした。
・児童を見る視点や授業づくりのアイディアなど、よく勉強している印象でした。授業していても落ち着いていて、児童の反応を見ながら言葉を選んでいました。
・とても素直な心を持っていると感じました。何事も丁寧に進められていて、打ち合わせした内容は全て活動できていました。

３　その他
もがみ教育実習について、改善すべき点等があればご意見をお聞かせください。
（自由にご記入ください。）
・学校で設定した小研の日時と大学の先生の都合が合わず、各実習生が指導教官と連絡を取り合いながら都合を確認し、お忙しい中、3名の先生にそれぞれの日時で来校していただいた。
・大学の先生の来校のタイミングについて、事前の説明会で聞いていた話と違っていたので、次年度はこの点（小研の日に来るのか、個別のタイミングで来るのか）を明確にしていただくとありがたい。学校の都合（管理職が不在など）もあるため。

・勤務日について、本校では、日曜日に相撲大会があり協力していただいたが、この日は勤務日とはならず、本校職員が振替休業日の月曜日に、市の委員会で研修を行う形になっているが、勤務校の実態に合わせた勤務日でよいと思われる。

・「小研・特研」と大学から2回来校して、授業を参観していただきました。事後研には、事前にメールで参加できないというお知らせでしたが、無理を言わせていただき、指導をお願いいたしました。実習生のためにも、ぜひご指導をお願いいたします。

・教育実習初日が「新庄まつり」、翌日が「（本校は）休業日」ということで、時間的に少しもったいないのかな、という思いを持ちました。ただ、「新庄まつり」を実際に目にし、肌で感じるという「エリアキャンパスもがみ」ならではの貴重な体験でもあると思います。

・実習生は県選手権陸上競技大会で入賞し、東北総体の出場権を獲得していましたが、教育実習と重なっていたために出場を辞退したと聞きました。東北でも十分に活躍できる選手だと思いますので、日程の配慮が可能ならば調整して頂けないかと思いました。

・特に問題起きなかったが、他校担当の実習生の宿泊先となり自家用車に同乗して送迎という点は危険性を感じた。退勤時刻を調整する必要もあり、実態に応じた動きがとりにくくなるおそれもある。

・8月24、25、26日に新庄まつりがあり、学校が休校になります。その時と実習が重なると学校で実習を行えなくなるので、その週を外していただけると良いかと思います。

Ⅱ　大学院教育実践研究科
“学社融合の実践と課題”

山形大学大学院教育実践研究科　　江間　史明
加藤　咲子

「学社融合の実践と課題」は、大学院教育実践研究科（教職大学院）「学校力開発分野」の選択科目の一つである。本授業は、学社融合の実践を学び、学校と地域社会の学習活動をコーディネートする教師の役割と方法の基礎を身につけることを目的とする。その実践事例として、山形県戸沢村や日本各地の学校支援地域本部事業を取り上げて検討している。

本授業の到達目標は、次の通りである。

① 学社融合実践の事例から、学校と地域の連携による教育効果を自分の言葉で説明できる。
② 学校と地域の教育活動をコーディネートできる教師の役割を、授業で学んだことをもとに説明できる。
③ 学校と地域を結びつけるアクションプラン（案）を提案できる。

2019（令和元）年度は、現職教員学生３名（今坂里美、佐藤公大、半田智美）が、本授業を受講した。

本授業で、戸沢村での実地調査実習を、実施した。戸沢村は、平成 25 年 4 月に小学校 4 校、中学校 2 校をそれぞれ小学校 1 校中学校 1 校に統合した。2019 年度は、統合 7 年目。小学校と中学校の合築も完成し、施設一体型の小中一貫教育が始まって 3 年目である。こうした中で、戸沢村全体の学社融合の実践が、どのように再編されたのか。当事者は、どのような特質や課題をとらえているのか。そうした点を調べることを、今回の調査の目的とした。以下、その実地調査実習について報告する。

１　戸沢村実地調査実習の日程

戸沢村教育委員会の柿崎健学社融合主事に調整をお願いした。次のような日程で行った。

12 月 22 日（日曜日）

9：00	戸沢村神田公民館に到着
9：00～12：00	門松作り・そば打ちに参加 この間に、聞き取りを行う。 （加藤久和氏、佐藤雄次氏）
12：00～13：00	昼食
13：30	戸沢村発

加藤久和氏は、統合前の神田小から現在の戸沢小・中学校まで 14 年間、地域教育コーディネーターを担っている。佐藤雄次氏は、戸沢村古口地区の地域教育活動団体である北の妙創郷大学の事務局長である。お二人とも、通学合宿など戸沢村の学社融合の取組みを支えている人物である。

２　神田公民館での活動の様子

12 月 22 日の「門松づくり・そば打ち体験」は、戸沢小神田学区育成会（戸沢小に通わせる神田地区の保護者の集まり）の主催である。

神田地区の老人会のお年寄り 20 人が、門松づくりを進めていた。この間、子どもたちは、そば打ちの活動に取り組んでいた。

子どもたちの様子について、今坂さんは、次の２つの場面について述べている。

【そば粉を捏ねている場面】
保育園生：（やってみる）こうですか？
　小学生：ちがーう。こう！（やって見せる。）
保育園生：（再びやってみる）こうですか？
　小学生：ちがーう！
そば打ちの先生：体重ぐっと乗せて！

保育園生は手元で粘土を捏ねるような感じで小学生は上から体重をぐっとのせるような捏ね方だった。小学生が「ちがーう」と、捏ね方の違いを見分けられる目を持っていたのに、驚いた。もう一度、保育園生がやってみるがさっきの捏ね方と変わらず、また小学生に「ちがーう」と言われてしまった。小学生は「ちがーう」としか教えてくれなかったが、大人が「体重をぐっとのせて」というように言葉を添えて教えてくださっていた。こうした大人の存在は、教える小学生の側にとっても、「こう言えばいいのか」という学習にもなる。

【そばを切る場面】
４年生２人、２年生２人のグループ

Ａ君（２年生男子）は、４年生の２人がそばを切る様子をじっと見ていた。Ａ君の番になり切ってみるも、太くなったり細くなったりしてしまった。そば打ちの先生が「こま板の押さえ方、違うんね？」と左手の形が違っていることを指摘した。脇で見ていた４年生が左手の形の手本をＡ君に見せてくれる。Ａ君は「難しい」と声をもらす。

交代して、再度Ａ君に順番が回ってきた。２回目は均一になるように切っていた。ちょうどそば打ちの先生が回って来て「それなりに考えているんだにゃ。親指で押して。」と感心していた。

毎年そば打ちを体験しているだけあって、4 年生の手つきは違っていた。A 君はそんな 4 年生の姿をじっとみて切り方を学んでいた。脇で 4 年生が見守り、手本を示している姿もほほえましい。（中略）２回目は、教えてもらった手の形でこま板が動かないように押さえながら A 君なりの工夫も取り入れたところ、先生がちょうどまわってきて声をかけてくださった。①上学年と下学年が一緒のグループで活動することですぐ近くに手本がいる、②人数が少ない分、回ってくる仕事は多い。「やってみる・手本を示してもらう・教えてもらう・またやってみる」と繰り返し経験できる。③上学年だけでは説明が足りないところは、適宜大人が声をかける、手を添えることで、子どもたちのそばうちは上達していた。…そば打ちの先生はお父さん方の中から選出されているそうだ。

子どもたちは、地域の活動の中で、そば打ちの技を受け継いでいることがわかる。一方、大人はどういう活動をしていたか。半田さんは、その様子を次のように述べていた。

そば打ちをコーディネートする 30 代～40 代のお父さんたち、そばつゆを作ったり、漬物を切ったり、おでんを煮ているお母さんたちの姿を見ながら、ひょっとしたら、この場所が子どもたけでなく、“大人の遊び場”にもなっているのではないかと思った。お父さんたちは、テキパキと動きながらも、尊敬の気持ちを持って年長者と話をし、何かを得ようとしているのがわかる。話を聞いてみると、県外から嫁いできたお嫁さんもいるということで、若妻会の存在が母親同士をつなぎ、助け合っていることもわかる。…年配の女性から漬物のつけ方を聞いている場面もあった。子どもを介して大人がつながることで、次世代のリーダー候補が育てられているのかもしれない。

学社融合の活動のなかでは、子どもを介して大人がつながる局面がよく見られる。大人同士が楽しくつながり学ぶ場になっていることは、地域における生涯学習社会の姿のひとつと言える。

では、こうした活動の場について、加藤久和さんや佐藤雄次さんは、どのように見ているのだろうか。次に、聞き取りについてみて見よう。

３　聞き取り調査から考えたこと

院生が調査で聞き取った内容で、もっとも考えさせられたというのは、次のやりとりである。

佐藤雄次さん

通学合宿のなかで時にしつけをすることがある。家庭では、みんな忙しいからお手伝いをなかなかさせていないようだ。お手伝いさせることで、家庭の風習を伝える役目があると思うし、お手伝いは「手で伝えるもの」というが、家庭のなかではその辺りが希薄になっていると思う。（略）「通学合宿で包丁の使い方を聞いてきた」と家庭に帰って言っている子もいるようだ。

加藤久和さん

今日のような機会を、家で教えてもらっていることを使える場所でありたいし、ここで習ったから家でそばを打ってみたいと言ってもらえるように、まだまだ私もがんばるしかないですね。

通学合宿では食事は全部自分達でつくります。「食事の準備も口を出さずに、見ててください」とお願いしている。食べられなくなっても子どもたちの責任なので。子ども達も、時間を見て間に合うように行動するように、考えるところを子ども達にさせている。もらい湯では、中学生・高校生のボランティアの子たちが迎えの手伝いをしてくれている。ここで先輩の姿を見ることで、次に続く子どもが育つといいのですが。

今年は、4 泊 5 日の（神田地区の）通学合宿に 3 年生以上が 10 名中、4 名しか参加しなかったんです。6 年生の女子は 1 名での参加。何度も 1 人でいいかと確認したが、最後の年なので…と言って参加してくれたんです。4 泊やり通していました。この子は、3～5 年のときは参加していないんですが。集まりも悪くなってきたんだけど、細々とでもいいから続けていきたい。

佐藤雄次さん

地域や学校で何かを教えると、「先生」と言われることが、お年寄りにとってはうれしい。学校の先生方とは距離がある。学校に行っても、先生方の名前も分からない。昔は、歓送迎会は地域住民と一緒にやっていた。お酒が入るといいアイデアが浮かんだり、楽しく話もできたりするのだが。通学合宿だって前は先生が顔をだしてくれた。働

き方改革など仕方がないのかもしれないが、昔のようなつながりが、今はもうできないのか。

こうした話について、３人の院生は、次のようにコメントしている。

今坂さん

・統合により、学区が広くなった。…そんな中、久和さんは、「学区が広くなり、戸沢村全体を知ることができるようになった」と前向きに捉えている。…学校は、地域の方から協力を得ることを期待するばかりではいけないのだなと、佐藤雄次さんたちの声から感じた。学校では、教員が地域に出向く機会が削られている。教員が地域行事に顔を出すことは大したことのないように感じていたが、実は地域とつながる大事な場であったのだ。…学区の統合、過疎化、少子高齢化など課題は様々あるが、できる範囲で代々継承していくことを大切にしている地域の方の思いを知った。

佐藤さん

・実際にそば打ちの様子を見ると、子どもの数が激減している現実に出会った。…「学校が遠くなった」「先生方の顔も名前も知らない」「先生方ともっと飲みたいんだ」「総合の授業では先生方が地域を知らなすぎる」といった声を聞くと、学校を支えたい、子どもたちと関わりたい、先生方には地域を知ってほしいという感情があるのではないか。…地域に残る伝統的な物事も財産であるが、人材も財産だと思う。地域をつなぐ役割を学校が担う必要があるのではないだろうか。

半田さん

・学校と地域の間にある距離感を語る佐藤雄次さんのお話に、学校としてどうあるべきかを考えさせられた。学校からは、積極的に学校に来てほしいと“簡単に”地域の方にお願いするが、逆に、学校から地域に出向くことは管理職が主であり、一人の教諭レベルではなかなかその機会がないのが現実である。今日のような子どもの姿を見ることができないのは、とても残念なことだと思った。…学校の外での子どもの姿を見ることができるのは、教育活動にとってプラスになるだろう。

学校に求められているのは、地域との“ほんの少しの関わり”ではないだろうか。学校と地域がともに活動に取り組むことで、どちらも元気になることを実感、体感されてきたからこそ、（佐藤雄次さんは）こう感じていらっしゃるのだと思う。Give and take の関係ではなく、Win-Win の関係に戻すためには、どうすべきか。学校と地域を結ぶ仕組みづくりをリバイズするのは、学校にしかできない。

４　学社融合の取組の意義

この戸沢村の実地調査は、毎年、行っているが、来る度に発見がある。今回は、学校統合という地域社会の大きな変化が、子どもの数の激減というなかで、新たなステージにうつったことが伺われた。加藤久和さんが「細々とでもいいから続けていきたい」というところまで、追い込まれつつあると言える。一方で、神田地区で小学６年生の女子が、一人でも通学合宿に参加してくるという自立した姿がある。このことも、戸沢村の子どもの育ちの大切な面として見ておきたい。

「学校の先生方とは距離がある。」この発言は、戸沢村における学社融合のこれまでの蓄積があるからこそ、地域からでてくるものと言える。

地域の側は、学校との関わりを求めている。それは、子どもの育ちにも有用なものである。これに応える学校と地域をつなぐカリキュラムの構築の任は、学校側の仕事として残されているものと考えたい。

社会力を提唱した門脇厚司氏は、かつて、子どもが一人まともに育つためには、村が一つ必要だと述べた。子どもが成長するのは、親や先生以外の、さまざまな社会を担う仕事をする大人との関わりが必要であると述べたものである。

今年の「学社融合の実践と課題」の授業で検討した文献に、ブレイディみかこの『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）がある。この文献にも、同様の指摘があった。

It takes a village.

英国の人々は子育てについてこんな言葉をよく使う。「子育てには一つの村が必要＝子どもは村全体で育てるものだ」という意味だが、うちの息子を育てているのも親や学校の先生だけじゃない。こうやって周囲のいろいろな人々から彼は育てられてきたのである。（p.80）

このような子育てを核とした地域の人々が育ちあう関係をどう再構築するのか。子どもの数が減り、個人や家庭の私事化が進んでいるなかで、戸沢村の直面している課題は、世界や日本のどの地域でも直面する課題であると言える。教師は、この関係の一部であり、学びの専門家でもある。そこで果たしうる役割について、引き続き、考えていきたい。

追記

通学合宿とは、通常通り学校に通い、授業を受けた後、公民館などで衣食住の活動をしながら集団宿泊をするものである。戸沢村では、入浴はもらい湯である。全国 300 か所近くで行われている。

第４章　もがみ活性化事業

Ⅰ　大学見学旅行

最上地域の子供たちに、もっと山形大学のことを身近に感じてもらうために「山形大学見学旅行」を開催しております。

児童の皆さんには、身近なものを使った「化学実験教室」として、楽しい実験を体験してもらうほか、校内散策や学食の利用等をとおして大学の雰囲気を味わってもらいます。令和元年度に来訪した小学校は、次のとおりです。

(1) 真室川町立真室川あさひ小学校(4 年生 10 名)
6 月 26 日(水)
(2) 新庄市立新庄小学校(4 年生 53 名)6 月 28 日(金)
(3) 新庄市立萩野学園(4 年生 32 名)　6 月 28 日(金)

Ⅱ　もがみ協力隊

もがみ協力隊は、エリアキャンパスもがみに関連した活動へ参加する山形大学の学生組織です。

令和元年度は、主に下記の活動を実施しました。

１　学習支援ボランティア

本活動は、大学生の学習支援により小中学生の学習意欲を喚起し、学力の向上及び進路意識の高揚を図るために行われたものです。

・舟形町立舟形中学校
7 月 31 日(水)～8 月 2 日(金)3 名参加

２　フィールドラーニング応用編

フィールドラーニングを受講した学生が、授業外で自主的に地域へ訪れる活動を「フィールドラーニング応用編」と呼んでいます。令和元年度は、以下の活動をとおして最上地域の方々と学生が交流を深めました。

新庄まつり（新庄市）
日程　8月24日(土)～8月25日(日)
参加学生　9名
概要　フィールドラーニングで提案した企画を実施。

図書館まつり（新庄市）
日程　10月27日(日)
参加学生　1名
概要　新庄市立図書館の図書館まつりの運営補助を実施。

新庄教育の日（新庄市）
日程　11月9日(土)
参加学生　2名
概要　今年度よりホストタウン契約をしている台湾の文化を紹介するため、大学生が考えた企画を実施。

ジモト大学（新庄市）
日程　11月16日(土)、11月17日(日)
参加学生　1名
概要　ジモト大学の１つのプログラムである「マイプロ推進」で受講生として参加。

しんじょうの高校生から愛を叫ぶ！！
～LGBTQ＋をともに考えよう～（新庄市）
日程　12月15日(日)
参加学生　3名
概要　新庄市の高校生が主体となり、LGBTQ+の理解を深めてもらうための写真展やタレントの「ぺえ」さんをゲストに招いたトークセッションを実施しているイベントの受付・運営補助を実施

2019フィールドラーニング応用編（戸沢村）
日程　9月28日(土)～29日(日)
参加学生　7名
概要　28日午後から北の妙の炭焼き窯の修繕作業。夕方から収穫祭で餅つきをし、ずんだ餅、納豆餅、あんこ餅、雑煮餅を作った。(ずんだは１回目のフィールドラーニングで植えた枝豆を使用。)
29日は最上川舟下りや幻想の森見学などの名所めぐりを実施。
フィールドラーニングに係わった地域の方も数十名参加し収穫祭で交流を深めた。

第５章　今後の展望
―「エリアキャンパスもがみ」を去る者の思い―

山形大学　教育開発連携支援センター
小田隆治

まえがき

私は 2020（令和 2）年 3 月末日をもって 30 年間務めた山形大学を定年退職する。それに伴い「エリアキャンパスもがみ」からも身を引くことになる。「エリアキャンパスもがみ」とは創立前年の 2004（平成 16）年から現在まで 16 年間、つまり私の山形大学在職期間の半分を超える年月を、「エリアキャンパスもがみ」と付き合ってきたことになる。それは単に時間の長さだけでなく、密度においてもそれなりの濃さがある。

私は毎年度末に発行してきたこの研究年報の「今後の展望」を創刊号から書いてきたが、それも今号で最後となる。最後であるからと言って、気が利いたことが書けるわけではない。だが、これからも「エリアキャンパスもがみ」を引き継いでいく者たちのために、幾ばくかは参考になることを書き留めたいと思う。

「エリアキャンパスもがみ」の先進性と特色

しばしば山形大学「エリアキャンパスもがみ」が創立された年を 2006（平成 18）年と勘違いされることがあるが、正確には前年の 2005（平成 17）年 3 月である。この年に「エリアキャンパスもがみ」の創立を記念して新庄市で一泊二日の大学祭を大々的に開催した。「エリアキャンパスもがみ」の創立までの経緯や初期の活動については、拙著『大学職員の力を引き出すスタッフ・ディベロップメント』（2010、ナカニシヤ出版）に詳しいのでそちらを読んでほしい。

では、なぜ「エリアキャンパスもがみ」の創立した年が 2006 年と勘違いされるのだろうか。それはこの年に現在まで続く初年次の授業『フィールドラーニング（当初はフィールドワークと呼んでいた）』がこの年に始まったからである。

「エリアキャンパスもがみ」の先進性は、まさに大学が地域それも山形県最上地方の 8 市町村全体と結んだ包括協定であったことにある。当時、大学が地方自治体と包括協定を結ぶことはなかった。「エリアキャンパスもがみ」の協定は、産業の育成などの経済的な結びつきは前面には出されなかった。非常に大学らしい（お金にまつわる現代では大学らしくないかもしれないが、歴史的には永遠に大学らしいのである）協定内容であると評価される。

「エリアキャンパスもがみ」が山形県最上地方で創立された経緯は、上記の拙著に書いているように、山形大学の事務職員の研修（ＳＤ：スタッフ・ディベロップメント）であり、協定相手として大学が最上地方をターゲットにしたわけではなかった。地域と連携する地として、最上である必然性はなかった。だが、最上から見るとそうではなかった。最上地方は山形県において唯一高等教育機関のない地方であった。最上地方の人々にとって大学などの高等教育機関を誘致することは長年の夢であった。「エリアキャンパスもがみ」ができるまでに地元の政治家などが様々な努力をしてきたようで

あるが、バブルがはじけ経済が衰退していく日本にあって、財政状況が逼迫した地方の小さな市町村が大学を誘致することは、とても無理なことくらいは誰しもが理解できることであった。そこに建物の新設はないが、バーチャルなキャンパスとしての「エリアキャンパスもがみ」が出来上がっていったのである。これまでの日本の箱物行政による地域振興に対して、大学独自の強みによる地域活性化を生み出す可能性を秘めた「エリアキャンパスもがみ」が創立されたのである。現在、「エリアキャンパスもがみ」は地域振興の一部を具現化したが、まだ潜在的な可能性の段階にとどまっているものが多くある。私が考える可能性については、過去の研究年報の「今後の展望」を読んでいただきたい。そこで書かれたことは永遠に日の目を見ることがないのかもしれないし、はたまたいつか花開くのかもしれない。現時点ではわからない。

「エリアキャンパスもがみ」の創立に大きくかかわったのが、地元の教育長をはじめとした教育関係者であったことが、その後の「エリアキャンパスもがみ」の方向性を決定づけることになった。当時、大学と大学外の連携と言えば「産学」あるいは「産学金」のお金を媒介とした連携であった。それがこの「エリアキャンパスもがみ」では、教育に重点が置かれることになったのだ。この教育重視の連携は教育大学や教育学部などの学校教員を養成する大学や学部で行われたとしても、6 学部を擁する山形大学のような総合大学と地域との間では稀有なことであった。

大学と地域が連携して教育に取り組むとなると、それは大学の教員が地元の小・中・高校の教員の指導、あるいは公開授業などを通して児童や生徒の直接指導に当たることが考えられ、実際に全国の教育系の大学や学部、学科の教員あるいは学生が従事している。「エリアキャンパスもがみ」でもこのような取組も当初から実施しているが、メインの取組は大学の授業『フィールドラーニング』にある。この授業は現地体験宿泊型の授業である。詳細はホームページなどを参照していただきたい[注1]。

大学生が地域に出かける調査型の授業は、社会学、経済学、地理学、文化人類学、農業経済学、地学など様々な学問分野で行われている。また、卒業研究などで長期に地元に滞在して調査が行われることもある。こうした専門分野の授業で使用されてきた『フィールドワーク』と我々の授業が混同されないために、人間力向上を目的とした教養教育の体験型の授業に『フィールドラーニング』という用語を当てた[注2]。この教養教育型の『フィールドラーニング』を創立した当初は、様々な大学関係者から「小学校の見学旅行とどこが違うのか」と揶揄されたりもしたが、現在では、全国の大学で『フィールドラーニング』をモデルとした体験型の授業が普及している。時代が我々に追いついてきたのである。

現在、高等教育では学生の主体性を育成する教育プログラムや方法が問われている。『フィールドラーニング』のような体験型学習はまさにこの主体性を育成することを目的とした授業なのである。

人間の主体性は、細かくプログラミングされた教育方法からは育成することが困難だろう。操り人形の主体性などどこにもないからだ。主体性は自由の中にある。『フィールドラーニング』は参加した学生の個性に合わせて、かれらがそれまで培ってきた多様な知識と思考、経験をベースにして主体性そして社会性が築かれていくことを基本としている。

地域からの側面においては、地元の子供たちの教育があった。山形大学の地域教育文化学部の教員をはじめとして、地元の小・中・高校の教員の研修などを行ってきた。新庄市では「エリアキャンパスもがみ」の創立を契機として、教育実習が始まった。こうしたことと並行して『フィールドラーニング』の授業に地元の子供たちが参加できるようなプログラムを我々は推奨し、実際にそれを実施している。

「エリアキャンパスもがみ」を創立した頃に、当時の新庄市長は「若者たちがいないこの地域に、大学生が来ることがもっとも大きな地域活性化です」と私に語ってくれた。この言葉は「エリアキャンパスもがみ」の地域活性化の神髄をついていると今でも思っている。最上地方は高等教育機関がなく、若者が従事するような産業も乏しいことから、18 歳を過ぎると若者が他の地に移ってしまう。人口ピラミッドからもわかるように、20 歳前後のところがくぼんでいるのである。20 歳前後の人たちが少ない風景が育っていく子供たちの日常の風景となっている。「エリアキャンパスもがみ」は、この風景を変えた。土・日曜日に子供たちは大学生と一緒に活動することができる。子供たちは大学生にまとわりついた。『フィールドラーニング』を通して、子供たちは大学生と大学が身近になっていった。将来、この子たちの中で大学に進学する子が出てくるだろう。『フィールドラーニング』は田舎の子供たちの視野を広げることができたと考える。

地元の学校関係者の多くが、『フィールドラーニング』で大学生と交流するようになって、子供たちが明るく積極的になり社会性が高まったと言われる。確かな手ごたえがあるという。『フィールドラーニング』は大学生の主体性や社会性の育成と同時に、いやそれ以上に子供たちの主体性や社会性の伸長に寄与してきたようだ。このことは、最上地方を取材してきた新聞記者にも指摘されたことがある。「エリアキャンパスもがみ」はいろいろな方面から見つめられている。時に温かく、時に冷たく。それが正常だ。

『フィールドラーニング』の教育成果は、大学生と地元の子供以外にもあった。大学生を教える地元の講師たちである。地元の講師の多くは教育経験のない人たちである。教えるコンテンツを持っているからといって、それを学生たちに教え興味を持たせることは、そうたやすいことではない。学生たちとの接し方の基本は私が研修したが、それぞれの講師が教えながら自分流の教育方法を模索するしかなかった。ここでは大学によくある学生の熱意がないとか、学生の出来が悪いなどという言い訳はきかないし、そもそも講師の人たちは学生に対して上から目線で接していなかった。

「教えることは学ぶことである」。まさにこの現代の教育論を実践していったのが、『フィールドラーニング』の講師たちであった。単発ではなく、毎年同じプログラムを改善しながら継続していったことによって、講師の教育力は着実に向上していき、学生たちの教育効果も増大していった。

文明が成熟し、高齢化社会になって「生涯学習」が推進されるようになってきた。様々なカルチャースクールもできてきたが、『フィールドラーニング』はそれらとは異なった新しい一つの能動的な「生涯学習」のスタイルを確立したことは間違いない。講師は教えるという行為を通して、能動的かつ双方向的な学習をしているのである。

普段、自分たちの仕事内容を言語化することはないかもしれないが、教えるためにはそうしたことを言語化していかなければならない。仕事内容が客観視でき、伝達可能なものになっていくのである。

「エリアキャンパスもがみ」創立当時の研究年報の「今後の展望」を読み返すと、関係者の信頼関係の構築が事業の成否に大きくかかわっていくだろうことが、繰り返し書かれている。それはこの 16 年間で十分構築できたと思えるし、できたからこそ 16 年間も続いてきたといえる。こうした信頼関係は、大学と地域という別組織が一緒になって一つのプロジェクトを遂行するためには必須だと思える。それは「エリアキャンパスもがみ」が、利潤の追求などという現世的な成果が見えるものではないからでもある。だが、こうした信頼関係は普段の努力なしでは維持していくことすら難しい。信頼関係は双方が常に努力していかない限り、フェイドアウトしていってしまう。

ここまで書いていくと『フィールドラーニング』が従来の大学教育の中でかなり特殊であることがわかるであろう。それは通常、大学のみならず制度化された学校すべてにおいて、授業の成果は学生に限定されたものであるからだ。しかし、『フィールドラーニング』の成果は学生はもちろんのこと、地元の講師、子供たちの三者が享受することになる。そしてこの三者は決まりきった成果を個別に得るのではなく、三者の双方向的な刺激によって、より高いレベルに達していくのである。『フィールドラーニング』を受講した学生の感想文からもこのことを理解することができる。大学と地域の連携の事業や授業はこの双方向性なくしては意味がないであろうし、双方向性の質を高めること（「触媒」の役割）に大学は尽力することが重要である。

「エリアキャンパスもがみ」のこれから

『フィールドラーニング』による大学生・講師・子供の三位一体の学習は、ユネスコが提唱する「学習都市」の定義の一つである「家庭やコミュニティにおける学習を復活させること」[注3]に共通しており、ゆりかごから墓場までの生涯学習の基盤となる「地域学習コミュニティ」を提供できる可能性を有している。さらにここに大学教員の専門性がうまく組み込まれていけば、学習内容やレベルが高まっていくことは間違いない。「地域学習コミュニティ」では受け身ではない能

動性が発揮されていくのである。

この「地域学習コミュニティ」を構築していくためには、多くの地域住民の参加がなければならない。「エリアキャンパスもがみ」は創立当初から広報に努め、年に一回市民が参加できる「タウンミーティング」を開催してきたが、決して参加者が多かったわけではない。「エリアキャンパスもがみ」が「もがみ学習コミュニティ」に発展していくためには、市民を巻き込む仕掛けを多方面に作っていかなければならないだろう。『フィールドラーニング』によって「もがみ学習コミュニティ」の種はすでにまかれているのである。

ところで、ある学会で現代ではトレンドとなっている大学と地域が連携した事業や授業の実践報告があった。大学と地域の交流を通して地域振興が図られ、若者の人口が増えていくことが期待できる、ということで話は結ばれた。私は「多くの若者が働ける産業がなければ若者は戻ってきたくても戻ってこれないのではないか」と発言した。発表者は絶句した。「エリアキャンパスもがみ」の創立当時は、私も同じようなきれいなストーリーを描いていた。しかし少し考えてみると、地域が元気になることの活性化と、よそから若者を呼び込むことによる人口増加とは、同じレベルの話ではないことを理解するのにそう時間はかからない。人口が増加するほどの多くの若者を呼び込むためには、工場などの働く場所しかも好条件の場所の確保がどうしても必要だ。最上地方は創立時には「エリアキャンパスもがみ」に対して産業の振興も期待したし、あるアンケートでは工場の誘致まで出してきた。しかし、大学は地方自治体とは違う。大学が工場誘致に与ることはない。

一方で、日本の荒廃していく地方を何とか立ち直らせようと真剣に考えるならば、どのように雇用を生み出すかを考える必要があることは間違いない。それは現世的な利益追求を第一義としない大学と言えども、知の拠点としての大学には現代的な責務がある。大学はこの責務から逃れることはできない。

山形大学の「エリアキャンパスもがみ」に地方の少子高齢化・人口減少を考える研究機関を設置した方がいいのではないだろうか。そもそも「エリアキャンパスもがみ」設立当時から深刻な問題であった少子高齢化・人口減少は、この 16 年でさらに進行していった。大学は有効でありかつ実効性のある提言をなんらしてこなかった。「エリアキャンパスもがみ」は、現代日本の深刻な問題に立ち向かってきたとは言い難い。これはもはや行政だけで解決できる問題ではない。もちろん財政難の山形大学単独では研究機関を設置することはできない。地元との連携が必須である。

私はある人から「先生は「エリアキャンパスもがみ」で壮大な社会実験をしているのではないか」と言われたことがある。私は一瞬、そして今もこの人が言わんとしたことが何であったのかをよくわかっていない。だが、「社会実験」という言葉は私の頭の中にいまでも所在なげに不安定な状態で残っている。生物科学の実験は、個体や細胞に薬物の種類や濃

度を変えて投与しその結果をみるものがある。遺伝子を組み替える研究もおこなわれている。すなわち研究の目的に合わせて（仮説を証明するために）対象を操作するのである。社会実験が人間をこのように操作するものであるならば、怖いものを感じざるを得ない。だが、ある地域で宅配のためにドローンを飛ばして安全性を調べるような社会実験は普段に行われているのだろうし、その必要性は十分に理解できる。ある特定の地域での先進的な取組が社会実験と呼ぶならば、「エリアキャンパスもがみ」もそうであることは間違いない。これからはもっと積極的にいろいろな先進的な取組（社会実験）が「エリアキャンパスもがみ」でなされてもいいのだろう。

教育を核とした「エリアキャンパスもがみ」は直接的には最上地方の産業の育成には絡んでこなかった。『フィールドラーニング』が産業の育成に絡めるとするならば、私はそれは観光業であると考えてきた。もし観光地として最上が日本の他の地域よりも努力して優位に立てるとするならば、それは体験型の観光であり、かつ住民のホスピタリティであると考える。『フィールドラーニング』によってすでに体験型のプログラムは各市町村にできている。観光の体験型のプログラムについては、前年のこの紙面で論じたのでそれを参照していただきたい[注4]。ホスピタリティについては、日本人学生や留学生の教育や交流を通して講師や住民はその能力が上がっていることは確かである。『フィールドラーニング』を担当した人は、日本語をわからない留学生がいてもものおじしないはずである。こうした経験はとても大きいことだと思う。

おわりに

最近、私は北海道平取町から「大学間連携推進事業」の協議会の座長を依頼され引き受けた。この事業の核は「大地連携ワークショップ」である。「大地連携ワークショップ」は、「エリアキャンパスもがみ」の『フィールドラーニング』から東日本の大学間連携組織「ＦＤネットワーク“つばさ”」のプロジェクトとして発展したものである。平取町は 2013 年からプロジェクトの一環として、そしてその後は町が単独で「大地連携ワークショップ」を毎年開催してきた。これを今回、国の「アイヌ政策推進交付金事業」の一環として全国展開することになり、私に協力を求めてきたのだ。

平取町の担当者は「大地連携ワークショップ」を行うのに非常に熱心である。私とのつながりも深い。なんだかんだ言っても、ことをなすのは使命感を持った熱い人である。内から湧き上がる情熱を持った人だけが新しいことをできるのだ。平取町役場のＫ氏によって、改めてそのことに気づかされた。

地方自治体が主導する『フィールドラーニング』の方向性は、大学主導とは違う成果を生み出すかもしれない。また平取町の『フィールドラーニング』のテーマは当初から「アイヌ文化体験」に絞られている。私はアイヌや少数民族、先住民族について無知である。この 20 年、年に数度北海道を訪問しているが、北海道についてよく知っているわけではない。

だが、この未知の世界ゆえに楽しみにしているところがある。好奇心だけは今でも衰えていない。関係者の人たちから学びながらこのテーマを深め、世界的な広がりのあるプロジェクトにして行きたい、と私は考えている。全国の大学生のみならず、いつかは世界中の大学生が交流し学ぶ場になればと思う。「エリアキャンパスもがみ」の『フィールドラーニング』は広がっているのだ。

私は「エリアキャンパスもがみ」の付き合いを通して、様々なことを学ばせていただいた。私は元来社会性に乏しいし、私が選んだ職場である大学も社会性に乏しい。大学や大学教員が社会性に乏しいことが一概に悪いとは思っていないし、大学がお金にまつわる利益を追求しないところに、大学や大学教員のレゾンデートルがあると信じている。大学は会社ではない。会社のように利益で大学が評価されたならば、それは大学でなくなる。大学は研究で得た成果や教育を社会に還元できれば、立派に社会に貢献したことになると思っている。

そうした私が「エリアキャンパスもがみ」と係わりを持たなかったならば、リアリティを踏まえてこれからの大学と地域のありかたについて考えることはできなかっただろう。「エリアキャンパスもがみ」によって私の視野は広がったし、地に足のついた思考を深めることができた（まだまだ観念的であることは認めなければならないが）。そしてなによりもたくさんの素晴らしい人たちに出会うことができた。「エリアキャンパスもがみ」に、いくら感謝しても感謝しきれない。

私は、2020 年 3 月 31 日をもって「エリアキャンパスもがみ」を卒業する。卒業できるほどのことはしていないが、16 年という歳月の長さでお許しを願いたい。

「エリアキャンパスもがみ」の益々の発展を祈念している。

注

1　山形大学「エリアキャンパスもがみ」はＷｅｂサイト（http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/yam/）を参照のこと。

2　フィールドラーニングの用語については、小田隆治・呉屋淳子・橋爪孝夫著「フィールドラーニングは教養教育の新しい教育方法である」山形大学高等教育研究年報 8、38－43、2016 を参照のこと。

3　「ユネスコ学習都市に関するグローバルネットワークについて」Ｗｅｂサイト（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/__icsFiles/afieldfile/2016/01/20/1366175_5.pdf）を参照のこと。

4　小田隆治著「「エリアキャンパスもがみ」とインバウンドによる地域活性化を考える」エリアキャンパスもがみ研究年報 2018、40-44、2019、電子版（www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/yam/houkoku/houkoku_H30.pdf）を参照のこと。

第二部　授業記録

○前期「フィールドラーニング－共生の森もがみ」

プログラム

１．「新庄まつりとオレ」～日本一の山車行列～　・・・・・・・・・・・・　38
２．「作陶に挑戦！」新庄東山焼の世界　・・・・・・・・・・・・・・・・　45
３．地域の資源を活かし山屋の魅力を探る　・・・・・・・・・・・・・・・　54
４．マルシェ“本活プロジェクト”～本と人をつなげる出前図書館～　・　61
５．山間地で感性を豊かにしよう　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　68
６．歴史的地域資源の保存と活用を考える　・・・・・・・・・・・・・・・　73
７．森と人との共存を考えるⅠ～山間地の歴史を探り地域振興へ
【地域マップづくり】～　・・79
８．最上町の人・自然・文化に触れよう①　・・・・・・・・・・・・・・・・86
９．里地里山の再生Ⅰ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
１０．中村湿原のみらいを考える～環境保全と観光利用の両立　・・・・・・98
１１．子どもの自然体験活動支援講座①　・・・・・・・・・・・・・・・・105
１２．大蔵村の生活と伝統の継承　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
１３．鮭川歌舞伎今昔物語～地歌舞伎の歴史と未来を考える　・・・・・・122
１４．戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生き様に学ぶ　・・・・・・・・・・128
１５．里山保全と山菜料理　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・137
１６．伝承野菜栽培と角川のパワースポット巡り　・・・・・・・・・・・・145

「新庄まつりとオレ」～日本一の山車行列～

活　動　状　況

○実施市町村：新庄市

○講　　師：新庄まつりサポーター‘S、羽賀　千尋、野川　北山（山車人形師）

○訪　問　日：令和元年 6 月 22 日(土)～23 日(日)、7 月 13 日(土)～14 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部 6 名、工学部 6 名　　以上 12 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】６月２２日（土）	【１日目】７月１３日（土）
08:00　山形大学発 09:30　ふるさと歴史センター着 09:40　開講式 1）オリエンテーション 2）プログラム説明 10:00　新庄まつりを知る① ◆展示山車見学 ◆お祭りホールの映像視聴 ◆山車の説明◆法被、囃子の説明 11:30　ふるさと歴史センター見学 12:00　昼食（各自） 13:00　新庄まつりを知る② ◆新庄まつりの人形制作現場見学 14：30 新庄まつりを知る③ ◆新庄まつりの起源・神輿渡御行列についての講義 16:00　指導者との振り返り 16:30　宿泊先へ	08:00　山形大学発 09:30　雪の里情報館着 09:40　企画立案・提案準備 ◆「新庄まつりファンを増やすために私たちができること」をテーマに企画立案 ◆提案資料の作成 ◆山車製作見学 12:00　昼食（各自） 13:00　企画立案・提案準備 ◆「新庄まつりファンを増やすために私たちができること」をテーマに企画立案 ◆提案資料の作成 ◆山車製作見学 15:00　会場準備・リハーサル 16:30　振り返り 17:00　宿泊先へ
【２日目】６月２３日（日）	【２日目】７月１４日（日）
09:00　企画立案・提案準備 ◆昨年プログラム受講者を交えたディスカッション ◆「新庄まつりファンを増やすために私たちができること」をテーマに企画立案 12:00　昼食（各自） 13:00　企画立案・提案準備 ◆「新庄まつりファンを増やすために私たちができること」をテーマに企画立案 ◆提案資料の作成 15:30　指導者との振り返り 16:30　雪の里情報館発 18:00　山形大学着	09:00　会場準備・リハーサル 10:00　企画の提案発表 想定：新庄市長、商工観光課・山車連盟・囃子連盟・神輿渡御行列へ企画の提案 12:30　昼食（各自） 14:00　提案発表のまとめ・振り返り 15:00　活動総括・全体の振り返り 16:30　雪の里情報館発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Sさん

今回のフィールドラーニングでは、本当に言葉では語り尽くせないほど多くのことを学んだ。

１回目のフィールドラーニングでは、現地でしか感じることのできないこと体験をできたと強く感じた。フィールドラーニングをする前に、事前学習として、新庄まつりの根幹となる山車や囃子、新庄まつりの歴史などを調べていたので、自分では新庄まつりについて大まかなことは理解できていると思っていた。しかし、現地の方々の話を聞いたりすると、新庄市民の新庄市や新庄まつりへの愛の深さなど、スマホの画面越しには絶対に理解することのできないことに関して知ることができた。また、貴重な体験をしていくなかで、抱いた疑問もあった。それは、新庄まつりへの認知度の低さだ。山形県内出身の友達に新庄まつりのことに関して聞くと、新庄まつりがどのようなものなのかを知らなかったり、新庄まつりを知っていたとしても、参加したことのない人が多くいるということを感じた。新庄まつりのことに関して山形県外ならともかく、新庄市外の山形県内で、新庄まつりへの認知度が低いということは意外だった。

そして、１回目のフィールドラーニングを通して、新庄まつりの規模の大きさ、魅力など、新庄まつりの素晴らしさを知った一方で、新庄まつりの課題を発見することができた。それは、「後継者不足」、「認知度の低さ」、「ごみ問題」の３つだ。その３つの課題を解決することが、私たちの目的になった。

２回目のフィールドラーニングでは、新庄市長をはじめとする新庄まつりに関わる多くの方々と協議するタウンミーティングに向けて、３つのグループに分かれ、１回目で発見した課題の解決に向けて、協議を重ねた。１つ目の「後継者問題」では、最上地域の子供たちや観光客に山車づくりに興味をもってもらい、後継者不足解消の足掛かりにするという企画趣旨で、新庄まつり当日に、さくら作り体験などを実行するという案を出した。２つ目の「認知度UP」では、新庄まつりの参加者を増やすのではなく、新庄まつりファンを増やすという企画趣旨のもとで、Twitter・Instagramの活用、イケメングランプリの継続、山形大学の講義でのアンケートを取ることを決定した。３つ目の「ごみ問題」では、「ごみ問題」は、新庄まつりに限らず、多くの祭りで問題となるので、少しでもポイ捨てを減らすという企画趣旨のもとで、新庄まつり当日に、山形大学のボランティアサークル「JCC」と連携してごみの回収活動を行うことになった。

タウンミーティングでは、新庄まつりに関わる皆さんが様々な意見を出してくださったので、自分が想像していた以上に議論が白熱した。

フィールドラーニングを通して、新庄まつりの課題を発見したり、新庄まつりの歴史を知ったりすることはもちろん、自分自身も成長できた充実した４日間だと思う。今回のフィールドラーニングは、大学の講義の一環で行っているが、授業内だけで終わらせるではなく、実行して成功させなくては意味がないと思う。新庄まつりの課題解決に向けて、これからも真剣に取り組んでいきたい。

人文社会科学部　Iさん

フィールドラーニングを終えてまず思ったことは、新庄まつりが壮大で美しく、新庄市の誇りであるということだ。私のチームには新庄市出身の学生が二人いる。そして、その二人は活動の前から新庄まつりについて他のメンバーに熱く語っていてくれた。また、一回目の授業で新庄市に来たときに、サポーターの皆さんが新庄の魅力を様々な角度から教えてくれた。そうして話を聞いていくうちに私もその熱に当てられ、魅力的に感じ、この祭りをさらに盛り上げたいと本気で思うようになった。

だが私は最初、新庄まつりをこれ以上どうしたら良いのかがわからなかった。なぜなら新庄まつりは現在すでに50万人以上の人が見に来るほど巨大化したお祭りになっていたからだ。しかし、そのように巨大すぎるが故に問題点もあった。例えばゴミ問題だ。ゴミ箱の供給が間に合わずにその場に放棄してしまう人が多く、毎年祭りが終わったあとのゴミ問題が深刻なのである。町の人が「人がたくさん来てもそのような問題が起こっては素晴らしい祭りとは言えない。それは成熟した祭りではない。」とおっしゃっていてその通りだと思った。そこで私は、新庄まつりの来客数を増やすよりも新庄まつり自体の魅力を高め、また新庄まつりのコアなファンを増やす必要があるのだと感じた。

そこで私たちは、新庄まつりファンを増やすために三つ課題を立てた。それが①後継者不足②若者の知名度の低さ③ゴミ問題　である。

そしてそれぞれ、①山車に使われる花作り体験ブースの設置②SNSによる新庄まつりPR③ボランティアサーク

ルと共同で行う清掃活動　として課題に対する解決策を立てた。

四日間のプログラムを終えて、多くの課題が見つかった。我々の考えた案は独自性やインパクトがある一方で、まだまだ実現性に欠ける。そのため祭り当日までに動きの想定、必要人数の配置、予算など企画書を見たら誰でも動けるような完成度のモノを作る必要がある。また課題に対する政策が、問題を捉えているのかも検討の余地がある。より効果的な政策を考え、できれば自分たちの活動を数値的に見られるモノにしたい。そうすることで我々の活動がどれだけ新庄まつりに貢献できたかがわかるようになるのだ。

そして8月24日から始まる新庄まつりを、私たち大学生の立場から発展させていきたい。

人文社会科学部　Kさん

私が今回「新庄まつりとオレ」を選択したのは、自分が小さいころから参加してきた新庄まつりを、県外出身者などの外の視点を通して見つめ直し、より良いものにしていきたいと考えたからだ。

実際にフィールドラーニングをやってみて、私は新庄まつりについてよく知っているようで、実は知らなかったことを自覚した。例えば、どうして新庄まつりが行われるようになったのかその背景については今回のフィールドラーニングで深く学んだ。新庄の方のお話によると、江戸時代、新庄藩では凶作飢饉に見舞われることが多く、死者も少なくなかった。それに心を痛めた新庄藩主が領民たちを励まし、五穀豊穣を祈願するためにはじめたことがキッカケだそうだ。私自身も今回のフィールドラーニングで新庄まつりについて新しいことをたくさん知れた。

260年以上続き、近年ユネスコ無形文化遺産にも登録された新庄まつりであるが、問題も多く見つかった。まず１つ目に後継者不足があげられる。新庄市では少子高齢化が進んでいることもあり、山車製作や囃子の担い手が不足してきている。今はまだ深刻な問題にはなっていないが、将来的には新庄まつりに大きなダメージを与えることは間違いない。２つ目は新庄まつりの認知度不足だ。フィールドラーニングの班に県内出身者（新庄市を除く）が2人いたが、どちらも新庄まつりがどういうものか全く知らなかった。去年先輩たちが山大一年生にとったアンケートによると、ほとんどの人が新庄まつりを知らなかった。３つ目はごみ問題だ。新庄まつりは３日間で５０万人以上の人々が訪れる。そのため、ごみが道端に落ちていることが多々ある。これは、新庄まつりの景観を著しく悪くしている。

私たちは上記の３つの問題についてそれぞれ解決策を考え、タウンミーティングで新庄市長を中心に提案した。多くの方々が、私たちの案について様々なアドバイスをしてくださり、企画の実現性を上げることが出来た。その中でも私たちが１番大事にしている後継者不足解決の企画について説明していきたい。

企画内容としては、新庄まつり当日に体験ブースを設ける。そこでは、実際に山車の一部（桜）を作る体験、法被を着ての記念撮影、太鼓・笛・鉦の展示、新庄まつりPRスライドショーを行う。

次世代を担う新庄・最上の子供たちに「体験」してもらうことで、観光客としてではなく、作る側・運営する側として新庄まつりを楽しんでもらえるようにすることが狙いだ。すぐに結果には結びつかないだろうが、いつかこの経験がキッカケとなって新庄まつりに携わっていきたいと思う子供たちが出てきてくれることを期待している。

このまま新庄まつりまで計画的に準備を進め、「新庄まつりとオレ」選択者として、地元の人間として、企画を実行するところまでやりきる。

人文社会科学部　Sさん

４日間のフィールドワークを通して多くのことを学べて実りの良いものとなった。私は地元が山形県だがこんなに新庄まつりが大きなものだと知らなかった。一日目では新庄まつりの起源や特徴などを学ぶことができた。新庄まつりは藩政時代の宝暦六年（1756）藩主戸沢が、前年の大凶作でうちひしがれている領民に活気と希望を持たせ、豊作を祈願するために行ったのが起源だとされている。特徴としては古式ゆかしい神輿渡御行列、歌舞伎・歴史物語の名場面を見事に表現した豪華な20台の山車行列など藩政時代をしのばせる歴史絵巻が繰り広げられる。また、町内によってメロディーが違う囃子・太鼓・笛の3つの楽器が作り出すハーモニーはとても見る人の心を揺さぶります。

そして囃子・神輿・山車が三位一体となっているのは新庄まつりだけでこのことにより、ユネスコに登録されている。

二日目以降はこの新庄まつりをどうしたらまつりにきた人々の満足度向上をあげることができるのか考えた。学生の目線から見て新庄まつりの問題点は後継者不足、山大生を含む認知度不足が挙げられた。そこで私たちが考えた企画は新庄まつり体験ブースの設置だ。これはまつり当日にきた方々に山車には欠かせない「桜」を作る体験をしてもらい、作った桜を来年のまつりに使わせていただく。こうすることによって、観光客は「自分が作ったものが山車に使われている」という気持ちがリピーターとなふるきっかけになることの期待や新庄最上の子供たちは「実際の山車づくりを手伝いたい・見てみたい」という気持ちが芽生え、少しでも後継者不足の解消になったり、また、法被を着て、太鼓の前に立って写真をとるという案も出た。このことにより、写真が一生の思い出となるとともにSNSに写真が投稿されれば認知度向上にもつながるという一石二鳥のメリットよるがあ

る。それに加え、「新庄まつり広報部」と称してSNSを活用して認知度の向上につなげるという案も出て、現在Twitterとインスタグラムの開設をして新庄まつりの広報に努めている。
このフィールドランニングを通して、自分たちの企画を通す難しさや楽しさを学ぶことができた。この経験をいろんなところに生かして自分の活動の幅を広げていきたい。

人文社会科学部　Aさん

私が今回のフィールドラーニングで最も印象に残ったことは、新庄出身の自分でも知らなかった、新庄まつりの魅力や課題を発見できたことだ。新庄まつりの歴史や戸沢藩主に関わる様々な場所を巡りながら、地元の人々の意見を直接聞くことができた。例えば、新庄まつりは、県内で一番歴史のあるまつりだということがわかった。260年間一度も絶やさず、形態を変えず、人と人との繋がりを大事にしてきたまつりである。自分が一番と考える人はいなくて、いつも新庄市民みんなで支えあってきたそうだ。その話を聞いて、自分の故郷の人々の優しさにとても感動したし、誇らしく思った。また、新庄まつりは260年以上前から続く、素晴らしい祭りだが、その伝統を引き継ぐ子供たちは年々減少している。後継者不足により、山車制作や囃子の組織は危機的状況にある。後継者不足に苦しむ町内の人のお話を直接聞き、自分が思っていたより課題は深刻で、解決するためには多くの時間と策が必要だと痛感した。

後継者不足を解決するためにはまず、次世代を担うであろう子供たちに、新庄まつりを裏で支える人々やその活動を知ってもらい、体験してもらうことが必要だと感じた。山車制作は特に、準備期間が長く、手間とコストがかかるので、なかなかやろうという若手がいない。しかし、新庄まつりにとって山車はなくてはならないものだ。そこで、まつり当日山形大学の特設ブースを設置し、山車作り体験をしてもらおうと考えた。山車には桜や松、山、川など、必ず乗せなくてはならないものがいくつかある。そこで、その中でも最も簡単な桜を作る体験をしてもらうことにした。ただ桜を作るだけでなく、それを来年の山車に飾ってもらうことで、体験者にまた来年もまつりに来たいと思ってもらえるような体験ブースにするつもりだ。また、この体験ブースは、後継者不足を解決するきっかけにするとともに、観光客のリピーターを増やす狙いもある。

4日間を通して、新庄まつりを全く知らない山大生と一から新庄まつりを学び、課題を発見し、解決策を提案することは、想像していた以上に大変で、企画を計画、実行する厳しさを学ぶことができた。しかし、私はこの企画にとてもやりがいを感じている。歴史と伝統と新庄市民の想いのつまった新庄まつりに、企画する立場で参加できるこの貴重な体験を大事にしていきたい。

人文社会科学部　Sさん

フィールドラーニングを感じたことは、私は新庄まつりについて何も知らなかったということだ。そのため、今回のフィールドラーニングを通して新庄まつりの魅力をたくさん知ることができた。

一回目のフィールドラーニングでは新庄まつりや戸沢藩の歴史、新庄まつりに携わる人々について、歴史的にかかわりの深い場所を巡りながら学んだ。具体的には、新庄市歴史センターの中を見学させていただいた。その時初めて新庄まつりの山車を間近で体感することができた。山車の想像以上の出来栄えに感銘を受けた。また、歴史センターで鉦や太鼓の演奏を聞くことができた。囃子の演奏は新庄のそれぞれの地域によって一つ一つ異なっているという。その後、新庄まつりの山車で使用される人形の制作現場を見学させていただいた。人形たちの生き生きとした表情はまさに人間のそれで、人形一体一体に込められている努力とそれに費やした時間はとてつもないものだと実感することができた。

二回目のフィールドラーニングでは、一回目のフィールドラーニングで学んだことをいかして、新庄まつりの問題点を改善するために班ごとに分かれてそれぞれ企画立案し、新庄市長に提案した。

企画は大きく分けて①特設ブースの設置、②広報・宣伝活動、③ごみ問題の解決の三つである。私は①特設ブースの設置について考えた。当日、特設ブースを設置して山車の一部で使用する花を作っていただいたり、法被を着て太鼓や鉦とともに記念撮影していただいたりして、新庄まつりに興味を持つ若年層を増やし、新庄まつりのリピーターを増やし、将来的に新庄まつりの後継者問題を改善していくことにつなげることが目的である。

今回のフィールドラーニングを通して新庄まつりの良さがわからないのはもったいない事だと思った。新庄まつりで問題なのは後継者が不足していること、認知度がまだまだ足りていないことだ。私もこのフィールドラーニングに参加していなければ新庄まつりの良さにつ

いて知ることはなかったなかったかもしれない。しかし実際に自分自身で体験して新庄まつりの良さをもっと発信していきたいと思った。これから新庄まつりに参加する機会があれば積極的に参加できるようにしていきたい。

工学部　Sさん

私がこのプログラムに参加することを決めた理由は、地元の祭り以外の祭りにも「つくる」側の一人として参加したいと考えていたからだ。

実際に新庄市に足を運び活動した4日間で、私はとても多くのことを学び、感じ、考えさせられた。最初の1日で、「新庄まつり」の起源などを、直接市民の方々から伺うことができた。また、ふるさと歴史センターという場所に展示されている、山車の迫力は実物を見た人にしか分からないものだと思った。私は山形県出身ではないため、新庄まつりに参加したことがない。今、目にしている山車が、代々受け継がれてきた「新庄まつり」という場で市民の手により、どのように新庄市を回っていくのかと、私はとても期待している。確実に、私の想像の範疇を超えてくるだろう。

私たちを感動させてくれた「新庄まつり」ではあるが、いくつか問題を抱えていることも分かった。それは後継者不足である。「新庄まつり」は山車・囃子・神輿の３つが主である。どれも欠いてはならないものであるが、昔に比べて継続が困難になってきているのは、確かである。そこで、問題解決のために、「新庄まつり」当日に体験ブースの設置を考えた。この企画は後継者不足問題解決の他にも、「新庄まつり」の認知度の増加にも貢献できると考えた。そのため、ターゲットは新庄・最上の子どもに加えて観光客とした。具体的な内容は、「山車づくり体験」と「法被＆囃子の記念撮影」である。具体的には、来年の山車の飾りに使われる桜の飾りづくり、法被を着用し、本物の太鼓・笛・鉦を持っての記念撮影だ。子どもたちの山車づくりへの興味をもつきっかけ、観光客のリピーターになるきっかけを狙った。

この企画は、実際に今年の「新庄まつり」での実施が予定されている。そのため、市長を含めた新庄市民に立案するタウンミーティングでは現実性が重要視された。企画に対し、私たちとは異なる視点からの指摘やアドバイスがあり非常に参考になった。より、考えるべき点が明確になったと思う。

今回のフィールドラーニングを通して、企画の立案から実行までの過程は非常に難しいことが分かった。実行までは、まだ少し時間があるのでより良いものになるように、企画を練っていきたいと考えている。4日間という短い間だったが、とても濃い時間を過ごすことができたと感じている。

工学部　Hさん

私が共生の森もがみの中で「新庄まつりとオレ」を選んだ理由は、正直に言うとお金が他のプログラムと比べ安かったからだ。当然新庄まつりを知らない状態だった。そのような心持ちで挑んだので事前学習を行ったがしっかりとしたまつりのイメージを持つことがないまま１回目のフィールドラーニングに挑んだのだ。

フィールドラーニング１回目の初日は、ふるさと歴史センターにてまつりの概要や昨年度のまつりで優秀作品に選ばれた２つの山車を実際に見学した。囃子に使われる楽器も見て演奏している所も見た。実際に見る山車は画像で見るよりも迫力があった。次に新庄まつりの起源や歴史にまつわる様々な場所を訪問した。訪問することで新庄まつりの歴史の深さを肌で感じた。昼食は新庄市内でとったが町に人がほとんどいないので、まつりで賑わうイメージを持つことは出来なかった。午後は人形制作をしている野川北山さんの制作現場を訪問した。様々な人がまつりに関わっていて大切にされているまつりだと分かった。

次の日は、雪の里情報館で企画立案に取り組んだ。初日の夜に行ったミーティングの中で出た意見から課題として取り組むものを決めた。実際に企画を立案しようと思うと、企画立案をやったことがある人がいないためとても苦労した。しかし先輩にも手伝ってもらいながら取り組んだ。立案の際には初日に学んだ内容も参考にした。まつりについて考えていく内に少しずつまつりのイメージが掴めてきた。

フィールドワーク２回目の初日は、企画の内容の詳細化や２日目に行われるタウンミーティングの準備を行った。この日が一番大変だった。２日目に使う企画書の作成や質問に備えて資料を探し質疑応答の準備、タウンミーティングで喋る人はその原稿の推敲や練習とやることが多くメンバーで分担して行ったが深夜の２時頃まで掛かった。

次の日はタウンミーティングを行った。トラブルはなくスムーズに進んだ。実際に地元の有識者を交えたディスカッションでは、これまで出なかった意見や気付かなか

った企画に対しての質問が予想以上に出た。タウンミーティングを終えた後はミーティングで出た改善点を全体で共有し企画の練り直しを行った。辛辣な意見が出た企画もあり練り直しも大変だった。
全体を振り返ると、まつりの事をまったく知らない状態から企画立案することは大変だった。また、企画を考える事の難しさを知った。時間をかけて作っても気付かない穴があり、それを実現するためのイメージを伝えるのは難しかった。話し合いの中で何回もテーマに立ち戻りwhyを大切に行った。今回のような企画立案し実行する能力はこれからの大学生活のみならず大学を出た後でも活きると思うので、とてもよい経験になったと思う。

工学部　Tさん

今回のフィールドラーニングは2回に分けられていて、1回目のフィールドラーニングでは新庄まつりの歴史や概要を学んだ後にまつりの問題点を洗い出してその解決方法を模索した。2回目のフィールドラーニングでは1回目のフィールドラーニングで考えた解決方法を具体化して、それを有識者の方々に提案した。

1回目のフィールドラーニングでは新庄まつりについての基本事項を知り、自分たちが関わる新庄まつりが如何にすごい祭りかどうかを再確認できた。新庄まつりには約260年の長い歴史があり、その始まりは宝暦6年といわれている。祭り当日は20の町の若連の方々が山車を引き、囃子を演奏する。山車には山、滝、松、桜、紅葉、牡丹の6つを乗せなければいけないという決まりがあり、人形を使って物語や歌舞伎の一場面を表現する。最近では山車をライトアップすることもできる。囃子は各町の若連ごとに少しずつメロディやリズムが違い、太鼓、笛、鉦を使って奏でられる。そんな新庄まつりだが、問題点もいくつかあり、私たちは主な問題は3つに分けられるとしてそれぞれを後継者問題、認知度の低さ、ゴミ問題とした。これらの問題の解決方法として後継者問題には祭り参加者への花づくり体験、認知度の低さに対してはＳＮＳによる広報活動、ゴミ問題に対してはボランティアサークルと共同でのゴミ回収が挙げられた。

2回目のフィールドラーニングでは3つのグループに分かれてそれぞれの問題と解決策の具体化を進めて、提案の準備を行った。その際最も苦労したのは問題解決の理想をどのようにして実現可能なレベルに落とし込むかというところである。今回のフィールドラーニングは一部大人の力を借りるものの基本的には大学生の力だけで問題を解決するという趣旨である。そのため、大学生の力でできる範囲で最善策を探し出すのはとても大変で、話し合いがうまくまとまらないときもあったが、意見を出し合っていくうちにだんだんと案が肉付けされていき、形になっていった。

計2回のフィールドラーニングを通して自分たちのできる範囲での新庄まつりの問題解決の最善策を見つけることができたと思う。これから祭り本番である8月の24日、25日に向けて問題の解決策を実現させていきたいと思う。

工学部　0さん

私が、「新庄まつりとオレ」～日本一の山車行列～を選んだ理由は、祭りが単純に好きであるのとプログラムの内容を見たとき楽しそうであると感じたからである。

１回目のフィールドワークでは、主に新庄まつりの歴史や起源についての知識を増やした。そこで、一番感じたことは、ものすごく伝統ある祭りであることと、新庄市民の祭りに対する熱い思いである。そこで私は、少しでも新庄まつりをよくするために力になりたいと感じた。

新庄まつりをよいものにするために私たちが取り組んだ課題は「後継者不足の解消」「新庄まつりの認知度UP」「ゴミ問題の解決」の３つである。この問題を解決するために私たちができることを考えた結果、計画された企画はそれぞれ「法被を着ての記念撮影、PR動画の放映、山車に使われるさくら作りの体験ブースの設置」「新庄まつりの認知度UPのためのSNSの開設、山大生の認知度調査のためのアンケートの実施」「JCCと連携したゴミの回収活動」である。私は「ゴミ問題解決」の担当になり、企画書を作ることになった。

２回目のフィールドワークでは、制作した企画書を市長などなどに立案するタウンミーティングをした。企画書を作るうえで難しいと感じた点は、自分たちのやりたいと思っていることをいかに相手に正確に伝えるかという点と、相手がやってもいいと思えるようなより具体的で現実的な企画書を作ることであった。企画書を今まで作ったことがなかったので思っていたよりも時間がかかってしまい苦戦した。しかし、タウンミーティング本番では自分たちの企画を自信をもってプレゼンできた。その結果、企画を実行するために必要な意見をたくさん出していただき新たな改善点も見つかった。企画書はもっと精度の高いものを作れた気がするが、無事にプレゼンテーションを終えられた他という点でタウンミーティングは成功と言ってよいだろう。

今回のフィールドワークを通して、私が今まで知ることがなかった新庄まつりという伝統に触れられたのでよかった。さらに、現地に行って現物を見たことや、地元の人の話を直接聞けたことは貴重な体験であった。企画書を作るのに苦労はしたが、企画立案者の苦労がわかったことや、祭りが抱える問題に正面から向き合えたという点で私は成長できたのではないかと感じる。大変なことも多かったがその中に充実感があり楽しいフィールドワークとなった。

工学部　Mさん

私は今回のフィールドラーニングと通して「地域の現状から課題を見つけ出し、その対策を提案・実行する」ということが想像以上に難しいということを実感した。

私は新庄まつりについて、事前学習で調べたこと以外は1 ミリも知らない状態で今回の集中講義に参加した。地域の人々から新庄まつりの起源や概要を 教授していただいた結果、自分の中で新庄まつりは長い歴史と自分の地元の祭りにはない魅力を発見することができた。

ところが、新庄まつりをより活性化させるための課題を見つけることは、与えられた情報だけでは考えるためには不十分であったため、自分にとって難しかった。しかし、今回私たちの活動に同伴していただいた小山さんたちや実際に新庄まつりに参加したチームメンバーの助言をいただいたことで、「新庄まつりにはこのような問題がある」と自分の中で発見することができた。

チームメンバーと意見を交換・共有を重ねた結果、とくに「後継者の確保」が新庄まつりを末永く続かせるために重要な課題であると感じた。

私たちはこの課題を解決するきっかけとなる「桜つくり体験」を実行することにした。

これは、祭り当日に山形大学のブースを設置し、そこで観光客や新庄地域に住む子供たちを対象に、山形大学生が主導で桜を手作りしてもらい、それを持ち帰らずに私たちで預かり、実際に新庄まつりで披露される山車（やたい）に載せていただく企画となっている。これによって、実際に自分たちの作ったものが祭りを構成する要素の一部分になっていると実感してもらい、再び新庄の地に足を運んでもらい、しいては新庄まつりの後継者となってもらう狙いがある。

この企画を、フィールドラーニングの一環になっている、私たちの考えた新庄まつりをより良いものにするための企画を発表しそれを実行するために、新庄市長様や新庄まつり実行委員会様をお招きして開催したタウンミーティングで提案した。その結果「新庄まつりをより多くの人たちに周知してもらうための企画としては面白い」という評価をいただいた。しかし「具体的な企画内容が曖昧だからもう少し深く考えるべき」、「少し現実離れしている内容があるから、他機関と連絡・確認をしたうえで内容を決定すべき」などという厳しい意見もいただいた。

私たちが考えた企画は、新庄まつりについてあまりよく知らない、いわば第三者目線で見たものであった。したがって、長年新庄まつりにかかわってきた人々の意見は私たちの考えもしなかった部分からのものがほとんどだった。私は、完璧に思えた企画でもさらに視野を広めた観点から改めて練り上げる必要があると反省した。

今回のフィールドラーニングでは、これから自分が社会に出て一人前の社会人になるために必要な「現実を客観的に見て課題を抽出する力」「意見を共有しながら具体的で現実的な解決策を提案・実行する力」が養われたと感じた。この力をさらに伸ばしていくべく、日々の生活から「どのような課題があるか」「それを解決するにはどのような方法が考えられるか」などを常に意識していきたいと思う。

「作陶に挑戦！」新庄東山焼の世界

活　動　状　況

○実施市町村：新庄市

○講　　師：新庄東山焼弥瓶窯　涌井正和

○訪　問　日：令和元年 5 月 18 日(土)～19 日(日)、6 月 22 日(土)～23 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部 2 名、地域教育文化学部 2 名、理学部 2 名、医学部 1 名、工学部 4 名
以上 11 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】５月１８日（土）	【１日目】６月２２日（土）
08:00　山形大学発 09:40　新庄東山焼着 10:00　オリエンテーション 10:30　講義Ⅰ　東山焼の概要 「歴史、特長、講師経歴、その他」 11:30　昼食（調理、食事） 13:00　講義Ⅱ　焼き物作り工程 14:45　実技　①粘土採り、加工作業　②様々な技法 ③自分の作品 17:00　宿泊先へ	08:00　山形大学発 09:40　新庄東山焼着 10:00　講義Ⅰ　焼き物の化学① 11:30　昼食（調理、食事） 13:00　実技　①釉薬つくり　②釉薬塗　③釉薬塗 16:40　宿泊先へ
【２日目】５月１９日（日）	【２日目】６月２３日（日）
09:00　講義Ⅲ　山形県内の焼き物 10:45　実技　自分の作品仕上げ① 11:30　昼食（調理、食事） 13:00　実技　自分の作品仕上げ② 15:30　後片付け 16:00　振り返り、活動記録 16:30　新庄東山焼発 18:00　山形大学着	09:00　講義Ⅱ　焼き物の化学② 11:30　昼食（調理、食事） 13:00　実技　窯焚き 15:50　振り返り、活動記録 16:20　新庄東山焼発 18:00　山形大学着

授業記録

〇活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Sさん

- 1回目のフィールドワーク
  始めに、東山焼を含む陶器の歴史について学んだ。その中で、瀬戸焼や備前焼といった日本六古窯について詳しくお話を聞いたが、その際、疑問に思ったことを中間学習では調べた。実技では、まず実際に土を掘り、小石や草といった粘土に不要なものを取り除き、水を加えながら硬さを調整し、粘土を生成後、その粘土と正規の粘土を使用し、自分自身の手や空き缶・ボウル等の道具を使用しながら行う手捻りと轆轤で陶器を作成した。
- 2回目のフィールドワーク
  最初に、灰を水に溶かし、何度も漉す作業を繰り返すことにより不純物を取り除いていく。本来の質量のわずか数%となり、さらに酸化鉄・酸化銅を加えることで釉薬を作成する。自分たちで作成した釉薬の他に、涌井さんが使用している釉薬で色付けを行った。釉薬が陶器の底につくと、焼き上げ後、床から離れなくなるため、底には蠟を塗り釉薬がつくことを防いだ。また、1回目のフィールドワークで私たちが作った粘土による陶器の焼き上げを行ったものの、温度が著しく上昇するため多くの陶器は溶けた。
- 課題と解決策
  若者が伝統工芸品を展示物として見ることにより、実用性のない美術品としての認識を強め、若年層の工芸品離れを進めている。さらに、博物館や美術館といった施設で伝統工芸品に触れるため、「高価」「保護」「観賞用」といったイメージを持ちやすい。しかし、東山焼には「使い勝手がよく、日常使いができる」「時代にあった作品を作り、その時代の伝統を作っていく」といった魅力がある。最後の一滴が中に戻り液だれしない醤油差し、注ぎやすいようになっている急須、遊び心を持たせたとっくりといったものが例に挙げられる。
  この問題を解決するにあたり、実際に身近な場で触れる機会を増やすことが、若者の認識を変えるのに必要であると考える。ゆえに、私たちは若者に東山焼を広める第一歩として、八峰祭での東山焼を使用した店舗の出店を企画した。
- 活動を通じて
  始めは、私自身、東山焼を知らず伝統工芸品として、どこか遠い存在に感じていた。しかし、事前学習で涌井さんが行っているクラウドファンディングを調べ、日常生活に関わりのあるものも存在することを知った。「伝統を守ることは必要だが、その時代にあった伝統を作っていくことが大事である」という言葉が強く心に残っている。これは東山焼以外にも言えることではないか。私たちがこれから過ごすうえで、守っていかなければならない伝統と新たに作っていかなければならない伝統を見極めていく必要があるのではないかと感じた。

人文社会科学部　Kさん

1.1回目のフィールドワーク

1日目は陶芸についての歴史の講義があった。陶芸の歴史は縄文時代まで遡る。そこから徐々に全国へと広がり、鉄分やきめ細かさなどの粘土の種類の違いや釉薬の違いによって六古窯という派生が出来た。そしてその後実際に粘土を掘り、その粘土を加工し、それを用いて器などを形成した。また、実際に作陶用の粘土を用いて、自分の作品を作成した。

2日目は1日目に引き続いて自分の作品作りをしたほか、ろくろ体験を行った。ろくろは実際にやってみると難しく、何回も失敗してしまった。講義では東山焼の歴史や先代の話について教わった。講師の先生である涌井さんは、最初の頃は「習うより慣れよ」という意識をもって作陶を行ったり、物作りは自分の想像で大きく変わるという意識を持ったりして、地道な努力を積み重ねて東山焼の新たな歴史を創っていらっしゃった。

2.2回目のフィールドワーク

1日目は釉薬の種類や東山焼の特性についての講義を聞いた。釉薬は木の灰が主成分となってい

るが、それのみでは不安定であるので長石を用いて、加工を行う。その時に酸化鉄や酸化チタンを用いれば、焼きあがった時の色が変化する。そしてその講義の後、実際に灰から釉薬を作った。最初は段ボールいっぱいにあった灰が様々な工程を経るとごく僅かになってしまったのを見て、陶芸は厳選された物の中で作られているということが分かった。

2 日目は 1 回目のフィールドワークで作った粘土を素焼きした。素焼きでは窯の温度が低く、器同士がくっついてしまったり、うまく色が出なかったりしていた。

3.全体を通して

今回のもがみの活動で講師の先生の涌井さんから「自分が東山焼の伝統を創っていく」という話を受けて、今までの歴史を受け継ぐという保守的な立場を取るのではなく、東山焼の魅力をより多くの人に発信していくという自分から行動を起こすという考え方がとても印象深かった。

今を生きている人々にそしてこれからの世代へ東山焼を伝えていくために、自分たちも文開催の出店等で協力していきたい。

地域教育文化学部　Sさん

● 活動（1 回目）

一回目の活動では焼き物の歴史から学び、様々な地域の焼き物の種類、東山焼きについて学んだ。焼き物は 1 万年前に縄文土器から始まり、食べ物が多かった関東から北の地域に食べ物の保管用として広まった。それは『太陽の塔』で有名な岡本太郎も影響を受け、平成 13 年に企画展を行っているほどの縄文土器ファンらしい。また東山焼きは見た目や材料に決まった物はなく、歴代の引き継いだ人がその時代に合わせて作る物も変えていき、時には土管も作ったりしていた。講師の涌井氏は一つ一つ作品を見せてその土地の土の紹介から特徴まで詳しく教えて下さった。講義の後は手びねりとろくろで作品作りをした。特にろくろは高さを出すのは簡単だが湯飲み型になるように丸みをつけるのは力加減が難しかった。力を入れるとすぐにぐにゃりと曲がってしまって慎重さが求められた。ろくろでは湯飲みを作るので精一杯だったので、次はおちょこにチャレンジしたいと思った。

● 活動（2 回目）

二回目は自分たちで作った陶器に薬をつけて色づけし、焼く作業を行った。薬も手作り体験をしたのだが主な成分となる灰を水肥という何度も網でこす作業を行い、材料を作るのにも手をかけているのが分かった。市販でもその原料は売っているそうなのだが自分たちで作るのが一番質のいい物が作れるらしい。薬を作った後は陶器を焼いた。今回は機械に頼らず七輪のような物で人が調節を行ったのだが外で焼いたため風や気温の影響で調節が難しくほとんど焦げてしまった。しかし意外と味のある色味がでて、貝殻のような出来になった。自分で作ったからかもしれないが特別感があった。

● まとめ

最後に涌井さんのお話で、社会で生きていくためにはオリジナリティが必要とおっしゃっていた。確かに東山焼きは180年もの時間の中で姿を変え、時代に対応しながら受け継がれていた。一つの形に固執することなく柔軟に対応するということを今回のフィールドワークで学べることが出来た。また涌井さんは生きていくため、楽しむためにチームワークが大事で、「食べること」は一番チームワークを育むともおっしゃっていた。今回昼食に班員全員で料理をして食べたが、料理を全員で行うというのは係を分ける必要もあり、絶対にコミュニケーションをとる必要が出てくるからほぼ初対面の私達には話せる絶好の機会だった。新入生歓迎のイベントでも食事関係が多かった気がする。東山焼きとは関係がないかもしれないがこれから生きていく上で有益な情報が手に入ったのではと思っている。このフィールドワークで、「生きていく上で大切なこと」という大きなテーマについて学べたと思う。学んだことを生かしてこれから頑張りたい。

地域教育文化学部　Tさん

1. 活動内容

私が参加した共生の森もがみのフィールドラー

ニングでは、新庄市で東山焼という作陶体験を行った。

一回目の活動では、自分たちで採取した粘土を使用して手でこねて作品を制作するいわゆる手びねりを体験した。次に涌井さんが用意してくださっていた粘土でろくろを使用して作品を制作した。手びねりはろくろを使用するのに比べて、自分の思い通りの形やデザインにしやすいという利点があるが、ろくろを使用したときに表れる特有の滑らかさを出すことは難しいと感じた。一回目で作った作品は、涌井さんに素焼きをしていただいて活動を終えた。座学の講義では、東山焼の歴史と特長や焼き物に関する基本的な事柄について学ぶことができた。

二回目の活動では、釉薬を作って素焼きしていただいていた陶器に色を付ける作業と窯での焼き方体験を行った。釉薬の主成分は土灰であり、そこに長石や珪石を混ぜて作る。また、ここに酸化鉄や酸化チタンなどを混ぜるとさらに色が変わり、様々な色の陶器を作ることができる。土灰は水簸（すいひ）という作業で少量しか取り出すことができない貴重な成分である。私たちは、きめ細かいザルのようなもので土灰をこした後、土灰と酸化鉄を混ぜたものと土灰と酸化銅を混ぜたものという二種類の釉薬を作った。色を付ける際には、素焼きした陶器の色を付けたくない部分（コップや皿などの底）に蝋と灯油を混ぜた液体を塗って釉薬で色を付ける。そうすることで、窯で焼いたときに陶器と窯がくっつかなくなるためとても重要な工程だということが分かった。色付けが終わった陶器を涌井さんに電気窯で焼いていただくことになった。自分で採取した粘土で作った作品は自分たちで小さい窯を使って焼くことになった。窯は小さかったが火力が物凄く強くなってしまい，1200℃で焼き上げるところをそれ以上の温度で焼き続けてしまったためほとんどの作品が熔けたり割れたりしてしまった。温度計がなく窯の中も見ることができない状況で、窯の中が現在どのくらいの温度にまで上がっているのかを判断するのはとても難しいことであると感じた。

2. 活動を通しての感想

今回の活動を通して最も強く感じたことは、“職人さんは一つ一つの作業に対してとても真摯に向き合っていて常に消費者のことを考えてモノづくりをしている”ということだ。涌井さんが作っている陶器を実際に手にして間近に見てみると、使う側がどうしたら一番使いやすくなおかつ長く使ってもらえるかということが考えられているものばかりだと思った。醤油さしは、蓋が取れないようにかえしのようなものがついていたり、醤油を注ぐときに最後の一滴が垂れないような工夫がされていたりする。このように常に私たち消費者を第一に考えて陶器を作ることによって、気持ちが込められた一つ一つ手作業で作られた陶器を使いたいと思う人が増えるのだと思った。

また、焼き物を作るということは、自分が思っていた以上に重労働で工程が多いと思った。土の掘り出しから自分で行い形成したものを焼き上げるという一連の作業を体験することができて、自分はもっと丁寧にモノを扱っていかなくてはいけないと改めて思った。

3. 課題に対する探究と提案

今回の活動で私たちが課題としたものは、東山焼きをもっと多くの若い人に知ってもらって使ってもらいたいということだ。そこでどのような活動をすれば東山焼をより多くの若い人に知ってもらえるかを考えた。班員で話し合った結果、八峰祭で出店して東山焼を広める活動をすることが決定した。八峰祭で出店する際に、涌井さんのところで開催している陶芸教室の案内と一緒に自分たちが今回の活動で作った新庄東山焼の作品の展示や涌井さんが作った陶器の展示などを行いたいと考えている。しかし、まだ八峰祭での出店許可が下りているかどうかが分からないため、分かり次第行動に移したいと思う。

理学部　Kさん

1.　事前学習を通して

私は、2 回の事前学習で焼き物の種類と特徴、素焼きについての 2 つを調べた。

焼き物の種類は大きく分けて陶器と磁器があり、私が予想していた数よりも多く、それぞれに特徴があることがわかった。今回参加させていただいた東山焼は、青みがかった色になるなまこ釉という釉薬や、醤油差しの蓋が落ちないなどの使いやすさに重点を置いた陶器という特徴があることがわかった。

素焼きの作業は、その前の乾燥の作業でろくろを用いて作った陶器の水分を十分に飛ばす必要がある。乾燥をしっかり行っていなければ陶器にひびが入り、素焼きの作業で割れてしまう可能性があるためである。事前に調べた素焼きの情報では、一定時間を一定の温度で焼くことがわかった。し

かし、実際は初めの温度を上げる課程が一番割れやすく､400 度程度まで上げることに時間をかけることを知った。今回の活動で、実際に話を聞くことや、体験することは、自分で調べるよりも深く理解できるのだと実感した。

2.　フィールドラーニングの活動

2 回のフィールドラーニングで､東山焼について多くのことを知ることが出来た。1 回目は、主に東山焼の講義、粘土作り、手びねり、ろくろ体験を行った。講義では、東山焼の歴史や、東山焼の特徴を教わった。粘土作りでは、粘土をスコップで採り、石などの余計なものを取り除くところから始まり、機械を使い粘土を練る作業をした。手びねりでは手を使って、ろくろでは足でペダルを踏んで粘土を回転させて、陶器の形を作った。どちらもすぐに粘土が乾燥するため、初体験だった自分では水を加えながらでないと出来なかった。実際に体験して、陶器を作る難しさを理解し、涌井さんの、感覚だけで寸分違わぬ作品を作る精緻な技術を目の当たりにすることが出来た。

2 回目は、釉薬を作り、前回作った陶器の焼上げを行った。釉薬を塗らないところにはロウを塗ることで釉薬をはじくことが出来ることを教わり、興味深いと感じた。焼上げの作業では小さい窯を用い、自分たちで粘土を採り、形作った陶器を焼いた。この作業は、温度調節が難しく、熱くなりすぎて多くの陶器が溶けてしまった。陶器を作ることは自分が考えていたよりも難しいことであると実感した。

3.　東山焼の課題と企画

今回のフィールドラーニングで東山焼は女性を中心に人気であることを知った。しかし、山形大学の学生には県外出身の人も多く、あまり認識されていないと感じた。従って、八峰祭で山大生向けに東山焼についてと、新庄市のことを発進していこうと考えた。この企画で一人でも多くの人に東山焼のことを知ってもらえるように活動していこうと思う。

理学部　Nさん

1.事前学習

私は新庄東山焼について、特に釉薬に興味をもち、その歴史や特徴を調べた。新庄東山焼では、なまこ釉という釉薬が用いられている。その始原は中国宋元代の鈞窯といわれ、主成分は長石などである。また、鈞窯は高火度釉に分類され、その組成のうち塩基成分が釉薬の性質に大きく影響する。

2.1 回目のフィールドワーク

初日は東山焼のみでなく様々な種類の焼物を手に取りながら焼物の歴史について講義を受け、その後は実際に粘土を採取、加工し、手びねりで作品を作った。二日目は東山焼の経緯について知り、さらに、ろくろを用いた作品も作った。

3.中間学習

初日、二日目の講義で酸化焼成と還元焼成の二つの焼成方法があると知り、また、東山焼の特有の青さはコバルトを含むなまこ釉の還元焼成によるものであると分かり、その仕組みに興味をもち、調べた。酸化焼成では酸素の供給が良い状態で焼かれるため、釉薬の成分中の金属が容易に酸化する。これに対し、還元焼成では酸素とふれないように焼くため、釉薬の成分中の金属と結合している酸素まで燃焼のために奪われてしまう。しかし、コバルトの作用には疑問が残った。

4.2 回目のフィールドワーク

三日目は釉薬の成分である長石、珪石や、色の原因となる酸化鉄や酸化銅などを見ながら、釉薬の具体的な成分（土灰、長石がそれぞれ半分ずつほどであり、そこにわら灰や金属酸化物も加えられる。）について理解し、実際に木灰から利用可能な灰を分離して、金属酸化物も加え、自分たちで釉薬を作った。午後からは素焼きされた前回の作品（主に手びねりでなくろくろを用いたもの）の表面をやすりで整え、調合した釉薬を塗った。このとき、ろう（釉薬をはじく）を底面に先に塗り、板との接着を防いだ。四日目は手びねりした作品に施釉し、炭火で温めた後、約 1100~1200℃で数分焼成した。加減が難しく、融解や生焼けのものも多かったが金属成分ごとの色を確かに示していた。（直接は関係ないが、オパール現象により、見る角度で色が変化するものも確認された。）その後、穴窯の実物を見ながら説明を受け、最後に前日に施釉した作品を窯に入れた。（また、なまこ釉の青色はわら灰〈＝塩基〉による部分が大きく、コバルトが補助的の機能しているとのことだった。）

5.課題と提案

「若い世代に知ってほしい」ということから、まずは自分たちと同じ大学生へ発信していきたいという考えから、八峰祭でテントを出すことを自分たちは計画した。また、涌井さんが「伝統は基礎であり重要だが、その時代のニーズに合わせたものも生み出していく必要がある。」という意識で、実用的な陶器（液が垂れず、傾けても蓋が外れにくい醤油さしなど）を制作していることから、陶芸教室などの宣伝だけでなく、「観賞用でなく

実生活のなかで活用できる」という、新庄東山焼の生きた魅力を発信することが自分個人としての大きな目標である。また、上の事前学習、中間学習で得た知識をもとに、新庄東山焼が新庄地域ならではのものだということを伝え、そこから、涌井さんの言うように、新庄市自体に興味をもってもらいたい。

6.活動を振り返って

ろくろを用いた陶芸に興味があり参加したプログラムだったが、それを楽しめただけでなく、多くの得るものがあった。釉薬などのメカニズムの理解も興味をもって取り組めたが、最も大きかったのは、11 人での活動全体で感じた、他人と協力したり人に感謝したりすることの大切さだった。そして、「自分のオリジナルの考え方をもつ」という言葉には非常に勇気づけられた。

まずは、これから計画している企画そのものに取り組むなかで、こうしたことを早速取り入れていきたい。

医学部　Kさん

私がこのプログラムに参加したのは東山焼について知り、陶芸をしたいからという理由だった。ところが、今回の 4 日間で学んだことは想像以上に大きな感銘を与えてくれた。

陶芸の過程として初めてのフィールドワークでまず行ったことは、近くの小山から粘土を掘り、不純物を取り除く工程である。粘土の山はとても固く必要量取り出すのに苦労した。不純物も 11 人で行ったにもかかわらず 2 時間ほどかかった。当日の日照りを考えれば普段からこのような過程をしている涌井さんの苦労は計り知れない。次の過程は成形である。手で成形する手びねり、ろくろでの成形の 2 つを体験した。ろくろでの成形というと一瞬で先が伸びて壺ができるといったスルスルと成形できるものだという印象があった。実際には手をよく濡らし、ゆっくり均等な力で行うなど難解で、皆が苦戦していた。ただ、今回できた作品がうまく仕上がったのは涌井さんが手は加えないながらも、的確に助言をしてくださったおかげであり、そのために皆とても楽しめた。次に東山焼の特徴ともいえる美しい発色のための釉薬を作った。釉薬については事前学習で調べていたが、ここでも驚くべきことに、釉薬は使用した灰から少量しかできなかった。また、比重を測って使用したり、そもそも想像していた作り方と全く違ったりなど調べ学習ではわからないことを学べた。最後の工程は焼きである。私たちは簡易的な窯で作った陶器の一部を焼いた。この火加減も非常に難しく、陶器を何回かに分けて焼いたが一回目は温度が高すぎたせいで融けてしまい、いくつかの陶器と融合してしまった。涌井さんのアドバイスも受けながら空気の送り具合などを創意工夫していき最終的にはうまく焼けるものも出てきた。上手く焼きあがったものが出た時には皆喜んでいた。

これこそが狙いだったと涌井さんは最後のミーティングでおっしゃっていた。陶芸のことを完璧に教えるつもりはなかったそうだ。確かに今回大枠を学んだだけでもわかる位陶芸は奥深く、たった 4 日で学べるものではないともわかった。今回涌井さんが伝えようとしていたのは皆で考え、創意工夫することだった。フィールドワークの中で涌井さんは昼食づくりにもかなり力を注いでおり単に食べるのが好きなのだと考えていた。しかし、よくよく考えると調味料や材料を与えられ、味付けや調理の仕方は任されていた。そして私たちは何度も味見をしながら「この調味料が足りてない」と意見を出し合って調理をした。結果的に毎回満足のいくものが作れた。

社会に出てからは、与えられるものはあるが、それをどうするのかは自分達次第であり、決まった答えに向かって進むのではない。まだ私達は高校時代のテストのように答えは与えられたものだと考えているように思う。そんな私達に創意工夫の難しさ、楽しさ、奥深さを一連のフィールドワークの中で教えてくださった涌井さんには感服するばかりであり、心から感謝の気持ちを送りたい。

工学部　Tさん

- 活動における事前学習

私は東山焼の概要や技法の伝達方法、後継者についいて調べた。技法は一子相伝であり多くの窯元で行われているものではないということがわか

った。また、現在 6 代目として制作を行っている涌井弥瓶さんのご子息がおり、その方も積極的に陶器の制作を行っているということが分かった。私はこのような伝統工芸は現在では後継者の減少により途絶えようとしているものもため、時代に合った作品やアイディアで存続させていくべきだと感じた。

• 活動内容

陶器・磁器の基本的なことやその歴史、東山焼について学んだ。また、粘土を採取し練り上げ工程、成形、釉薬作り、焼き等を行った。粘土の練り上げでは、不純物の除去、水分の調整に時間がかかり苦労した。成形は手びねりとろくろによる 2 つの方法で行ったが、想像していた以上に難しく苦労した。釉薬作りの工程では薪の灰から不純物を取り除くために何度もこす作業を繰り返ため少量の釉薬しか採れないことに驚いた。焼きの作業では温度の調節が難しく大半が変形か溶けてしまった。

• 活動を通じて

今回新庄東山焼について学んだが、私は今まで新庄東山焼について全くと言っていいほど知識がなかった。今回のように私のような若い世代にとって焼き物というものは身近ではなく新庄東山焼についてもあまり知られていないであろうと感じた。そのため、若い世代にも今回のような体験を通じて、興味を持っていただく必要がある。したがって、私たちはまず山形大学文化祭「八峰祭」で宣伝を行う計画を立てることとした。新庄東山焼を実際に使っていただき、ポスター発表形式による説明・紹介とパンフレット等の配布で興味を持っていただくという計画だ。加えて新庄東山焼の体験の紹介と新庄市の紹介を行い、実際に足を運んでいただけたらと思っている。

これらの活動により新庄東山焼を広めていき、今回講師としてお世話になった涌井さんに恩返しができたらと思っている。また、新庄東山焼だけでなく、他の伝統工芸にも興味を持っていただけたらと思っている。それと同時に、私自身も他の伝統工芸について調べ、体験していきたいと感じた。

最後に私たちに親切かつ丁寧に教えてくださった涌井さん、サポーターとして私たち助力してくださった佐々木さん、そして文化祭での計画に助言をくださった市の担当者の方に心から感謝の気持ちを送りたい。

工学部　Sさん

● 活動における事前学習

事前調査として新庄東山焼の歴史、中間学習として釉薬の役割について調べた。
新庄東山焼は、約 180 年の歴史があり、初代涌井弥兵衛氏が新庄戸沢藩の御用窯として設立したのが始まりである。また、釉薬は色を付けるだけでなく、水の染み込みによる陶器の破損を防ぐ役割もある。
私は東山焼をこの活動に参加するまで知らず、約 180 年もの歴史があると事前学習をしなければ知れなかった。素晴らしい焼き物だと感じた。

● ２回の活動

１回目は、「粘土作り、手びねり、ろくろ体験」を行った。粘土作りでは、実際に土を掘り、小石や草といった粘土に不要なものを取り除き、水を加えて粘土を作成。その粘土と６代目涌井弥瓶さんが普段から使っているものを用いて手びねり、ろくろで陶器を作成した。手びねりとは、手を使って陶器の形を作る方法である。ろくろ体験は初めてだったので力加減が難しく、私だけではできず涌井さんにかなりたよってしまった。ろくろにはとても苦労した。
２回目は、「釉薬作り、１回目で作った陶器の焼き上げ」を行った。釉薬作りでは、灰を水に溶かし２回こして砂などを取り除き、こしたものに酸化鉄、酸化銅を入れ釉薬を作成した。
私たちで作った釉薬を陶器に塗り焼き上げをした。この焼き上げ作業は涌井さんが普段から使っている窯を使ったのではなく、巨大な七輪を使った。約 1,200 度で焼くのだが、調節が難しく温度が上がりすぎてしまい、陶器が溶けてしまった。この焼き上げ作業が成功した陶器はほとんどなく、焼き上げの大変さを思い知った。
粘土、釉薬の作成はかなりの重労働で陶器 1 つ作るのに作業工程が多く手間と、時間がかなり必要であった。だが、このような作業によって素晴らしい陶器ができるのだと感じた。

● 活動を通じて

この活動を通じて私たちは新庄東山焼をもっと様々な人たちに知ってもらいたいと思い、どのようにすれば多くの人に知ってもらえるかを話し合った。話し合いの結果、山形大学の学生をメインに新庄東山焼を知ってもらう活動を行うことにした。具体的には、八峰祭で東山焼を使った屋台を

出店するというものである。東山焼の宣伝としては、涌井さんが陶芸教室の案内をしてほしいとおっしゃっていたのでその案内と共に、実際に東山焼を使って焼き物の魅力を伝えていきたい。まだ計画の段階であるため確実にできると決まったわけではないが、八峰祭で出店することは山形大生に知ってもらうのには 1 番の方法であると考えている。この活動を実現するために出店の許可が出たときに備えて、グループのメンバーとよく話し合い計画を前に進めていきたい。

工学部　Sさん

1.　２回の活動内容

一回目の活動では、自分たちで粘土を採集し、手作業で石や枝を取り除き加工した。また、自分たちの作品作りを行った。手びねりとろくろを使って作品を作った。手びねりとは自分の手で形を作ることで、空き缶やボール等の道具を使い、型を取って成形した。ろくろでは自分で回転を調節して、成形をした。座学では、縄文時代からどのように焼き物が変化してきたか、どのような焼き物があるのか、東山焼はどのような歴史を学んだ。

二回目の活動では、釉薬を作り、自分の作品の色づけをした。また自分たちで採集した粘土から作った作品の焼きを行った。釉薬作りでは、材料である土灰と長石、酸化銅、酸化鉄などを。混ぜたものを何度もこす作業があり、実際に使えるものは最初の量の数パーセントしか取れない。窯焚きでは、自分たちで炭を使って温度調節を行う。座学では、釉薬がどのようなものからできているのか、窯にはどのようなものがあるのか、窯の構造を学んだ。また東山焼の醤油差しや急須などでプラスアルファーの機能を見せてもらった。

2.　活動の振り返り

私は今回の活動から多くのことを学んだ。焼き物は奥が深く、昔の人からの知識や経験から今現在の焼き物の形が作られているものだと分かった。土を作る作業でも不純物を取り除かないと焼く際に形が崩れてしまう。またその土地の土に含まれている成分が異なると色が変わる。釉薬でも混ぜ合わせるものの量が違うと完成で色が異なっている。焼く際も温度が強すぎると溶けたり、温度が弱いと焼けなかったりと実際に自分たちで様々な作業を体験してみて簡単ではないということを実感が、一つ一つが繊細でこれでいいという終わりがなく、自分たちが体験した作業だけでは分からない大変さもあるだろうとすごく感じた。大切な伝統がある中でも涌井さんはその中でもその時代に合った伝統を作っていくことが大切である、来てくれた人が喜んでくれるのが一番だとおっしゃっていて、オリジナルを作っていくこと、誰かのために努力しているのは素晴らしいと感じた。またそのことは普段の生活でも同じことであり、大切にしていくべきだと感じた。

3.　課題と課題に対する提案

私たちはこのきれいで素敵な東山焼をもっと多くの人に知ってもらいたいと思った。地元の人でも名前を知っていても詳しいことは知らなかったり、県外出身の私たちは名前さえも知らなかったりという現状であった。そこでまずは私たちの身近の人に知ってもらおうと考え、文化祭で東山焼にふれてもらう機会を作ろうと考えた。今回の体験で自分の作ったものが形になる嬉しさやすごさを感じ、その魅力を伝えつつ東山焼はどのようなものなのか紹介しようと考えた。

工学部　Kさん

1.活動内容

新庄東山焼きの活動体験では東山焼きを含む陶器のいろはについて体験した。粘土作りから陶器の作り方や焼き方までゼロから完成までをダイジェストで行えた。まずは元となる粘土作りだが、これはその土地によって性質が異なる粘土を採集して純粋な粘土のみにするという大変な作業である。必ずしも取った分が全て粘土になるわけではないので尚更苦労することになる。また、粘土は何度もこねなくては陶器としては使えないので専用の機械でひたすらこねる。そして、形を作る作業に入るのだが、私たちのような素人が行うと思った通りに形を作れる方が難しいと言える。粘土は私たちが考えているよりも繊細で柔軟であったのだ。ろくろでも陶器を製作したが、ろくろはそれがより顕著に現れると思う。少しの力加減のミスが器の形を大きく歪ませるのだ。一日数十個と

作るには並々ならぬ集中力と忍耐力が必要である。形を作った陶器は乾燥させて焼きの作業に入るが、その前に釉薬と言われる塗り薬をつける必要がある。これは陶器の色に深く関わっており少しの成分の違いが色の様々な変化の原因となる。職人といえどここは感覚ではなく正しく測る必要がある。それほどまでに注意しないといけないのが釉薬であるのだ。釉薬を塗った後はいよいよ焼きに入ることになるが、窯の温度は焼くというよりは燃やすの方が正しいと思えるほどの高温になる。私たちが体験で出した温度は目算で 1400℃だそうだ。これは溶けにくいと言われている長石でも簡単に溶かしてしまう温度である。失敗した作品の中には完全に溶けてしまった陶器も何個かあった。3〜5 分ほど焼いて取り出したものを水で洗えば晴れて陶器、焼き物として扱われる。このように陶器一つでもかなりの時間と労力を弄するのが陶器作りであることを学んだ。

2.感想

ここでは東山焼きについて感じたことを書いていきたいと思う。そもそも私が知っている焼き物、すなわち陶器とは骨董品のような値段が高いものであるというイメージあった。安物で十分であると、壊れたら買えばいいとそう思っていた。しかし、この東山焼きの体験を通して私のそのようなかんがえは 180°変えられた。どうしてそのような値段がつくのかという疑問に対して東山焼きの職人の 6 代目涌井弥兵衛さんは「それだけ使う人のことを考えられているいいものだから」ということらしい。つまり、陶器を作っている時にどれだけ使用者のことを考えて作っているかが陶器の真の価値であるということである。このように聞いた時に私はイマイチ理解できなかったが、実際に涌井さんの作った陶器を見て理解した。醤油差しの残りの醤油がこぼれ落ちないような構造や持ちやすさを重視した急須などにはここまで計算していたのかと驚かされていた。いかに使用者が自然と使えるようなものを、自然と手に取ってもらえるようなものを作るかを常日頃から考えている涌井さんには生産者としての本当の意味の誇りのようなものを感じた。私自身も将来は生産側に回るので涌井さんのような信念を持ち、自らの仕事に打ち込みたいと思い、そして、そのように心を込めて作られたものを大切に使おうとも思える良い体験であった。

3.提案・企画

私は常に使用者のことを思いやる涌井さんの信念を見習うべきであり、他の人にも是非知っていただきたい、と自然と考えるようになっていた。山形大学の1講義で終わらせてしまうのはあまりにも惜しいと感じる。なので、今回は企画の提案をしたいと思う。山形大学の文化祭という場を使い実際にそのように信念込めて作られた東山焼きを体験してもらおうという企画である。私たちは学生なので同世代の若い人たちにもこの事が伝えられると考えた。このように若い世代が知ることで絶えず東山焼きは続くのでは、とも考えている。私たちは私たちのできることで東山焼きを、涌井さんの信念を知ってもらいたいと考えている。

地域の資源を活かし山屋の魅力を探る

活　動　状　況

○実施市町村：新庄市

○講　　師：山屋地区有志の会　会長　押切　明弘

○訪　問　日：令和元年６月１日(土)～2 日(日)、7 月 6 日(土)～7 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部２名、理学部２名、医学部３名、工学部３名

以上 10 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】６月１日（土）	【１日目】７月６日（土）
08:00　山形大学発 09:40　山屋セミナーハウス到着 10:00　開講式 & プログラム説明 & 山屋地区の説明 11:30　杢蔵山登山 & 山菜収穫 12:00　食事（休憩）※山中にて 12:30　杢蔵山登山 & 山菜収穫 15:30　杢蔵山下山 16:30　地域の方と収穫した山菜を料理 18:00　夕食（地域の方と調理 & 交流会）	08:00　山形大学発 09:40　山屋セミナーハウス到着 10:00　プログラム説明 10:15　デザイン案の発表 & 作業 12:00　昼食（地域の方と調理 & 交流会） 13:00　デザイン案の発表 & 作業 16:30　振り返り　活動記録 17:00　夕食（地域の方と調理 & 交流会）
【２日目】６月２日（日）	【２日目】７月７日（日）
08:00　朝食 09:00　山屋セミナーハウス環境整備 ※グラウンドの壁清掃 12:00　昼食（地域の方と調理 & 交流会） 13:00　山屋セミナーハウス環境整備 ※グラウンドの壁のデザイン考察 15:30　振り返り 16:30　山屋セミナーハウス出発 18:00　山形大学着	08:30　朝食 09:30　「山屋の活性化」をテーマに地域の方と ワークショップ 12:00　昼食（地域の方と調理 & 交流会）※ＢＢＱ 15:30　振り返り 16:20　山屋セミナーハウス出発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Hさん

今回の最上では多くのことを学べた。特に一日目では山形の魅力について知れたと感じる。一日目の主な目的として、福島県と山形県の山と自然とではなにが異なるのかを知ることだった。その目的を果たすために一日目の山菜収穫では、山形県の山の地形がどのようなものなのか実際に歩きながら、理解することができた。特にその山菜収穫の時に、福島県で採れる山菜と山形県で採れる山菜の違いを見て、調理して、食べることで違いが実感できた。福島県の会津では主に、ふきのとうやわらびなどが多く採れるが、山形県の山にはわらびなどよりも、たけのこが多く生えていて、そえれについては山形県の気候が重要な役割を担っているのだと感じた。また、一日目の午後の行った草刈りの体験ではとても貴重な体験ができたと感じている。それと同時に、高齢化が進行している新庄市で、重労働である草刈りを老人たちだけで行っているのに対して、驚きを隠しきれなかった。しかし、昔ながらのやり方などを熟知している人たちだからこそ速さ、正確性などがあり短い時間の中で広い面積の草を刈れるのだろうと感じた。

二日目では、私たちが提案した扉のデザインを描くという行動に移った。三つのデザインを提案したのだが、どれも配色と構図が難しくて、時間内に完成することができるか不安だった。また、私は山屋の子たちは山に囲まれているため、海を見る機会が少ないと感じていたので、茂水族館のクラゲをイメージしたデザインにした。後ろの背景の色を水のような淡い色にするために白と青とのコントラストに注目した配色にこだわった。大きい扉を塗るには時間もコストもかかったが、自分たちで何かを作り上げるという体験は貴重なもので、とても楽しかった。

そして最後の夕食の時間では、山屋の人たちから山屋のセミナーハウスの現状を聞いて、どんな解決策を講じればいいのか、また私たちにできることはなにがあるのかを考えるきっかけとなった。今回のフィールドワークで山屋のセミナーハウスの魅力を知れた。この魅力を私たちの作成した扉絵を通してもっと多くの人に知ってもらえるように、私たちで情報を発信していきたいと思う。

人文社会科学部　Tさん

私は今回「地域の資源を生かし山屋の魅力を探る」という新庄市のプログラムに参加した。座学ではなく実際に外に出て地域の人々と関わりながら地域の活性化について学べたことはとても貴重な経験だった。この経験は私が目指す東北の長期的な活性化をもたらすアイデアを生み出す礎になると感じた。

フィールドラーニングの１回目では初日に開講式を行った後に杢蔵山登山と山菜収穫を体験し、二日目にセミナーハウスの環境整備として草刈りと施設の扉の錆取りなどを行った。杢蔵山は標高 1027mの比較的低い山である。杢蔵山には麓に電波を届けるための鉄塔が立っており、この鉄塔を建てるために機械がない時代に人力で岩を除けて道を作り、協力しながら機材を町と山を何度も往復して建てたという住民の方の話から、何年以上も前から山屋の住民たちは互いに助け合って生きてきたのだと感じた。

山菜収穫ではタケノコと山葵菜を収穫した。地域の方は私たちの倍以上のタケノコを採っており、山を深く知っているからこそできるのだと思った。

二回目はセミナーハウスに併設されている体育館の扉に、一回目の体験と事前・中間学習からヒントを得てさくらんぼ、クラゲ、サンショウウオの三種類を主なモチーフとしてペンキでペイントをした。ムラができないよう何度も試行錯誤をしながら制限時間の直前まで作業を続けた。

この四日間で山屋の方々の団結力と深い地元愛を感じることが出来た。山屋の方々が大好きなこの山屋の景色を私も守っていきたいと強く思った。今回の体験は山屋の方々の協力なしでは出来なかっただろう。感謝してもし尽くせない。

私は山屋の課題は若い世代の人たちがいないことだと考えた。原因として高校卒業の後、進学のため県外に出ていきそのまま就職して戻ってこなくなってしまうことが多いのだと住民の方から聞かせていただいた。また、「山家にこれからどうなっていってほしいか」という質問に対して「子供が増えてにぎやかになってくれたら嬉しい」という話を聞かせて頂いた。このことから山屋地域にとって若い世代の力は山屋の発展とその維持には欠かせないものであると思う。だからこそその世代が地域に入って来やすい環境を整えていくべきであると考える。

そのために私は「山屋地域田舎暮らし体験ツアー」を提案したい。この企画は若者・ファミリー層を主なターゲットにしたものである。昨今注目されている「田舎暮らし」「木育」「環境保全教育」などをヒントにしたものだ。具体的には山菜取りや川遊び、田植えや山の散策などを泊りがけで体験し、山屋暮らしを体験してもらう。そして山屋への移住・定住、子育てをイメージしやすくすると共に四季折々のこの地域の良さを知ってもらいたいと考えた。

理学部　0さん

私は一泊二日のフィールドラーニング二回分を通して地域の方々の大事にしているものや、昔か

らの風習などその地域に行かないと一生味わえなかった体験をすることができた。一回目の一日目は杢蔵山に登り山菜取りをした。タケノコを収穫は想像以上に大変で、草木が目に入らないように注意しながらタケノコを散策するのは普段使わない感覚を研ぎ澄ます非日常を味わえたと思う。水菜の収穫は前日の雨で足場が悪い中、川の崖に生えている水菜を収穫するのはとても骨の折れる作業だった。地域の方々は慣れた様子で山菜取りをしていらっしゃったのをみて、私は普段の生活の違いや地域差に関心を持った。農家の人々と大学生の生活の違いを比べるのは、ナンセンスに思われがちであるが、山形という同じ地域で暮らしている以上考えるべき大切なことであると思う。大学生は大学の周辺に住む場合が多く栄えている傾向が強い。理由として、全国から人が集まるので経済が動きその地域が活性化するためであると考えられる。それに対して、もがみ地区は全体が田んぼで近くにお店もなく栄えている印象は薄いと感じられる。このことから、若年層の割合が都市の発展に大きく関わってくるであろうと思われる。もがみ地区では若年層の流出が顕著であり問題であるといえる。そういったことが進行し続けると、もがみ地区は衰退してしまう。従って、私は課題として「もがみ地区を維持するためにどういったことができるか」を考えていきたいと思う。解決策として私はボランティアを募ることを提案したい。ボランティアを募ることでもがみ地区の継続に繋がり、認知されることによって観光客や学生に来てもらうことができる。具体的には、草刈りや山屋セミナーハウスの整備などがあげられる。草刈りはセミナーハウス前のグラウンドの草刈りを行うことで、地域の方々の負担を減らすことができると考えた。山屋セミナーハウスの整備では、今回私たちが行った体験の一つである体育館のドアのデザインといった山屋の魅力を伝えるための活動である。アイデアを考えるところから作業を行うところまでをボランティアに委託することで、様々な視点からの問題点などを挙げることができ、問題解決に繋がると考えられる。また、ボランティアに問題を全て任すのではなく、受け継いでいく形をとりたいと思う。そうすることで問題が問題だけで終わることを防ぎ解決につながるからだ。もがみ地区の問題は他人ごとではない。そう考えるようになれた非常に有意義な体験であったと思えるような課題探求を努めたい。

理学部　0さん

私たちは今回の活動を通じて、新庄市の山屋地区の魅力を知るためのとても良い機会となった。2回のフィールドラーニングの活動をして一番に感じたこととしては、地域の方同士の関係はとても密接に関わっているということである。

1回目の活動では、杢蔵山に登りタケノコなどの山菜収穫をした。タケノコを自分の手で実際に収穫したことは今までなかったので、道なき道を自分の手でかき分けてタケノコを探すのはとても大変であった。しかし、地域の方に取り方のコツを教えていただくと最初はなかなか取れなかったタケノコも自分たちの手で取れるようになり最終的にはたくさんのタケノコを収穫することが出来た。また、2回目のフィールドラーニングでペンキ塗りをする体育館のドアの清掃とそのドアを白く塗るという作業を行った。壁を白のペンキで塗るという単純のように思える作業でもムラなく塗るというのはとても難しかった。ムラなく塗るためには何回も塗り直すことによってムラが失くせるのだと感じた。

2回目は、今回の活動のメインである自分たちで考えたデザインを体育館のドアに塗るという作業をした。1回目のペンキ塗りの経験を生かして2回目のペンキ塗りは効率よく作業を進めることが出来た。ムラなく塗らなくてはいけないと思っていたが、自分たちでペンキを塗っていくうちに敢えてムラを作ることによって川の流れを表現したりして自分たちで作業していくと気付くこともあった。地域の方のアドバイスもいただきながらこの自分たちの思った通りにデザインを完成させることが出来たので良かった。また、講師の方に山屋地区の紹介をしていただき、山屋の地名の由来や山屋の歴史についてよくわかった。そして、最後の地域の方との交流会としてバーベキューをした。このフィールドラーニングで地域の方と話せる最後のチャンスであると思い、自分から積極的に地域の方とお話をした。

今回の活動を通して、自分の課題としては班長としての仕事があまりできなかったことである。1回目の活動で班員に連絡し忘れることが少しあったと思うので、もう

少し班長としての自覚を持って行動するべきであると思った。また、今回のもがみで山屋地区のことを少しでも知ることができ、自分たちの考えたデザインをドアに塗るという貴重な経験もさせていただき山屋の方々に感謝の気持ちでいっぱいである。

医学部　Tさん

（一回目のフィールドワークを通して感じたこと）

一回目のフィールドワークでは、山菜取り、草刈り、扉の絵の設計を行った。山菜取りでは実際に山に入ってタケノコ採りを行った。最初はなかなかタケノコを見つけることができずにいたのだが、山屋の方々からの「目線を地面すれすれの低さに保ちながら、タケノコを探せ。」というアドバイスに従ったところ、驚くほどの数のタケノコを見つけることができた。長い間採集を生業とされてきた山屋の方々の偉大さを、心から実感する機会になった。その後草刈りを手伝い、山屋校舎の校庭を整備し、扉の絵の設計を終えたところで一回目の活動は幕を閉じ、二回目への明確な目標を胸に、山形に帰還した。

（二回目のフィールドワークを通して感じたこと）

二回目のフィールドワークでは、扉のデザインを実行し、山屋地区の歴史を学び、その後山屋の方々と BBQ で交流をした。扉のデザインでは、当初の予定通りに進まないことが多くあったものの、山屋の方々と知恵を振り絞り、作業を成功させることができた。例えば、私たちが蛍の描き方に苦戦していたところ、山屋の方の一人が木の枝をカッターで切り、その切り口に黒い絵の具をつけて、それをハンコの要領で押し付けることで、蛍の体の、黒い楕円形を上手に表現することができた。この出来事に、私ははっとさせられた。絵を描くために筆を使うことしか頭にない私とは対照的に、山屋の方々は、さすが周りの環境を利用して困難を乗り越えることが上手なのだと思った。BBQ を通した交流では、時間をかけて山屋地区の抱える問題点、課題を地域の方々から聞くことができた。

（課題に対する探究と提案）

上述した通り、私たちは地域の方々から直接山屋地区が直面する課題を知ることができた。それらを３つに大別すると、人口流出、交通手段、財政難である。このうち人口流出に関して言えば、大学進出や就職で都会に出た若者を呼びもどすことが最も効果的かもしれないが、私は　　現存する資源を最大限利用することを重要視する。第一に、県内の美大生を募集して、ボランティアの一環として山屋セミナーハウスなどの建物を美装、デザインすることである。これにより、建物の知名度を高めるだけでなく、学生を募集する機会が増えボランティア活動が活発になることも期待される。第二に、学生に雪かき、草刈りなどのボランティアをしてもらうことである。現在では高齢化の進行によりこの二つの仕事の負担が増大しており、特に雪かきに関して言えば、高齢者の雪かき中の死亡事故が増加している。この二つの負担をボランティアにより軽減させることで、地域の方が農業に専念できるだけでなく、地域の活性化により精を出すことができると考える。

医学部　Sさん

はじめに、私がこのプログラムを選んだ理由は、山屋地区でのフィールドラーニングを通して山形について知り、また自分の地元の活性化につなげられることはないかを知りたいと思ったからだ。

2回の活動を通して、私は自分の手で成し遂げることの喜びを感じた。初日には昔から見慣れているタケノコを収穫したが、実際はどのような場所に生えていてどのように収穫するのか全く知らず、新しい発見ばかりだった。また、２日目の草刈りも父が行っているのをよく見ていたこともあり自分にも簡単にできると思っていたが、実際にやってみると思っていたよりも力やコツがいり、なかなか思うようにできなかった。扉のペイント作業では、どのようなペイントにすれば山屋地区の人たちに喜んでもらえるか考え、自分たちだけでなく地域の方のアイディアも参考にしながら進めることができた。また、私は山屋地区のコミュニティの広さも感じることができた。これは都会では感じにくい田舎の良さであると再認識することができた。

課題を見つけるためにまずは山屋地区についてより詳しく知りたいと思い、最終日に地域の方にいくつか質問をした。その中の一つとして「予算などを考慮しなかった場合、山屋地区にほしいと思うものは何か」という質問では、若者、お嫁さん、バス、温泉などが挙げられた。今後若者がいなくなった場合、地域の家族ぐるみのつながりが薄れ、コミュニティが縮小する恐れがあると考えられる。また山屋地区にはバスが通っておらず、高齢者の負担になっており、加えて免許返納が困難にな

るという悪循環になっている。

これらのことを踏まえて、「山屋を維持していくにはどうすれば良いか」という課題を設定した。維持していくためには、まず山屋地区について多くの人に認識してもらう必要があり、また環境整備が必要であると考える。山屋地区をより多くの人に認知してもらうためには芸工大生などと協働した山屋地区の美装やデザイン活動を行い、また環境整備では高齢者にとって負担となる草刈りや除雪を行うことが解決方法としてあげられた。これらの活動をボランティアを募り実行することで、多くの人に山屋地区を認知してもらうことができると思う。

今回の活動で、現地の人の声を聞くことで自分たちだけでは見えない部分まで山屋地区について知ることができた。将来地元に戻ったとき、地元の活性化につなげられるように自分の地元についても見つめ直したい。

医学部　Sさん

私がこのプログラムを選んだ目的は地域の方々との交流を通してコミュニケーションの向上を図ることである。初日は自分から地域の方々に話しかけることが出来なかったが、フィールドワークをしていくうちに積極的に話すことが出来た。まず１回目は主にたけのこの収穫を行った。収穫したたけのこは私たちが想像していたものと違って細く小さかったので見つけるのが難しかった。その時、たけのこをはじめとする農作物を供給してくださっている農家の方々への感謝の気持ちを再確認することができた。２回目は山屋地区の歴史について学んだ。その中で感じたことは過去にはたくさんの住民が住んでいて栄えていたということである。歴史をたどることで山屋地区の人口減少を身をもって感じることが出来た。

私たちは計２回のフィールドワークの中で、山屋地区の問題は人口流失であると考えた。その問題を解決するために移住を促進させることは難しいので、視点を変え、関係人口を増やすべきであると考えた。そこでボランティアによる環境整備、デザインの考案を行いたい。

まず、ゆるキャラを作成したいと考えた。その際に私たちがフィールドワークを行っていく中で目にしたヒメダケやサンショウウオをテーマにしてゆるキャラを作成したい。ゆるキャラという、人々に親しみやすいものを利用することによって、ゆるキャラを通して、山屋地区に興味を持ってもらい、山屋地区を知らない人に山屋地区を知ってもらうことができる。

次に、山屋地区の整備について考えたい。私たちはフィールドワークの一環として草刈りを行った。また、地域の方から自分が所有している広大な範囲の田んぼの草刈りを行っているという話をうかがった。私が、実際に草刈りをしてみて感じたことは草刈りの際に背負うガソリンのタンクが重い上に、腕を左右に動かしながら草を刈ることにとても労力が必要であるということである。近年、農業従事者の高齢化が問題となっているため、草刈りを行って少しでも地域住民の負担を減らすことが重要であると考えた。加えて、雪かきの手伝いという形で山屋地区でのボランティア活動を行うべきであると考えた。毎年、雪かき中の死亡事故が絶えない。雪かきのボランティアは農業を行っている地域住民だけでなく、雪かきを行うことが困難な高齢者にも大いに役に立つ。

このように山屋地区にもともとある資源を利用することで、外部からやってきた人々に自身の肌で山屋地区の魅力に気づいてもらい、関係人口を増やしていきたい。

工学部　Sさん

序論

新庄市について調べてみたところたくさんの魅力があり、フィールドラーニングを通して新庄市の魅力を全国の皆さんに知らせたいと思った。新庄市を活性化させるにはどうしたらよいか、まず新庄市について地域の方々インタビューしたところいくつかの問題点と興味深い点があった。

本論

1.問題点の一つ目として新庄市の財政状況が深刻であった。調べてみたところ、夕張市に次ぐ財政難であった。わかりやすく例えると新庄市は山形県の中でワーストに入る財政状況だ。そのため新庄市の市役所の人は「ふるさと納税」というシステムを利用して一時期納税する市町村の中で2位に輝いた。しかし、礼品の規制が厳しくなり新庄市は礼品として「つやひめ（20kg）」を扱っていたが、規制変更後は「つやひめ（10kg）」に量を変更していた。また農協と市役所の対立があり、財政難の危機は未だに続いている。

2.題点と関心を持つ点はコミュニケーションだ。問題点として挙げるとしたら「方言」だ。「方言」は使われている言語は日本語だが、他地域の人たちにとっては「外国語」を話されているものだ。関心する点として「方言」を人に興味を持たせるためにSNSを利用して知らせて

いることだ。新庄市はSNSをうまく利用して「新庄弁」をfacebookで紹介していた。
3.最後の問題点は人口だ。人口問題は日本全体の問題だが、山間部や田舎の場所は大きく高齢者の割合が大きく「限界集落」になっている地域が多く、新庄市の山屋地区もその一つになりつつある。なぜ高齢者の割合が大きくなっているのは、新庄市に大学などの教育機関が少ないからだ。高校生になった息子が大学を選ぶときに新庄市に大学がないことから市外、県外の大学を選んでしまうため、どうしても新庄市から離れてしまうのだ。

結論

これらの問題を解決するために、私はボランティア活動を発足させたら地域の人々と関わらせて山屋地区を知ってもらおうという計画を思いついた。具体的には除雪作業や農業体験などのアクティブ活動をホームページにアップして少しでも山屋地区の魅力を知ってもらおうと思った。また他にも、バーベキュー施設の増設、農業についての講演を開いて資料に山屋地区の風景を紹介するなど、間接的に山屋地区を知ってもらう方法を行うことが、山屋地区を活性化させる近道だと思った。効率的な方法を取るには財政が悪い状況だと難しいだが、地道にコツコツ情報を提示すれば解決の糸口が見つかると思った。

参考文献　https://m.facebook.com

工学部　Hさん

〈初めに〉

私がこのプログラムに参加した理由は、シンプルな扉のデザインからグループ等で話し合って新しいものを想像していくことがとても楽しそうだと思ったからである。廃校になった小学校を宿泊施設にしているため、長期間残るものに対して私たちが考えたデザインを残すことができることは大変魅力的である。また「山屋の活性化」をテーマに私たちにできることはどういうことかを考えた。

〈フィールドラーニングでの感想〉

1回目は、山菜収穫と調理、扉の下地を塗るとともにデザイン案を提出するということを行った。初心者にとって登りやすい山で、地元の人によると「今年はたけのこの量が少なかった」とのことだが十分満足するくらい収穫することができた。たけのこを採るという貴重な経験をすることができた。今回初めてペンキに触れたので地域の方に塗り方を教わった。初めはムラだらけだったが、次第に塗り方が上手くなったのか下地完成のときにはきれいに塗ることができた。

2回目は、いよいよデザイン案を扉に塗るという作業を行った。3枚の絵はサクランボ、山屋地区の山に多く生息するサンショウウオ、山屋地区が山に囲まれているのであえて海をモチーフにしたクラゲのイラストに決まった。私はサンショウウオの絵を担当した。川の水に動きをつけるためにあえてベタ塗りをしなかったり、あじさいに濃淡をつけたりと工夫した。地元の人に絵を見せて議論した結果「新しく蛍を追加してほしい。」との要望があったので蛍を書こうと思ったが、蛍のように描くことができなかった。悩んでいたところ地元の方から落ちている枝をとって胴体の描き方について教わった。身近にあるものを使って創作するのは大変興味深いと感じた。

〈地域の課題と課題に対する探求・提案〉

山屋の活性化をするにはどうすればいいかを思考するために、地域の方にお話を伺った。地域の課題に関しては人口流出があり、地元の人の要望はもっと山屋に人が来てほしいということである。

そこで私たちの班では、外部からボランティアを募集して山屋地区を維持しようと考えた。広報用デザインや草刈り・施設の修繕・田植え・山菜収穫といった様々な分野で募集し、そこに参加することで山屋地区を知ってもらうという狙いもある。

工学部　Hさん

私は今回の共生の森もがみのプログラムに参加して、このレポートには書き切ることができないほどの貴重な経験をすることができた。このレポートでは二つに絞っていきたいと思う。
まず、私がこのプログラム中に感じたことは食事一食に対する重みだった。初日、私たちは山菜のタケノコ収穫をするために車で山に登り、さらにそこから雑草を踏み倒しながら道なき道を進んでいった。ここまでの苦労を果たしながらも、自分たちが満足のいく大きなタケノコを見つけることはできず、収穫できたのは小サイズから中サイズのものばかりだった。さらに、山を下りて宿舎に戻る途中で畑の仕事をしている地域の方を見かけた。そのとき私は、普段食べている食事の具材一つ一つには、たくさんの人の努力と苦労があるのだと思い、食事を当たり前のものだと思っていた私は、そのときに大きな感謝と謝罪の気持ちで胸がいっぱいになった。また、これはお昼ご飯を食べている際に地域の方に伺ったことだ

が、お米の味はそこの土と水の質ですべてが決まるらしい。山屋地区周辺の土は質が高く、高品質のお米を収穫することができるそうだ。食に関連して、四日目に行われたバーベキューで使用されたお肉の一部に、なんと地域の方が育てた家畜のお肉が含まれていたのだ。山屋地区では、野菜にお米そして家畜とほぼ自給自足生活が可能である環境にあるのだ。私の地元では、そのようなことは絶対的に不可能である。ゆえに、私は驚きを隠すことができなかった。もちろんそのお肉はすごくおいしかった

最後に私は、宿舎を利用している人の多さに驚いた。新庄市は現在少子高齢化の影響もあり、その人口は着実に数を減らしている。しかし、プログラム三日目。私たちが宿泊する宿舎には、神奈川県から来た柔道クラブの子供たちが数十人宿泊していたのだ。そのクラブのコーチにお話を伺ったところ、東北の強豪校と合同練習の予定があるので、山屋に泊ったのだという。私は、これからも同じように宿泊する子供たちに山屋の魅力を伝えられないものかと考えた。また、私たちが利用したセミナーハウスには体育館が併設されており、多くの子供たちがバトミントンをするなどして利用していた。

マルシェ“本活プロジェクト”～本と人をつなげる出前図書館～

活　動　状　況

○実施市町村：新庄市

○講　　師：一般社団法人とらいあ（新庄市立図書館指定管理団体）
　　新庄市立図書館　館長　高橋一枝

○訪　問　日：令和元年 5 月 18 日(土)～19 日(日)、6 月 15 日(土)～16 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部 4 名、地域教育文化学部 2 名、医学部 2 名、工学部 2 名　　以上 10 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】５月１８日（土）	【１日目】６月１５日（土）
08:00　山形大学発 09:40　図書館着 　開講式　オリエンテーション 10:00　語り＆読み聞かせで育む豊かな心 　（講話＆実技指導） 12:00　昼食〔各自〕 13:00　kitokito マルシェ　概要説明 　“本活プロジェクト”など 14:00 エコロジーガーデン移動視察見学 　kitokito 前日準備など 15:30　図書館移動　活動計画立案 17:00　講師懇親会・食事会 18:30　宿泊先へ	08:00　山形大学発 09:30　図書館着 　kitokito マルシェ本活プロジェクト準備 　■計画立案に基づく準備作業 　ワークショップ・読み聞かせ練習など 12:00　昼食〔各自〕 13:00　ワークショップ準備 　kitokito マルシェ本活プロジェクト準備 　■計画立案に基づく準備作業 　■ワークショップ・読み聞かせ練習 　■活動計画立案など 15:30　各自準備　当日スケジュール調整 17:00　宿泊先へ
【２日目】５月１９日（日）	【２日目】６月１６日（日）
08:30　kitokito マルシェ 　kitokito マルシェ　ブース準備 　■お話し会協力参加 　■ワークショップ協力参加 　■移動図書館見学協力参加 　■kitokito　BOOKS　協力参加 12:00　昼食〔各自〕 　■お話し会協力参加 　■ワークショップ協力参加 　■移動図書館見学協力参加 　■kitokito　BOOKS　協力参加 15:00　kitokito　マルシェ終了片づけ 15:30　図書館移動　ミーティング 16:20　図書館発 18:00　山形大学着	08:30kitokito マルシェ 　kitokito マルシェ　ブース準備 　本活プロジェクト 　■計画立案に基づく展開 　■移動図書館　協力参加（お話し会） 　■kitokito　BOOKS　協力参加 12:00　昼食〔各自〕 　本活プロジェクト 　■計画立案に基づく展開 　■移動図書館　協力参加（お話し会） 　■kitokito　BOOKS　協力参加 15:00 kitokito　マルシェ終了片づけ 15:30　図書館移動　振り返り感想交流 16:30　図書館発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Sさん

１．活動を通して学んだこと、考えたこと

１回目のフィールドワークでは、主に読み聞かせの魅力やコツを学んだ。子供たちへ問いかけるアドリブを入れたり、緩急をつけたりといった聞き手を引き付けるためのコツはプレゼンテーションにもそのまま活かせると感じた。また、読み聞かせの相手である子供への接し方に関しても学ぶことができた。“相手を肯定する”ということを念頭に置いて子供を褒めてあげることにより、子供は自分の表情をきちんと出せるようになるらしい。今まで自分は読み聞かせを“大人から子供へ与えるもの”だと捉えていたが、図書館長が“大人と子供をつなぐもの”だと考えているというお話を聞き、捉え方が大きく変わった。実際の読み聞かせと同様、常に子供と同じ目線になることが大切なのだと感じた。

ワークショップ企画の考案では、ターゲットを子供に決めた。そして、図書館の利用者数を増やすという目的を定め、新庄市図書館をゴールとするシールラリー企画が出来上がった。また、シールなどを選ぶ際には“男女どちらかに偏らないデザインにすること”が重視された。なぜなら、１回目のワークショップが女の子向けになってしまっていたからである。私はジェンダー教育に関心があるので、このような配慮は重要だと感じた。

２回目のフィールドワークでは、新庄市がもつ地域活性化への熱量を強く感じた。今回、Kitokitoマルシェだけでなく100円商店街も体験し、新庄市は地域の方に向けた取り組みに力を入れていることがわかった。そこで、２回目のフィールドワークでは地域の人たちとのつながりを意識して活動に取り組んだ。マルシェは出店数が多いため規模も大きいが、予想外の雨天でもイベントを開催し、来客数もそれほど減っていなかったところに地域の結束を感じた。

２．地域の課題

今回、移動図書館等の新庄市図書館の活動を含めた新庄市の地域活性化について学ぶことができた。それを踏まえて、これからの新庄市の課題は「新庄市の良さをほかの地域にどうアピールするか」だと考える。

３．課題に対する探求と提案、解決策

新庄市で行われているイベントはどれも魅力的だ。特にkitokitoマルシェの公式tumblrはデザイン性も高いので、大衆から好印象を受けやすいと考えられる。そこで、宣伝の中心となっているFacebookに加えてTwitterやInstagramなどの若年層も利用しているSNSの利用を検討するべきだ。そこで出店者紹介や出品にあたってのこだわりを紹介し、tumblrのリンクを載せて関心を引くのがよいと考える。

人文社会科学部　Tさん

１、フィールドラーニング１回目

１回目のフィールドラーニングでは、館長さんや読み聞かせ団体の方による講話や実技指導がメインの活動だった。そこで感じたのは、本を子どもたちに身近に感じて欲しいという図書館職員の皆さん、読み聞かせ団体の皆さんの思いの強さだ。実際に子どもたちに本を読み聞かせるために必要な知識を教えて頂いた。読み聞かせというと、今までするよりもされることの方が多かったので考えたことがなかったが、読み聞かせを通じて子どもたちの豊かな心を育むためにはどうすれば良いのか、ヒントをたくさん講話の中から得ることができた。読み聞かせが子どもたちにとってどんなものなのか。子どもたちに安心感を与え、ホッとしてもらえるような時間を作りあげるために、何度も読み聞かせの練習を行った。２回目のフィールドラーニングでも読み聞かせを行ったが、この時にしっかり練習を行ったからこそ読み聞かせのノウハウを理解し、それをスムーズに実践できたと思う。

２、フィールドラーニング２回目

２回目は全て学生主体の活動であったため、その分大変な部分はたくさんあったがそれと同時に大きなやりがいも感じた。出前図書館、読み聞かせ、ワークショップを楽しんでもらい、新庄市立図書館の利用者を増やすためにシールラリーを企画した。当日は雨天だったため、まゆの郷二階で読み聞かせやワークショップを行った。できることなら、青空の下で本に触れて欲しかったので天候が悔やまれた。しかし、雨天のおかげでkitokitoBOOKSがある場所に人を集めることができkitokitoBOOKSにある本を手にとってもらいやすい環境になったと思う。また前回の活動と比較して変更した点は読み聞かせのタイムスケジュールを看板にしたり、呼び込みの看板を作りマルシェの中で宣伝できるようにしたりした。タイムスケジュールを設定し看板に明記したことでお客さんが時間を見て利用しやすいようにした。また読み聞かせをする私たちにとっても時間をはっきりさせたことで、役割分担をより明確にできた。またマルシェの中で子どもたちやその親に直接呼びかけることができたので、より集客できたと感じる。

３、全体の活動を振り返って

聞いたり見たりするだけでなく、それを自分たちの活動にどのように活かせるのかを常に考えながら活動できた。実習の日以外でもメンバーで集まるなどミーティングを重ねたことで、２回目の活動がより濃いものになったと感じる。読み聞かせを通じて本の面白さを子どもたちに伝える活動が自分にとっても本の魅力を再発見する時間になった。この活動に携わって頂いた全ての方に感謝したい。

人文社会科学部　Kさん

I. フィールドラーニングの感想

２回のフィールドラーニングを通して私はいろいろなことを学んだ。まず一つ目にスケジューリングの大切さである。１回目の読み聞かせのお手伝いの時、班構成を組んではいたものの結局うまく持ち場を回すことができなかった。２回目ではその失敗を考慮してしっかりタイムスケジュールを組んで行ったため、１回目に比べたら上手く持ち場を回せたと感じた。

二つ目に相手の目線を考えることだ。読み聞かせやワークショップ（今回では栞作りとシールの台紙づくり）は子供向けのイベントである。読み聞かせでは、子供たちが参加しやすいようにみんなが知っているような絵本にしたり、絵本の大判を使用したり、参加型の読み聞かせにしたりと工夫した。ワークショップでは高校生と一緒に子供たちと物を作りながら交流を深めた。その交流がきっかけで読み聞かせにきてくれた子も、読み聞かせがきっかけでワークショップに来てくれた子もいた。

また、新庄市という自分にとって未開の地に行ってみて、自然豊かなkitokito marchéやとても温かい図書館の人たち、マルシェの人たちとふれあえることが出来て幸せだった。少しここからは離れているが、また参加したいと感じた。有意義な時間を過ごせたと思う。

II. 図書館の課題

図書館長から頂いた課題は、「新しい利用者を増やしたい」というものであった。私たちは今回のフィールドラーニングでこどもたちをターゲットとした。１回目のkitokito marchéに参加した感想で、親子連れや出店している人の子供が読み聞かせに来てくれることがほとんどであったからだ。しかし、実際に図書館でも子供向けのイベントは他にも多く実施していた。移動図書館もそのうちの一つであるが、例えば図書館内での読み聞かせや赤ちゃんを対象にしたものもあった。それらを踏まえ、２回目のフィールドラーニングを終えてグループメンバーで話し合った結果、次はお年寄りを対象にすることを解決策として挙げた。例えば、もともと教師をしていた方や、子供とのふれあいが好きな方に図書館に来ていただいて読み聞かせをしてもらったり、読んだ本の感想交流会を行ったり、自分の読んだオススメの本の帯を作成したりなどを通して、交流を深める企画などである。私たちの２回目のフィールドラーニングでは、ターゲッティングが子供から大人と幅が広すぎたと班長が言っていたので、図書館長からいただいた課題の対策として今回話し合って出てきた案であるならば１回目、２回目のフィールドラーニングに比べ、さらに良い結果を得られるのではないかと考えた。

人文社会科学部　Yさん

マルシェに行って感じたこと

自分は一回目のフィールドラーニングには参加できず2回目からの参加となった。2回目では天気は生憎の雨となったが、それでも自分が想像していた以上に来客があり、雨を跳ね返す勢いの活発さが感じられた。また、広すぎない範囲のコミュニティで行われる催しであるためか、人々との交流の中でその温かさも感じられた。

自分たちの活動と反省点

参加できなかった1回目のフィールドワークを終えてから、班の方針として新庄市図書館の利用者を増加させるための企画として、シールラリーをすることになった。また、当日マルシェに来て、自分たちのする読み聞かせやワークショップ、移動図書館、kitokito booksなどの活動に足を運んでいただいた方にアンケートをとることも決まった。当日では、子供を対象とした読み聞かせやシールラリーは、雨にしては多いと感じさせる来客数があり成功したといえる。アンケート数も約50と、多くはないが雨天にしては良かった数だった。結果としては成功した部分は多くあった。

しかし、同時に失敗してしまった部分もあった。自分は移動図書館に乗せる本選びをしたが、本選びをしているときの想定は、子供用が半数、大人用が半数で両方対応できるようにするという意図をもち選んだが、実際に移動図書館から本を借りたのは子供が大半であった。雨天であったため当初の予定の場所と移動図書館の場所にずれがあり、もともと存在を知っていた方しか来られず、さらに宣伝などの広報が十分でなかったためだと思われる。さらに、アンケートもQRコードを当初予定していたが、実際にはQRコードは敬遠され、紙でのアンケートなら受けてくださるというお客さんが多かった。

このような結果となった原因として二つのことが

挙げられる。1つは班員全員でのミーティングが足りておらず、それぞれの認識に若干の齟齬があったこと。もう1つは、実際に相手の目線に立ってみて考えるというロールプレイングを全くしていなかったことだ。この2つの要因を解決することができていれば今回の活動はより良いものになっていたことは間違いない。

感想

今回は雨の中での活動となり、晴れていた1回目の活動に参加できなかったことがとても悔やまれた。さらに2回目からということでハンディキャップとなる部分はあったが、逆に新鮮な視点から活動できたため得るものも多かったと思う。

地域教育文化学部　Kさん

●事前学習から

kitokitoMARCHEは、かつて養蚕研究のために利用されていた施設を活用し、新庄市民の方に楽しんでもらえることを目的としたものだ。

私自身、kitokito MARCHE自体をこの活動を通して初めて知ったが、とても画期的だと思った。

●1回目のフィールドワーク

主な活動は、新庄市の読み聞かせ団体の代表の方から読み聞かせの指導をいただき、実際に二日目のマルシェで、実際に新庄市立図書館のブースのそばで絵本の読み聞かせを行うことだ。具体的には、図書館の児童書コーナーで本を選び、3人程度のグループに分かれて練習を行った。他にもエコロジーガーデン内の建物に常時設置してある、「kitokitoBooks」というものがある。利用者が持参した二冊の本を、融資で集めた本一冊と交換するという企画だ。一回目の反省点としては、

●企画考案

今回二回目に実行する企画の狙いは「新庄市立図書館の来館者数を増やすこと」だ。例えば、マルシェだけで完結するような企画であれば、本や読み聞かせへの興味のきっかけをつくだけでは少し不十分のように思える。

そこで考えたのは、「シールラリー」である。具体的には、マルシェ内で行う読み聞かせ、kitokitoBooks、ワークショップの三か所でシールを配り、ワークショップでデコレーションしてもらう「かやのみちゃんシート」という台紙に貼りながら回ってもらうというものだ。加えて当日や後日、新庄市立図書館で他の物より大きく、メッセージの書いたシールを渡す。このシールラリーは小学校低学年くらいまでの子供を対象に行った。

●現地に行ってみてわかった変更点

当初の予定では、室外の移動図書館車の近くで行う予定だった読み聞かせ、ワークショップが雨天によりkitokitoBooksが行われる建物に移設した。それによって、シールラリーで回ってもらう三つが一点に集まってしまうことになった。これの対策として、シールラリーのポイントを一部改変しkitokitoBooksから移動図書館車に変更した。このことにより、シールラリーの形を保つことができた。

●成果と反省

当日シールラリーに参加した人は40人に上り、そのうち三組の人が当日中に新庄市立図書館に足を運んでくれた。つまり、新庄市立図書館に足を運ぶきっかけ作りという狙いを果たすことができた。しかし、反省として、二回目の訪問に向けての活動が一部の班員に偏っていたこと、アンケートの狙いが班員によって認識にズレがあったり、アンケートの質問を吟味しなかったりということがあげられる。

地域教育文化学部　Iさん

１、当講義に参加する以前

「山形県民でありながらも、私自身が住んでいる村山地域以外のことを全くと言っていいほど知らないことに気づいた。今回の集中講義を通じて、自分の知らない山形を学びたいと思った。また、本が好きで、将来教職をとるつもりなので、本を通じて少しでも子供たちと関われればいいと思った。」主にこの二つが理由で今回の講義に参加していた。あくまで子供との触れ合いが目的であり、今新庄市が抱える読書離れの問題への興味・関心は薄かった。

２、第一回フィールドワーク参加後の反省

５月度のフィールドワークは新庄市立図書館さんの側が主体となり、学生はその補助という立場だった。結果としては子供たちと読み聞かせやワークショップを通じて子供たちと関わることはでき、当初の目的は達成した。だが、前日に割り振っていた分担が崩れたことにより、シフト制が成り立たなくなり、当人のその場で考えた行動が多

く求められたため、どう動けばいいかわからずに何もできなかった、という後悔が残った。
３、第二回フィールドワーク参加後（最終的な）反省
　６月度のフィールドワークでは、学生側が主体となってワークショップのシール台紙づくり、読み聞かせ、kitokitobooksの三か所を巡ってシールをもらう企画を考えた。最終的なゴールとして図書館でスペシャルシールがもらえる、という形にすることで、図書館への集客にもつながることを見越した企画にした。当日はあいにくの雨で、本来屋外で開催予定だった読み聞かせとワークショップを、kitokitobooksと同じ屋内で行わざるを得なかった。だが、それが結果としてkitokitobooksへも目が留まる形になり、主に親御さんを中心に認知してもらえた。また、私個人としても読み聞かせやワークショップの中で様々な世代の子供と関わることができ、考え方など多くの面で刺激になった。全体としても、私個人の精神面でも、６月度のフィールドワークは成功だったといえる。
４、今後に向けて
　今回は子供向けの企画をメインにしていたので、今後は子育て世代気軽に本に触れられるような機会を作るための、本のレファレンスなどにも興味を持ち調べ、機会があればそれを実践していきたいと思う。もし三度目があるなら私はこれを軸に企画を考えたい。

医学部　0さん
●1回目のフィールドラーニング
1回目のフィールドラーニングでは、新庄市の現状を学んだうえで、新庄市立図書館の課題が利用率の低下であることを知った。そこで、私たちは来月のマルシェで子どもをターゲットにしたシールラリーを実施することで、図書館の来館者数の増加につながるのではないかと考えた。

●２回目のフィールドラーニング
２回目のフィールドラーニングでは、１回目に考えた企画を実施した。実際マルシェに行ってから図書館に足を運んだ子どもが当日に何人かいて、結果としては私たちの企画は成功したといえるだろう。しかし、同時に実施したアンケートからわかるように、子どもに狙いを定めたため、ほかの世代に対してはあまり効果を得られなかった。今後は子どもだけでなく、親世代や祖父母の世代に向けてもはたらきかける企画を考えたい。

●多世代に向けた提案
多世代の利用者数を増やすという課題に対しては、マルシェにおいてはkitokito booksの充実がまず考えられる。もっと宣伝に力を入れることで、たくさんの人が交換する本を持ってきてくれるだろう。また、図書館では、子どもに読み聞かせを行っていると聞いたが、高齢者向けのイベントが少ないように感じられた。高齢の方に向けては、読み聞かせボランティアの募集や、好きな本や思い出の本について話し合ったり、本のおすすめのポイントをまとめた帯を作ってもらったりするイベントがあると、高齢者にとっても図書館にとってもプラスになるだろうし、地域の活性化につながるはずだ。

●フィールドワークでの感想
キトキトマルシェや新庄市立図書館を通じて、新庄市のことをよく理解できた。新庄市では、閉所した蚕糸試験場をマルシェに有効活用したり、100縁商店街など先進的なプロジェクトに取り組んだりして、若い人たちを巻き込んだ明るい街づくりをしていた。実際に行った新庄市は、活気があり、とても魅力的に感じた。マルシェや新庄市を町おこしの参考にするために他県からお越しになった方もいて、取り組みが新庄市だけでなくほかの地域にも影響を与えるものであるものだと感じた。
最後になるが、私が新庄市の魅力を多く知ることができたのは、このプログラムにご協力いただいた新庄市の方々のおかげである。お世話になった新庄市に恩返しができるように、今後も足を運んで、新庄市とのかかわりを保ちたい。

医学部　Sさん
1.　このプログラムに参加しての感想
　私は、今までずっと山形県に住んでいながら新庄市を一度も訪れたことがなかったため、このプログラムをきっかけに新庄市に行ってみようと思い、このプログラムに参加した。フィールドラーニングの事前学習や実際の活動をしてみて、新庄市は地域を活性化するためにkitokitoマルシェや100円商店街などの様々なイベントを企画、運営しており、私が想像していたよりも活気のある町だと感じた。また、イベントを運営している方や

参加している方のお話の中で、人と人のつながりや協力し合うことを大切にしているのだと感じた。実際に今回のプログラムでグループメンバーや図書館の方と連携をとりながら企画を立案、運営していく中で、一人では実現が難しいことも人と協力し合うことで成し遂げられることがあるのだと学んだ。
このプログラムを通して絵本の読み聞かせの重要性、子供との触れ合い方を実際に体験し学ぶことができた。子供の前で絵本の読み聞かせをするのは初めてで緊張したが、子供が真面目に読み聞かせを聞いてくれたり、反応してくれたりする様子を見て、絵本の読み聞かせは子供と大人がつながる方法の1つであり、子供が人のぬくもりを感じる温かいものであると感じた。また、子供が本を読もうとする良いきっかけになると考えた。

2. 新庄市立図書館の課題と解決案

新庄市立図書館の課題は、利用者の減少であり、今後、もっと多くの人に図書館を利用してもらうことが目標である。図書館の利用者を増やすためには、まず図書館について知ってもらい、図書館のことを少しでも好きになってもらうことが大切である。なぜなら、もともと本を読むことがあまり好きでない人にとって図書館はあまり身近な存在ではないため、図書館や本と触れ合うきっかけが必要であるからだ。そこで、対象を子供と大人に分けて図書館を利用する人を増やすための案を1つずつ提示する。子供向けの案は、図書館での読み聞かせを月2回程度行うことである。子供が読み聞かせを聞きに図書館を頻繁に訪れることで図書館を好きになったり、本を読む楽しさを知ったりすることができると考える。大人向けの案は、ジャンルや年齢層など様々なテーマごとにお勧めの本を提示することである。これは図書館やkitokitoマルシェ会場に設けられているkitokitobooksで実施することができる。読み聞かせを目的に図書館を訪れた子供の付き添いの親やkitokitoマルシェに訪れたお客さんが本を手に取る大きなきっかけになると考える。多くの人が新庄市立図書館を訪れることで、新庄市立図書館が活性化し、そして新庄市全体の発展につながるだろうと考える。

工学部　Tさん

①マルシェ、移動図書館に行って感じたこと
私が新庄市のｋｉｔｏｋｉｔｏマルシェ、移動図書館の活動で感じたのは想像以上の活気と
地域の温かみであった。
実際のところ、新庄市の人口や若年層の人口について調べた自分からするとあまり大きくないイベントか、子供がそこまで来ないイベントかと思っていた。それが実際一日目に行ってみると多くの店が出てにぎわい、たくさんの子供たちが読み聞かせを参加してくれた。
二日目も雨の中晴れより少なかったとはいえ口述するアンケート結果からみても人が来る魅力あるイベントであるのは間違いない。
②アンケートとそれによって見えてきたこと
私と柏谷の二人は二回目の活動においてアンケートを取り、その結果からｋｉｔｏｋｉｔｏｂｏｏｋｓ、移動図書館についてのアンケートを実行した。結果としてアンケート自体は失敗したが、それによって見えてきたことが数多くあった。
一つ目はこのイベントの地域性である。私と柏谷は当初、アンケートをＱＲコードと紙の二種類用意し、ＱＲコードを七割、紙をサブとして三割、目標として１００集めることを目標とした。しかしながら、実際にはＱＲのハードルが高く、紙のアンケートが人気で増刷する事態となった。
なぜこのようなことになったか。恐らくは来ている人々がほとんど新庄市民である点が大きい。来ている大人たちの年齢の多くは三十代から四十代の母親が多かったが基本的にスマートフォンに抵抗感を感じていた。これは大学生とのギャップもあるが、他の都市、特に大都市ではこの年代であってもＱＲコードは広く浸透している。実際他県から来た人たちがアンケートを答えるにあたってＱＲコードにあまり抵抗は見られなかった。
ｋｉｔｏｋｉｔｏｂｏｏｋｓでも制度の緩さを見る限りこのイベントは他地域の人々を意識したイベントではなく、市内の住民間で楽しむイベントであることに気付けた。
これはｋｉｔｏｋｉｔｏマルシェ、移動図書館においても集客したいターゲットにおいて重要な意味を成す。このイベントが実際市内でのイベントで楽しむのか、それとも他地域から来た人々に発信するイベントにするのか、この点は私が考えることではないが、今後このイベントを拡大するうえで避けては通れない議題であると思う。
③活動を振り返って
この活動を通して、失敗や成功が数多くあった。特にアンケートについては初歩的で重大なミスが目立った(ターゲティングなど)。もしまた参加することがあればこの反省を生かしたい。

工学部　Kさん

1.はじめに

　今回、新庄市立図書館　髙橋 一枝様を始めるスタッフの皆様、新庄市役所 社会教育課 小山様他多くの方に助けられて4日間の活動ができました。本当にありがとうございました。

この活動で成功したところ、失敗して今後の活動に改善できるところ、いろいろと垣間見られました。本レポートでは、自分の主に担当した“図書館利用に関するアンケート調査”について、得られた情報・失敗点とこれからの改善点について記していく。

2.アンケート調査で設定した仮定条件

　我々が提案した企画の中で“図書館利用者が新庄市立図書館に関してどのような思いでいるのか”を知り、集計することで図書館利用者の増加のための改善点を見つけ出せると判断した。そこから、Google Formsを主とし、利用が難しい方への副媒体として、紙面での準備も行った。また質問も簡潔に回答いただけるように“ラジオボタン”選択形式で準備し、Google Formsでは誤答を防ぐために、フローチャートと必須設定をした。各媒体の準備した割合として、Google Forms70回答・紙媒体30部として総計100回答以上の集計を目標とし仮定していた。

3.実際にアンケート調査を実施し、気づいたところ

　当日は雨天で一部企画・会場変更があったため、急遽目標数を仮定の半分50回答へと減らした。だが、49回答の回収に成功した。

ただ、統計処理をしていた中で、データとしてあまりよくないものであることが発覚した。それは、回答対象の不明瞭さと、回答収集の意図が分からないような曖昧な質問項目にしてしまい、うまく次へと発展することができなかったところである。

アンケート収集企画を発案したときにそれらの詰めが確実にできなかったところがあるので、このような失敗を生み出してしまったのだろう。実際に６月MARCHE開催時にメンバーと集まれる機会がなく、アンケート以外にも様々なところで失敗してしまっているので、“情報共有”の大切さも再認識させられた。

今後“共生の森もがみ”以外にも調査をとる機会がもしかしたら存在するかもしれない。その時に備えるためもしかり、自分の教養として深めるためにも、社会調査を独学で学んでいく。実際に管理会計専攻の本大学　人文社会科学部　尻無濱 准教授に学び方のご指導をいただいたので、似たような失敗を避けるために、習得できるよう心掛けたい。

山間地で感性を豊かにしよう

活　動　状　況

○実施市町村：金山町

○講　　師：須藤功、石井芳五郎、高橋伸一、斎藤正昭、中野光雄、須藤幸一、岸末吾、岸吉三郎、岸浩樹、柿崎喜一、樋口勝也、小野花子、岸ミツ子、柴田学

○訪　問　日：令和元年６月８日(土)～9 日(日)、7 月 13 日(土)～14 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部２名、理学部２名、医学部１名、工学部３名、農学部１名　　以上９名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】６月８日（土）	【１日目】７月１３日（土）
08:00　山形大学発 10:00　道草ぶんこう着 10:10　開講式 10:30　オリエンテーション 　　カメラの使用について 　　撮影スポットについて 12:00　昼食 13:00　初夏の風景撮影（田茂沢地区） 17:00　入浴（ホットハウスカムロ） 18:00　ホームステイ先に移動、交流 　夜　　ホタル観察	08:00　山形大学発 09:50　道草ぶんこう着 10:10　写真コンクール準備 10:30　審査会 12:00　昼食 13:00　縄ない体験 17:00　入浴（ホットハウスカムロ） 18:00　ホームステイ先に移動、交流
【２日目】６月９日（日）	【２日目】７月１４日（日）
06:00　暮らし体験 07:30　朝食 09:00　道草ぶんこう集合 10:00　そば打ち体験 12:00　昼食 13:30　街並撮影（金山街中） 15:30　交流会（マルコの蔵） 16:00　金山町中央公民館発 18:00　山形大学着	06:00　暮らし体験 07:00　朝食 08:30　道草ぶんこう集合 09:00　わら細工講座 12:00　昼食 13:30　ライブコンサート 　　交流会 16:20　道草ぶんこう発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Kさん

私は最初、大学生が田舎に行って滅多に体験できないことや自然などに触れて、感性を育てることがメインのプログラムだと勘違いしていた。しかし、私はこのプログラムの本質はそこらへんに落ちている感性をどんな目線、立場で見るかだと思いはじめた。それは２日目のフィルムカメラを用いて金山町の景色の中から自分の感性をくすぶるものを撮るという活動のなかで、レンズ越しだから、授業だからこそ注目して金山町を見て魅力を感じた部分があったからである。このことはすべての活動に影響していて、特にホームステイに影響していた。まず、私は旅行では絶対ホームステイをしないので、体験できたことに学生という立場が活かされた。ご飯時では初めて食べるもの、金山地区特有の食べ物などほとんどが新しく、また、金山の方言に触れて聞き取れないというもどかしさを感じつつ、ひとつふたつ違った感性を鍛えられた。このように、学生でなおかつ授業の一環であるという見方、立場で金山を知れた、感じられたことが今回自分にとって一番の成果、収穫である。

私はフィールドワークをするにあたり懸念していたことがあった。それは、自分の意見が絶対であり、他の意見は否定的にみてしまうところだ。つまり、自己中心的に物事を判断しきめつけてしまう。この性格のせいで、チームのみんなにも金山町の方々にも不快な思いをさせないように今回のワークで感性を育て柔らかい思考にかえるのが私個人の密かな課題だった。しかし、初めて会うチーム、人や町で慣れず課題どころではなく、あっという間に２日が経とうとしていた。そして、フィールドワークのまとめの時、町の方が「みなさんにとっては目新しいフィルムカメラに初めて触れて、金山の新鮮な景色を撮ってみてどうでしたか」と言った言葉に私はひっかかった。それは、新しいという言葉だ。私たちが一般的に新しいという言葉を最先端、ＩＴなどという意味で捉える。しかし、昔のカメラを目新しいと新鮮だというようにひとつの言葉にも事柄にもいろんな見方があり、立場や環境が違えばそれぞれの感じかたも違う。最後のほうでしたが、みんなで協力すること、地域のひとに積極的に関わることで無事に自分の課題を解決できた。そして、またこのメンバーで金山を訪れ地域の人々と絆、交流を深めていきたい。

人文社会科学部　Sさん

フィールドラーニングで今まで触れたことのなかったものにたくさん触れ、それらを耳や手、鼻を使って感じることが出来た。また、地域の方々のあたたかさをたくさん感じられた4日間でもあった。

１日目にフィルムカメラの使い方を教えていただいた。私たちが使うデジタルカメラや携帯電話のカメラの何倍も撮るまでに手間がかかり、便利なものがあるのにとばかり思っていた。しかし実際に外に出て金山町の様子を撮影する際、構図を考えてピントを合わせ一枚一枚を大切にとる時間がとても楽しく、撮った写真には愛着がわいた。また、須藤さんが「スマホで撮った写真は複数にピントが合って綺麗すぎる」と話されていたが、フィルムカメラで撮った写真には奥行きが感じられ素敵だと感じた。このように、私たちはいつも便利さばかりを求めてしまうが、便利さだけが全てではないということを学ぶことが出来た。

4日間の中で地域の方々からたくさんのお話を伺った。その中で、インターネットの話をしていたときに、インターネットを「怖い」と話されていた。しかし、インターネットが使えないせいで販売など農業に利用することも出来ないとも話されていて、地域の方々はインターネットを嫌っているわけではないことが分かった。もしインターネットを使うことが出来るようになれば、農業だけでなく金山町の良さを発信することで観光の面にも役立てることが期待できる。そこで私たちはインターネットの使い方を学ぶ勉強会を開くという案を考えた。地域の方々は人と人の「繋がり」を大切にされていた。この勉強会によって、インターネットの使い方を学ぶことが出来るだけでなく、私たち若者と地域の方々との「繋がり」も出来ると考えた。

金山で過ごした4日間の全ての体験が私たちにとって新しく、とても新鮮なものばかりだった。この体験がなければどれも古いといって経験せずに終わってしまっていただろう。これからは、新しいものだけに目をくらませず、昔のものにも良さを見いだすことの出来る広い視野をもつ人になりたいと思った。また、先ほども述べたが地域の方々は繋がりを大切にしており、とてもいきいきとして楽しそうだった。私も、毎日の中で人と人の「繋がり」を大切にすることを忘れずにいようと思う。

理学部　Mさん

私は元々「チーム道草」というサークルに所属しており、金山町には何度か訪れたことがありました。しかし実際にこの活動に参加してみると何もかもが初めて体験することばかりで、まるで小学生のころに戻ったかのような、どこか懐かしさを感じた４日間でした。

主な活動内容としては、そば打ち体験や縄ない、わら細工講座に金山町出身のアーティスト柴田さんのライブコンサートなどで、金山の方々は私たちのためにいろいろな企画を準備してくださいました。特に今回のフィールドワークのメインであるフィルムカメラを使った写真撮影では、金山でも有名なカメラコレクターの須藤さんから実際にフィルムカメラをお借りし、金山の自然豊かな風景や美しい街並みで自由に写真を撮って歩きました。あまり難しいことを考えずにゆったりとした時

間の中で過ごしていると、普段の疲れが取れていくような感じがしました。このプログラムが始まるとき、地元の方は「慌ただしい大学生活を忘れて、のんびりとした雰囲気を味わってほしい」とおっしゃっていました。これからときには普段の生活から離れて、穏やかな時間を過ごすのもいいなと思います。

活動を続けていた中で、須藤さんをはじめとする金山町の方々からいろいろな話を伺いました。この地域での昔からの暮らし、産業などについて話をしていただきましたが、そこでひとつ気になったことがあります。それは高齢者の働き方についてです。調べてみると、金山町は人口の約3割が６５歳以上であることがわかりました。金山町は、農業や林業が特産として知られていますが、そのほとんどが地元の６０代以上の方々によって支えられています。つまり、定年退職をしても働き続けている人が大勢いるのです。ここで私は、これから先少子高齢化が進んでいくことを考えると、必要なのは高齢者のことを考えた仕事環境を整えていくことではないかと思います。今世間では「働き方改革」といった政策も打ち出されていますが、この日本を支えているのは会社で働くサラリーマンだけではありません。金山町のように、高齢者が現役で仕事を続けている地域のことも私たちは考えていかなければなりません。

私は今回のフィールドワークを通して、金山町の良さを実際に肌で感じることができました。ただじっと座って講義を受けるのではなく、自分の足で歩き、目で見て、耳で聞く。本当に意義のある授業だったと思います。「いらっしゃい」と私たちを温かくむかえてくださった金山町の方々のように、これからは私も人と人との「結」を大切に生きて生きたいと思います。

理学部　Tさん

私は初め、緑溢れるもがみの景観に触れてみたいという思いで講義を選んだ。金山町の美しい自然や街並みをカメラに写すことや、ホタルを観察することを楽しみにしていた。実際に金山町のフィールドランニングに取り組んでみて、カエルやホタルなどの生物、山や田んぼの風景と慣れ親しむ生活は、3月まで名古屋に住んでいた私にとっては、刺激的だった。

しかし、想定していなかったことがある。それは、もがみの自然に触れる以上に大切な宝物を見つけることができたことである。人と人とのつながりを大切にしてほしい。これは、お世話になった道草ぶんこうの方から頂いた言葉である。思えば、これほど人と人とのつながりに惹かれたことはあっただろうか。私は今まで、過去に出会った人々のことは今の自分と切り離して考えてきた部分がある。その方が、過去を引きずることなく、目の前の相手に最善な態度で接することができると思っていたからだ。だが、フィールドワークを終えた後では、人と人とのつながりの感じ方が変わっていることに気が付いた。人の出会いは川の流れに似ている。川に流される花びら達は、お互いにぶつかり合って、名残惜しそうにしながらも、止まることを知らず、また離れ離れになる。一見、今とは関係がない過去の出会いのように思えるが、フィルムカメラで撮ればずっと残すことができるのである。今回の講義で触れた、フィルムカメラ、そば打ち、縄ない、わら細工どれをとっても初めてのことであり、初めて出会った方々に教わった。こうして、出会いが蓄積し、人と人とのつながりが形成されていくのである。実際に、講義でお世話になった方々は、お互いに敬意を払いつつも、仲がとても良いように思えた。このプログラムの名前にもなっている感性とは、風景や人の、流れの中で蓄積された出会いを感じる能力なのではないかと、今の私は考えている。

今回のフィールドワークで共に活動した私達学生も、偶々この機会に巡り合っただけで、出身も将来もばらばらである。しかし、金山町の活動のお陰でつながることができた。私は、金山町は人と人とのつながりを育む町、伝統を後世に伝える町であり続けてほしいと思う。

私はこの講義で学んだ人と人とのつながりを大切にし、短い間だけれども多くの山形の思い出を作り、蓄積できるようにしたい。その為にも、フィールドワークで共に活動した皆で、また金山町を訪れたいと思った。

工学部　Kさん

私は、フィルムカメラとわら細工の体験ができるということで金山町のプログラムを選んだ。そして実際に活動するまでは、様々な体験をしながら、現地の方たちから地域の問題を聞き、その解決策を見つけ出し提案するというプログラム通りのことをして終わりだろうと考えていた。

しかし、私はプログラムにはなかったことでも大切なことを学んだ。それは人との繋がりの大切さである。もがみの活動中に須藤さんは、よく人との繋がりを大切にしたいとおっしゃっていた。私は須藤さんのお宅がホームステイ先だったので、その時に須藤さんのこれまでの人との関わりについて体験したことを教えていただいた。

内容は、須藤さんが友人と北海道までサイクリングで行ったときのことと、これまでに共生の森もがみで須藤さんのお宅にホームステイした先輩方の話である。須藤さんは、北海道まで行く際に何人もの人たちに助けていただいたから、人との繋がりを大切さにしたいと教えてくださった。そしてこれまでにもがみで須藤さんのお宅にホームステイした先輩方が、活動に関係なく再び泊まりに来ているとおっしゃっていた。私はこれらの話を聞いてコミュニケーションの素晴らしさを学びました。私は昔から人と話すのが苦手であり、知らない人と話すのは友達に任せたりし、自分から人と関わろうとしていなかった。実際に、1回目の活動の１日目は、ホームステイ先が同じだったメンバーくらいとしか話せなかった。しかし、須藤さんの話を聞いて、２日目からは他のメンバーとも話そうと考えるようになった。そして2回目の活動では班のメンバーだけでなく、地域の方々ともたくさん話せた。今までは人と話すことにマイナスのイメージを持っていたのに、いつの間にか人と話すことが楽しいと感じるようになっていた。活動をする前の自分には想像できないくらいの変化である。
私は、フィールドワークで様々な体験ができたこと、現地の方々との会話を通して人との繋がりの大切さを知ることができたことから、共生の森もがみの金山町のプログラムに参加ができて良かったと感じた。そば作り、フィルムカメラでの撮影、縄ない、わら細工、全て初めて体験することであり、フィルムカメラに関しては須藤さんのお宅で１００台近くのコレクションまで見せていただいた。どれもこのプログラムに参加していなかったら経験することはなかっただろう。これらのことから共生の森もがみの良さを友達や後輩に教えたいと感じた。そして、須藤さんが私たちにしたように、人との繋がりの大切さをいつか誰かに教えられたらいいなと思った。

工学部　0さん

地域問題とその解決策

今回の金山町でのフィールドラーニングでは、美しい自然、藁細工など田舎の魅力や古き良き文化を楽しく学ぶことができた。多くの魅力に溢れる金山町だが、現地の方々との交流会などを通して１つの地域の課題を発見した。それは、「高齢者がインターネットに慣れていない」ということだ。と言っても、ネットで検索することすらできないわけではなく、ネットに慣れておらず、よく知らないため商品を売り出したい時などにネットに出品することが怖く感じるといったような悩みだ。

この問題の解決策として我々は、学生がその地を訪問し、インターネットの使い方の勉強会を行うというもの提案した。これが実行されれば上記の問題解決だけでなく、現地との繋がりができ、街中にいるだけでは得られない多くを学ぶことができる。また、今後も発展していく情報社会においてネットの理解は必須であり、これをわかりやすく伝えるように努力することは私たち自身の生活や仕事などにおいて大きな意義があると言える。よってこの提案は大きなメリットがあるいい考えだと考える。

学んだこと・感想

今回の経験を通して、私は現代の人はもっと昔の知識や文化を学ぶべきだと考えた。

初めに上記の問題について考えた時、私はこの問題が解決できれば、地元の方の苦労も減って快適になるだろうと考えていた。しかし、２回目のフィールドラーニング時の交流会で、この考えがただの思い込みからくる勘違いであることに気付いた。現地の方々は、インターネットを上手に用いれことが町のためになることも、生活が便利になることもわかっているが、別に便利さを求めているわけではなく、今の生活は楽しく満足しているとの事だった。私はごく当たり前に、自然に現代文明の力に満ちた生活が誰にとっても幸せなのだと思っていた。しかしそれは私の勝手な考えで、実際は互いに顔を合わせて会話をし、少し不便ではあるがその不便さを楽しみ、満足した生活を送っている方も沢山いるのだ。

最近は昔の文化を放置しどんどん他国の文化や新しいものを取り入れようとする動きが活発になってきている。それについては他国との繋がりや発展に遅れないためなどの理由があるため否定はしない。しかし私はそんな今だからこそ古くからある日本が大切なのだと考える。ただ他国を真似るだけでは日本の個性がなくなってしまう。それは金山で多くを見て、聞いた私にはとてももったいないことに思う。よって、高齢者が現代技術に慣れる努力をするように、若者である私たちが昔のことを学ぶことも必要なのではないかと考える。

工学部　Sさん

私は共生の森もがみの活動を通して大きく二つのことを学んだ。
一つ目は「何もないからこそ感性が豊かになる」ということだ。まず、今回の活動を始めるにあたってテーマに

もある「感性」の意味を辞書で調べた。
感性:外界からの刺激を直感的に印象として感じ取る能力。感受性。(明鏡国語辞典第二版)
続いて、感性を豊かにするためにはどうすればいいのかをインターネット等で調べると、芸術作品に触れる、読書、映画鑑賞などが挙がった。たしかに、様々な刺激を受け取ることで感性が磨かれていくというのは容易に想像できる。しかし、今回の活動を通して、自ら刺激を見つけにいくことでより感性が磨かれていくのではないかと思った。町に出ればたくさんのもので溢れている。何も考えず歩いているだけでも、派手な広告や賑やかな音楽、美味しそうな匂いが私たちを刺激してくる。しかし、そのようなものが一切ない田舎ではどうだろうか。金山町を訪れて、私は意図的に感性を鋭くして外界の刺激を感じ取ろうとした。普段なら気にしない雲の動きや風の音、草の匂いに気づくことができた。このような能動的な行動を通してこそ、人の感性が豊かになるのだと思った。
二つ目は「写真に対する世代間の意識の違い」だ。最近流行中のSNSのInstagramは写真投稿が主なものだ。今回、金山町を盛り上げるためにInstagramのアカウント開設をするという案があった。今回お世話になった方々の中にカメラが趣味の方がいて「撮った写真をSNS等に載せたいと思うことはありませんか。」と伺うと、「写真投稿はしなくてもいい。」という回答をいただいた。最近の私はSNSに載せるために写真を撮るというようなスタンスだったので、その答えには驚いた。その方はシャッターを切る瞬間を楽しんでいるようだった。スワイプしてタップすれば簡単にシャッターを切れるスマホのカメラと違って、今回の活動でお借りしたフィルムカメラは一瞬を切り取るために大変手間がかかる。手動でピントを合わせる必要があり、一度シャッターを切ってしまうと写真が焼きあがるまで確認することができない。これを経験している世代とそうでない世代では根本的に写真に対する姿勢が異なるのではないかと思った。
以上二つのことについてフィールドワークを通して学んだ。新たな発見ができてとても充実した四日間だった。

農学部　Hさん
今回のもがみの活動を通して、そば打ち体験や縄ない、わら細工、フィルムカメラでの写真撮影、ライブコンサート、地域の方々との交流会を通して金山町の美しい自然や街並み、あたたかい地域の方々に出会って感性を高められた4日間であった。金山町の方々は連絡をくれればいつでも遊びに来てくださいとおっしゃってくれて、また質問するとたくさんいいお話をきかせてくださって本当にこの活動に参加してよかったと思った。
　金山町の方々が、インターネットは否定していないし自分たちがついていけていないことは自覚していて、インターネットで金山町を宣伝したほうがいいということも分かっているというのを聞いて、今回の活動で金山町の豊かな自然や綺麗な街並み、あたたかい地域の方々などたくさんの魅力を感じることができたので、もっとたくさんのひとに知ってほしいし金山町の方々がフィルムカメラについて教えてくれたように、私たちも何か役に立つことをしたいと考えた。そこで私たちは、実際に金山町にいってインターネットの使い方についての勉強会を開くという解決案を考えた。実行することができれば、金山町の方々は少しずつでもインターネットを活用できるようになり金山町の魅力を発信できると思うし、私たちも教えることで自分自身もインターネットの利用方法を見直せるし金山町の方々との交流も深められるというメリットがある。
　昔の方々が使っていたものや育ってきた環境にもたくさんの魅力があるし、私たちのインターネットも直接足を運ばなくても物が買えるなどのメリットはそれぞれあって、お互い使い方が分からないとか使うのが怖いという理由で遠ざけてしまうのはもったいないと感じた。フィルムカメラでの写真撮影でピントが合わないとか暗い明るい、どんなふうにとれているか見ることができないなどがあっても撮った写真をみるとスマホの写真よりも奥行きがあっていいなと学ぶことができた。また今ではSNSやインターネットなどでの広告や宣伝が主でありポスター掲示などよりも一気に多くの人に情報が回っていく世の中であり、それをうまく活用すれば金山町の魅力を発信することも十分可能である。それぞれの技術などを少しでも触れて体験したり、教えあって活用することで感性が高まったり、魅力を発信できると思うのでお互いの技術や物を勉強しあえるような環境や場所があったら生活が豊かになるのではないかと考えた。

歴史的地域資源の保存と活用を考える

活　動　状　況

○実施市町村：金山町

○講　　師：谷口銀山史跡保存会　会長　井上敬助

○訪　問　日：令和元年 5 月 11 日(土)～12 日(日)、7 月 13 日(土)～14 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部 2 名、理学部 1 名、医学部 2 名、工学部 3 名　　以上 8 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】５月１１日（土）	【１日目】７月１３日（土）
08:00　山形大学発 10:15　谷口公民館着 10:30　講義 「谷口銀山の歴史」講師：井上敬助氏 12:00　昼食 14:00　銀山探索 大切鋪探索、周辺探索 16:00　入浴（ホットハウスカムロ） 17:30　宿泊先へ	08:00　山形大学発 10:10　谷口公民館着 10:30　銀山周辺跡地探索 環境整備 12:00　昼食 14:00　銀山周辺跡地探索 通路整備（草刈り） 16:00　入浴（ホットハウスカムロ） 17:30　夕食＆懇親会（谷口公民館） 20:00　宿泊先へ
【２日目】５月１２日（日）	【２日目】７月１４日（日）
08:50　谷口公民館集合（ミーティング） 09:00　銀山整備活動 坑道清掃 周辺通路整備 12:00　昼食 14:00　午前の続き 環境整備作業 15:00　ミーティング 16:00　谷口公民館発 18:00　山形大学着	08:50　谷口公民館集合（ミーティング） 09:00　吉次山　登山 ※登山中に道の草や枝を取り除きながら 進みます。 12:00　昼食 14:00　活動まとめ、感想発表 16:00　谷口公民館出発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Mさん

　私たちは２度のフィールドワークで、金山町に訪れた。この４日間で金山町のレトロな町並みを紹介してもらったり、谷口銀山の坑内を案内してもらったりと、金山町の魅力をたくさん知ることができた。そこで私たちは課題として、「どうすればこの町の魅力を外に伝え観光者を増やせるのか」について考えてみた。

まず、今のままでは観光客が増えないことは明白である。私もこのフィールドワークに参加していなかったら、一生この町を知ることはなかったと思う。そこで私は、この４日間で一番楽しかったのは何か考えてみて、それを軸に観光客を呼べないかと考えた。考えた結果、それは谷口銀山の坑道に入った時だと気づいた。中はとても涼しく湿っており、下には水が張っていて高さは150cmほどしかないため中腰になりながら進み、途中にはコウモリがたくさんいて最後にはとても急な階段で地上に上がっていった。こんな体験は初めてで、まるで洞窟の中を探検しているかのような気分になってすごく楽しかった。現在、日本で入れる坑道はたくさんあるわけではないし、貴重な歴史資源であるので、これは観光客の方も訪れたくなるスポットであると考えた。

その宣伝のための提案として3つあり、まず1つ目が谷口銀山の探訪ガイドの見直しだ。私が谷口銀山史跡保存会の方からもらった資料には、谷口銀山の歴史が事細かに載せられていたのに、探訪ガイドにはたったの３２２文字しか説明が載っておらず説明不足で、これでは谷口銀山の魅力が完全に伝わらないものとなってしまっている。改善方法としては、まず文章としては私がもらった資料のような説明を載せること、谷口銀山坑内の写真や動画をアップして少しでも観光客の方に情報を伝えるなどが考えられる。2つ目がSNSで宣伝すること、具体的には金山町公式Twitterで宣伝してもらうこと。よくtwitterで観光地の写真が拡散されている時があるので、ぜひtwitterで坑内の写真を載せていただき、それがもし拡散されれば観光客が増えることは確実である。そして3つ目が金山町の小中学校の校外学習に谷口銀山の中を見学するという内容を盛り込んでもらうということです。それによりまず子供たちに銀山のことを知ってもらい、その子の親も銀山の存在を知ることによって金山町での銀山の認知度をある程度確保し、その方たちの口コミで少しでも谷口銀山が広まればいいという狙いである。

また班の話し合いでも上がった話で実現できるかはわからないが、youtuberを町に呼んで動画で町を宣伝してもらうという方法もある。youtuberのファンは動画で出た場所に訪れたがるので、とてもいい方法であると思う。だがそれなりに影響力のあるyoutuberとなると呼ぶのにも大金がかかるので、この方法は町ぐるみで行っていかなければいけない問題である。

金山町はたくさんの魅力にあふれている町なので、銀山を見に来た人たちがほかの魅力も見つけ、より町に活気が溢れることを祈るばかりである。

［参考文献］

金山町探訪ガイド
http://town.kaneyama.yamagata.jp/kanko/best-view/entry-506.html
谷口銀山保存史跡会　井上会長　聞き取り資料

人文社会科学部　Nさん

　このレポートの中で、感想の他、グループとしてではなく自分の思う課題と解決策について述べていきたいと思う。

今回二度に渡ってフィールドワークを行い、金山町の谷口銀山とその周辺施設を訪れた。

その活動の中で、実際の銀山の迫力を感じると同時に、過疎化傾向にある現状を感じた。

確かに、私にとって銀山に入ること自体は普段経験できるようなものではなく、楽しさや新鮮さを感じる貴重な体験であった。しかし、普段の生活の中で友人らとこの地を目的に訪れる機会は、少ないといわざるを得ない。その原因として、交通の便や町の立地、周辺施設の少なさが挙げられる。

私のように車を持たない者が遠方から訪れる場合、行くだけでも相当な労力と金額を要する。

だが、銀山の場所を変えたり、突如として大型観光施設を建てたりすることは現実的ではない。

では、どうすれば活性化に繋がるか。二つの対策を考えた。

一つは、SNSや広告等で銀山の宣伝をした上で、山形駅などの主要駅から直通のバスを格安で運行するというものが考えられる。交通の便が改善され気軽に行けるようになれば、一度くらい訪れようと思う人が増えるのではないか。さらにこれは、費用対効果の面からも、最も

現実的であると考えられる。
もう一つは、有名人にこの地の宣伝をしてもらうというものだ。
誰に宣伝してもらうのかについてだが、最近はテレビをもしのぐ勢いでYouTubeが広まっているため、人気YouTuberに一声発してもらうことが、集客数と活性化の進歩に対して効果的であると考えた。そのYoutuberの中でも候補として私が第一に推すのは、６人組YouTubeクリエイターの東海オンエアである。このグループを推す理由としては、彼らの若者からの圧倒的な支持率がある。もし彼らがこの地を題材に動画を撮影すれば、確実に若者からの認知度は上昇するであろう。事実、彼らが地元岡崎の観光伝道師となったことで、「愛知県岡崎市」の認知度は間違いなく上がっている。ただし、この案には、費用面が大きな障害として立ちはだかる。私なりに調べたが、案件にかかる費用は明かされていなかった。だが、他のYouTuberの案件費用から推測すれば、数百～数千万単位でかかるのでは見込まれる。この案については熟考の余地があるが、残念ながら今回は文字数の関係でこれ以上述べることは難しい。しかし、実現すれば大きな効果を発揮することは間違いないだろう。また別の機会があれば、このことについてより詳しく掘り下げて行きたい。
今回のフィールドワークを通し、地域活性化について具体的な案を出すことの難しさを感じた。だが、これらの体験は貴重なものであり、とても楽しいものでもあったため、自らの糧としていきたいと思う。
（参考資料）
金山町探訪ガイド　「谷口銀山跡」
http://town.kaneyama.yamagata.jp/kanko/best-view/entry-506.html
Uuum公式ホームページクリエイター情報　「東海オンエア」https://www.uuum.jp/creator/tokai_onair

理学部　Kさん
自分は今回の学習で様々なことを学ぶことができた。1つ目は自然の素晴らしさだ。都会では味わえない自然の風景、おいしい空気を体験し、町をただ発展させるのではなくこの自然を守っていくことが大切だと感じた。2つ目は谷口銀山の魅力だ。谷口銀山は自然と歴史両方を味わえる。特に新大切鋪はこのような鋪を掘った人間のすごさ、それを利用して生活するコウモリの生命力を感じた。谷口銀山は普段では体験することができない特別な場所だと思った。
　自分は谷口銀山の魅力は金山町を活気づけられるくらいあると思う。しかし谷口銀山保存史跡会井上会長の話を聞いたところ、谷口銀山の年間観光客数は150人程度である。｛谷口銀山の料金は個人500円、団体（6人以上）3000円｝谷口銀山の年間の維持費だけでも10万円かかり、環境収入だけでは赤字になってしまい、教育委員会からの補助金で経営を成り立ちさせている状態である。実際自分が谷口銀山を探索したところ、お金がなくてコンクリートで固定できない不安定な手すりがあった。
　谷口銀山は魅力的な観光地であり、知ってもらえさえすれば観光客も増えると考えられる。そこで提案することが2つある。
　1つ目は金山町探訪ガイドの改善だ。自分たちがフィールドワークでもらった資料ではたくさんの情報が載っていたのにもかかわらず金山町探訪ガイドの谷口銀山の説明は322字しかなく魅力が伝えきれていない。文章を長くして情報量を増やすのも良いし、YouTubeにある最上があげている谷口銀山についての動画のURLを貼るのも良いと思う。YouTubeの谷口銀山の動画は7月15日現在7年間で3020回しか再生されておらず、URLを貼ることで動画を見てもらう機会が増える効果もある。また金山町探訪ガイドの〈谷口銀山探索はこちら〉というところをクリックしてもページが見つからないのでページをつくる必要がある。
　2つ目は地元の小学生高学年を対象に自分たちが行ったような体験をする校外学習を実施することだ。子供が金山銀山について知れば、その親も谷口銀山について知る機会になるし、草抜きや手すりの整備を行えば銀山の安全確保になる。また金山町人口ビジョンによると金山町は人口減少が続いている。子供たちに谷口銀山、金山町の魅力を知ってもらえば、若者が金山町に残ってもらうことにつながると思う。小学校で校外学習が行われたのは2年前であり、実行する価値はあると思う。
＜参考資料、聞き取り資料＞
金山町探訪ガイド　2019年7月15日
http://town.kaneyama.yamagata.jp/kanko/best-view/entry-506.html
YouTube 谷口銀山　2019年7月15日
https://www.youtube.com/watch?v=Bs27Xvdh0XE
谷口銀山保存史跡会　井上会長（68歳）聞き取り資料
金山町人口ビジョン　掲載日2015年10月　観覧日2019年7月15日http://town.kaneyama.yamagata.jp/docs/金

山町人口ビジョン.pdf#search=%27%E9%87%91%E5%B1%B1%E7%94%BA+%E4%BA%BA%E5%8F%A3%27

医学部　Kさん

二度のフィールドワークを通して、私は今まで名前も聞いたことがなかった金山町という町にとても惹かれた。その理由は主に二つあるが、一つは伝統的な景観を保護しようとしている点であり、もう一つは自然との共生が感じられる点である。しかし金山町に人を呼び込むということを考えたとき、問題になることが一つある。この二つの点は重なる部分もあるものの、主要な魅力は全く違う系統であるということだ。だからこそ、金谷町のホームページには金山町が力を入れている景観保護の面でしか町をアピールしていなかったし、谷口銀山のことは載っていなかったのだと思う。伝統的な景観というのは石畳の道路や地元でとれる金山杉を使い白壁で統一する家づくり、町内のあちこちを流れる小川、そしてこれは自然との共生と重なる部分だが、林檎や胡桃などの食べられる街路樹、伝承野菜を使ったデザートや日本有数のメープルの樹を活用したアイスクリームのホテルでの提供など、昔ながらの日本の落ち着いた雰囲気が感じられるところに魅力がある。一方で自然との共生は、当時の鉱山労働の厳しさが感じられる谷口銀山であったり、ほとんど道がないような、しかし様々な生き物や町では見られない良い香りのする樹などがたくさん生えている吉次山であったりと、町の中心からは少し離れたところで感じられるアウトドアなところに魅力が詰まっている。銀山も山も町から遠いし、何より足場などに不安があるため決して人にお勧めできる場所では正直ないが、自分はまたいきたいと思わせるような素敵な場所だった。

ここで考えられるのは二つの方面に魅力を持つ金山町は二つのタイプ、つまりレトロな雰囲気を好む人とアウトドアで自然を感じることが好きな人、を集められるのではないかということである。そこでまずは町、特に今あまり知られていない谷口銀山をもっと多くの人に知ってもらう手段として私たちの班はSNSの活用や小中学校の校外学習を提案した。現在、ネット上に金山町のホームページや探訪ガイドがあったり、Twitterに山形県金山町の公式アカウントがあったりしますが、銀山などについては載っていないに等しいため、それらに載せてもらえれば、少しは多くの人に知ってもらうことができるのではないかと思う。またフィールドワーク時に地元の方に伺ったところ、銀山については金山町の人でも知らない人がいるそうなので、まずは町の人が銀山のことを知り誇りに思ったり興味を持ったりできるように校外学習ができたらよいと思った。最近小学生が来たのは二年前であり、それも隣町の真室川北部小学校であるが、その流れをまた町内の三つの小学校でも取り入れてもらえれば、現在よりも多くの町民が銀山のことを知り、かつその人たちによっても銀山の存在が広められるのではないかと考える。もちろん小中学校の校外学習の変更は教育カリキュラムとの兼ね合いもあり、SNSの活用ほど容易なことではないので実現は難しいかもしれない。しかし、私たちの提案が少しでも金山町ひいては谷口銀山の活性化に繋がればよいなと思う。

医学部　Sさん

私は今回のフィールドワークを通して、疲れることも多かったが、全体を終えて振り返ってみると楽しかったと感じた。また、フィールドワークを通して、金山町のいいところをたくさん見つけることができた。具体的には、豊かな自然、町の人たちの人柄の良さ、谷口銀山や金山町の町並みといった歴史的観光資源が特に印象に残っている。

私は金山町の田畑が広がり、みずみずしい豊かな森が生い茂っているところが好きだ。なぜなら私の故郷と似たところがあったからだ。金山町を訪れて開口一番に私はえもいわれぬ懐かしさを叫んだ。金山町は、昔から米作りが盛んに行われていて、田んぼがいくつもある。農作物も多く作っており、味もおいしい。これは金山町の豊かな自然が影響している。様々な影響が考えられるが、私は特にきれいな水が影響していると考える。町の脇を用水路の水が流れていたが、透明度が高かった。

私は金山町のプログラムを通して、町の人たちの連帯感の強さを感じた。例えば昼食を食べに店に入ったとき、案内してくれた人が店にいる人と仲良く会話しているのを見て、金山町のアットホームな雰囲気に惹かれた。また、町の人たちの人柄の良さを身にしみて感じた。スモモをごちそうしてくださったり、夕食会を開いてくださったり、私たちを歓迎してくれた。それに金山町の町並みを紹介してくださったときには、町の隅々まで丁寧に説明してもらった。

さらに谷口銀山に入ってみて、先人たちの大変さや、この町を盛り上げたいという願いを感じた。私自身銀山の中に入るという経験は初めてだったので、とても新鮮な体験となった。銀山の中は、とても暗く、懐中電灯なしには前に進めない状況だった。天井が低く、進むときには頭を低くしていかなければならなかった。そのため、腰が痛くなったり、頭を天井にぶつけてしまうことも多々あった。天井にはコウモリが多く住み着いており、前に進む私たちにむかって飛んできた。こんなに近くでコウモリを見たのは初めてだった。このような状況の中、金山町の先人たちは銀山を掘り進めたということで、私は驚きとともに、畏敬の念を抱いた。

私は今回のフィールドワークを通して、金山町のいいところをたくさん見つけることができた。こうしたいいところを日本全国に発信していけば、町にたくさんの人が集まってくるはずだと思うので、金山町のいいとこ

ろを多くに人に伝えていきたいと思う。
（参照）
金山町探訪ガイド　2019年7月15日
http://town.kaneyama.yamagata.jp/kanko/best-view/entry-506.html

工学部　Aさん
私は、山形についてもまったく詳しくないので、まして金山町のことについては全く知らなかった。しかし、二度のフィールドワークを通して金山町の良さを語ることができるほど多くの魅力を見つけることができた。
金山の魅力の一つに谷口銀山がある。谷口銀山が本格的に採掘され、大盛期となったのは約400年前であるが、現在は内部が復元され、通り抜けできるようになっている。しかし、実際に通ってみると高さは150cmほどであり中腰で進まなければいけなく、また急勾配の階段もあり、当時の採掘の厳しさを私たちは十分に体験することができた。銀山坑内はとても涼しく、七月の坑内探索はとても心地が良かった。
しかし、県内には尾花沢市にも坑内探索可能な延沢銀山がある。延沢銀山では温泉地として盛んになっていて、年間30万人以上の観光客が訪れている。一方で谷口銀山の年間の訪坑者数は150人程度である。解決策として、SNSや金山町公式websiteをつかって谷口銀山の知名度を上げることが挙がった。
私は、延沢銀山と谷口銀山の比較から有名観光地になるには何が必要なのかを自分なりに考えた。延沢銀山の場合、温泉とレトロな雰囲気が漂う景観に心惹かれ観光客が訪れていると思ったので、谷口銀山でもプラス要素でなにかを加えればよいのではないかと考えた。そこで私が考えたのは、金山町名物メープルソフトと銀山をセットで売りにするということである。夏の３０度を超えるような猛暑の日に、谷口銀山を訪れメープルソフトをその後に食べるというコースを組むことで観光客は金山町に来て涼しむことができると思った。
また、これから次の世代に谷口銀山を伝えていくという観点から地元小中学校の校外学習に銀山探索を取り入れるという意見も上がった。しかし、銀山の中は危険も伴うためこれは検討の余地があると考えた。しかし、その代わりに街並みを探索して金山町の名物を知る活動にしたりするもいいと思った。
この活動を通して、私は日本の地方の現状について身をもって知ることができた。担当してくださった現地の方が言っていたように、若者がくる町にするにはどうすればよいかという課題についての解決は非常に難しいということ。しかし、この問題は金山町だけではなく、全国にあるということ。私たちの世代が解決していかなくてはならないという危機感を持つきっかけになった。
地域再生計画
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/tiikisaisei/dai43-2nintei/plan/a119.pdf
谷口銀山跡のあらまし（谷口銀山史跡保存会）

工学部　Wさん
フィールドラーニングにて
午前中は金山町を散策しました。水路に綺麗な水が流れており、家々の壁には和紙で丸く包まれたライトが列になって垂れ下がっていてとても趣のある街並みでした。その水路は風景としての飾りだけだはなく雪が降ったときの流雪溝となったり、使った皿や衣類の簡単な洗い用に使用されていました。水路の中には鯉がいるところもあり残飯を食べてくれるそうです。水路一つにこんなにも工夫がされていて素晴らしいアイデアだと思いました。公園があるところには食べれる木の実がなる木が生えていました。成った木の実は自由に取っていいことになっているため、よく町の子供達が食べにくることがあるそうです。これのおかげで子供達が自然と旬の果物がわかるという徳にもつながり本当にすごいと思いました。他にも誰もが使える自由スペースな場所がいくつかあり、落ち着いた雰囲気のとてもいい場所だと思いました。
午後は谷口銀山に行き整備活動をしました。行く前までは鉱山はその場所に一つしかないものだと思っていましたが、実際に行ってみてそれは間違いだということがわかりました。谷口銀山はいくつもの鋪がありその範囲は広大でした。全てを徒歩で見にいくのはとてつもない時間がかかるだろうなと思いました。銀山の入り口に来たとき、入り口の中から白い冷気が出てきて中がとても涼しいことがわかりました。銀山の中は夏でも涼しかったので快適だなと思いました。銀山内はとても狭く、床から天井までの高さはおよそ1.5メートルほどで、入る人皆しゃがんで歩きました。地面は前日に雨が降ったためか水浸しの状態でした。中には、ぬかるんでいるところもあり非常に歩きにくかったです。途中からコウモリの群れが頭上を飛び交ってきました。沢山のコウモリが一斉に飛び交っていて少し怖かったです。鉱山内の壁には所々に印が彫ってありました。その印は様々な種類が

あり、それぞれ意味が違いました。江戸時代からの跡が、いまだに残っていることにとても素晴らしいと思いました。

このたった四日間で金山町と谷口銀山の素晴らしさがわかりました。観光地になってもおかしくないと思いました。しかし実際にはこの金山町は観光客が少なく、特に谷口銀山は人気が少なく、町の住民にも知らない人がいるほどの知名度でした。そのため私たちは谷口銀山について多くの人に知ってもらうべく、沢山の意見を出し合いました。そしてその中から私たちなりの答えを見つけ出し、まとめました。そしてこの答えが実現できるよう活動して行こうと思います。

工学部　Nさん

金山町と聞いて、最初はどこにあるのかもわからなかった。そんな見ず知らずの場所へ行き、現地での活動を通して感じたことをまとめていく。

金山町に行ってまず思ったことは、民家のデザインが同じであることだった。調べてみると、金山町は１９８５年から１００年をかけて自然と調和した街を作ることを目指しており、条例で「金山型住宅」と呼ばれる名産の金山杉を用いた住宅の普及に努めていることが分かった。すべての住宅がそうなっているわけではないが、外観がそろった住宅の並びには感動した。そんな美しい金山町には、「谷口銀山」という銀山の廃鉱がある。廃鉱といっても荒れ果てているものではなく、保存会によってきちんと整備がなされており、坑道内部にも入ることができる。地下のため気温の変動は少なく、常に１８℃程度である。橙色の電灯が坑道内を照らしているが、非常に暗く、天井も一部低くなっているため懐中電灯がないと探索しにくい。しかし、それがかえって独特の雰囲気を創り出し、不思議な感覚にとらわれ、知的好奇心を刺激する。この歴史的資源を活用すると現在以上に町が活性化するのではないだろうか。

谷口銀山は、１１６０年金売り吉次信高が発見したと伝えられている。その本格的な採掘は１５６８年頃からで、最盛期は１６２５年～１６６０年といわれている。その最盛期時代には民家や寺など合わせて３５００軒ほど存在しており、銀山周辺だけで約６０００人が暮らしていた。しかし廃鉱となった現在では谷口銀山の周辺の活気は当時ほどではなく、訪れる人も年間約150人程度である。これは非常にもったいないと感じる。銀山の観光地化と観光客数を増やすことが課題だと考えると、解決策はどのようなものがあるのか、考えてみる。

観光客が金山へ行こうと思っても公共交通機関ではいずれの経路も新庄駅からバスで４０分と行きにくい。これは地理的に解決が難しい。この欠点を克服し、観光地化するためには宣伝が必要だと考える。今あるホームページの充実だけではなく、ＳＮＳや動画の活用などが宣伝方法として考えられる。ここでは動画について考えてみる。現代ではスマホでＶＲが楽しめる。それを生かして銀山内部や周辺、金山町の街並みを３６０度録画ができるカメラを用いて収録し、インターネット上に公開するというのはどうだろうか。今までの動画よりもより一層雰囲気を感じることができ、それで興味を持った人が観光に来てくれるのではないだろうか。

＜参考文献、聞き取り資料＞

・山形県ホームページ－金山杉と金山の町並み、参照：２０１９年７月２１日
https://www.pref.yamagata.jp/ou/somu/020026/mailmag/special/yamagatabiyori/kaneyama.html
・谷口銀山史跡保存会、『谷口銀山跡探訪写真で覗く谷口銀山』、２００３年
・谷口銀山史跡保存会　井上会長（68歳）聞き取り資料
・金山町ホームページ－交通のご案内、参照：２０１９年７月２２日

https://www.town.kaneyama.yamagata.jp/chosei_machizukuri/machinosugata/1134.html

森と人との共存Ⅰ
～山間地の歴史を探り地域振興へ【地域マップづくり】～

活　動　状　況

○実施市町村：金山町

○講　　師：遊学の森案内人会ボランティアのみなさん及び地域住民

○訪　問　日：令和元年５月 11 日(土)～12 日(日)、６月８日(土)～9 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部１名、地域教育文化学部５名、医学部２名、工学部２名

以上 10 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】５月１１日（土）	【１日目】６月８日（土）
10:00　遊学の森着 10:15　オリエンテーリング 森を楽しむ講座Ⅰ（ビオトープ観察） 12:00　昼食（柳原公民館） 13:00　森を楽しむ講座Ⅱ（地域マップの充実） 15:30　夕食づくり（弁当づくり） 夕食 21:00　入浴 ふりかえり 就寝	10:15　遊学の森着 10:30　マップづくり（名所めぐり） 仮装づくり（まつりの準備） 昼食 水辺観察 15:00　終了（荷物分け運搬） 夕食づくり（弁当づくり） 18:30　有屋少年番楽（遊学の森） 19:00　地域児童交流会 20:00　蛍観察 21:00　入浴 ふりかえり 就寝
【２日目】５月１２日（日）	【２日目】６月９日（日）
06:30　起床、朝食準備、部屋の片付け 07:30　朝食、片付け 09:00　森の恵みを味わう講座（地域交流） 12:30　昼食 13:00　スポーツ GOMI 拾い 15:00　ふりかえり 16:15　遊学の森発 18:00　山形大学着	06:00　起床、朝食準備、部屋片付け 07:00　朝食、片付け 08:00　地域交流（下向地区まつり） 昼食（各自） 14:30　遊学の森へ移動 15:00　マップ発表 15:50　遊学の森発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Sさん

私は金山町について何も知らなかった。しかし、この授業を通して金山町のいいところを沢山知ることができた。

一回目は実際に山の中に入り、採れる山草や生き物の知識を地元の方々から学んだ。具体的には、見た目が非常に似ている二輪草とトリカブトの見分け方を教わり、都市部ではなかなか見られないスジグロシロチョウも実際に見せてもらった。夕食の私達が採った山菜の天ぷらはとてもおいしかった。また、このフィールドラーニングのメインであるマップ制作の材料探しと金山町の事をより知るために地域を散策した。私が最も印象に残ったのは金山町の名所である龍馬山である。この山は大きな崖が特徴的だった。言い伝えによると60年に1度だけ麒麟のような龍馬が現れるという。確かにそこに入ると神秘的なオーラを山全体に感じた。自然の偉大さとともに、地域の方々がこの山を保全しているのだと思うと歴史と地域の結びつきが強く感じられた。

二回目は地域の方々との交流がメインの活動だった。一日目には日本では唯一であろう、雪室が中にある家にうかがった。そこでは雪を利用して食べ物を保管しているだけではなく地域の子供たちにふるまいアイスを手作りなどのアクティビティを行っているとのことだった。それだけでなく、その地帯では今後積極的に対する太陽光発電を取り入れる予定だという。自然を大いに活用しており、人間と自然の共生をとても感じることができた。

二日目には下向地区のまつりのスタッフとして働いた。そこでは神輿を担いで町内を回りゆく先々の民家で止まり飲み物や飲み物をごちそうになった。地元の方々とお話しをする機会にもなったので交流はより深くなったと思う。

この二回のフィールドラーニングを通して地方の良さがわからないのはもったいない事だと思った。問題なのは金山町の存在、そして良さを知っている人が都市部に少ないため人口が少ないことだ。私自身、積極的にもがみに参加しなければ、自然、金山町の伝説、伝統を知ることなど絶対になかった。しかし実際に目で見、手で触れ、地域の方々と話し合いすることで地方の良さを実感した。これらの事は金山町を訪れる前の私たちのように何も知らない人たちに伝えていくべきだ。そこから金山町に興味を持ち訪れる人が増えれば人口も増えていきこの町が栄えていくと思った。私もがみに参加した人の役目として機会があればそのような活動に参加していきたい。

地域教育文化学部　Gさん

私は今回森と人との共存を考える～豊かな暮らしをつくる生き方働き方～として金山町の有屋地区に行きました。１回目の初日、まず初めに森を楽しむ講座Ⅰということでカタクリやワラビなどといった山野草、またメダカやシュレーゲルアオガエルといった生き物を観察しました。自然に触れることで、どこか懐かしさを感じるとともに、地域の方々にたくさんの山野草や生き物を紹介してもらい、とても有意義な時間を過ごすことができました。そして午後からはマップ作りの一環として、地区ごとに分かれてそれぞれ調査を行いました。2日目は地域の方々とともに山菜をとり、それらを調理しておいしくいただきました。その後、地元の子供たちとペアを組みスポーツＧＯＭＩ拾いに参加しました。競い合う形式にすることで、ごみをたくさん拾おうとする意識が向上するとともに、子供たちとお互いの地元について話すことができ、とても工夫されている活動であるなと感じました。

２回目の初日は、大美輪や竜馬山などといった名所を巡りました。大美輪の大杉は樹齢約280年といわれていて、自分がちっぽけに見えるくらいとても大きかったです。その後有屋少年番楽の子供たちから歴史ある番楽を見させていただきました。地元の子供たちが集まって練習し長年の伝統を引き継いでいることはすごいことだと思い、また子供たちに番楽についてたくさん話を聞くことができてよかったです。2日目は下向祭りに参加させていただきました。ここでの活動が1番地域の方々との交流が多かったなと感じます。お手伝いをするとともにお話をするなどの交流を通して、たくさんの学びがあり、楽しく活動することができました。

この2回のフィールドワークを通してこれまで全く知らなかった金山町で行われている活動や伝統、歴史など学ぶことができました。さらに地域の方々と話すことにより、課題も見つかりました。高齢化、若者の減少、山の手入れができていない、活動の広告があまり広がって

いないことがあげられました。これらの課題を解決するためには何が必要であるかと考えたとき、私は今回のフィールドワークでさまざまな活動に参加し交流したことで経験したことを、例えば幼稚園や学校などといった施設へ、また家族や友達同士を対象とする人などを多くの人たち伝えていくことが大事であると思います。そうすることで金山町について少しでも興味を持ってもらい、それが課題解決への第一歩になると考えています。自分自身ももっといろんな人に金山町について知ってもらいたいと感じました。ここで自分たちの活動を終えることなく、課題解決に向けて自分たちにできる形で貢献していきたいと思います。

地域教育文化学部　Eさん

私は第一回のフィールドワークに行く前は金山町について何も知らず、自然の多い場所という漠然とした印象を持っていました。金山に到着すると想像より自然が多く、人工物が少なく、驚きとともにとてもワクワクしました。1日目は地元の人たちとビオトープ観察を行い、山菜や生き物、植物の説明を受けました。山菜を生のまま食べたのは初めての経験でした。また、見たことないような生き物の説明を聞けて良かったです。2日目は山菜取りに行きました。主に、ゼンマイ、ワラビ、アイコ、ウド、ミツバ、タラの芽を取り、それを天ぷらにして昼食としていただきました。自分たちで取った山菜をすぐに調理して食べるという貴重な体験ができました。とてもおいしかったです。また、午後にはスポーツＧＯＭＩ拾いというイベントに参加しました。地元の方たちと協力して、グリーンバレー神室スキー場をきれいにすることが出来ました。七輪を運んで優勝できたのは思い出になりました。

二回目のフィールドワークでは主に金山の伝統に触れました。有屋少年番楽を目の前で見たときに自分たちより小さい子たちが素晴らしい舞を行っていて、すごいと思いました。また、長く続いてきているので、このまま後世まで語り継いでほしいと思いました。2日目は下向祭りという地元のお祭りに参加しました。お神輿を担ぐという貴重な体験や、魚のつかみ取りなど普段はできない体験をさせていただきました。地元の方たちと関わる機会がとても多く、子供たちも心を開いて話しかけてくれたのでうれしかったです。

私は、二回のフィールドワークを通して、多くのことを学びました。雪を家の中に貯蔵して、夏の暑さ対策に用いたり、野菜の保管に使ったりするなど発想に驚かされました。また、金山町は人が少なく、なかでも子供が少ないことが課題となっていますが、その分地域の人同士のかかわりが深く、祭りでも全員が知り合いのようなアットホームな雰囲気が見られ、羨ましく感じました。子供の数が減少したことで番楽に女子も加えたと言っていましたが、とても良い演奏だったのでこのように問題を解決できれば良いと思いました。森と人との共存というテーマのフィールドワークで最初はよくわかりませんでしたが、帰るころには共存の意味が理解できるようになりました。貴重な体験の場を設けていただき、今回得たものを今後のフィールドワークやその他の活動に生かしていきたいと思いました。

地域教育文化学部　Aさん

私は、山形県出身でありながら、今回が初めて金山町に訪れる機会でありました。１回目のフィールドワークでは、主に自然に親しむような体験をさせていただきました。ビオトープ観察や森の恵みを味わう講座では、ゼンマイやふきをはじめとする山菜の豆知識を教えてもらったり、珍しい動植物を観察したりすることができました。自然の中をゆっくりと眺めながら歩くのは中学校以来で、不思議と懐かしい気持ちになり、豊かな自然を素肌で感じ、日頃のストレスや不安が解消されるような、心地よい時間でした。また、ほとんどの食事を自ら作り、一からうどんを作ったり、食わず嫌いであった山菜が実際は美味しかったりなど、金山町に行かなかったらできなかったような体験もすることができてよかったです。

２回目のフィールドワークでは、地域の伝統について学ばせていただきました。有屋少年番楽は、子ども達だけで伴奏、歌、踊りをしていて、こうした活動が主体性を生み出すと番楽を観ていて感じました。また、下向地区まつりでは神輿を担いで回ったり、素手で魚をつかみ取りしたりなど、初めて体験することが多かったです。こうした昔馴染みのお祭りで、地域の方々とお話しをしたり、イベントのお手伝いさせていただいたことで、地域が一体となってするお祭りは、子どもから大人まで楽しめる素晴らしい行事だと気づくことができました。

また、このフィールドワークを通して、金山町のマップづくりをしました。その際に、ホースセラピーや植樹祭・育樹祭などの金山町特有の活動を初めて知り、金山町には良い場所がたくさんあるのだと実際に行ってみて感じることが多かったです。

今回の活動を通して、気づいた金山町の課題は、少子化問題だと私は思いました。実際に金山町の小学校の子ども達の人数も減少傾向にあります。しかし、これは金山町だけの問題ではなくて日本全体の問題でもあります。明確な解決方法はまだありませんが、私が訪問した金山町では、子ども達がのびのびと暮らせる非常に良い環境であると実際に行ってみて身に染みて感じました。だから、私はまず、実際にやってみることを大事にする、そういうことを周りの人や子ども達に教えていこうと思います。

また、今回の活動で行なったスポーツGOMI拾いや地域児童交流会を通して、私は子どもと話すことが少し苦手であることが自分自身の課題として見つけることができました。将来、教師をなろうとしている私にとって、これは解決しなければならない課題です。そこで、サークルや教育実習の中で子どもと触れ合う機会を多くし、段々と子どもと話すことに慣れていこうと思います。

地域教育文化学部　Oさん

今回、最上フィールドワーク森と人との共存を考えるを通して金山町に伺い、貴重な体験と多くの学びを得た。第一回の活動ではビオトープ観察や地域調査、スポーツ GOMI 拾いなどを行った。ビオトープ観察では、豊かな生態系を見るとともに、地元の方の自然保護にかける思いを感じた。そこでは、出会って間もない私たちに丁寧にやさしく動植物について教えてくださり、地域の方の温かさに触れた。その後の地域調査・マップ作りでは地元の方の案内のもと入有屋地区をまわり、地域の現状や町としての取り組み、歴史や自然など多くのことを教わった。減りゆく人口のなか、金山町をどう守り、地域の伝統をどのようにつないでいくか、若い世代をどう呼び込むかなど課題は多くあるようだった。地域を回る中、昔はと寂しそうに語る地元の方の姿が印象的だった。

第二回の活動では、有屋少年番楽鑑賞、地域児童交流、下向まつりに参加などした。有屋少年番楽は４００年伝わる民族芸能「番楽」を伝えるために昭和５９年に結成され現在３５周年を迎える。子供たちが目の色を変えて踊る姿に驚き、迫力のある演奏に圧倒された。こういった伝統あるものを継承しようとする取り組みはぜひ続けていってほしいし、守らなければならないものだと思った。その後の児童交流会では演奏していた子供たちに話を聞き、実際に演奏もさせてもらった。子供たちの話を聞くと、番楽は父から教わったと言っていて、親世代から子世代に確かに受け継がれていることが分かった。翌日、下向まつりに参加した。神輿を担ぎ地区を回ったり、祭りの運営など多くのことに携わった。その中でも印象的だったのはイワナのつかみ取りだった。地区内にイワナの養殖をしているところがあり、そのイワナを小川に放し、子供たちが捕まえるというもので、地区の特色が表れていると感じた。少人数ではあるが、工夫された取り組みがあり、これからも続けていくべきものだと感じた。お祭りの中で地域の大人の方、子供たちとかかわる中で様々なお話をし、フィールドワークとして意義のある活動となった。

また、このフィールドワークの取り組みとしてマップ作りがあった。金山町に伺うのが初めてである私たちがどのようにマップを作ればいいのか悩んだが、外から来た人ならではの視点から作ろうと考えた。地元の方のお話を聞き、わからないところを質問していく中で私たちの理解も深まり、少しでも良いマップにしようと努力した。大変意義のある活動だったと思う。

地域教育文化学部　Iさん

私は地域の問題としてはじめは外部の人をどうしたら人を集めることができるのか解決することを目標にしてフィールドワークに参加した。1回目はシュレイゲルアオガエルなどの珍しい生き物を観察してこれは活動として有名にできる、また山菜料理を生かす活動ができそうだと考えた。しかしスポーツGOMI拾いで家族と必至にゴミを拾う子供たちをみて、まず住む人がどれほど地域を好きでいられるか考えるべきだと感じた。

フィールドワークを通して、地域の活動とは本当につながりで支えられていることを痛感した。ビオトープ観察や森の恵みを味わう会などすべての活動に共通するのは、現地の方々の小さなつながりであっても「地域の活動」として成り立っているところである。この「地域の活動」というのは都会の地域では作れない活動だと思う。今回体験した活動は人と人が関わっている。一番関わりを感じた例は、2回目の下向地区祭りだった。御輿担ぎの休憩で地域の方から、お菓子、飲み物をいただいて出店では無料で料理をいただいた。何より、今年生まれた子供のお祝いを地区の方全員でする様子をみて、地域全体で子供たちを守っている人のつながりは都会でもあってほしいと思う。私も田舎出身だったので、最近地元で続いていた地区の祭りがなくなりそうなことを改めて寂しく感じた。地元の地区も子供の数は20人ほどで少子化が一番影響しているのだと思う。子供の目線で考えると進学するためには町を出ていかなければならず、そしてそのまま地元でない町にとどまってしまうことも少なくない。子供たちが変われば、地域が変わっていくと思う。

金山町の有屋少年番楽の子どもたちと話をして、私は勉強や学校は楽しいかと聞いてあまり良い返事ではなかったことに興味を持った。「学校は楽しくない。」と言う子供たちには、やはり色々なものに興味を持ってほしい、たくさんの人に会って影響を受けてほしいと思う。4日

間金山町で活動をして、珍しいカエル、生き物を見つけ、山菜採りを経験できた。やはり「子どもたち」には知らないという影響を与えてくれる教育が必要だと感じた。また影響を与えるという点ではエリアキャンパス最上は良い活動だと思う。学生にとっても地域のつながりを体験できて、最上の子どもたちにも影響をあたえられる。大学に限らず、他の団体とつながりを持つことが地域として活動するはじめにするべきことだと分かった。自分の学びとして視点を広く見ることは重要だが、今回の「子ども」のように一度目線を狭めたり、同じ視点のままで居続けないことに注意していきたい。

医学部　Kさん

一度目の訪問では、ビオトープの観察や山菜取り、下向地域の探索、そして、スポーツごみ拾いへの参加をした。

ビオトープでは、多くの自然の生き物や植物を見て、地域の方にそれらについて教えていただくことができた。

また、山菜をとって自分たちでてんぷらにして、手作りのうどんと共に食べることもできた。

2日目には地域の方々が山菜料理を振舞ってくださった。

街中で育ったこともあり、これらのものに触れたことがなかったので、大変貴重な経験ができた。

探索では、下向地域について案内人の方がともに散策して説明してくださった。

スポーツごみ拾いでは、地域の子どもを含めた３～４人のチームで拾ったごみの重量を競った。

二度目の訪問では、有屋少年万楽の見学と金山の名所めぐり、地域マップの製作、下向祭りへの参加をした。

有屋少年万楽は、金山の小学生で構成された団体で、古くから伝わる万楽を継承している。

その方々が、私たちに万楽を披露してくださった。舞をはじめ、歌や音楽も小学生の方々が担当していて、とても力強い万楽だった。

そして、大美輪の杉やブナの森、などの名所を巡った。杉やブナが見られる場所は、見たこともないような大木が多くあり、圧巻であった。そのほかにも、空き家と豪雪地帯であるという特性を生かして、雪で発電したり、野菜などを保管したりする雪室などを見学させていただいた。

そのあと一度目の訪問の時の散策と名所めぐりをもとに地域マップを製作した。

翌日には、下向の祭りに参加させていただいた。祭りの前に、参加者が集まってその年に生れた子どもの健やかな成長を願って鏡開きをし、升に注いだ日本酒で乾杯していた光景が印象的だった。

また、子供たちが走って飴をつかみ取りしたり、地域の方が壇上でカラオケをしたり、イワナをつかみ取りしたりするなどの特徴的なプログラムが多くあった。また、祭りでは地域の方々と多くお話しする機会があり、より交流を深めることができた。

現在、金山では、子どもの減少が課題となっているという。

私は、今回訪問して、下向祭りが子ども達のためにできた祭りであることや、あちこちに地蔵が祀られていたりすることから、子どもを大事にしている地域なのだという印象を受けた。

また、自然豊かであり、住民全員が家族のような土地であることからも子育てによい環境であると思う。このような面を発信していけたら１つの少子化対策になりうると考える。

医学部　Tさん

金山町へフィールドランニングとして二回訪問させていただいた。一回目は遊学の森での金山の自然観察と金山の各地域の探索、スポーツゴミ拾いを行った。私は、下向地区を担当した。遊学の森のビオトープで水辺の生き物の観察をした。普段、自然と触れあうことが少ないのでとても良い経験になった。改めて自然のたのしさ、美しさを感じ、これらを守っていかなければならないと感じた。子供たちも多く参加していて活気があるイベントだった。金山は自然と触れ合う機会や活動が多く子供を育てる上で良い環境のように感じた。

二回目は、金山の名所を訪れ、その後、金山伝統の少年番楽を鑑賞すると同時に地域の子供たちと交流した、また下向地区の下向祭りに参加し地元の方々とも交流した。少年番楽は小学一年生から続けている子供が多く、非常に完成度が高かった。普通は舞や歌のみで演奏は大人が行うが、有屋少年番楽では演奏も子供だけで行っている。

また、課題として地域マップの作製を行った。この作成を通して、地域の魅力を見つけてそれを整理することが出来た。

金山は元々山間地域にあるため、自分のことは自分で何とかするといった責任感が強い人間性があり、全国で活

躍している人もいる。また、子供を大切にする思いが強い。それは、地域の行事や祭りの伝統に表れている。巡り地蔵やおひまち、下向祭りなどの行事について住民の方々に詳しく尋ねた。もちろん家内安全や豊作、など宗教的な伝統という側面もあるが、今の時代まで受け継がれている理由として、主に行事を通した地域住民同士の交流や子供たちが楽しめる行事を残したいという思いが大きかった。また、民家を雪室に改装するという空き家の活用が行われていた。同時に太陽光の発電も行っている。
金山の問題として、人口減少があげられる。また空き家の増加も課題である。原因として、買い物の際町まで降りなければいけない立地や雇用の少なさなどがある。しかし、金山は子育てに適した地域である。金山では自然に触れてのびのびと子育てができ、地域との繋がりが希薄になっている現代においても、地域全体で子どもを育てることができる。そこで、何か全国から注目を受けるものがあると良いのではないか。金山型住宅や空き家を雪室にするといった活動を広げ、街並みを観光資源とするなどの活動が行える。金山の街並み作り100年運動に加えて雪室などを組み合わせる。今回のフィールドラーニングを通して、金山の魅力的な場所を多く発見することができた。一度金山に訪れてこれらの魅力を体験することで、その地域に住んだり、また訪れる人も増えるだろう。そのため、知名度を上げる事が重要だ。

工学部　Tさん
第１回のフィールドラーニングでは講師の方々や、地元の子供達と一緒にビオトープ観察を行いました。そこでは、自分の知らなかった動植物を見たり、触ったり、山菜を生で食べたりしながら楽しく学ぶことができた。また、観察した山菜を実際に持ち帰り、天ぷらにしうどんと一緒に食べ春の旬の味覚を味わうことができた。二日目のスポーツGOMI拾いでは、地元の方々と交流し競い合いながらグリーンバレー神室スキー場をきれいにすることができた。
第２回のフィールドラーニングでは有屋少年番楽という地域の伝統芸能を実際に目の前で鑑賞しとても迫力があり感銘を受けたので是非これからも続けていって後世にも語り継いで欲しいと思った。その後役者の子供達とふれあい仲良くなることができた。二日目の下向祭りは、有屋地区の中でも下向地区に住んでいる方々だけというとても小規模な祭りに参加させていただいた。神輿など普段体験できないようなこともしながら、花笠サークルの「四面楚歌」の先輩といっしょに祭りを盛り上げるお手伝いをすることができた。
全体を通して地域のマップ作りにも挑戦し、行くまで何も知らなかった有屋地区を表面的だけかもしれないが知ることができた。また、このマップを地域の子供達が見るので恥ずかしくないようなマップに仕上げたいと思います。
このフィールドラーニングで自分は地域交流の大切さを知ることができました。神奈川に住んでいた時は、近所の人とは挨拶程度しか話さず、地域の交流といえば嫌々ながらにやる公園掃除ぐらいでした。しかし、今回お邪魔させて頂いた有屋地区はとても交流が盛んで、祭りでは地域の大人から子供さらに金山町の議員さんも一緒に飲み物と美味しいごはんをつまみながら談笑をするといった都会では考えられない素晴らしい地域コミュニティーだと感じた。さらに、有屋少年番楽のチームやスポーツチームなどの子供同士の交流も盛んに行われており子供の仲がとてもよく、いじめなどの問題が起きそうにない良い環境だと思った。そこで地域の課題である「子供の数が減ってきている」という問題に対して上記のことや山菜などの自然豊かな環境をアピールすることが改善の一歩につながるのではと思いました。

工学部　Sさん
一回目のフィールドワークでは、まず到着して金山町という町は自然に溢れていて空気が美味しくとても住みやすい場所で私の地元とよく似ていると思われました。初めに行ったフィールドワークは今回泊まった遊学の森周辺の散策でした。そこには私の地元である千葉ではあまり見られないような植物や生き物がいました。特に私が気になったのはアイコという名の山菜です。アイコは食べてみると少し酸っぱくみずみずしい味がします。地元が田舎だったにも関わらずあまり山菜などに親しみを持っていなかったので新しい体験が出来ました。
2日目には、森の恵みを味わう講座と題して山菜ツアーが開催されました。そこでも、私は初めての山菜達に心を踊らせ昼食の時には美味しく天ぷらで頂きました。その後、スポーツGOMI拾いが開催され、キャンプ場兼スキー場となっている場所でごみ拾いをしました。そこで私達は地元の子供たちと一緒に行動をしました。そこで、地元の子供たちや親御さんと交流をして私の個人的な課題であった人と積極的に交流をするということを達成することが出来ていたのではないかと思われました。

２回目のフィールドワークでは、あいにくの雨の天候ではありましたがまず名所巡りとして遊学の森からは少し離れた場所を調査しました。ある家では山形大学の工学部の教授の実験の一環として冬の間に大量に降った雪を保存して生活に役立つように利用している家がありました。この方法は現在人口流出が進んでいる金山町で空き家が多くなることが見込まれているのでその空き家を有効利用して雪室とし活用することが出来るのではないかと思われました。その後、夜になり星空観察となりました。金山町は空気が澄み切っていて星がよく見れて慣れない一人暮らしをしている身としては心が浄化された気分でした。
まとめとして、今後この金山町は子供の数が減っていき極めて厳しい状況に立たされることだと思われます。しかしその中にも、毎年子供達やお年寄りを対象としたお祭りを開催したり、めごたま園という自然の中での保育園を創設したりして対策を行っています。また、私自身も参加している山形大学TEAM道草と協力して子供たちと交流をしてます。遊学の森の館長さんがおっしゃっていた「今回の活動だけでなくこの金山町に積極的に参加してほしい」という言葉を胸にサークルという形にはなりますがこの金山町と交流を続けていき、この課題の答えを見つけていきたいと考えました

最上町の人・自然・文化に触れよう①

活　動　状　況

○実施市町村：最上町

○講　　師：NPO法人山と川の学校

○訪　問　日：令和元年５月 18 日(土)～19 日(日)、６月 15 日(土)～16 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部２名、理学部３名、医学部３名、工学部２名　　以上 10 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】５月１８日（土）	【１日目】６月１５日（土）
08:00　山形大学発 10:00　大堀地区公民館着 　　放課後子ども教室田植えに参加 11:00　親倉見に移動(山菜採取) 　　黒米の田植え開始 13:00　昼食 14:00　炭焼き体験　その１ 　　・炭材の詰み込み 　　・口焚き、点火 15:00　炭焼き体験終了 17:00　宿泊先到着	08:00　山形大学発 10:00　大堀地区公民館着 　　放課後子ども教室トレッキングに参加 12:00　昼食 13:00　引き続き活動 14:00　放課後子ども教室活動終了 　　放課後子ども教室に参加後の振り返り 17:00　宿泊先到着　夕食自炊
【２日目】５月１９日（日）	【２日目】６月１６日（日）
09:00　親倉見着 09:00　キノコの植菌 11:30　昼食 12:30　炭焼き体験　その２ 　　・炭出し 15:00　炭焼き体験終了 16:00　大堀地区公民館発 18:00　山形大学着	朝食自炊 9:00　大堀地区公民館着　活動開始 9:30　ピザ焼き体験 11:30　昼食 12:30　志茂の楯めぐり 16:00　大堀地区公民館発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Kさん

2回分のフィールドラーニングを終えて

感想

私は４日間様々な体験をさせてもらって、本当に充実した時間を過ごすことができた。体験させてもらったことはどれも初めてのことだらけで、地元のNPOの方々は魅力が分からないと言っていたが、私にとってはすべての体験が魅力的であった。

また、私たちのプログラムでは子供たちと触れ合うことも多く、とても心が癒された。自分の地元では、学童はあってもこんなアクティブな活動はしていないので、子供のときから自然で遊べる機会が多いわんぱく学校の子供たちを少しうらやましく思うと同時に、これからもこんな活動が続いていってほしいと思った。

課題

私が考える最上の課題は、「もう一度来たいと思ってもらえるような魅力の伝え方をすること」である。せっかく体験をしてもらって、最上町に興味をもってもらえたなら、それを次につなげていきたいと考えたためである。

対策

最上町を訪れた人に私たちが今回体験させてもらった、自然を使った様々な体験をしてもらい、最上により興味をもってもらう。フィールドラーニングのなかで、都会の人は、栗のいがが珍しいと言ったり、吹雪の中を歩きたいと言っていたという話を聞いたので、体験ならより最上町に興味をもってもらえるのではないだろうか。

そして、ここで大切にしていきたいのが、体験をしに来た季節のことに加えて、「冬になると、この辺はこう変わります。」というように、他の季節の情報も説明することである。そうすることによって、冬になったらまた来てみたいというような気持ちを生み出し、次につなげることができるのではないだろうか。

また、体験者に配られるパンフレットにも、ちょっとしたスペースに、体験している季節とは違う季節の写真や情報を加えることも同じような効果を得られると考える。

これは、自然豊かでどのシーズンも魅力がある最上だからこそ効果的なアイディアだと考える。

最後に

今回は、多くの人の協力があって、大学一年生にしてこれだけ多くの体験をさせてもらうことができた。この機会を与えてくれた方々への感謝を忘れず、そしてこの体験を無駄にしないように、これからの学びにしっかりつなげていこうと思う。

人文社会科学部　Mさん

四日間という短い期間だったが、普段は体験できない360度自然に囲まれた環境でたくさんの体験をすることができた。私が特に印象に残っているのは、1回目の2日目のキノコ栽培と山菜取りである。私の地元は山形県なので山菜には詳しいと思っていたが、見たことや聞いたことがない山菜を知り、見分けてとることの難しさを体験した。自分達で山へ行き、山菜をとり、自然に囲まれて食事をするという一連の自給自足の体験をすることができ、最上町の良さを肌で感じることができた。子ども達との田植えとトレッキングでの体験では、初めはなかなか話しかけることができず打ち解けるのに時間がかかった。しかし、自分から積極的にコミュニケーションをとるという目標を立て子ども達に接すると次第に打ち解けることができ、最後には子どものほうから話しかけてきてくれたので嬉しかった。活発に生き生きと活動する子ども達を見て、最上町は子育てをするうえでとても良い環境であり、最上町の宝物であると感じた。

地元の方の話やインターネットで最上町について深く調べたところ、最上町での短期の体験を行っていることが分かった。私はこの活動は最上町の良さを知ってもらうのによい活動だと思った。しかし、この活動はターゲットとしている人々に伝わっているのか疑問に思った。私は、この活動を環境が違う都会の若者や文化が異なる外国人に知ってもらいたいと思う。そのためには都会の若者や外国人の目につくようなPR方法が必要である。そこでSNSを活用したPRを重視して行っていくのがよいのではないかと思う。SNSは気軽に外国人とも交流することができ、流行を知ることができるので、「インスタ映え」する最上町ならではの風景や町並みなど発信することができたら最上町の魅力をより多くの人に知ってもらえるのではないかと思った。また、最上町は歴史の深い街でもあるので、歴史好きをターゲットにした発信も効果的であるのではないかと思う。

最後に、このフィールドラーニングの活動をすることができたのは地域の皆さんのおかげである。最上町について教えていただき、バーベキューやピザ作りの体験でも優しく楽しく接して下さり、地域の方の温かさを感じた。短い期間であったがこのような出会いを大切にしたい。また機会があれば最上町の訪れたいと思う。

理学部　Yさん

今回私が体験したことのほとんどが私にとって初めての体験であり、学ぶことも感じることもたくさんあった。１回目と２回目に分けて記述していく。

1回目で最も印象に残っているのは炭作り体験である。どうやって炭を作るのかという知識はあったが、実際に体験するのは初めてで炭窯に気を並べる難しさ、炭を掻き出す時の暑さなど実際にやってみなければわからないこともたくさんあると感じた。特に炭を掻き出す

時は自分が思っていたよりも暑く、大変なものだった。しかし慣れてくると暑さも心地良く感じてきて不思議と楽しくなってきたこと、実際に体験しなければ分からないこの感覚を他の人にも共有したいと強く感じたことを鮮明に覚えている。

2回目では、天気が雨だったこともあり、より「自然」を強く感じた。雨の中トレッキングでは頭から足先までずぶ濡れになりながらも子供達と共に自然に親しんだ。子供達の元気いっぱいな姿に元気付けられ、最後まで笑顔でやりきることができた。そんな中でも印象強かったのは子供の中の一人がくれたクワの実の味である。私は幼い頃にこのクワの実を食べたことがあったこともあり、なんだか懐かしい気持ちになることができた。

最後に最上町の魅力について記述する。私が考える最上町の一番の魅力は「自然」である。田植え、炭作り、キノコの植菌、山菜採り、トレッキング、瀬見温泉、今回私たちが体験しただけでも自然の恵みを感じる部分が多かった。最上町の方々は「最上町に住んでいるとここの魅力がわからない」と言っていた。しかし、私に言わせれば最上町は魅力の塊のような場所だった。

私たちが考えなければならないのはこの魅力をどう人々に伝えていくかだろう。魅力を発信することで人を呼び込む。これが最上の方々が言っていた「人が来ない」という問題の解決につながるのではないだろうか。しかしこの問題はそんなに単純ではない。なぜなら「人が来ない」というのは観光客が来ないというだけでなく、定住する人がいないという意味でもあるである。つまり私たちは、魅力を効果的に伝えて定住も視野に入れてもらう必要があるのである。そのため自分たちが感じた魅力を最大限もしくはそれ以上に人々に伝えて行かなければいけないと考えた。

理学部　Eさん

私は今回の活動を通して考えたことは人口減少が問題になっている最上町で、どのように自然や文化を伝承してゆくのかである。1回目の活動を行った親倉見という地域は1975年に集団移転をした場所だった。親倉見では集団移転を行った後も水田などとして利用されていたが、農家の数も少なくなってきたために休耕田が多くなってきているという話を聞かせていただいた。また炭作りでは昔の人が実際に使っていた窯を再現した窯で炭作りをした。しかしもう炭作りで生計を立てている人がいないという。そのため、窯の作り方や使い方を知る人は少ない。2回目の活動で見学した喜至楼では瀬見温泉の観光客が減少しているという話を聞いた。喜至楼はかつて予約が取れないほどの宿泊客が訪れていたが、今では泊まる人が少なくなってきているという。このほかの場面でも最上町の人から人口減少についての話しを聞く機会が多かった。

実際に最上町の人口の推移を見てみると昭和50年には13,500人ほどいた人口が平成27年には8,900人ほどになっている。また高齢化率をみると昭和50年には9.9%だったのに対して平成27年では34.6%となっていた。

これらのことから私は若い人が最上町に定住することが必要だと思った。そこでどうすれば若い人が最上町に興味を持つか考えた。最上町のよいところは自然が豊かなところ、また農業をやってみたいと思う人にとっては農業が盛んであるというところだと思う。そこで私はやや長期の最上町での模擬移住プログラムを都市部に焦点を置いて募集するのはいいのではないかと思った。親倉見などの休耕田や畑などで実際に農業を体験してもらうという内容だ。それをやや長い期間体験してもらうことで最上町の良さをより多く知ってもらい、また実際に移住した場合のイメージをつかみやすくするというメリットがある。また実際に農業をする上での知識や技術、農村での生活の知恵を地元の人から教えてもらうことによってコミュニケーションを図ることができるだけでなく、最上町の文化の伝承にもつながるのではないかと考えた。

実際、私も最上町での活動は短い期間であったため、もっと別な良さや問題点があるかもしれない。人口減少の問題はもっと複雑な原因があるはずであると思う。最上町での実際の活動は終わってしまったが、私自身はより最上町への関心が強くなった。私は今回の活動だけでなく、今後も最上町の良さを探求していきたいと思う。

参照　最上町ホームページ

http://mogami.tv/info/05toukei/02jinkou.php

理学部　Nさん

私が最上で最も印象に残っていることは子供たちの元気さである。私たちは訪問1回目と2回目の1日目で子供たちと触れ合う機会があった。はじめのうちは子供たちも私たちも探り探りの様子で、少し緊張していた。しかし、こちらから少し話かけると、徐々に子供たちも慣れ始め、気づいたら私たちの体力はすべて奪われていた。そこで私は高校生の時に体験した保育園での子供との触れ合いを思い出した。その保育園でも私は子供の持つ

エネルギーに圧倒されていた。この2つからわかることはどんな場所で生まれようが、どんな場所で育とうが子供は変わらず元気であるということ。どこの子供と遊んでも楽しいこと。やはり自分は子供と遊んだり、話したりすることが好きだということ。今回の最上の目的は子供と触れ合うことではないと思うが、自分の中で好きなことを再確認できたという点で、子供との触れ合いが印象に残っている。

次に、私が最上で最も考えたことは田舎での人口減少についてである。現在山形県では毎年人口が減ってきており、今では山形県の人口が仙台市を下回ってしまっている。最上町も例外ではなく、現地の方々も言っており、データとしても出ている。この問題は山形県のみならず全国的に起こっている。しかし、訪問2回目の喜至楼での話の際に、最上町の方から横浜から来た人の話を聞いた。その日は大雪の日で、吹雪くほど天候は荒れていた。最上の方はさすがに歩いていくのは無理だろうと思い、車で喜至楼に向かうことを提案した。しかしその夫婦は、横浜ではこんなに雪が降ることはないから歩いていきたいといい、凍えながらも満足していたそうだ。この話を聞いて私は、山形ほど雪が降らない宮城の出身だが、さすがに吹雪の中を歩こうとは絶対に思わない。横浜ほどの都会になるとそのような気持ちになるのか、と、とても驚いた。つまり何が言いたいのかというと、宮城のような中途半端な都会ではなく、関東の中心的な都市の人たちにとっては雪も一つの大切な経験につながり、山形に興味を持つきっかけになるのではないかということである。興味を持つということは、山形を知るものが増え、広まり、人口増加まで行くかはわからないが、少なくとも旅行客は増えると思う。そこから、どうすれば住むようになるか、が今後考える必要のある課題であるが、もう少し広い視野で物事を考えられたら人口を増やす方法は見つかると思う。

私は最上町が大好きである。それは子供たちもそうだが、最上で様々な活動の案内をしてくれた方々、山菜がたくさん採れ、自然の豊かな山々、ゆったりと流れる時間。そのすべてを含めて最上町が大好きである。今回のフィールドラーニングは終わってしまったが、まだまだ最上の魅力はあると思う。まだ川に入れていないことや、雨天中止になってしまった活動も気になる。今後、もし時間があったら、また最上町に行ってみたいと強く思う。

医学部　Tさん

私が最上に行って感じたことは、最上にはたくさんの魅力があるということだ。

1つ目は、普段はできない経験ができることだ。今回のフィールドラーニングで自分が今までやったことのないキノコの植菌、山菜採り、炭焼き、ピザ焼きを体験できた。私は、山形市民なので他の人よりもそのような経験をしてきたつもりでいたが、初めてのことが多く驚いた。キノコの植菌では、キノコの元になるものを穴を開けた原木に打ち込むというのが自分の想像していた植え方と全く違っていた。山菜採りでは、自分たちも収穫したような山菜を地元の方が天ぷらにしてあげて振る舞ってくれ、自然な味に感動した。何もつけなくてもそのままで素材の味が出ておいしいというのは新しい体験だった。炭焼きでは、木を燃やしやすい大きさに切ったり、割ったり、並べたり、と1つの体験に対しできることがたくさんあって、さまざまな経験を一気にすることができた。続けてやっているとそれぞれの班員がその道のプロのようになり、やりがいを感じた。次の日に炭だしをしたときに大きな炭ができていたときの喜びは大きかった。また、2回目のバーベキューのときに自分たちが作った炭を利用したら普段使っている炭よりも火付きがよく頑張りが目に見えるのがうれしかった。ピザ焼きでは、自分たちで生地からピザを作り、生地がもちもちになるまでもんだら、食べ応えがよくまた作りたいと思った。

2つ目は、歴史的に面白いエピソードがあることだ。最上には瀬見温泉という温泉郷があり、そこは源義経の一行と深い関わりがある。私たちは喜至楼という旅館で移動中の様子の絵を見ることができた。ガイドの方がそれぞれの絵に対して解説をしてくださり義経に思いをはせることができた。旅館自体も山形県内で現存する最古の旅館建築物であり、まるで明治か大正の世界に迷い込んだような気分になった。昔のものが廊下の至る所にちりばめられていてみているだけでも楽しかった。また、ローマ式千人風呂という有名なお風呂がありテルマエロマエを彷彿とさせるお風呂には次訪れたときに是非入ってみたいと思った。

このように魅力にあふれているのにもかかわらず、人が増えないことが問題になっている。私も実際に行ってみるまで知らないところがたくさんあったので、もっと魅力を若い人たちに伝えていくことが大切だと思う。そのためにもっとSNSで発信していかなければならないと思った。

医学部　0さん

今回最上でのフィールドワークに参加して私が感じたことは、知らない土地や初めてのことをすることで得られる新鮮さと楽しさだ。最上に来たことはなかったし、炭焼きやキノコの植菌など初めてのことばかりで最初少しとまどうこともあったが、現地の方々が親しく接してくれたおかげで様々な体験を楽しみながらすることができた。最上の斑のメンバーとは今回の活動を通して知り合ったが、泊まりがけの講義であり様々な体験を共にしたことで仲を深めることができ、友人の輪を広めることができた。また二回目の活動では天候に恵まれはしなかったが子供たちとトレッキングを通してふれあうことができ、今まで子供たちと一緒になにかをするということがあまりなかったので元気の良さに驚いたがとても楽しかった。

また今回の活動で、最上にはあまり知られていない魅力が多くあることを感じた。特産品としてのアスパラや山菜、そして義経や弁慶とつながりがある歴史的にも魅力的な土地だということなどだ。地元の方々は山菜のある場所などを熟知していて、実際に自分たちが採った山菜を自然の中で食べるととてもおいしく、自然が多い最上地方ならではの楽しみだと思った。

歴史の方面では義経伝説が色濃く残っており、兄頼朝から追われた義経は弁慶たち少数の部下を連れて、船で最上川をさかのぼり陸奥国平泉に逃れたといわれている。その際に義経や弁慶たちが関わった場所は今でも最上町で大切に語り継がれている。私は今まで歴史に対する知識や興味があまりなかったが、今回現地のガイドの方に案内してもらいながら瀬見温泉を見せていただき、様々なお話を聞かせてもらい、情緒や風情のあるお風呂を説明してもらいながら見たりしてとても勉強になった。知識として知っていることと実際に見て、経験することには大きな差があると改めて感じ、もっと多くの人に体験してほしいと思った。

今回の活動を通して、知らない土地を訪れ、その土地ならではのことをすることがいかに楽しく、そして貴重な体験であるかを知った。最上町に行くまではネットなどでの知識だけだったが実際に訪れ、現地の方々とふれあううちに自然と最上町の空気や魅力を感じ、もっと広く伝わってほしいと思い、また私自身も今回感じたことを覚えていたいと思う。

医学部　0さん

今回のフィールドラーニングは私にとってとても良い経験となった。私は子供が好きで、子供と一緒に活動したいと思いこのプログラムに参加したため子供たちと一緒に田植えやトレッキングができとても楽しかった。また1日目で山菜やアスパラガス、2日目にバーベキューやピザなどを食べ自然の中だったためよりおいしく感じられた。さらに瀬見温泉や大堀温泉で1日の疲れをゆっくりと癒すことができた。今回のプログラムは楽しいこともたくさんあったが、直接最上町に行くことで見えた最上町の課題もあった。どの地域でも言えることだと思うが、多方面につながる1番の問題は若い人がいないことだと思う。私は人手不足の中でも特に農業の面で見ていきたいと思う。

すでに最上町で行われていることで、農業の人手不足の問題の解消につながると私が思ったのは放課後子供田植え教室だ。私もこれに1日目に参加したが、現在やはり農業従事者の高齢化が進んでいるため子供たちが農業に興味を持つ機会があるのはとても良いことだと思った。

ここで、私が大堀支部小国川漁業協同組合の方に伺った話を入れる。組合の方は「収入が米だけでは生活は成り立たないが、アスパラだとうまくいけば1単で米の約10倍の、150万円程稼ぐことができる。昔はやませが吹くときだけ作っていたが、今最上町でアスパラは米に次ぐ農業になりつつある。しかし問題はアスパラのB級品をどうするかということだ。A級品はそのまま市場に出すことができるが、B級品のアスパラをどう保存・加工するかがまだ成功していない。だから、大学の農学部や栄養部にいろいろと研究をしてほしい。」とおっしゃっていた。

B級品のアスパラに対する解決策として、山形大学の農学部で研究ができたらいいと思った。農楽里norariより［1］、JAおいしいもがみでアスパラガスのジェラートや一本漬けが開発・販売されていると書かれていた。こういったものも参考にして加工品が開発され、財政が豊かになり農業を継ぐ若者が増えることを期待したい。

私は最上町に初めて行ったが自然が豊かで食べ物がおいしく、住んでいる人達にあたたかく出迎えていただき最上町がとても好きになった。最上町の人達だけが頑張るのではなく最上町に直接行った自分だからこそできる、最上町の魅力を伝える方法を考えていきたい。

引用文献

[1]『農楽里　norari 2019年春号』norari編集委員会、2019年3月22日発行

工学部　Kさん

私が最上町でのフィールドラーニングを通して最初に思ったのは自然が豊かだということだ。一回目のフィールドラーニングで主な活動をした親倉見やトレッキングでは、私が今まで生きてきた中で見たことがないほどの自然に囲まれ引き込まれそうになった。きっと私のように感じる人は全国に大勢いると思う。観光としても十分な内容になると思うので是非いろんな人にあの自然を体感してもらいたい。また、米や蕎麦、アスパラガス

などの農作物も豊富で、山菜もたくさん採れるので、食についても充実している。例えば親倉見の秘境ともいえる立地を利用して秘境メシを出してみても面白いかもしれない。
だが、そのようなツアーなどをするのであればPRが必要である。私が考えたPR方法はツアーの案内等を小・中学校で配ってもらうというものだ。私が小・中学生の時に通っていた学校ではよくそのような案内等が配られていた。もちろんそれを見て参加する人もいた。このPR方法ならば確実に多くの人の手元に案内等が行き渡りPRしやすいのではないかと考えた。また、現地の人が都会に住んでいる人の方は自然に触れる機会が少なく自然に興味を持っているという話を聞いたので、仙台や首都圏などの学校に案内等を配るとさらに効果があるのではないかと考えている。
　また、トレッキングは最上町の子供たちと一緒に行われた。雨でみんなぐったりしているかと思いきや、とても元気でトレッキング中は常に笑いの絶えない充実した時間であった。道中でいろいろな子たちと話をしたが、私たちが小学生の頃では考えられなかったようなアニメやゲームなどとても近代的になっていて現代の小学生は進んでいるなと感じた。だがそこで思ったことは最上町周辺には特にこれと言った娯楽施設がないということだ。これは人口流出に大きく影響を与えているのではないだろうか。自然で遊ぶことも楽しいが、ずっとその地域で住んできた子供たちがショッピングセンターやカラオケなどにいきたいと感じるのも確かにわかる。そして大きくなったら都会に出ようと考える人が増えれば人口はさらに減ってしまう。実際にトレッキングで話していたときも都会に憧れる子供がいた。そのため難しい話にはなってくるとは思うが、最上町にもショッピングセンターやカラオケなど現代の子たちが興味を示す娯楽施設を建ててみてはどうだろうか。
　私はこのフィールドラーニングでは今までで初めてだという体験が非常に多かった。ピザを窯で焼いたり山菜を採ったりはもちろんのこと、BBQや花火なども記憶の限りでは初めてだった。とても刺激的な4日間であった。このプログラムに参加できてよかったと心から思っている。また時間のあるときに最上町を訪れたいと思う。

工学部　Tさん

私は最上町での活動を通して、自然はいろいろな力を持っていると感じた。
　１回目の活動では、田植えや炭焼き、キノコの植菌、山菜採りを体験した。田植えは、地元の小学生と一緒に取り組んだ。最初は若干の緊張感があったものの、田植えが始まると会話が増え、子供たちの元気さに圧倒された。炭焼きは、「まどのこ」や「かなや」など、古人が考えた便利な道具を使った。キノコの植菌や山菜採りも班のメンバー全員で協力して取り組むことができた。１日目は「親倉見」の話を伺った。当時の人々は「親倉見」を「しぐらみ」と呼んでいたそうだ。この地域はかつて、１００名ほどの人々が身を合わせて生きていた。しかし、過疎化の一途を辿り、１９７５年には清水町に集団移転した。講師を務めていただいた奥山さんは、「稲作を繁栄させようと思っても、後継者不足が深刻であることや米作りに必要な機械の購入にはお金がかかることが理由でできないのだ」とおっしゃっていた。私の実家も田んぼを持っているものの作ってもらっている状況が続いているので、奥山さんがおっしゃったことにはとても共感ができた。解決には、官民が共同し農家の補助にあたらなければならないと考える。
２回目の活動では、トレッキングやＢＢＱ、ピザ焼き体験、瀬見喜至楼見学をした。トレッキングでは、地元の小学生と一緒に４ｋｍの道のりを歩いた。話が盛り上がり、最後まで楽しく散策することができた。夜にはＢＢＱをした。１回目に自分たちで作った炭を使った。買い出しや会場設営、食料準備等、班のメンバーそれぞれが役割を果たし、スムーズに始めることができた。２日目のピザ焼き体験では、ＢＢＱの残りの野菜も使うなどして、個性あふれるピザがたくさんできた。最後の活動は瀬見喜至楼見学だった。最上町観光ボランティアの板垣喜悦さんに案内していただいた。喜至楼別館では、義経が京姫とともに、最上川を下る絵が飾られていた。
　今回のフィールドワークはとても有意義なものだった。小学生との触れ合いや炭焼きなど、自然の力を借りて取り組んだからこそ、充実度の高い学びができることに気が付いた。また、いろいろな歴史的背景があるなど、最上町にはたくさんの魅力があると実感した。この魅力を発信する方法が大きな課題であると考える。そこで私は、「友好都市との児童及び保護者の交流」を提案する。最上町の友好都市と人の行き来を作るのだ。実績が増えれば、新聞などで取り上げられ、そこから新たな波が生まれることも考えられる。大きな目標のために小さな努力を積み重ねることが大切だと思う。

里地里山の再生Ⅰ

活　動　状　況

○実施市町村：舟形町

○講　　師：堀内ファーム会員及び地域住民

○訪　問　日：令和元年５月 25 日(土)～26 日(日)、６月１日(土)～2 日(日)

○受　講　者：地域教育文化学部１名、医学部４名、工学部５名　　以上 10 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】５月２５日（土）	【１日目】６月１日（土）
08:00　山形大学発 09:15　舟形町役場着 10:00～　開講式（農村環境改善センター） 活動説明 11:00～　野菜の播種体験活動 12:00　昼　食 13:30～　野菜の播種体験活動 18:30～　夕　食 体験実習館　宿泊	08:00　山形大学発 09:15　舟形町役場着 10:00～　野菜の播種体験活動 12:00～　昼　食 13:00～　野菜の播種体験活動 18:30～　夕　食 体験実習館　宿泊
【２日目】５月２６日（日）	【２日目】６月２日（日）
7:00　起　床 7:30　朝　食 9:00～　野菜の播種体験活動 12:00　昼　食 13:30～　野菜の播種体験活動 16:00　農村環境改善センター発 16:45　舟形町役場発 18:00　山形大学着	7:00　起　床 7:30　朝　食 8:00　体験実習館　出発 9:00～　野菜の播種体験活動 12:00　昼　食 13:30～　野菜の播種体験活動 16:45　舟形町役場発 18:00　山形大学着

授業記録

〇活動レポート「私はもがみで考えた！」

地域教育文化学部　Bさん

１.農作業について

私たちは今回、舟形町で野菜の播種体験活動を行いました。具体的な活動内容としては、きゅうり(1020株)、ナス、ジャガイモ(2400個)、かぼちゃ、南蛮の定植を行いました。活動を通して私が感じたことは農作業を終えた後にとても達成感がある反面、想像以上に重労働であるということです。作業のほとんどは手作業であり、まだ若い私たちでさえも一日作業をしていると疲れ切ってしまうほどのものでした。そこで現地の方になぜ作業を機械化しないのかを聞いたところ農業機械は価格が高く、反面生産者米価が低く採算が合わない、ということでした。農業者が高齢化になっている今、これからも同様の方法で農業を続けるためにはどうしたら良いのか、また後継者不足により今後耕作放棄地の増加が懸念されるためどうすればよいのか、ということが大きな課題だと感じました。

２.現地の方々の活動について

舟形町の方々が目指している将来ビジョンの一つとして「高齢農家が安心して営農を継続できるための共助による共同活動の仕組み化により『人・資源・経済』の循環により発展し続ける体制整備することで、地域の主産業である農業の維持、ひいては集落全体の維持・振興を図っていく」といったものが挙げられました。この将来像を実現するために地域全体で経営の共同化を図ったり、直接消費者に販売するシステムを設けたり、外部の人にお米の美味しさ・良さを知ってもらう・食べてもらう活動に取り組んだりと数多くの活動に取り組んでいるそうです。また、堀内公民館に貼ってある「堀内町内会びじょん」には町内会の課題や目標などが書かれており、地域全体で協力しながら活動していることがわかりました。

３.活動全体を通して・まとめ

今回の農業活動を通して農作業の達成感と過酷さを痛感しました。加えて、ご高齢の方々がいつもこのような作業を少人数で行っているということがどれだけ大変なのか考える良い機会になりました。私自身今回の体験はとても楽しく、以前より農業に興味をもてる体験でした。そこで、堀内地域の現状を維持するために、グリーンツーリズムの促進と農業体験活動の取り組みを積極的に行っていくこと、また、私たち自身も今回の活動を通して感じたことを周りに発信しくことが大切だと私は考えます。それによって少しでも農業に興味を持つ人や堀内地域を訪れる人が増えたらと思います。特に子供に自然、食についての理解を深める活動を行うことによって就農したいと考える人が増えるのではないかと思います。

医学部　0さん

1.農業の達成感

私たちは4日間で、きゅうり1020株、ナス、じゃがいも2400個、かぼちゃと南蛮の植え付けなどの農業体験を行いました。

私が特に大変だと感じたのはハウスを建てる作業です。作物に直接関係するわけではないけれど、きちんと幅を測ったりきつく紐を締めたりしなければいけないので意外と集中力を使いました。私が野菜を買うとき、そんな裏の作業について考えたことはなかったので、今回炎天下の中自分でそれを体感して、農家の方々の努力は本当にすごいものなのだと感じました。しかしひとつの作業が終わってから全体を眺めると、今まで何もなかった畑に自分たちが一所懸命につくったハウスや、植え付けをした苗がずらっと並んでいて、とても達成感がありました。

また共同作業の大切さも感じました。それぞれが仕事を自分で見つけて動くことで、ひとつの作業にかかる時間が少なくなっていって作業が前倒しになっていったり、1人では時間がかかる植え付けもみんなでやると早く終わったり、当たり前のことだけれど改めてすごいなと感じました。

また作業が終わったあとに作って頂いたごはんがとてもおいしかったです。ごはんのおかげで頑張れました。ありがとうございました。

2.舟形を知ってもらうための農業体験

堀内公民館で見た「堀内町内会びじょん」には、地域の課題やこれからの活動が具体的に書いてあり、地域の将来ビジョンがきちんと設定されていました。それに現在の状況の維持をしていこうというのが書いてあるのを見て、将来のことまで考えていることがすごいと感じると同時に、私は今回のフィールドラーニングのような農業体験を行い続けて頂くのがとてもいいことなのではないかと考えました。

私は今回農業体験を行って、大変なところは多かったですが大きな達成感を感じることができました。また堀内

ファームや地域の方々の優しさ、自然の豊かさに触れることで、とても貴重な体験をすることができました。このような感覚を多くの人に感じてほしいと私は思いました。この体験をすることが将来農業に関わる人を増やすことにつながっていくのではないかと思います。

医学部　Iさん

1.　背景

舟形町の人口は1980年をピークに減少しており、特に若者の減少が著しい。そのため、現在、この地域では、深刻な若者の農業の担い手不足に陥っており、その結果、農業の担い手の高齢化が進み、この地域の農業は衰退の一途を辿っている。したがって、このままではこの地域の農業が崩壊する恐れがあり、農業に就労する若者の確保が急務となっている。

2.　現状から見た課題

そこで、我々は舟形町の農業の再生のために微力ながら何かできることはないかと思い、フィールドワークとして実際にこの地域で農業体験を行ってきた。この体験から見えてきたことは、農作業は過酷で非効率的なものであるということだ。例えば、我々は、この体験の中できゅうり・なす・じゃがいも・かぼちゃ・南蛮の定植を行ったが、そのすべてが人の手によるものであった。また、定植する前に、そのための穴を掘らなければならないのだが、これも器具を用いたがすべて人の手で行った。これらの作業は、ほぼすべて中腰で行わなければならず非常に身体に負担のかかる作業であった。また、きゅうりやかぼちゃの蔓を這わせるために、ハウスと呼ばれるネットを張った枠組みを畑に設置したのだが、これも非常に手間のかかる作業であり、身体に負担のかかる作業であった。このように、農作業は身体に負担のかかる過酷な作業であり、また、そのほとんどを人の手で行っているため非効率的な作業である。現在の若者は過酷で非効率的な作業を避ける傾向にあるので、就農する若者を確保するために、こうした作業を改善すること必要であると考えられる。

3.　課題の解決方法

現在、農業用アシストスーツの開発が進められている。このスーツは、人の動作の補助をし、身体にかかる負担を軽減するものである。したがって、これらのスーツを導入すれば、農作業時の負担を軽減することができるので、その結果、若者の就農者数の増加につながると考えられる。さらに、農業用ロボットやAIを導入することによって、農作業の効率化が図られると考えられる。例えば、現在、農作業の効率化のために、AIの画像認識によって収穫すべき野菜を判別し、それを自動で収穫するロボットの開発が進められている。したがって、このようなロボットが導入されれば、農作業の効率が上がり、その結果、作業者の負担が軽減されるので、これも若者の就農者数の増加につながると考えられる。

医学部　Sさん

1.背景

山形県舟形町の総人口はこれまで減少傾向で推移しこの先は継続的に減少が進む可能性が高いと予想されており、2040年には1980年比で4329人程の減少で54％程度の人口減少が予想される。特に生産年齢人口は2040年には1980年と比べて総人口比率で69％から21％程度に減少しており、若年世代の減少と高齢者世代の増加が急激なスピードで進行している。全国平均は平成28年10月1日現在で60.3％、平成4年で69.8％だが、山形県舟形町は21％と今後は全国平均以下が予想されるので生産年齢人口不足が予想され大変危険な状態である。

2.現状から見た課題

舟形町の中心産業は農業である。地理的要因で労働集約的な第一次産業に偏った産業構造をとらざるを得ない面があるが、喫緊の課題は生産年齢人口の減少とそれに伴う農業の衰退である。舟形町の農業の衰退はすなわち町の財政問題としても顕れ、このまま対策を足らないでいれば夕張市のような財政破綻も招いてしまうだろう。産業の衰退は町の福祉の質の低下も招き、ますます人が住まなくなり、この美しい里山の風景も荒れてしまう。そんな危機が目の前にあった。

3.課題のための解決方法

近年の人口減少を経て、舟形町には多くの休耕田や耕作放棄地が見受けられた。作物が作られなくなっても、作物を作るだけの土壌はまだ健在である。それを見過ごすのは非常にもったいないと考えた私達は、農業に魅力を感じる人を外から呼び込み、そういった誰も耕作しなくなった土地を無償で貸し与えて生活の糧にして定住してもらおうという提案をしたい。例えば、定年退職をして第二の人生を考えたシニア世代や、都会の喧騒に疲れて土に触れたくなった若い世代、安定した仕事が見つからず現状を打破したいと考えている若者などがその対象と考えられる。課題としては、住居をいかに提供するか、栽培・出荷ノウハウの継承などである。もし戦略的

にこれらの課題が解決されれば、人口減少の問題に歯止めをかけ、里山の復活とともに長く舟形町を維持していくうえでも有効な施策ではないかと考えている。

医学部　Tさん

1, フィールドワークを通して

私は地域の方のお話を聞いたり、事前学習や中間学習などを通して学んだりした中で、舟形町では昭和30年をピークに人口が減少しており、特に少子高齢化と若い世代の流出が大きな課題になっていることを知りました。私は今回のフィールドラーニングを通して、舟形町には美しい里地里山があり、おいしくて安全な農作物が作られているということを体感することができました。これといった人口減少という課題への解決策を見つけることはできませんでしたが、まずは舟形町の魅力について多くの人に知ってもらうことが重要なのではないかと考えました。

2, 舟形を知ってもらうために

舟形町を知ってもらうために、子供たちや学生などの農業体験活動を定期的に開催すること、自然的景観や農業を観光資源として提供するグリーンツーリズムの促進などが効果的なのではないかと考えました。体験を通して農業の楽しさややりがいを感じてもらうことで少しでも関心を持ってもらうことができると思います。また、船形ならではの美しい里地里山と安全で美味しい農作物のＰＲの促進も重要だと考えます。舟形町の農作物のブランド化を進めたり、例えば山形大学や大都市、お祭りなど人目を引くところや興味を持ちそうな若者のいるところで直接販売をしたりすることによって船形と農業をより多くの人に知ってもらうことができると思います。

3, 感想

一回目のフィールドワークの時に定植したきゅうりを二回目の時に見に行くことができたのですが、きゅうりはたった一週間で倍ほどの大きさに成長していました。今回参加した四日間は暑い日が続き、作業には重労働が多くとても大変だったのですが、成長しているキュウリを見たときにはとてもうれしく思いました。そして成長して収穫できた時には本当の達成感を味わえるのだろうなと思いました。この感動は実際に体験してみなければわからないことだと思うので、より多くの人に体験してもらいたいと思いました。

工学部　0さん

私は今回のフィールドラーニングで、大きく分けて２つのことを感じました。

１つ目は、農作業の大変さです。今回の活動で私たちは主に農作業をしました。４日間でキュウリ、ナス、カボチャの定植をしました。植えるだけの単純作業だと思っていましたが、前屈みになったり、立ってはしゃがんだり繰り返しで結構な重労働だとわかりました。私たちでさえ結構疲れたのに私たちの３倍以上年上の方々が毎日こんな重労働をしていると身体的にもかなりの負担がかかると思います。もっと若い世代が率先して手伝うべきだと思いますが、現実はそう上手くいかないのが現状です。なので、農業を触れてみるという体験をさせてみるべきだと思います。機械に詳しい人が農業に触れることで、農作業の大変さを知り、農作業を効率的に行えるようなロボットを考えたりしてくれれば、高齢者の負担が軽くなると思います。他にも色々な分野の人を呼び込み、農業を触れさせて農作業の大変さを伝え、少しでも若い人に興味を持ってくれるようにさせることが必要だと思います。そして、舟形町の問題となっている少子高齢化問題を少しでも解決できる手助けになればいいと思います。

２つ目は、舟形町の景色の美しさです。１日目の夕方に見た夕日はとてもきれいでした。自然も豊かで空気もきれいなので、それを活かして観光業もできるのではないかと思います。冬には雪がたくさん降るとのことなので、それを活用した札幌のような雪まつりなども開催できるのではないのでしょうか。また、キャンプ場なども建設し、農作業を体験できるプランなどをつけたりすれば、舟形町の人々の手助けにもなり、いろいろな人に農業の大変さを知ってもらえるいい機会になります。

今回の活動を通して考えたことはもっと活動を起こすべきだということです。今の少子高齢化を変えたいのならば、若い人が興味を持つようなイベントを開催すべきです。また、定住者を増やしたいのであれば、もっとスーパーマーケットなどのお店を建てる必要があると思います。いくら景色がきれいで自然が豊かでも住みにくいと定住者を増やすことは難しいと思います。

まず、農作業を触れさせるイベントを開催することで改善に少しは近づくのではないでしょうか。

工学部　Mさん

フィールドラーニングで舟形町を訪問して、舟形町の地域の現状の話、播種作業、定植活動などを体験した。

まずは、農作業体験を通して感じたことを書く。私は出身が農村地域で、実家が兼業農家なので、小さい頃はよく自給野菜の収穫や田植えをした。だから農業が大変なことは知っていた。しかし、今回、野菜の苗を植えるまでの色々な準備が想像以上に大変で驚いた。特に苗を植えるための穴開け作業と、畝をならすのが力作業で大変だった。今回は１３名で作業を行った。普段は３人で作業をされているそうである。１３人でも大変だったのに、それを考えると、時間もかかるし、肉体的にも大変だろうと感じた。しかも、舟形町では農業をする世代の高齢化が進んでいる。力仕事が軽減されるか、人手がある程度確保しないと厳しいこともあるだろうと思った。少しでも農業をする際の負担が和らぐ方法を見つけていかないといけないと感じた。

次に舟形町の地域の現状の話を聞いて感じたことを書く。まずは、私の住んでいた島根県の邑南町と舟形町は環境面や気候がよく似ていると感じた。ただ、舟形町は小学校が総合している。また積雪量はかなり多い。この点が違っているところである。生活していく上で不便なことが多々あるために、若い世代の人口が減少していることも聞き、何か対策をとるべきだと感じた。

私は舟形町の若い世代の人口減少の対策として、人が少ないことを生かした手厚い子育て、教育サポートをするべきだと考えた。理由としては、生活に不便がなくなったとしても、都市部にはかなわないことが明確であり、田舎の良さが生かすべきだと考えたからである。私の出身の邑南町では日本一の子育て村を目指して、中学生までの医療費無料、２人目から保育料無料などの政策をとっている。また、福島県磐梯町では子供たちが国際社会に対応できるように、幼少中一貫教育を貫く英語教育を行った。幼稚園では週２回、小１～４年生は年間２０時間小５、６年生は年間４５時間の英語教育を取り入れている。この二つの町のように舟形町も少人数だからできる活動を行っていくべきだと考え

私は今回のフィールドラーニングを通して、野菜ができるまでの準備や農作業に、体力や時間が大変かかっていることが分かった。この講義を取って、よい体験ができたと感じた。これからも実践的に活動を行うものには積極的に参加したい。

工学部　Ｉさん

私たちのグループはきゅうり、なす、ジャガイモ、かぼちゃ、南蛮の定植を舟形町の地域の方と協力して行いました。私は農作業をするのは初めてだったので初日の午前中は楽しく活動することができましたが、午後からは暑さと疲労でヘトヘトになりながら活動していました。この活動を通し、私は農作業がどれだけ体に負担がかかり、体力を使うのか自分自身の体で感じることができました。特に農作業はしゃがんだ状態で作業することが多いので膝や腰に大きな負担がかかりました。今回は私たちのグループメンバー10人と学生サポーターの方、地域の方4人の15人、一回目のフィールドワークは阿部先生を含めた16人で行いましたが、普段は1人～4人くらいで私たちが農作業した時間の4、5倍の時間をかけて行うそうです。また、舟形町で農業を行う人は60代以上の方が多く50代では若手と呼ばれていて驚きました。これらの話を聞いたとき一人一人の仕事が多く、私たちが感じた何倍もの疲労感を地域の方々は感じているのではないかと思いましたが、早寝早起きをして毎日体を動かし健康的な生活をしているので皆さんとても元気で生き生きとしていました。しかし舟形町では年々人口が減少していること・農作業する人がいなくなり土地が荒れ地化していることが問題であることが地域の方の話を聞きわかりました。舟形町では現在「舟形町内会びじょん」というものを考えており、大きな課題を小さい課題に分けて自分たちにできる課題の解決法を具体的に立てていました。例えば、お年寄りにはすることが難しい除雪をボランティアで行ったり、地域の人との交流を増やし仲間を作るための行事・イベントの開催などがありました。私は舟形町で活動する中で農作業をしているときにその脇を通過する車の人が声をかけているのを何度か見かけました。そのようなことがあるのは舟形町内会の方が「舟形町内会びじょん」に書かれているように率先して町の人に声がけをして仲の良い町ができたのではないかと思いました。また課題探究をしてグループで考えた課題の解決方法は自分たちだけで行うことができないので地域の方々に提案して少しでも舟形町が住み続けられる町になることに役立てば良いと思いました。他にもより深く課題探究をして自分たちでもできる課題の解決方法を見つけたいと思いました。また、私が工学部であることを知り、地域の方から「農作業をもっと楽にすることのできる安い機械を作ってほしい。」と言われました。その言葉を聞き、機械は専門ではないのですが安く作れる物質を開発したいと思いました。このように私はこのフィールドワークの貴重な体験を通したくさんのことを習得することができました。

工学部　Hさん

1. 農作業を通して

私は舟形町で様々な野菜を定植する体験をしました。農作業をしたことがほとんどなかったため定植する作業はとても楽しかったです。しかし、農作業は楽しいことばかりではなく、身体的な疲労を引き起こす作業がたくさんありました。定植する作業に入る前に、畑に穴を開けたり、支柱を組み立て倒れないようにしっかりと固定したりするなどたくさんの仕事があり、それは想像以上に大変な作業でした。そのような作業を地元の人々がたった数人で素早く丁寧に行っており、農作業に対する熱意を感じました。また、気温の高い中一生懸命作業をした後に食べた地元の料理がとても美味しかったです。農作業をしたおかげで野菜が普段よりも美味しく感じました。

それから、一人で作業しているときはその作業を終わらせるのにかなり時間がかかったけれど、グループのみんなで協力して作業しているときは効率がよくあっという間に作業が終わったということと、地元の方は何十年もこの仕事をしているため、私が作業するのと比べものにならないほどテキパキと行動して仕事を進めていたということから、協力することの大切さと経験の素晴らしさをこの活動で学ぶことができました。

2.　課題と解決について

舟形町は人口が減少しており、若い人々が少なく高齢者が多い状況です。そして、舟形町の農業の労力が不足していると思ったため、労力を確保する必要があると感じました。そこで、私は他の地域からいろいろな人を呼び込み、ほとんど使われなくなった広大な土地と宿を与えて農作業をしてもらうべきだと思いました。現在インターネットが普及しているため、多くの人々に情報を伝達することができ、人々を呼び込みやすくなっています。また、他の地域では景色が良く、自然が豊かであることを利用した観光スポットはたくさんあるため、舟形町の景色や自然を活かして観光交流や移住定住を促進することができるのではないかと思いました。

舟形町だからこそできることを見つけ、欠点だと決めつけている物事を利用していくという考え方が必要だと思いました。

工学部　Kさん

私が今回の研修で感じた、舟形町の課題は以下のふたつです。

一つ目は、農業の体力的な厳しさです。私達は舟形町で、きゅうりやカボチャといった作物を植えましたが、それらは全て力仕事でした。舟形町の農業従事者の高齢化が進む中、このような体力勝負の仕事を続けるのは厳しいと考えられます。実際、舟形町の3割程度の田んぼや畑は、開墾されたまま放置されていました。このままでは美しい里地里山の景観が見られなくなるのも時間の問題です。

二つ目は、若者の都市への流出による舟形町の人口減少です。舟形町には、小学校や中学校はありますが、高校はありません。そのため、中学校を卒業した若者は都市部に行くほかなく、人口減少が著しいです。実際に私達は、小学生の減少に伴い閉校となった小学校をみてきました。舟形町の、特に若い世代の人口減少は、目の前に迫った大きな課題なのです。

私は、舟形町を再建するために、これら二つの課題を踏まえて次のような提案をします。

舟形町に必要なのは、農業をする若い働き手です。だから私は、都市部から農業の担い手を募集すればいいと考えました。具体的な案として、とある地方都市で行っていた、「若者に新しい家と場所、土地などを与える代わりに、数年間はその場所で農業をしてもらう」というプロジェクトを行えばいいと思います。私が今回体験した限りでは、農業は力仕事メインなので、特別な技能はあまり必要ないと感じました。そのため、専門職に比べれば比較的一般人も取り組みやすいので、求人のような形で働き手を募集すれば、都市から人が集まると思います。そうすれば、農業従事者は増え、上の課題はだんだんと解決に向かうはずです。

農業人口の減少という課題は、舟形町に限らず、山形県、そして東北地方全体に広がる大きな問題です。今回の舟形町研修を通して、このことを非常に強く再認識させられました。この先、地方の厳しい現状をどのように改善していくか、今回のこの研修にとどまらず、この先も私達ひとりひとりが考えて続けていくべきです。

中村湿原のみらいを考える～環境保全と観光利用の両立～

活　動　状　況

○実施市町村：真室川町

○講　　師：中村湿原を守る会　会長　高橋喜久美氏　ほか

○訪　問　日：令和元年６月８日(土)～9 日(日)、7 月 6 日(土)～7 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部２名、理学部２名、医学部２名、工学部２名、農学部２名

以上 10 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】６月８日（土）	【１日目】７月６日（土）
08：00　山形大学発 09：30　新庄駅着、まざれやへ移動 10：30　開講式・オリエンテーション 12：00　昼食・休憩 歴史民俗資料館見学、森林鉄道（トロッコ列車）乗車体験、温泉体験など ふりかえり 17：30　宿舎（コテージ）へ移動 18：30　夕食・入浴	08：00　山形大学発 09：30　新庄駅着、まざれやへ移動 10：30　現地視察、野外作業など 12：00　昼食・休憩 現地視察、地元への提案と実践など ふりかえり 17：30　宿舎（農家民宿）へ移動 18：30　夕食・入浴
【２日目】６月９日（日）	【２日目】７月７日（日）
07：30　朝食 09：00　宿舎出発、まざれやへ移動 09：30　現地視察、中村湿原保全活動体験など 12：00　昼食・休憩 地元地域住民へのヒアリング調査など ふりかえり、新庄駅へ移動 16：30　新庄駅発 18：00　山形大学着	07：30　朝食 09：00　宿舎出発、まざれやへ移動 09：30　発表会準備 12：00　昼食・休憩、発表会会場準備 14：00　発表会、閉講式 16：30　新庄駅発 18：00　山形大学着

授業記録

〇活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Mさん

山形に住み始めて2か月、「最上地域ってどこだろう？」「真室川町ってどこだろう？」という状態から今回の集中講義が始まった。今回のプログラムテーマは「中村湿原の未来について、環境保全と観光利用の両立を考える」というものであった。実際に行ってみると、自分が知らなかったことがほとんどで、真室川で過ごしたすべての時間が学びであった。

車での移動中に見える風景や産業、話してくださる話、その場所に住む方の方言や料理などである。学ぶことが多すぎて、メモするためにペンとメモを取りだすのが何度も面倒くさいと感じたが、私はその一つ一つをメモした。いま振り返ると、面倒くさいと思ってもメモを残していたことは、本当に良かったと感じている。あとからそのメモを振り返ってみると、その日にはよく理解できず、ただメモしただけの言葉が、２回目のフィールドラーニングで学んだこととつながったり、興味をもって調べるきっかけになったりした。

１回目のフィールドラーニングでは、主に湿原保全の活動を行った。さらには、現存して動いている中でも最古と言われる森林鉄道に乗ったり、歴史民俗資料館の見学、中村湿原保全の会の方とレジャーシートの上で昼ご飯を食べながら、ヒヤリングした。ヒヤリングというより、リクリエーションに近く、終始打ち解けた和やかな雰囲気であった。湿原に関して分かったことは、自然のままを保って大切に保全してきた湿原であり、珍しい動植物が生きる場所であった。過去には、盗掘の被害で絶滅に追いやられた花もあり、できるだけ人を呼びたくないらしかった。しかし、中村湿原を知ってほしいという思いもあることがヒヤリングで明らかになった。実際に聞いて気づくことが多かった。また、なにかに気づこうと思って話を聞かないと、気づきが生まれないこともあり、目的をもって学ぶことの大切さを知った。

１回目の調査から、具体的な案を練った。２回目のフィールドラーニングでは、その案に関係する質問を用意し、地域へ１軒１軒聞き取り調査を行った。しかし、１回目の調査では分かったことまた違った意見が出てきて、案の練り直しが必要になった。そこでは、さまざまな職業や年齢、地区の方の話を聞く大切さや、柔軟に考えることの大切さを学んだ。最終的な案では、「保全のための目標値設定」「看板作成」、次世代育成のための「真室川内の他地域の子供を招く保全活動」などを提案した。また、住民の方、守る会の方、教育長の方からそれぞれの案からフィードバックをいただいた。そこでは、「実現しやすいね」「これは子供も楽しめそうだね」というポジティブな意見もいただいたし、逆に「保全という観点からその案はどうかな…」「その案はやったことあるよ」という意見もいただけた。学びは最後まで続いた。自分の反省点は、時間内に終わらせられるメリハリを持つことだ。

真室川町でフィールドラーニングできたことはずっと心に残る経験だと確信している。真室川町の方は本当に温かい人ばかりでした。時間があれば満天の星空やホタルを見せに連れて行ってくれたり、絶品の伝承スイーツを何度も買ってきてくれたり、追加で話し合いの時間を設けてくれたり…。真室川でお世話になった方には本当に感謝しきれない。真室川には本当に「ゆたかなくらし」があった。これからも真室川の方と何らかの形で関わりたい。

人文社会科学部　Nさん

私はこのフィールドラーニングを通して、中村湿原を中心に真室川町のことをたくさん知ることができた。一回目の訪問では今回の学習のメインとなる中村湿原の観察・調査や、中村湿原の保全活動を行っている「中村湿原を守る会」の方々との交流、真室川町の観光を通して、班員との親睦を深めると同時に真室川町への理解を広げた。そのうえで、中村湿原が保全の必要な状態にあることやその保全活動の継続のための課題を班員で協力して発見した。私たちは見つけた課題の解決のためには町民の中村湿原への意識を知り、さらに中村湿原への理解を深める必要があると考え、二回目の訪問では町民の方々へアンケート調査と聞き取り調査を行うことにした。この結果町民から挙げられた指摘をもとに、中村湿原の保全のために私たちや町民の方々ができることを発表会を開いて提案した。さらにその発表に町民の方々からフィードバックをいただき、より深い学びを得ることができた。

この４日間でたくさんのことを知り、味わい、感じ、考えたが、その中でも自分のこれからの成長につながるであろうことがいくつかある。

まず一つ目に、班で活動する際の協調性について。私は集団で行動するのがあまり得意ではない。物事も自分でやってしまいたいと思ってしまう。しかし今回班員で

協力する機会がたくさんあり、それらを通して集団で何かをやり遂げる楽しさや達成感を実感することができた。もちろん、スライドの作成などの活動の中で班で議論をし、時には意見がぶつかることもあった。でもそれも班員が真剣に活動に取り組んでいる証で、ぶつかり合いを通しながらも考え出した提案や作り上げたスライドは、内容は至らないところも多くあったとは思いますが、とても輝いて見えた。とてもいい経験になったと思う。

次に二つ目は、人の温かさについてだ。これはフィールドラーニングが始まってからずっと考えていたことである。私たちのフィールドラーニングに全面的に協力してくださった関係者の方々をはじめとした、真室川町の方々の温かさにたくさん触れたからだ。常に私たちを気遣い優しく接していただいたおかげで、初めて訪れる地でもすぐに緊張もほぐれ、真室川町の魅力をたくさん教えていただき、学習に集中できたことに感謝したい。私も彼らのように、人に優しく、地元を愛する温かい人間になりたいと心から思った。

理学部　Tさん

真室川町にある中村湿原の現状を見ることで、様々な問題を垣間見ることができました。

まず、湿原の管理に充てることのできる人材が不足していることです。中村地区に住んでいる人々も整備活動に参加する意思はありますが、「中村湿原を守る会」のメンバーが全体的に高齢化しているため、土木作業などの力仕事は全体的に苦しい場面があります。私達のような若者の訪問は有益であるというお話を伺ったので、来年も山形大学の生徒が率先して行くべきと感じました。

次に湿原自体の状況についてですが、こちらは自分達だけの能力では問題の露呈と解決方法の模索が難しかったので、山形大学で集団生態学を研究している教授のお力添えを頂きました。そこで分かったのは、湿原が既に森への遷移を始めていること、湿原内に生息する希少な動植物を管理する上での注意点、そして町全体で目標値を設定する必要性です。

まず遷移についてですが、そもそも湿原という環境自体が不安定で、乾燥してしまうと森林に遷り変っていってしまい二度と元には戻らず、人為的に放水する等の退位策が必要らしいのですが、２回目の調査で地下からの湧水があることが判明したので、もう暫くの間(100年単位)は湿原の環境を維持できそうです。

次に動植物の管理ですが、こちらは生物学の教授ならではの見解でした。希少な動植物の数を増やすために、「他地域から同種の生物を持ち込む」と「中村湿原に元々あるものを地区内の別の場所で培養して再植する」という2つの方法が考えられていたのですが、前者の場合は生物が生息していた環境に適応してしまっていることを、後者の場合は遺伝的多様性の損失によって病気や突然の環境変化への抵抗性が減ってしまうことを考慮しなければならないとのことです。

そして3つ目の目標値については、1回目の調査にて「湿原を最終的にどのような状態にしたいのか」が未確定な状態で活動している部分があるということが分かったので、最も深刻な問題であると捉えました。アンケート調査を実施してデータを見たところ、町民の皆さんは中村湿原を守るべきという考えはお持ちですが、具体的に湿原をどうしたいのかというハッキリした目標はありませんでした。また、守るべきという意思があっても高齢で行けないという切実な思いもありました。

2日目の報告会にて、上記の4つの観点を中心に町民の皆さんの前で発表を行いましたが、フィードバックの調査を用意していないという手痛いミスをしてしまったので、活動報告会の内容を如何にして凝らすか考えなければなりません。

理学部　Hさん

私は真室川町のフィールドラーニングにおいて、学んだこと・感じたことが2つあります。

一つは、真室川に限らず、一般に「田舎」と呼ばれる地域の素晴らしさです。自分は東京都出身であり、このような体験をしてこなかったからなのか、たくさんの見たことの無い動植物や、感じたことの無い人の温かさを今回のフィールドラーニングで初めて知ることができました。中村湿原ではハッチョウトンボを中心とした貴重な生物が生息しており、教科書にはない、美しい生態系を手に取って実感することができ、湿原から出れば、見かける住民に方々全員が気軽に話しかけてくれていろいろな話を聞かせてくれて、町の人みんなが優しくしてくれました。この経験は一生涯大切にできる、本当に貴重な時間でした。

もう一つは、グループワークの重要性です。今回のように、学生主体で町の発展に寄与するのは当然はじめての経験で、とても得るものが多かったように思います。自分は班長を任され、最初は班員をうまくまとめることができず、一回目のフィールドラーニングではたくさん

の方に迷惑をかけつつ、いろいろな面で支えてもらいました。班員にも何回も助けられ、ここでも人の温かさを改めて知ることができたように思います。自分一人ではなく、班で良いフィールドラーニングを作るというのは簡単なことではありませんでした。そこで自分が一番重要だと感じたのは、「相手の意見をまずはしっかりと受け入れる」ことです。班員との度重なる会議で、意見に対して「でも、～」や「いや、～」と否定してばかりでは良い結論は近づいてこないということを知りました。まずは肯定し、自分の意見と比較する。そうやってかみしめた上で、反論する。今回のフィールドラーニングは、そういったことも学ぶ、とても良い経験の場とすることができました。

最後に、今回のフィールドラーニングで私を支えてくれた方々に感謝申し上げます。おかげで人として、何か大きなステップを上がるきっかけがつかめたように感じます。そして班員のみんなにも感謝しています。いろいろと頼りない班長だったとは思いますが、ありがとうございました。

私はもがみで、一生ものの経験をさせてもらいました。

医学部　Sさん

私はこのフィールドラーニングの活動を通して、中村湿原の課題とその解決策について考えた。

1回目の活動では、実際に中村湿原の動植物を観察するとともに、湿原の保全活動を体験した。観察を通して、中村湿原にはハッチョウトンボをはじめ、モリアオガエルやイモリ、トキソウ、ノハナショウブなど、希少な動植物が生育し、豊かな生態系があることが分かった。保全活動では、ミズゴケを除去し、人が歩く木道の幅を広げる作業をした。まず、ミズゴケをスコップなどでとり、次に袋に詰めて、袋がいっぱいになったら、乾燥させる場所まで運ぶという作業だったのだが、袋いっぱいに詰めたミズゴケは重く、足下が滑りやすいこともあって、運ぶだけでも一苦労で、この作業を高齢の方がやるのは厳しいのではと思った。

1回目の活動の後、専門家のアドバイスで、地域の方の湿原に対する意識を調べるためにアンケートを行い、また、2回目の活動では、お宅を訪問して話を聞かせてもらった。その結果、町の中でも湿原からの距離で意識の差があること、保全活動の継続が大変なこと、湿原への来訪者が増加していることなどが分かった。

これらから、来訪者に湿原の位置やマナーをどうやって伝えるか、意識の差をどう解消するか、保全活動をどう維持していくか、の3つの課題を考えた。それぞれの解決策としては、まず、位置やマナーを伝えるために看板を設置することを考えた。位置を伝える看板を湿原までの道の途中に、マナーを伝える看板を湿原の入り口に設置すれば、より多くの来訪者に知ってもらえると思う。次に、意識の差の解消のために、町の共通の目標値を設定する、つまり、町全体でどのような湿原を目指すのかを決めることを考えた。共通の目標を決めるために話し合えば、町民の間の意識の差が解消していくと思ったからだ。最後に、保全活動の維持のために、町の他の地区の親子に保全活動に参加してもらい、より多くの人に湿原に関心を持ってもらうと共に次世代に伝えていくこと、保全活動への参加を直接呼びかけて参加しやすくすること、ボランティアを募集する際、いくつかの役割に分けることでより多くの人に参加してもらうこと、の3つを考えた。保全活動を継続するには、より多くの人に参加してもらい、次世代に伝えていくことが重要だと思ったからだ。

今回私なりに課題と解決策を考えてみた。及ばぬところは多々あったと思うが、中村湿原の保全の一助となれば幸いだし、また、過疎化が進む中での環境資源の保全について、これからも考えていきたい。

医学部　Eさん

私はこのプログラムに参加するまで、真室川町の存在を全く知らなかった。しかし、二度にわたる真室川町でのフィールドラーニングを通して、真室川町の素晴らしさを肌で感じた。

1回目のフィールドラーニングでは、主に中村湿原の保全活動を行なった。中村湿原にはハッチョウトンボやモウセンゴケ、トキソウといった、珍しい動植物がいた。それらの観察を行いつつ、水苔によって幅が狭くなった木道を、水苔を取り除き広くした。水を多く含んでいる水苔は重く、大変力のいる作業だった。そして、中村湿原に対する地域の方々の思いを伺った。中村湿原の普段の保全は、地域の方々が主体となっていて、私たちのような大学生が保全活動にやってくることはあまりないという。中村湿原を有する中村地区では、少子化高齢化が進み、保全活動を行う方々の負担も大きく、またその次に中村湿原を守っていく人たちが不足していることが課題だった。それでも地域の方々は中村湿原を地域の誇りに感じていて、あくまで地域の中で、大きく手を加えることなくありのままの自然を守っていきたいと仰っていた。自分の住む地域とそこの自然に対する思いの熱さに感動した。

2回目のフィールドラーニングでは、中村湿原を守っていくためにどのようにすれば良いか、私たちなりの考えを発表した。事前に地域を回って直接住民の方々のお話を伺ったが、中村湿原の自然を守っていきたいという思いはほとんどみなさん同じだった。一方で、保全活動への参加に関しては、住んでいる地域ごとにばらつきがあったり、最近は中村湿原に行ったことがないという方もいた。また、同じ真室川町内であっても、中村地区以外の離れた地区の人は中村湿原の存在すら知らないという人がいるということもわかった。調査をしていくにつれてどんどん当事者意識が強くなって、

どのようにしたら中村湿原に自然の良さを住人の方々の意向に沿ったやり方で守っていけるか真剣に考えるようになった。最終的に、案内標識を立てること、中村地区以外の親子に保全活動を行なってもらうこと、学生ボランティアを募集することを提案した。全力は尽くしたものの、まだまだ良いやり方があるのではないかと心残りもあったし、ほとんど初めてプレゼンを行なったので緊張した。しかし、地域の方々も教育委員会の方々も私たちの提案を褒めてくださって、とても嬉しかったし、やりがいを感じた。
今回のフィールドワークでは、中村湿原の保全活動以外にも様々な面でいつも地域の方々に支えられた。私たちをあたたかく受け入れてくれ、調査にも快く応じてくださった。雄大な自然とあたたかい人々に囲まれた真室川町のことが大好きになった。そして、少子化高齢化による問題について深刻に考えるようになった。たった四日間のフィールドワークだったけれど、得たものの大きさははかりしれない。このプログラムに参加して本当に良かったと思う。

工学部　Wさん

私はこのフィールドワーク共生の森もがみの授業で真室川町を訪れ、真室川町の魅力に触れつつ
真室川町の宝である中村湿原の保全とその未来について考えた。

まず事前の調査で中村湿原にはハッチョウトンボをはじめ、山形県のレッドデータブックに載っている植物などが生息することが分かった。それらの希少動植物を、そして湿原の環境をどのように維持していくのか、改善していくのかを考えながら一回目のフィールドワークに臨んだ。一回目のフィールドワークでは、湿原を守る会の方々は湿原の観光利用には消極的であることが分かった。このことを踏まえて班員同士で意見を出し合い、「湿原そのものの保全」、「周りから湿原の保全」の二つの観点から考えることとなった。また専門家の意見から湿原を保全する上で真室川町全体としての具体的な目標値の設定が必要であることが分かり、具体的目標値を設定するために地域住民の方々の意見を聞こうということでアンケート・聞き取り調査を行った。そして私たちなりに課題を考え大きく３つの提案をした。

最初に「湿原そのものの保全」という観点から、湿原の訪れる方々の増加に伴いルールを守って観察を楽しんでもらうことに着眼点を置き、注意喚起の看板の設置、中村湿原に生息している動植物の写真パネルの設置、案内標識の設置。次に「周りからの保全」という観点から、町全体の意識の差や人材不足に着眼点を置き、他の地区に住んでいる親子による保全活動、そしてそれらの活動をアルバムという形で記録してもらうということ、学生ボランティアの募集の工夫、直接的な呼びかけの範囲を広めること。最後に，町全体が「湿原をどのようにしていきたいか」という具体的目標値の設定を提案した。自分たちなりに考えたつもりであったが、誰がするのか、ほかの湿原との比較など、もっと考えなければならないことがあったと思う。しかし自分たちで課題を見つけその課題解決に向けて考え、発表することで達成感が得られた。

今回のフィールドワーク（in真室川町）で真室川町のことを知ることができ、また地域の方々のあたたかさを感じながら、自ら課題を発見し、探求するという新鮮で貴重な体験を経験でき、四日間という短い間だったが得られるものはとても大きく、人として成長することができたと思う。

工学部　Kさん

自分はフィールドラーニングの一回目に中村湿原の保全活動を行った。保全活動では主に湿原の中にある木道の整備をし、保全活動が重労働だと感じた。また、湿原には貴重な動植物が多く存在し、特にハッチョウトンボは日本で最小のトンボであり、生息地も限られている貴重な動物なので、観察できてよかった。保全活動の後に中村湿原を守る会という湿原の保全活動を行っている方々と話すことができ、湿原について聞いたところ、過去にあった盗掘のせいで湿原にあった植物が減り環境が荒れてしまったこと、年々若い人が減ってきて将来保全活動をする人がいるのか不安なこと、湿原を昔の環境に戻すことが目的だということなどの話を聞くことができた。二回目のフィールドラーニングでは、湿原の近隣住民の方々に湿原についての聞き取り調査を行った。聞き取り調査を行った地区には上座、下座という区分けがあり、同じ地区内でも湿原から近い下座の方々には湿原の保全活動に対して積極的な意見が多く、湿原から離れた上座には湿原に対しての関心があまり強くない方が多かった。話を聞くことのできた人の多くはハッチョウトンボなどの貴重な動植物が多く生息していることなどの湿原の魅力を知っていたが、保全活動に参加したいかと聞いたところ、ぜひ参加したいといった声は多くなく、特に上座の方々には少なかった。調査の結果から、

地区には湿原の魅力を知っている方々が多くいることが分かったので、もっと地元の方々に保全活動に参加してもらうことが可能で、それが保全活動の人手不足という問題の解決の糸口になるのではないかと考えた。どうすれば地元の方々が保全活動に参加してくれるのかを考えたところ、保全活動には積極的に参加したいという意見は多くないものの否定的な意見は無かったため、保全活動に参加している地元の方が知り合いに参加を促すなどの人同士の直接的なやり取りでの呼びかけをしてもらうことで、参加しやすい環境を作ってもらうことができ、地元の方同士の仲を保全活動を通してより深めてもらうこともできると考えた。また、湿原の保全活動の人手を確保でき、中村湿原を守る会や地域の方々と触れ合うことで中村地区や湿原の魅力を地区の外の若い世代の人に知ってもらう機会になるため、学生にボランティアを呼びかけることを考えた。

農学部　Tさん

私は計四日間、二回のフィールワークにわたって真室川町の理解に努めた。フィールドワークは大きく考えて一回目に活動、聞き取り調査、二回目に追加調査、発表の流れで行った。その中で大きなテーマとなったのはどのように中村湿原を保全していくかということ、そしてそれについて自分たちが考えたことを地元の方々へ提案するということだった。そのような方向性になったのは第一回目のフィールドラーニングで町民の方々の意見を聞いて学生側から行動をしなければとみんなの足並みが揃ったからだ。

より具体的な提案をするために私たちは内側から湿原への提案を行う班と外側から湿原への提案を行う班に分かれて課題を見つけ提案する内容を考えた。課題を見つける方法としては町民の方々に質問をして意見を聞いたりアンケートでの調査を行ったりした。また自分たちの意見だけでは力不足だと考え教授からの意見も伺った。その中で見えてきた課題は担い手不足、湿原を守る方々の高齢化、有名になることがうれしい反面他地域から訪問されることが心配、上（湿原から遠い地域）と下（湿原から近い地域）での意識の違い等々だった。また教授からの意見としては湿原から森林への遷移、湿原に人の手を加えないのがベストだが湿原を保全していくにはある程度人の手を加える必要がある、目標値を設けるという意見等々をいただいた。

それらを踏まえて内側からの提案として注意喚起、中村湿原の場所を促すための看板を立てるという提案を二回目のフィールドワークの発表にて町民の方々に示した。外側からの提案としては他地区の親子、また自分たちのような学生に来てもらい保全活動を行ってもらう、直接的な呼びかけを行うということを示した。またアルバムに関しては実際に自分たちの写真を用いてサンプルを作って町民の方々に見ていただいた。学生側からできることとしては最高の投げかけができたと思う。

しかし、発表終了後に聞きに来てくださった方々からの意見を積極的に聞きに行くことができなかった。残ってくださっていた町役場の方々からは意見をいただくことができたが、やはり実際に暮らしている方々に個人的にでも気づいて聞きに行くべきだなと反省した。

今回のフィールドワークではただ活動を行い、ただ調べたことを発表するということではなく上記のように生徒側からの考えを住民の方々に提案するという一歩踏み込んだ活動になったと感じた。実行されるかはわからないが、真室川町にいい影響を与えることができたと思う。地域活動、地域貢献の大切さを知れた四日間になった。

農学部　Sさん

私は中村湿原をあらゆる視点から良くするため、私自身に「中村湿原を観光と保全の両面から考える」というテーマを掲げた。そしてこのテーマのもと、中村湿原と向き合った。

私はまず現在の中村湿原の現状はどうなのかを事前学習と一回目のフィールドワークを通して調査した。事前学習では天然保護区域に指定されていることやハッチョウトンボやサギソウなど山形レッドデータブックに掲載される希少生物の宝庫ということがわかった。そして、一回目のフィールドワークでは、役所の人達と住民の人達の観光利用に対する意見の隔たり、人工的な力を使わず自然だけでの保全を目指したい、という真室川の人達の考えが分かった。これらの意見をもとに私は中村湿原を「内側」と「外側」から良くしていくべきと考え、さらなる調査を行った。

私は役所の人達の意見、住民の人達の意見どちらも叶えるため、住民の人達が中村湿原に対してどんな印象を持っているのか、これからどうなっていってほしいかということをアンケートにして、さらなる調査を行った。そして、中村湿原に行くまでの道がわかりづらい、中村湿原を理解している住民が少ない、中村湿原に関心を持つ人や携わる若者が欲しい、少数の人達だけで負担が大

きい、ということが分かった。

　そういった意見から私は大きく分けて三つの具体的な提案を行った。まず全体にかかわる部分の地区内でどうなりたいかという目標値を設定し、住民全員がそれを理解すること、次に「内側」の部分で、湿原内に注意喚起の看板、湿原内の希少生物の紹介を書いた看板の設置、また湿原に行くまでの道に案内用の看板を設置すること、最後に「外側」の部分で真室川内の他地区の親子による保全活動、活動記録のアルバム作成、呼びかけの工夫、大学生ボランティアの募集とその工夫を行うことを提案した。提案後、住民の人達の声を聴くことでこれらの提案、提案した意図が伝わったと感じた。

　このように、中村湿原を目で見て、耳で聞き、肌で感じながら調査を行い、私なりの考えを提案した。提案した内容が採用されるかどうかはわからないが、少しでも中村湿原の今後に貢献できていたら嬉しい。最後になるが、広大な自然や真室川の人達の温かさに触れながら課題を探求できて良かったと思う。

子どもの自然体験活動支援講座①

活　動　状　況

○実施市町村：真室川町

○講　　師：山形県神室少年自然の家職員

○訪　問　日：令和元年６月１日(土)～2 日(日)、6 月 29 日(土)～30 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部２名、地域教育文化学部３名、理学部１名、医学部５名、工学部３名
以上 14 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】６月１日（土）	【１日目】６月２９日（土）
08:00　山形大学発 09:30　新庄駅着・打ち合わせ 10:00　東山公園へバス移動 10:15　企画事業「わんぱく探検隊」 であいのつどい 自然体験活動①（陣ヶ峰トレッキング） 12:00　昼食（各自持参のおにぎり等） 14:20　東山公園からバス移動 15:00　自然の家着 15:30　自然体験活動②（テント作りなど） 17:30　夕食 缶バッジ作り、シャワーなど 21:00　子ども就寝　　スタッフミーティング スタッフ就寝	08:00　山形大学発 10:00　神室少年自然の家着・打ち合わせ 10:30　企画事業「めんごキャンプ」 であいのつどい 自然体験活動①（野遊びなど） 12:00　昼食 自然体験活動②（テント設営など） 自然体験活動③（野外炊飯など） 17:30　夕食 自然体験活動④（夜の活動） 21:00　子ども就寝 スタッフミーティング スタッフ就寝
【２日目】６月２日（日）	【２日目】６月３０日（日）
06:00　起床、朝の集い、シュラフ・テント干し 07:00　朝食 自然体験活動③（石窯ピザ作りなど） 12:00　昼食 12:50　わかれのつどい（子ども解散） 13:15　後片付け・ＦＬミーティング 16:00　自然の家バス発 18:00　山形大学着	06:00　起床、朝の集い、シュラフ・テント干し 07:30　朝食 自然体験活動⑤（川遊びなど） 12:00　昼食 13:45　わかれのつどい（参加親子解散） 14:00　後片付け・ＦＬミーティング 16:00　自然の家バス発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Tさん

私は今回のプログラムに、子どもと関わる事ができる貴重な体験ができると思い参加することを決めた。また、将来教員になりたいと考えているため子どもの目線や考え方を間近で体験し、どのような声かけやサポートをすれば、子どもの成長につながるのか考えたいと思った。

第一回目のフィールドワークでは小学校３・４年生を対象とした「わんぱく探検隊～夏～」の班付きスタッフとして、子どもの自然体験活動支援をした。活動の最初のトレッキングでは、班の子どもたちがとても緊張している様子だったので、学校での様子、習い事など、その子の興味のあることを引き出して、少しでも打ち解けられるように積極的な声かけをした。大学生が介入することによって、大学生と子どもという繋がりはできたが、子ども同士の繋がりがあまりなかったので、1日目の反省として大学生で共有し、明日は安全面を確保しつつ子どもだけでできることは、協力してできるような声かけをしようという目標を立てた。二日間の日程を経て、子どもができないことをやってあげるのが支援ではなく、子どもができるように声を掛けたり、見守る事が支援なのだと思った。

2回目のフィールドワークは、幼児～小学２年生までを対象にした「めんごキャンプ」の班付きスタッフとして参加した。保護者プログラムの担当の方から、活動が始まる前に大切なこととして「１繰り返す」「２行動を言葉にする」「３具体的に褒める」というお話をいただいた。前回のプログラムで、支援のあり方について自分なりに考えてみて、子どもの成長のために見守る姿勢を意識しようと思い臨んだため具体的にこの三つを、行動に移してみた。あいにく天候に恵まれず本来活動プログラムの一つであった川遊びが変更になり、予定が大きく変わるなど臨機応変に対応しなくてはならない場面があった。今回は対象年齢が前回より低かったこともあり、子どもの安全確保をしながら職員の方の指示を仰ぎ、伝えるというのはとても大変だった。二回目ということもあり、先を見越した行動ができるようになったのが自分の一番の成長だったと思う。

二回のフィールドワークを通して、人の学びを支えているものは周りの環境だと思った。自分の学びは、普段行かないような場所で子どもと活動したことで得ることができたし、参加した子ども自身も同様だと思う。今回の活動で学んだことをこれからの大学生活、そして将来に生かしていきたい。

人文社会科学部　Tさん

今回私が参加した「子どもの自然体験活動支援講座」は、2回に分けて行われた。1回目は小学3・4年を対象とした活動の班付スタッフとして、2回目は幼児～小学2年を対象とした活動の班付スタッフとバックアップとして、子ども達の自然体験や自立支援を目標に活動した。

1回目の活動では、子どもの扱いに苦戦しつつ、子どもの成長を感じることが出来た。最初は子ども同士の会話が少なく、あったとしてもほとんど「大学生と子ども」の会話だった。それが2日目にはお互いにいじり合うまで仲良くなっていて、順応性の早さに驚かされた。また、積極的に意見を出し合い分担して行動出来ていたというのも、良い意味で自分の想像外であり、とても感心した。その一方で、自分はどうだったかというと、「活動支援」をする立場の人間としての自覚と努力が足りなかったように感じる。子どもが何か上手く出来ない時に手を出してしまうことがあった。何か簡単なアドバイスや他の子どもとの連携を促すような言葉をかけてあげる必要があったと今思う。

2回目の活動では、1回目の時より年齢が落ちて扱いがさらに大変だったが、子ども達が積極的で思いの外自分で行動していたところは、とても嬉しかった。何々が出来ないと訴えてくる子どもがいたが、「こんな風にしてみたらどうか」と説明してあげると、もう一度挑戦してみるという場面があり、前回の時より良い対応が出来たと感じた。また、「自分達で働いて作ったものを皆で食べるのは最高だ」と言った子どもがいて、その考えが生まれたことに私はただただ感動した。一方で、子ども達皆が積極的すぎて少々危ない雰囲気になることがあった。その時は私たちが分担して収まったが、もっと別の、子ども達で分担するよう促す言葉をかける努力をすべきだった。また、注意しても危ない事を繰り返してしまう子がおり、注意の仕方を工夫できるような知識を持つ必要があると思った。

今回の講座を通し、私たちの中では、自然体験活動がもう少し充実していると良いのではないか、また、スタ

ッフ間の情報共有をもっとしっかりすべきではないかという提案・課題が出た。自然体験については、登山やハイキングをしている時、コースに生育している植物の資料を子ども達に持たせ、それらを見つけさせるゲームのような事をしたらどうだろうかという提案が出た。せっかく豊かな自然があっても、歩くことに集中して周りを見ることが出来ていないように感じたからだ。また、情報共有については、職員間で意見が合わないことや、荒天時のスケジュールが具体的で無くその都度知らせるなどというようなことがあった。その場その場で決めるよりは最初から確定していた方がスムーズに動けるのではないかという意見があった。予定を話し合う時は私たち大学生も含めてしてほしいという意見も出た。

普段関わることの無い子どもとの触れあいや自立支援をして、子ども達の成長を感じ、その過程に関われたことをとても嬉しく思う。なかなか出来ない体験に自分も成長出来たと感じる。今回の体験を大切にし、これからの生活に応用出来るように過ごしていきたい

地域教育文化学部　Iさん

私は、教員を目指す上で子供と関わり何かを学びたいと思いこのフィールドワークに参加をした。実際に参加してみて、自分の想像していなかった行動を子供がしていて、自分の中で子供への接し方や考え方が変わるきっかけになる貴重な体験となった。

1回目のフィールドワークでは、はじめ子供との接し方が分からず、ついやり過ぎてしまったり注意ができなかったりと反省点が多く出た。私達の班では自分がやりたいという考えを持つ子が多く、平等に仕事をさせられなかったり不満を持つ子が出たりと、申し訳ないと思うことも多かった。しかし、順番などと声をかけていくうちに次いいよと譲る子がいたり、我慢したりする子もいて、頑張っているのが伝わった。また、私の班ではあまり話さずはじめ輪に入れていない子がいたが、子供同士が話すうちに心を開き1日目の夜には元気に笑いながら話す姿を見て、いつの間にか仲良くなる子供はすごいと感じた。見守るということがあまりできなかったが子供同士のふれあいの中で起こる何かがあるのだと感じることはできた。

2回目のフィールドワークでは、班付きスタッフとなり子供たちをサポートした。前回の反省を踏まえ見守るという課題を意識し活動した。親と離れる前から泣いている子がいたが泣きながらもすべての活動を行っていた。しかし昼に泣いてごはんを食べなくなったとき、はじめはスタッフ2人で挟んでいたが、班長の子供と場所を変わるとその班長の子が一生懸命話しかけお昼の後からは元気に笑いながらいろいろなことを話してくれ、その子を知ることができた。その後も班長の子はみんなを気にかける様子が見られ、見守る中で小学2年生なりの責任感を感じた。子供同士の成長を感じることができ、見守ることの大切さを再確認した。また、山登りの際、急な上り坂で歩くことが困難なときも水筒を自分でギリギリまで持って頑張る姿が、自分で頑張るという意思が見え成長しようとしているのを感じた。時と場合に応じた手助けをすることが大切だと感じた。子供がいじけて話さなくなってしまったときの対応として、まずは何があったのかをしっかり聞きそれでも何も話さなかったら放置してみるという職員さんからのアドバイスを受け、放置という考えは私になかったので参考になった。また実践するといつの間にか子供もついてきていて、機嫌が直っていた。時には何もしないことも大切なのだと学ぶことができた。

今回課題として、その活動を時間内に行うことができず、変更点などの各自への連絡が遅れて行動全体が遅れてしまうことがあった。解決策として、分かっていると思い込まず大人や大学生同士でも声を掛け合い、腕時計など持つなど時間に気をつけながら活動を行うべきだと感じた。

地域教育文化学部　Mさん

私は今回のこの２回のプログラムを通じ、子供たちと同じぐらいの貴重な体験ができた。私は県外出身のため山形のことはほとんど知らなかったし行ったこともなかったため、事前の下調べなどをして郷土のことやその土地についても知れた。また、実際の体験の中でも普段関わることのない年齢の低い子供たちと密に接することが出来たことは教員志望である私にとって大変貴重なものになった。

一回目のフィールドラーニングでは小学校３，４年生を対象とした「わんぱくキャンプ」の班付きスタッフとして、二回目活動は幼稚園の年長さんから小学校１，２年生対象の「めんこキャンプ」の班付きスタッフとして参加した。このような支援サポーターとしての立場での活動は初めてだったため、まなぶことはが大変多かった。子供との距離感の取り方や、やってあげたくなる気持ちを抑えて子供たちに頑張らせてみることなど実際に子供たちと過ごしてみなければ分からないことについて

身をもって知ることが出来た。また、ただのキャンプではなく、あくまで子供たちの自然体験の支援サポーターであることを忘れずに、子供たちが危ない状況などがないかを見守ったり、自分たちのことは自分たちでやらせることを意識して活動することもたくさんの工夫が必要なことであると感じた。そしてもう一つ、子供たちとふれあうこともちろん大事なことではあるが、それは年齢の近い子供同士の場合である。子供と大学生において年齢は他の大人の人に比べれば年齢も近く話しやすいため、たくさん話しかけてくれたりかまって来てくれるが、結構友達感覚でふざけてきたりすることも多かった。そのため、そこは一線を引いて、切り替えをしてもらわなければ円滑に活動を進めることが出来ない。周りの状況なども考えた上で動く臨機応変さをもっと養いたいと感じた。

そして、活動をしていく中で見つけた課題点として私が感じた点は運営上の連絡がスムーズでなかったことだ。一回目の活動の際はそこまで感じなかったのだが、二回目の活動の際は天候が悪く予定されていた動きが出来なかったときの対応を班付きスタッフにうまく伝達されていなかったことが多々あった。その場にいなかった時に次の動きに変更があるかを職員やバックアップ側のスタッフに聞いたりした際に人によって違うことを言っていたりすることもあった。スタッフ間の連絡をもっと密に行うことでもっと臨機応変に対応出来ると思った。

この体験をただの活動として考えるのではなく、一つの地域的な試みとして捉え、地域全体で支援していこうという神室少年自然の家の職員の方々の思いをとても感じた。このような思いを形にしていくためにも支援のあり方やより良い方法を模索していくことが重要であると考えた。

地域教育文化学部　Sさん

私は将来教員志望なのでこのプログラムに参加させてもらった。1泊2日の2回の体験を経て感じたこと、体験をして得た課題などを今から振り返ってみようと思う。

1回目の活動では、小学3、4年生を対象としたキャンプだった。私は班付きスタッフとして、子どもの支援を行った。1回目の活動でよかったことは、小学生がだれ1人と大きな怪我をすることなく、最後まで活動を続けることができその支援を行えたことがよかったと思う。しかし1回目の体験を得て課題も見つかった。１つ目の課題は子どもに手をかけ過ぎてしまったことである。活動の前にあらかじめ配られていた資料に体験活動の目的などが書いてあり、その１つに「自分で難しいことに挑戦する楽しさを知ってもらう」とあった。子どもたちはテント作りやシュラフの片付けに手間がかかっている様子で、出来ないところを私はほとんど手伝ってしまった。支援していると思いとった行動が、逆に子どもたちの学ぶ機会を奪ってしまっていたことに気づいた。ここで、見守ることが1番の支援だということがわかった。

２つ目の課題は子ども同士の交流が少なかったことである。神室少年自然の家についていきなり活動が始まり、私は積極的に子どもに話しかけていき交流を図った。しかし、大学生と小学生の交流はよかったが、小学生同士の交流は少ないように感じた。支援スタッフとして子どもとある程度の距離をとって接することが大事だと思った。

2回目の活動では、幼稚園年長から小学生1、2年生を対象としたキャンプで、山登りやカレー作り、1回目同様、テントシュラフ作りなどを行なった。2回目はバックアップとして支援することになり、1回目で得た課題をもとに活動した。2回目の活動を始める前に、講師の先生から、「具体的に褒める」、「行動を言葉にする」、「繰り返す」ことが子どもと関わる上で大事だとおっしゃっていたので、このことを頭に入れて活動した。やはり1回目同様、テント建てとシュラフの片付けが難しいようで、この時も子どもたちに助けを求められたが、手伝うのではなく、アドバイスをして自分でやりきるよう支援した。そして達成した時には、子どもたちは満足気な顔だった。2回目の活動では自分で難しい課題に挑戦したり、友達と協力して活動したりすることの楽しさを知ってもらえたと思う。2回目の課題としては情報共有がスムーズにいかなかったことだ。2回目のフィールドラーニングでは雨の影響もあり、スケジュール通りの活動は行わなかった。その際にバックアップの大学生には伝わっても、班付きの大学生には伝わっていない場面があった。大人のスタッフから発せられた情報を、すばやくかつ正確に伝えていかなければいけないと思った。

今回の活動を通じて1番学んだのは、見守ることの大切さであった。この体験をもとに今後の活動にも活かしていきたい。

理学部　Kさん

私たちは今回の活動を通して「支援の立場としての子供たちとの距離感」について考えました。

なぜ、「距離感」を考える必要があるのかというと、支援する立場として見守るという行為が一番大切で、手を差し伸べすぎず、突き放しすぎない子供と我々との距離を考える必要があり、結果いい距離感をとれたとき子供の成長を目の当たりにすることができたからです。まず、近い距離（寄り添い）すぎると子供は甘えてしまい自分から何でもやらなくなってしまいます。子供は自分でやることによって経験を積み、多くのことを学ぶことで成長していくため、寄り添いすぎることは子供の成長を阻害することに繋がります。実際、一回目の時寄り添いすぎて子供の甘えてくる場面、自分でやろうとしない場面が多く観られました。この反省をいかした二回目の山登りの時一人の子供が「もう来たくない」「もう帰る」

と泣いていました。ここで私たちが距離をとったとき最初、泣いてしまった子供は一人残されてしまいました。同じ班の子もどうすればいいのかと悩み何度も振り向いて声をかけるばかりでした。しかし、だんだん時間が進むにつれて手を差し出すために戻ってくる子供、慰めに来る子供と全然しゃべることもなかった子たちが成長していく姿を目の当たりにしました。また、何でもやらせるのみだと子供の成長を手助けできないこともあります。子供は見て学ぶ場合もあり、その中で正しいやり方を覚えます。実際、野外炊飯の時、大学生が包丁を使っているとその姿を見ていた子たちはどんどん自分からやりたいと意欲をだし、手の形などをまねして挑戦する姿を観ることができました。そして、叱るという行為をしなければいけません。親のように強く怒りすぎず、観てるだけの人にならないようにする必要があります。叱る行為は子供を成長させます。だからこそ、嫌われる可能性はあるけれどしっかり叱ることをする必要があります。

以上のことから「支援の立場としての子供たちとの距離感」を考える必要があると思いました。

最後に、私は教員を目指して今頑張っています。その中で大学生という立場でこのように小さい子たちとこのような活動を今回できたことで見つけた発見が多くあり大学生の自分でも成長できた気がします。私はサークルで今後も最上地区で子供たちと関わっていきます。ここで経験したことを生かして今後頑張っていこうと思います。

医学部　Sさん

私は、最初子供と触れ合って単位もらえるなんて楽そうだな～と思って選びました。しかし私は子供を触れ合うという貴重な経験を通して多くのことを学び、培うことができこのプログラムを通して一人の人間として大きく成長できたと思います。具体的な一回目と二回目の内容やどんなことを学び培ったかは以下に書きたいと思います。

1回目のキャンプは小学校3.4年生を対象としてトレッキングや頂上での昼食、そこからテント・シュラフ作り、ピザ作りなどをした。1日目はアイスブレイキングの時間や自己紹介が足りない状態ですぐトレッキングに入ってしまったため子供同士での話が少なかったように感じた。その中で自分たちも子供との触れ合いがまだ少ない状態であったため精神的余裕がなかったように感じる。最初はその焦りからか大学生側から子供に話しかけることが多く、子供同士のコミュニケーションを改善できなかった。後々トレッキングを終えたあたりから大学生同士の話で子供同士で話してもらうために促そうと改善し実際にテント・シュラフ作りやピザ作りでは子供同士で仲良くなっていた。大学生がいじられて疲弊することも多々見られた。この経験から主体的に行くのも重要だが、子供を見守る上で重要なのは主体的に行動するように促すことであり見守ろりに徹することであると感じた。それに時間意識をそろそろ身につけるべきようにもっと手助け出来たらなと感じた。

2回目のキャンプでは保育園の年長、小学1.2年の子供たちを対象として行われた。ハイキングやナン・カレー作りを行い、親御さん向けのデザートなども作った。当初は川遊びの予定であったが豪雨のため中止になり生き物収集をした。中には捕まえた生き物を施設に持って行ってる子達もいた。その後子供たちの親と合流し流しそうめんを食べた。先程書いたように豪雨だったために計画変更が余儀なくされた。子供達が川遊びを楽しみにしていたためにスタッフの方達も計画変更したくない様子ではあったが。そのために計画伝達が遅れてしまったのが反省点であった。私は子供担当とバックアップ担当のうちバックアップ担当だったためにスタッフとの連携をもっと密に取るべきだったと感じる。ただし、1回目のフィールドワークと比較するとみな子供との距離感を早いうちに掴み、主体的に行動を促すという点はクリアしていたと思う。

以上を通して私は学生スタッフとしてサポートする立場、親のような立場、そして純粋にこの活動を楽しむ子供としての立場を経験できたと思う。私は将来医師を志しており、その中で子供と触れ合うことは少なくない。さらに自分の子供を持つこともあるだろう。この活動で自身は子供との接し方や最近忘れていた大自然の素晴らしさ、そしてコミュニケーションの大切さを子供のリアクションや成長を通して学びました。これらをこれからも自分の人生に活かしていきたいと思います。

医学部　Kさん

2回のフィールドワークを通して、私は子どもとの関わり方を学んだ。また「活動を支援する」ということは、必ずしも子供の活動を手助けをすることと同じではなく、子供達の活動を見守ることが一番の「支援」につながるということを学んだ。

1回目の活動では小学校3、4年生の生徒にトレッキング、

テント作り、ピザ作り、バッチ作りなどを通して班付きのスタッフとして関わった。最初に子ども達は班に分けられたが、班の中で子ども同士が話すことはあまりなかった。私は話しかけることで会話を生み出そうとしたが、結局その子供と私だけの会話に終始してしまうことが多かった。しかし、2日目には班内での会話も多く、子供の班長も話し合いや指示出しができており、子供同士の交流が多く見られた。これは、テントで班員が一緒に寝ることなど、同じ時間を長く共有し、相手を信頼し、仲が深まったと考えられる。このことから私は一日目に子供に介入しすぎたことで、子供同士のコミュニケーションの機会を待つことをしなかったことを反省した。小学生3,4年生は「ギャングエイジ」と呼称される時期で、明るく元気いっぱいな生徒が多かった。だが、その中で協調性や自主性がみられたことは子供の成長につながることであったと思う。

2回目の活動では幼稚園児、小学校1，2年生とバックアップのスタッフとして関わった。子供と直接関わる機会は少なかったが、今回は広い視野で様々な生徒をみることができた。保護者と離れて初めて会った同年代の友達と関わる、初めてテントで友達と寝る、など子供にとっては大きな障壁になると同時に、成長の大きな機会となるキャンプであった。天候不順により予定していた川遊びなどが中止になり変更も多かったが、池での昆虫探しなど環境を活かした活動ができたので良かったと思う。

以上のことから、子供の学びを支える立場において重要なことは、子供の活動を見守り、自主性に任せて手出しをしすぎないことである。当然子供の安全が第一であるが、子供が活動を通して得る学びをより多くするために、介入しすぎないことが大切であると学んだ。また、「具体的にほめる」、「行動を言葉にする」、「繰り返す」ことも子供と関わる上で意識すべき3要素であると学んだ。バックアップのスタッフとして重要なことは、理念・目的を共有し、組織的に行動することで、スタッフ間で情報共有を十分行い、円滑に活動が進むように支援することである。天候など当日の判断に任せるようなこともその場で臨機応変に対応することやあらかじめ様々な状況を想定して予定を組むことも必要であると感じた。

医学部　Tさん

私はこの2回のプログラムを通して、子どもとの関わり方を学んだとともに、参加した子どもが一回り大きくなったような姿を目の当たりにして、子どもにとって親と離れ自然に触れるという少し過酷な体験を行う意義を実感することができた。私がこのプログラムを履修した理由は、私は身近に小さい子どもがいるような環境と無縁だったため今回の学びが将来医師として働くうえで何らかの役に立つのではないか、と考えたこと、加えて、自分自身子どものころに似たようなプログラムに参加し今でも貴重な経験として胸に残っているため、大学生になった今、次はスタッフとしての立場からプログラムにかかわることができたらいいなと感じたからである。

プログラムは2回に分けて行われた。

1回目は小学校3，4年生を対象として行われ、私は小学生の班について見守ったり、必要となれば指示を出したりする、班付きスタッフとして参加した。私でも多少つらく感じるような山登りや、大人でも一苦労のテント張りなど、小学生には大変だろうと思えるような活動もたくさんあったが、外から見守っていると、「こうすればいいんだよ！」、「ちょっとそれかしてみて！」など、班の中で初期には見られなかった子どもたち同士の協力がみられるようになり、缶バッジ作りやピザ作りなども含めて子どもにとって思い出に残る貴重な体験をできたのではないかと思う。この活動を通して見つけた私自身の課題として、プログラムの性質上仕方のないことではあるが、時間に追われ、マイペースな子をせかしてしまったり、本来ならその子に自力でやらせるべき鞄の整理などを手伝いすぎてしまったりと、子どもの行動に介入しすぎてしまい、ある意味で自立の機会を奪ってしまったことがある。子どもの成長を支援する上では子どもとの距離感を意識して接していかなければならないと感じた。

2回目は幼稚園年長から小学校2年生までを対象として行われた。私は班に付くのではなく、必要な道具を準備したり、広い視野で子どもたちを見守ったりと、安全かつ円滑にプログラムを進められるようにするバックアップスタッフとしての参加であった。1回目の反省を踏まえて、必要以上の介入は避け、できるだけ離れて子どもを見守るように心がけた。雨上がりの足元が悪い中でのハイキングや、すべて自分たちで行うカレー作りなど、やはり子どもにとっては大変に思われるプログラムであったが、最初は「ママ」を連呼し泣き叫んでいたような子が最後は笑顔で手を振って帰っていく姿が見られるなど、低年齢の子どもの成長速度に驚かされた。また、プログラムを運営するという観点から情報共有の大切さと、確実な連絡体制を事前にとることの重要性を感じた。2日間を通して天候が悪く、次に何を行うかが直前まで決まらないような状況で、職員さん同士であっても電話がつながらない（おそらく雨音で着信音が聞こえなかった）場面もあり、大学生同士での情報共有もあまり上手にいかない場面が多かった。運営する側がバタバタしてしまうと子どもが不安に思ってしまうし、子どもから注意がそれてしまうため安全管理がおろそかになりかねないと感じた。

この2回のフィールドラーニングは私自身にとっても得られるものが多かったように思う。今回の貴重な体験を将来につなげていきたいと感じた。

医学部　Sさん

私は今回、子供たちと関わることのできる貴重な機会だと思い、このプログラムに志願した。2回のフィールドワークを通して、子供と接することの難しさや、子供が自ら学ぶことを妨げずに「見守る」大切さなど、普段は体験できないような、とても大きなことを学ぶことができたと感じている。

1回目のキャンプでは、小学3・4年生の子供を対象として、トレッキングやシュラフ・テント作り、ピザ作りなどの活動を行った。一日目は、神室少年自然の家に到着してすぐにトレッキングが始まったため、子供たちはお互いに緊張している様子で、会話も少なかった。大学生と子供の間で話すことが多く、初対面の子供たち同士でおしゃべりするというのは難しそうだった。活動内で気が付いたことは、大学生として子供たちに手を貸してあげたい、という気持ちになってしまいがちだということだ。活動を続けているうちに自然と仲良くなっていく子供たちの様子や、テントを組み立てたり、包丁を使ったりする普段あまりやらないことにも積極的に取り組もうとする姿を見て、子供自らの発見や学びの機会を奪わないように、あえて手を出さずに見守ることの大切さに気が付いた。

２回目のキャンプは、年長児や小学校低学年の子供を対象として行われた。活動はハイキングやナン・カレー作り、川遊びなどだったが、雨のせいで時間や活動内容が変更され、そのたびに臨機応変に対応しなければならなかった。また、1回目のキャンプとは、大学生が班付きスタッフとバックアップスタッフに分かれて活動するという違いがあった。私は班付きスタッフだったため、1回目のキャンプと比べて対象年齢が低いということを考慮し、より子供たちが理解しやすいように気を配ったり、「疲れた」「できない」という気持ちにさせないようにモチベーションを上げる言葉かけをしたりすることを心掛けた。また、前回のフィールドワークの反省を生かし、子供たちが難しそうと感じることにも諦めずに挑戦する機会をつくってあげられたのではないかと実感している。

2度のフィールドワークを通して、子供との接し方や距離感のとり方の難しさを学んだ。活動によって、子供と仲良くなることはできても、指導者として関わることはとても大変だとわかった。「『見守る』ということは、相手を信頼して『待つ』ということだ」という少年自然の家・所長様のお話を心に留め、今後も機会があれば、子供たちと関わっていきたいと思った。

医学部　Hさん

今回のフィールドワークの目的は、事業を通して子供と指導者の双方の視点から、活動支援のあり方について考えることであった。「支援する」ということをいざ行動にうつそうとすると、想定外のさまざまな困難にぶつかり、想像以上に多くのことを学べた。

第1回の活動は、小学3、4年生を対象とした1泊2日の「わんぱく探検隊」の班つきスタッフとして活動に取り組んだ。班の顔合わせを行ってすぐにトレッキングが始まり、歩きながら班内で打ち解けることが要求された。私は自分が担当した班の子どもたちと打ち解けようと、積極的に話しかけた。人見知りの子もいれば、たくさん話してくれる子もいて、どうするべきかを考えているうちに、大学生と子供のやり取りが多くなってしまい、班内の子供間でのコミュニケーションが少なくなっていることに後から気づいた。このとき、自分自身があまり関与しすぎずに、その活動を支援することの難しさを知った。2日目は野外炊飯もあり、前日の反省点をいかし、子どもたちに積極的に行動させようとしたが、手伝いすぎないことや口出ししすぎないことに気をつけながらサポートするのはとても難しかった。しかし前日の反省点を踏まえたことで、子供の協調性を大切にしながら活動に取り組めた。

第2回の活動は、年長から小学2年生を対象にした1泊2日の「めんごキャンプ」の班つきスタッフとして活動に取り組んだ。第1回の活動の反省をいかして、子供の自主性や協調性を特に大切にした。1日目の夕飯は野外炊飯をしたが、第1回のときの、子どもから「できない」「やって」などと助けを求められたときにすぐに手を貸してしまった反省をいかし、第2回ではすぐに助けを出すのではなく、「少しやってみよう」など子どもに挑戦させることを意識した。手を貸さずに見守る難しさを感じると同時に、「支援」するにはどうしたら良いかが少しわかったような気がした。また、子どもの活動を見守る姿勢をとることで、子供間のコミュニケーションが促進したり、協調性を高められたりするように感じた。2日目は雨が強かったため、川遊びが中止され、川に住む生き物と触れ合う活動をした。川にはザリガニやヤゴなど、普段の生活ではなかなか触れ合えないような生き物が多くいた。自然の中で活動することによる学習は、子ど

もたちにとっても貴重な体験であり、また、生き物を探す過程で子供間で協力していたのがよかったと思う。
今回の2回のフィールドワークを通して、「支援する」ということの難しさを学んだ。しかし子どもたちをよく観察し、どうしたらよいかを常に考えて行動することで、子どもたちの協調性や自主性の成長に少しは役立てたのではないかと思った。今回学んだことは特に、将来看護師になり、患者さんの自立支援をする際などにいかしたいと思う。

工学部　Sさん

今回のフィールドラーニングで私は、小学3.4年生を対象とした「わんぱく探検隊」、小学２年生以下の幼児を対象とした「めんごキャンプ」の２回に参加して、様々な事を学んだ。

初回となる「わんぱく探検隊」では大学生でも少しキツいと感じるような登山、慣れないと複雑なテント張りと保護者から離れて子どもだけでのテント泊などを行い、２回目の「めんごキャンプ」では距離や高低差こそ１回目より少なかったものの荒天でぬかるんだところを歩いたり、池でザリガニや小さな魚を捕まえたりといった事をした。

このプログラム以外で小学生以下の子どもと関わるようなイベントに参加したときは、毎回子どもたちに楽しんで貰う事を最大の目標としていたため子どもがわからないところはすぐ教えたり手伝ったりして如何に子どもにわかりやすく説明するかといった事を考えていたが、今回のプログラムではあまり口や手を出さずに安全だけ確保したら後は出来る限り見守るだけにすると言われて意外に感じた。保護者などの手伝いがない自然の中で厳しく辛い体験をするることで子ども達同士で助け合ったり生きる術を身につけてもらう事が目的だと自然の家の方の体験談を交えた説明を聴くことで納得したが、実際の活動の中では思わず手伝ってしまうことが多く分かっていても難しかった。

活動が始まる前は、普段関わることがほとんどない小学生に対して手伝いをしなくても大丈夫なのか、野外炊飯は無事に出来るのかなどとても心配で、活動が始まっても最初は緊張のためか子ども達の動きも固くその不安は拭えなかったが、半日ほど経つと緊張がほぐれ班のメンバーにも慣れたのか心配は要らなかった事に気づかされた。自分たちのテントを張り終わった子がテントを張り始めた大学生のところに近づき手伝おうとしたり、暫定的にリーダーに指名された子がリーダーシップを発揮して何も口を出さなくても班を纏めてくれたり、自分より下の学年の子が困っているのを見たら助けにいく子がいたりと、予想以上に子ども達はしっかりしていて心配はいらないと言うことを身を持って感じ、学んだ。

しかし、自然体験という大きなテーマを考えると大きな課題が残った。大学生の自然に対する知識が薄すぎて子ども達に自然に興味を持つキッカケを与える事が出来なかったのだ。事前学習として子供の年齢にあわせたコミュニケーションの取り方や地域の特徴などは調べていたが、それだけでは足りなかった。

工学部　Tさん

私は、自分とは違う考え方をする人と同じ活動をしてみたいと思い、「フィールドラーニング共生の森最上」を選択した。その中でも、普段関わることがない年齢の子供の成長を見守るというプログラムがとても興味深いと考えた。私は、教員免許を取る予定なので、これは良い経験だと考えた。また、地元の岩手県にいた時に、似たような、子供に森と関わらせるプログラムにボランティアで参加したことがある。その時に、子供の補助をしすぎたことが反省であり、違う方法を模索することが出来ると考えた。

１回目の1日目の活動では、いきなり子供の中に入り、とても動揺した。まず、どのように子供に接していくか、それが課題であった。大学生でもきついような山登りをしていく最中で、徐々に子供仲良くなった。子供との接することが、出来たのは良い事だったが、この子供の成長を見守るというプログラムという意味では、失敗であった。子供と接することを意識するあまりに、子供たちの自主性を見落としてしまっていた。スタッフの方が話し出す時、静かにしなければいけない。それをお互いで声をかけさせるという行為はあったが、それをもう少し、私たち大学生が関与せずに、自主的にやるべきであったのだ。

１回目の2日目活動は、１日目の反省を生かし、子供たちでの自主的な行動をと心がけた。実際行動してみるとそれがなかなか難しいと感じた。実際、意識をして見守っていると、子供たちが自主的に行動するようになった。自分たちの仕事だけでなくスタッフさんの仕事も気づいてやってくれるようになった。ただ、苦手なことへのチャレンジは、まだまだ出来ず、頑張るように声をかけてしまった。これを子供同士で声がけが発生するように私は見守るべきだと反省した。

２回目は、子供たちの自主的な行動を子供たち自身で行うように見守るというのを課題にして向かった。バックアップで、班付きではなかったが、その分、前回では、見られない視点で見ることが出来た。初日の山登りで、大人が後ろで静かに足を止めると、1人の子供も足を止め、動こうとしなくなってしまった。私達は静かにその様子を見守った。そうしたことで、他の子供たちがその子を迎えに来たのだ。私はこの様子を見て、これが見守るということなのかと初めてわかった気がした。

今回の活動は、子供の成長に関われて、とてもいい経験になった。プログラム中の課題は、子供たちの自主的行動を見守る事だった。最初は、できなかったが、徐々

に見守るという意味が分かってきた。
最後に出てきてしまった課題は、運営側の連携だ。ここはチームとしてもう少し改善があったと考える。班付きとバックアップの大学生同士の連携はもちろん、大学生とスタッフでも事前に話し合うことや、連絡を正確に、はやく、伝えていくことが大切だと考える。

工学部　Kさん

私は、この2回の“こどもの自然体験支援講座１”を通して、子供との距離感や接し方の難しさや、見守ることの大切さ、子供の成長のスピードの速さなどを学ぶことができた。
1回目の活動は、小学校3，4年生と山登りやシュラフ、テント作り、ピザ作りなどの活動を行った。子供達に会って、自己紹介もままならないまま、戸惑いつつも山登りが始まった。子供達と大学生はもちろん、子供達同士も初対面であった。そのせいか、子供達と大学生は話すことができるが、子供達同士の会話は見ることがあまり無かった。道中、静かになることもあった。この活動は、あくまでも子供達が主体である。その為、どこまで子供達にやらせ、どこから手伝うかという線引きが難しかった。テント作りはみんなで協力しないと立てることができない。しかし、子供達は自分のしたいことをし始めるとそれに夢中になり班員と協力しなくなってしまうことがあった。この時、子供達を言い聞かせるのは苦労があった。2日目のピザ作りでは、仕事をしている子供としてない子に分れることはあったが、少し、手伝うよう伝えると昨日までとは違い、すぐに行動に移してくれた。1日前までは出来ていなかったことがたった1日でできるようになっている成長のスピードの速さに驚かされた。
２回目の活動は、幼稚園年長から小学校2年生とハイキングや川遊び、ナン、カレー作りなどを行なった。しかし、天候が雨になってしまい活動内容が変わった為、臨機応変に対応しなければならいことが多かった。また、班付きの大学生とバックアップの大学生に分かれ活動を行った。私は、バックアップであった為、子供達と接することは多くはなかった。ただ、バックアップがいないと成立しない活動だと感じた。班付きの大学生は、子供達につきっきりの為それだけで手いっぱいになることがあるからバックアップは、子供達の活動が安全で、円滑に進むように自分達の活動をテキパキ行い、子供達の活動の準備をし、先のことを考えなければならなかった。また、バックアップ側は知っている情報があるが、班付き側知らない情報があるという、大学生同士の連携が十分にできなかった。そこが今回の課題点なのではないかと痛感した。
今回の活動を通して、子供の素直さや無邪気さ、自然のなかでできること、バックアップの大切さや大変さを学ぶことが出来た。協調性、自主性、コミュニケーション能力、創造力、臨機応変に対応できる能力、とっさの判断力、忍耐力、このような能力を今後の人生で役に立てるように活用していきたい。

大蔵村の生活と伝統の継承

活　動　状　況

○実施市町村：大蔵村

○講　　師：地域住民の方々

○訪　問　日：令和元年 5 月 25 日(土)～26 日(日)、6 月 1 日(土)～2 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部 4 名、医学部 3 名、工学部 4 名、農学部 3 名　　以上 14 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】５月２５日（土）	【１日目】６月１日（土）
8:00　山形大学発 10:00～10:15　赤松生涯学習センター着 オリエンテーション 10:15～10:30　四ケ村の棚田へ移動 10:30～12:00　ほう葉めし作り・棚田田植え体験 12:00～13:30　昼食・移動 13:30～14:30　地域ぐるみの棚田保存活動 14:30～14:40　男沼・長沼へ移動 14:40～15:40　里地里山動植物生息調査 15:40～16:00　肘折温泉へ移動 16:00～17:00　温泉入浴・休憩 17:00～17:30　赤松生涯学習センターへ移動 17:30～18:30　夕食 18:30～18:45　休憩 19:00～20:30　合海田植え踊り体験 22:00　消灯	8:00　山形大学発 10:00　赤松生涯学習センター着 10:00～10:30　オリエンテーション 10:30～11:30　笹採り 11:30～12:30　昼食 12:30～17:00　村の歴史と文化（合海～肘折） 17:00～17:30　赤松生涯学習センターへ移動 17:30～18:00　休憩 18:00～19:00　夕食 19:30～20:30　レポート記入 22:00　消灯
【２日目】５月２６日（日）	【２日目】６月２日（日）
7:30～ 8:30　朝食 8:30～ 9:30　準備 9:30～10:00　肘折へ移動 10:00～11:00　肘折温泉街散策 11:00～12:00　地蔵倉見学 12:00～13:00　昼食 13:00～14:00　肘折温泉の泉質 14:00～14:30　赤松生涯学習センターへ移動 14:30～15:30　レポート記入 16:10～　赤松生涯学習センター発 18:00　山形大学着	7:15～ 8:30　朝食 8:30～10:00　笹巻き作り 10:00～12:00　合海田植え踊り見学 12:00～13:00　昼食 13:30～15:30　レポート記入・村レポート提出 16:00～　赤松生涯学習センター発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Sさん

4日間のフィールドラーニングで、私は多くのことを学ぶことができました。私たちを受け入れてくださった大蔵村の皆さんに感謝したいです。

私は、大蔵村の魅力として、都会にはないつながりを感じました。四ヶ村の棚田での田植えでは地域の方々が田植えをしていました。皆さんが親しく話しながら田植えに参加しているのを見て、ここまで親しいコミュニティがあるのかと驚きました。また、合海田植え踊りを見学するときに、教育委員会の方が「次の家は○○さんの家だな」と、次に踊りを踊る家について確認しているときも、私にとっては驚きでしかありませんでした。役所の人、保存会の人、合海地区の皆さんが一体となって活動を行っているのだなと思いました。私が地域の魅力としてつながりを挙げたのは、私が住んでいるところが東北地方でも都会と言われる市だからです。そこでは多すぎる人口のため、ひとと人とのつながりも希薄だし、コミュニティが広すぎるようなところがあります。また、私は「村」と聞くと、自然が豊かということのほかに少子高齢化や後継者不足、過疎化といったマイナスのイメージが強かったのですが、コミュニティが狭いからこその強みを知ることができました。しかし、棚田を通したつながりも、やはり後継者不足の問題がありました。活動を通して感じた魅力も実は課題と隣り合わせになっていることを知りました。そのために私たちのグループでは、まずは大蔵村のことを知ってもらうことが重要だと考え、自然にあまり触れあう機会の少ない、都市部のこどもたちに、今回私たちが体験したようなプログラムを体験してもらうという案が出ました。こどもたちに棚田での田植えや動植物生息調査を体験してもらって、大蔵村の自然や産業についてかんがえる機会を持つことが必要だと思います。紙面やネットだけでなく実際に活動することで、大蔵村のことについて考えてくれる人が増えると思います。今回私は、大蔵村に行って良かったと思っています。もともと座学だけではなく実際に何か現地で活動する機会がほしいと思って共生の森もがみに参加を希望しましたが、今回のフィールドラーニングを通して現地の人の話を聞いてその中で課題を見つけ、自分なりに考えることが大学での学びで重要なことだと気付きました。このことを心に留め、今後の学習に生かし、さらなる成長につなげたいと思います。

人文社会科学部　Kさん

今回、計4日間の大蔵村でのフィールドワークを通して、身をもって体験することでしか感じることのできない、気づくことのできないものにたくさん触れることができたと感じる。

最も印象に残っている体験は、四ヶ村の棚田での田植えと、合海田植え踊り体験である。人生初にして念願の田植えであったこともあり、泥の中を歩く感触や苗を植える難しさは忘れられないものになった。また、伝統である田植え踊りの言葉の意味や起源を知るだけでなく、実際に教えていただきながら踊ったことで、地域における伝統の意味を実感することができた。

その他にも、大蔵村の方々と交流しながらたくさんの体験をさせていただきながら、地域の持つ魅力と課題、解決策として提案できることは何かについて考えた。

地域の魅力というのは大きく分けて、地形や景観、温泉などの観光資源等の自然が関係するものと、伝統や歴史、恒例行事等の人が関係するものの2つがあると考える。

大蔵村は、2つが密接に関係しているところが最大の魅力であると感じた。どの体験でも必ずどこかに自然とのつながりがあり、人間と自然との関わりがはっきりと感じられた。

課題としては、過疎化、少子高齢化といった、現代の日本の多くの地方地域でみられる問題が挙げられると考える。そしてそれは棚田の保持が難しくなっている現状にもつながっていて、簡単には解決することができない大きな課題になっている。

これらの課題に対する解決策として、私は、デジタル・デトックスツアーを提案する。これは、スマートフォンを使いすぎる現代の人たちに向けたものであり、ツアー中はスマートフォンを回収して使用できない環境の中で、五感を使った活動などが行われる。大蔵村では自然と触れあう活動がたくさんできることから、このツアーに向いているのではないだろうか。また、大半の人がデジタル疲れの状態である大学生に向けたツアーなどで、若い世代の人たちが大蔵村を訪れることで、ツアー後にSNS等で村の魅力が広まることも期待できる。

しかしグループメンバーでの話し合いを通して、村を訪れる人が増えても移住を考える人がいなければ過疎化問題も少子高齢化も解決することができないことに気づいた。やはり、地方での人口減少は簡単に解決できるものではないことを改めて感じた。

活動全体を通して、簡単に答えのでないことを考え続け、ディスカッションを重ねたことで、自分はもっと広い視野を持つことが課題であると感じた。ここでの学びを必ずこれからの大学での学びに生かし、成長していきたい。

人文社会科学部　Kさん

私は大蔵村での4日間を通し、様々な魅力と問題に気づくことができた。

大蔵村には想像以上に多くの魅力が詰まっていた。特に記憶に残っているのは棚田だ。バスを降りると一面に広がる棚田光景は素晴らしいものだった。着いてすぐ子供たちと行った田植え体験では農家の方々の苦労が身に

染みて分かった。また、終わった時の達成感や同じ姿勢で一つの作業を続ける根気強さなど田植えという行為一つから様々なことを学ぶことができた。
しかしその後の食事会で園児減少により子供たちと行う田植えが今年で最後になってしまうという話を聞き、とても胸が痛んだ。座学では学べないこと、限られた環境でしかできないこと、そして地域の人とのつながりがもてる良い機会がなくなってしまうのは、大蔵村で生活していく子供たちにとってもったいないことだと思うので、近所の人や村内の知り合いなどに頼るなどして田植え体験を続けていってほしい。
現地に行って気づいたことは、村の人々はみな大蔵村で過ごしていることに誇りを持っているということだ。合海田植え踊りを指導していただいた際、講師の方が「大人になったら絶対やると決めていた。村の外に出たとしてもおどる時は必ず戻ってきてみんなでしている」と言っていたのを聞き、彼らは地元を愛していて、その大切な伝統を守り抜く使命を背負っていることが伝わってきた。その地元愛が大蔵村にあふれているからこそ外部からきた私たちも沢山の魅力を感じることができるのだと思う。このほかにも食事を作ってくださった方や講師の先生方、たくさんの人が嬉しそうに私たちに大蔵村の良さを教えてくださった。パンフレットやホームページを見ただけではわからない魅力をたくさん知ることができた。
だからこそ私は今のままではいけないと考えている。村に人が来なくなり温泉や棚田が消えていく可能性があるかもしれない、そして棚田を整備する人が消えてしまえば山形全体に悪影響が出てしまうことを聞き、どうにかして大蔵村に人を呼ばなければならないと感じた。魅力に気づかれないまま村が衰退していくのは避けたい。そこで私はPRに力をいれることを提案したい。先ほども書いたが、大蔵村には現地に行って初めて気づく魅力がたくさんあると分かったので、これからはホームページの情報量を増やし見やすいデザインにするなどして、外部からの興味や関心の目を増やしていくとよいのではないだろうか。
このプログラムは他では体験できない素晴らしいものだった。大学生である私たちができることはほんの限られたことだとは思うが、その出来ることは何かを探し、お世話になった村の方々に恩返ししたい。メンバーの皆でまた大蔵村を訪ねたいと思う。

人文社会科学部　Hさん

今回の大蔵村でのフィールドラーニングで、様々なことを体験させていただきました。そして大蔵村の生活や歴史にも触れることができました。4日間の活動を通して村の現状を知り、多くのことを考えるきっかけとなりました。
　棚田での田植え体験や肘折温泉街散策、笹巻き作り、村の歴史と文化についてのお話をその場所に行って聞いたりして、私が一番感じたことは、人々の温かさです。大蔵村を大切に思い、来る人を拒むことなく迎えてくれる、このような温かさに触れることができました。また、合海田植え踊り見学では、村の中でのつながりが強いことも感じました。一軒一軒を回って踊りを披露するということは、人々の関係性が良好でないとできないことです。そして近隣付き合いが希薄になっていると言われている現代で村全体が一体となってある行事を行うということは素晴らしいことだと思います。
　4日間の活動の中で見えてきた大蔵村の大きな課題は人手不足・後継者不足ですが、これらを解消するための田植え踊りや笹巻きなどの伝統、棚田や肘折温泉などの村の大きな特徴となるものを外に発信しきれていないことです。このような村があるのだということを外の人に知ってもらわなければ、せっかく棚田や田植え踊り保存会が発足していても、また棚田オーナー制度があっても新しく人を呼ぶことは難しいと思います。大蔵村のことを全く知らない人の興味を引き付けるものが重要となってくるのではないかと考えます。
　この課題を解決するために、まずはウェブサイトを工夫する必要があります。大蔵村について何か情報を得るときに一番目にする機会が多いのが年齢を問わず村のホームページだと思うからです。見てもらいたいところをピックアップされてはいますが、写真のあるもの、ないものがあり文字だけの説明だけでは分かりにくい部分もありました。写真だけでなく動画を載せるとより具体的な動きが分かって良いと思います。
終わりに、初めて体験したり聞いたり食べたりしたものが多くとても新鮮に感じた4日間でした。そして私の地元についても考えるきっかけとなりました。村づくりや伝統の継承など今回の活動の中で得たことを今後の大学生活につなげていきたいと思います。

医学部　0さん

　私は今回の大蔵村の四日間のフィールドラーニングを通して、普段の生活では決して学ぶことのできないたくさんのことを学ばせていただきました。また、そのこ

とからいろいろなことを考えさせられました。

まず、初日の「地域ぐるみの棚田保存活動」と称して行われた活動では、棚田保存活動の当事者である農家の須藤さんに直接質問してお話を伺い、棚田保存だけでなく、米農家そのものの深刻で厳しい現実を感じました。お話の中で最も印象的だったのが、須藤さんが何度もおっしゃっていた「コメはもう主食ではなくなってきている」という言葉でした。また、棚田米のPR活動をしたり、オーナー制度を取り入れたりした結果について質問した際に、「一時的に販売量は増えるものの、それを継続するのが難しい」「契約している人はいいが、そうでない人に継続して買ってもらうのは難しい」といった切実な声をきいて、厳しい現状が伝わってきました。本当に大変なのだなと感じました。また、このような問題は、大蔵村だけではなく日本のいろいろな場所でも存在していると思いました。

大蔵村の伝統料理の「ほう葉めし」と「笹巻き」を実際に食べてみて、ご飯にほう葉、笹の香りがついて、きなこを付けて食べるととてもおいしかったです。笹巻きは、私が小さいころから祖母に作ってもらって食べていたので、親しみがありました。「ほう葉めし」と「笹巻き」はどちらも抗菌作用、乾燥防止の役目をもつ葉に米を包んだもので、長く保存できるようにして農作業にもっていって食べる習慣があったのだなと思いました。健康を損ねるリスクのある保存料を使わずに長期間保存できるようにすることは、都会でも活用できるのではないかと思いました。

最終日の班ごとに大蔵村の魅力、課題、解決策を考察する活動をしました。私たちの班では、魅力では、肘折温泉、自然、人々のつながり、郷土料理、伝統行事があげられました。課題では、交通の便が悪い、少子高齢化、観光、ほかの棚田との差異化があげられました。解決策としては、都会の学生にも今回のような体験型学習をしてもらい大蔵村に触れてもらう、温泉ツアー、育児支援、農業体験、キャンプ体験、道の駅をつくる、移住者受け入れがあげられました。

大蔵村のように村おこし、地域おこしに力を入れているところは日本中にたくさんあり、どこも思考を練って頑張っているのだと思いました。しかし、それでも厳しい現実があるのが現状で、これらの問題を解決するには、県や国の協力が欠かせないと感じました。

医学部　Oさん

私は今回大蔵村で考えたことを述べていきたいと思う。大蔵村は人口3200人ほどの小さな村で、新庄駅からも車で約15分、山形駅から車で約75分、仙台駅から車で約110分、東京からに至っては約320分もかかるいわゆるドの付く田舎であるといえよう。我々が宿泊することになった生涯学習センター松ぼっくりも廃校になった小学校を生かしたものだということが明らかであった。本音を言ってしまえばこのような村は日本全国にごまんとあり、そのなかで大蔵村が生き残っていくことは、難しいだろう。その中でも自分の村を生かしたいと思っている人たちと出会えたことは行幸であったといえよう。村が生き残るのに必要なことというのは、他との差別化であると考える。その点に着眼して各活動を考えていきたいと思う。

その点で見たとき、棚田における田植え作業およびオーナーシップ制度というのは、まさしく差別化の一環であるといえよう。自分が実際に行って田植えをしたことのある田でとれたイネというのはその人にとって唯一無二の価値を持つといえよう。この点において、秋田や新潟といったコメどころのコシヒカリとは一線を画す価値が消費者において生まれるといえよう。棚田百選ということばも示すとおり、少なくとも棚田を売りとする村は百個あるわけだがそのなかで特別な価値をもつというのは絶対に必要なことであるといえる。

また、やはり都市部から離れた地域ということもあって非常に自然は豊かである。自然散策でいった森もしかり、ベランダからみた星々はプラネタリウムのように一面の星々が広がっていた。しかし、おそらくではあるがこの自然を売りにするにはあまりにも都市部からはなれすぎているがためにほかの村と差別化、優位化ができているとはいいがたい。

温泉街についても、数こそあれ非常に閑散としており、他の温泉街と比べても差別化に足る魅力があったとはいいがたい。各温泉はこじんまりとしており、湯舟の種類も豊富とはとても言えない。

上記のとおり、大蔵村が今後必要とするのはほかの村との差別化だ。交通の便において優とはいいがた以上これは絶対的に必要だ。何より都市部から遠すぎる。そのハードルを越えてなお生きたいと思わせる何かを大蔵村は創出していく必要があるだろう。

医学部　Kさん

とても楽しく、有意義な4日間を過ごすことができました。まず大蔵村の方々が私たちを温かく迎えてくださいました。たくさんのことを体験させてくださったり、丁寧に教えていただいたり、とても感謝しています。

私は、大蔵村の豊かな自然と歴史ある伝統を肌で感じるとともに、そういったものが金銭的な理由や、人手・後継者不足によって将来失われるかもしれないということを痛感しました。私は4日間という限られた時間だったから、棚田や肘折温泉などを単純に「きれい」や「美しい」という言葉が出るのかなと思っています。地元の方や、保全・PR活動に取り組んでいる方のお話はとても現実的で、正直かなり辛そうでした。何とかしたいと思っても大学生の私たちにできることはほとんどないです。しかし、より責任をもってこのプログラムに取り組むことで大蔵村に限らず同じような状況の地域のこと

をもっと心に留めておけるのではないか、４日間で何か解決策をだせるのではないかと思い、積極的に活動してきました。

最終日に大蔵村の魅力・課題・解決策を出し合いました。魅力は自然、棚田、温泉、人の温かさなどで、課題としては棚田のPR、後継者・人手不足、交通の便の悪さ、資金不足などがあげられ、私たちのグループでは後継者・人手不足の解決を目指した提案をしました。子供を増やしたり、若い家族の移住を促進したりすることは難しいと判断した私たちは若い世代ではなく、退職後の高齢者の移住を進める策を思い付きました。大蔵村の美しい自然の中で穏やかな老後を過ごしていただき、趣味の一環として農作業をしてもらえれば、ある程度の人手不足は解消されると思います。また、長期休暇の時などに子供や孫が祖父母のところを訪れ、大蔵村の歴史や自然に触れて大蔵村に興味をもってくれる可能性が増えます。村全体が大きな老人ホームのような役割をはたすこの案も一つの解決策として挙げられると考えました。

大蔵村を学びながら、私の地元である米沢市のことも同時に考えていました。今までずっと住んできたのに地元について知らないことが多すぎると痛感しました。私たちのような未来を担う若い世代がもっと知って、考えていかなければいけないと思います。私は大蔵村のプログラムに参加したことでそのことに早く気付くことができました。よかったです。

楽しみながら多くのことを学び、感じ、考え、とても貴重な経験を積むことができました。大蔵村を選んでよかったです。お世話になった方々、ありがとうございました。

工学部　Oさん

大蔵村で大変有意義な4日間を過ごせた。その活動記録を記していく。まず1日目。午前中に棚田田植え体験、棚田の保全活動の話を聴いた。田植えは小学生以来で、あの田んぼの中の生温い感じが懐かしかった。それに周りの景色がほぼ緑であり、ジブリでてくるような自然豊かな景色であった。保全活動の話は深刻な米の衰退の話が主であった。私は普段日常生活で米を食べており、自分以外も米は食べているものだと勝手に勘違いをしていた。今はパンやシリアル、パスタなど気軽に食べられる主食がいくつもあり、残念ながら米の衰退は仕方がないのかもしれない。午後には里地里山動植物生息調査をし、肘折温泉に入り、大黒舞いの体験をした。どれも貴重な体験であり、非日常的な日だった。2日目は人力車体験、地蔵倉見学、温泉の泉質の話を聴いた。中でも温泉の泉質の話は興味深かった。肘折温泉は身体にどのような効果があるのか？と治療効果のある温泉水は９タイプに分類出来るという話に興味を引かれた。これを肘折温泉のＰＲとして身体に良いことを大々的にいえば女性層から人気が出て、今よりも観光客が増えるだろうと思った。3日目は笹取り、そして大蔵村の歴史と文化について学んだ。笹取りは道路横に生えている笹をそのまま取った。私は水で汚れを取らないと使いたくないなと思いながら黙々と笹を取っていた。大蔵村の歴史は看板や神社をバスで周りながら話を聴いていた。4日目は笹巻き作り、合海田植え踊り・大黒舞いの見学をした。笹巻きはひもを使わずに笹、イ草で作り大変エコな食べものだ。イ草を笹に巻きつけるのは難しく、大蔵村の人に教わりながら作った。自分で作った笹巻きは大変美味しいものであった。踊りの見学はほんの1時間であったが、踊っている人は一日かけて100軒以上もの家々で踊りをしているという。地域の祭りは過酷だと思いながら踊りを見学していた。最後に班を三つに分けて衰退していく大蔵村はこれからどうすればいいのかを話し合った。私たちの班は定年退職した人をターゲットにして、第二の人生を大蔵村で過ごし、村を活性化しようとの案を出した。

この4日間は普通に生活していては体験出来ないものであり、このプログラムで米、村、伝統は衰退しているという事実を目の当たりにした。だからその問題を解決できるようにするために自分でやれることを見つけて、積極的に問題に取り組もうと思った。

工学部　Mさん

私は今回の活動で初めての体験をたくさんさせていただきました。大蔵村の方々のあたたかさ、現在の村の現状と課題、村の歴史、またグループでのコミュニケーションの大切さを学べました。この４日間を楽しみながら大蔵村について深く考えられたのも、私たちをガイドしてくださった方々のおかげです。

１日目の棚田の田植え体験後の質問に答えていただいた際、後継者不足の深刻さを目の当たりにしました。他にも高齢化とともに負の循環に陥ってしまっている事、最近ではお米が主食ではなくなってきてしまっていることなど、私たちには解決できないような課題、または解決するのに時間とお金がかかってしまうという問題点についても深く考えることができました。そして、棚田米のPR活動で棚田のオーナー制を広めていることを

知りました。このPR活動では私達にも協力できることがあるのではないかと私は考えました。大蔵村の自然の豊かさを最大限に生かし、まず棚田について興味を持ってもらえるようなPRの案をだしたいです。

そして、肘折温泉とその周辺の地域についての歴史と温泉の水質についての情報を多くいただきました。この際アクセスの悪さが１番の問題なのではないかと私は考えました。観光地として発展するにも資金不足という問題があることも分かりました。

これらの課題の解決策をだすため最終日の各班の話し合いで、私達にはSNSで発信することをまず考えました。発信力のある有名人の方に宣伝を依頼するという案や、外国人をターゲットにこの綺麗な棚田の魅力を伝え棚田のオーナーになってもらうという案もでました。そして私達の班で最終的に出した効果のありそうな案は、退職後の方々をターゲットにし、人生の後半を農作業により没頭できるような生活をしていただくというものです。この方々のお孫さんは時々大蔵村を訪れる事によって田植え体験ができるなどのメリットもあります。これからの発表で情報をわかりやすくまとめ、大蔵村の良さを最大限に伝えたいです。

工学部　Kさん

まず、４日間大蔵村での生活はとても楽しかったです。初日は子供や大人と一緒に田植えをしたり、農家の人の話を聞いたりと村の人との関わりが一番多かった感じがします。二日目は温泉街の探索で肘折温泉付近を歩き回りました。週をまたいで三日目は村の歴史について学んだり、高原から景観を眺めました。四日目は前日に採った笹を使って笹巻きを作ったり、合海田植え踊りを見たりしました。どれも印象に強く残る思い出です。しかし、そんな大蔵村は人口減少の危機にあります。

大蔵村が人口減少している理由は大きく２つ挙げられると思います。

１つ目は、農家など衰退です。初日の農家の人に聞きましたが、昔村には山菜採りがいて山の中に集落があったそうです。しかし、今は山菜採りはいません。また、農家の後継者のほうも不足していると聞きました。若い人がどんどん村から離れていくため、少子化や高齢化が加速していき人口が減り続けるのだと思います。

2つ目は村の文化をうまくほかの地域に伝えきれていないからだと思います。これも初日に体験しましたが、合海田植え踊りと大黒舞は村に伝わる伝統的な踊りです。それがほかの地区では知られていない模様でした。しかも、大蔵村でもごく一部の地区でしか踊っていないようです。村の伝統的な踊りなら後世に伝えたくなるはずです。それがあまりできてない気がして残念です。また、温泉ももう少しアピールできる村のスポットだと思います。

ではどうしたらいいのでしょうか。僕なりに考えた案は、まずホームページを立ち上げることだと思います。今のホームページを見てみると、少し内容が寂しすぎる気がします。大蔵村は面積自体は山形県内最小ではありません。ですが、ホームページの内容はそう多くありません。もう少し村の細かいことをこまめにアップロードすればいいと思います。例えば、この時期にどこでどんなイベントをしているかなどで注目を集めてみることがいいと思います。また、ホームページ以外では、外部から人を呼ぶために温泉ツアーや高原からの眺めを楽しむ企画があってもいいと思います。それで少しでも人が増えたら僕は嬉しいです。

最後に4日間とても充実した日々でした。この素晴らしい4日間を周りに伝えて大蔵村の良さを広めていきたいです。大蔵村の皆さん4日間ありがとうございました。

工学部　Sさん

今回の大蔵村で行われたフィールドワークでは沢山の思い出が出来また、多くのことを学べました。

今回の集中講義では他学部の人たちと関わりコミュニティを広げられたのと同時に時間の流れが心地良く、大変充実した四日間を送ることが出来ました。これから、この四日間を通じて学んだことを紹介しています。

具体的には、肘折温泉、歴史、、棚田があげられます。

主に肘折温泉では泉質や温泉の由来について、歴史では清水城址を訪れることで村の形成過程や松尾芭蕉の奥の細道で詠まれたとされる最上川沿岸について、棚田については農家が今、直面している課題について知りました。

それらを踏まえて大蔵村が抱えている過疎化や財政困難といった問題をどうアプローチをして解決していくか考えてきました。

そこから導き出された結論としては、やはり大蔵村と似たような状況である市町村、集落は日本にはごまんとあるため、そのためそれらと村と差を見出すためには差別化を図ることを最優先とするべきだと考えました。やはり東北地方の秘境とも呼べる位置に大蔵村が存在するため何か特別な魅力をPRしなければ村の活性化にはつながらないと考えます。

では、どう差別化を図るかと方法を考えたとき棚田のオーナー制の知名度を上げることです。そもそも大蔵村の棚田があることに関心を持たせることが最優事項だと考えています。そのため、オーナー制をPRすることで、まずら大蔵村について知ってもらえる第一歩となります。具体的な方法としては今日、急速な成長を見せているInstagramとTwitterに棚田の絶景や、星空、肘折温泉の写真を載せ、その中にオーナー制をの紹介を行えば消費者に知って頂けると思います。

以上が今回のフィールドワークを通して学び、考え、感じたことです。これ以降の日で、共生の森最上の発表会で班員と集まる機会が何回かあり、そこから、質の高い発表を作り上げることはもちろんのこと、大蔵村のさらなる発展を促す具体的な問題の解決策を議論していきます。

農学部　0さん

私は、4日間の大蔵村でのフィールドワークに参加してなかなかできない体験を多くさせていただきました。たった4日間という短い時間の中で大蔵村の魅力、人の優しさ、自然の美しさに触れることができ貴重な体験をすることができてよかったです。

まず、最初に行った活動は田植えでした。私は田植えが初めてではなかったのですが班の人や地元の方と話し協力して作業するのがとても楽しく、小さい頃に戻ったような懐かしさを感じました。そのあと、地元の方にお昼を食べさせていただき大蔵村の郷土料理を食べてとてもおいしかったです。一日目で大蔵村を好きになりました。最初は全く興味のなかった大蔵村の魅力に一瞬で引かれました。フィールドワークの前に少しだけ調べ、その時もいいところとは思っていました。しかし、それ以上に実際に足を運ぶことで写真や文字では伝わらない村の魅力に圧倒されました。２回目のフィールドワークではより歴史を知ることで村を深く知ることができた気がします。

4日間の活動で思ったことはもっと大蔵村に人が来てほしいということです。棚田、温泉、自然、アピールできる点は多くあると実際に行って活動してみて感じました。それと同じように大蔵村の方がPR活動を行っているというお話を聞かせていただきました。大学生ができることは限られていますが力になりたいと思いました。班のみんなで話し合い自然や棚田を活かした農業体験や最上地方全体でのバスツアー、高級老人ホーム、道の駅を置くなど様々な案が出てきました。私がこの中で一番村の魅力を一番伝えられるのは農業体験だと思いました。理由は農作業の中で自然、村の方の優しさに触れることができるからです。これは私が実際に体験した感じたことです。そのあとに温泉や郷土料理を食べる。これを大学生や高校生が企画し、行うことで地元の方のやる気につながり活気づくと思いました。私は将来農業の面から地元である青森県の活性化に貢献したいと考えています。今回実際にその地域の活性化や現在直面している問題について考える機会ができたことは将来の自分に役立ついい経験になりました。本当にありがとうございました。

農学部　Sさん

私が大蔵村の実習で考えたこと。それは、実際に足を運んで経験してみないと分からないことが絶対にある、ということである。それはどこか懐かしく美味しいごはんであったり、村の歴史を知る上で交通路として使われてきた最上川の渡し舟の衰退であったり、生々しい少子高齢化の進行として現実に現れる保育園の減少であったり、大蔵村の夜の星の美しさや肘折温泉で人力車を押してくださったおじいさんの若々しさや力強さであったり、村の伝統を伝えていく合海田植え踊りの村の人々の団結力であったり……。パンフレットやホームページに書かれていることを理解しただけでは、私の思っていたものとは格段に情報量が異なっていたことを実感した。例え情報を沢山持っていたとしても、実際に話すことでしか得られない貴重なものが、確かに大蔵村にはいっぱいあったのだった。私たちを受け入れてくださった村の方々には本当に感謝しきれない。

それにしても私たちは、こんなにも満ち足りていて豊かさに富んでいる世界を、現代の色眼鏡を通してでしか見ることが出来ないというのは本当に勿体ない。交通の便が悪い、お年寄りしかいない、近所にコンビニがない。それらは現代の塗り固められた価値観によって、田舎は不便で何にもないところだ、と勝手に判断されてしまうことを始まりとする。しかし、実際に暮らす人々にとっては必ずしもそうではない。見方を変えれば、いつでもすぐそこに身近な遊び場があって、想像力に富んだ学べる場所があり、工夫すれば事足りてしまうという便利な環境がある。それなのになぜ人は不便だというだけで田舎を去ってしまうのか。皆が気づかないだけで、現代の価値観や世間一般の考えというものがいかにして田舎への流入人口を減らしているのか、というところに人間の単純な思考の恐ろしさを知る。充実などいくらで

も自分で作り出せるというのに、なぜ人は簡単に手に入れられるものばかり欲し、それが当たり前だと思うようになってしまっているのだろう。

もちろん、私はそれでいいとは思わない。しかし、村の存続が危ぶまれてしまう未来はそう遠くないのが現実である。私も可能な限り、この貴重な実習をもとに活性化の波を推し進めていく機会があれば、今後も様々な形で活性化に繋げられたらいいと思った。また、将来は地域おこし協力隊というのも考えてみたいなと思えるようになった。今回の実習では、人生経験的にも本当に多くのことを学べた。最後に、大蔵村の方々、四日間ありがとうございました。

農学部　Nさん

この4日間のフィールドワークで、実際に現地に行ってしか得られない情報を多く得られました。インターネットで見る大蔵村よりも、自分の目で見る大蔵村の方が魅力的で、自分の予想を超えていました。一方で、大蔵村には問題点が多くあって、解決するのが難しいということも分かりました。

田植えをするのが初めてだったので、棚田田植え体験はとても貴重な経験となりました。棚田は景観が美しいのですが、維持するのにコストがかなりかかる、面積が小さい、など問題があります。地元の農家さんの話によると、棚田は普通の田んぼの数十倍コストがかかるそうです。また、棚田は山間部の高齢化地域にあることが多いため、後継者がいないと言っていました。さらに、現代の日本は米離れが進んでいて、主食がパンに変わっているそうです。米の消費量が少なった今、棚田を保全するのには努力がかなり必要です。これらの問題を解決するために、東京でのPR活動やオーナー制度の導入が行われています。オーナー制度を導入することで、大蔵村のことを知ってもらえる上に棚田米を買ってもらえるので良い制度だと思いました。大人になったら、棚田のオーナーになってみたいです。

田植え踊りは、この4日間で経験したことの中で一番伝統を感じました。田植え踊りをやっている人は若い人が多くて、後継者不足を感じませんでした。家を一軒一軒回って踊るというのは、村人同士が信頼しあってないとできないことだと思いました。他の村にはない伝統を大切にしてほしいです。

食、観光、伝統文化など、様々な面で魅力を感じることが多かったです。自分の地元には笹巻きや山菜料理のような伝統食がなかったので、大蔵村に来て初めて食べました。大蔵村には小学校、中学校が一校ずつあるので、学校給食としてそれらの伝統食を提供すれば経済面で少しは潤って、さらに伝統が継承されていくと思いました。観光では肘折温泉が魅力的で、飲める温泉に入るのは初めてだったので新鮮でした。肘折温泉街をみんなで協力して作っていくために、旅館と売店を分けていることに感銘を受けました。

大蔵村の問題は、観光資源があるのに上手に生かしきれていないことと、交通の便が悪いことだと思います。他の村と差別化ができていないので埋もれてしまっていると思います。それらの問題を解決するために、富裕層高齢者の老後の人生を送る場所として開発したり、アニメの舞台になるように誘致して聖地にする、などをすれば良いと思いました。自分達にできることは、大蔵村で学んだことを世間の人に伝えることだと思うので、発表会やSNSで伝えられるようにしたいです。

鮭川歌舞伎今昔物語～地歌舞伎の歴史と未来を考える～

活　動　状　況

○実施市町村：鮭川村

○講　　師：鮭川歌舞伎保存会　会長　佐藤　成一
　　鮭川歌舞伎保存会　座長　高橋　眞一

○訪　問　日：令和元年６月８日(土)～9 日(日)、6 月 22 日(土)～23 日(日)

○受　講　者：地域教育文化学部２名、医学部５名　　以上７名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】６月８日（土）	【１日目】６月２２日（土）
08:00　山形大学発 10:00　鮭川村中央公民館着 　　開講式 10:15　鮭川歌舞伎についての説明 10:45　鮭川歌舞伎定期公演準備（会場設営等） 12:00　昼食 13:00　鮭川歌舞伎定期公演準備（会場設営等） 　　練習見学等 17:00　鮭川村中央公民館発 17:30　羽根沢温泉着	08:00　山形大学発 10:00　鮭川村中央公民館着 　　2 回目の説明 10:30　川口、上大渕地区での聞き取り 12:00　昼食 13:00　鮭川村中央公民館着 　　石名坂、京塚地区での聞き取り 15:30　鮭川村中央公民館着 　　まとめ、史料研究 17:30　鮭川村中央公民館発 18:00　羽根沢温泉着
【２日目】６月９日（日）	【２日目】６月２３日（日）
08:30　羽根沢温泉出発 09:00　鮭川村中央公民館着 　　歌舞伎化粧、着付見学 11:00　定期公演受付等手伝い 12:00　昼食、鮭川歌舞伎見学 16:00　鮭川村中央公民館発 18:00　山形大学着	08:30　羽根沢温泉出発 09:00　鮭川村中央公民館着 　　活動のまとめ ※追加で聞き取り等必要な場合はこの時間を使う 12:00　昼食 13:00　活動のまとめ 15:00　感想発表 15:45　閉講 16:00　鮭川村中央公民館発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

地域教育文化学部　Sさん

・定期公演に参加してみて

私は実際に役者の一人として鮭川歌舞伎定期公演の舞台に立たせていただいた。練習や本番を通して感じたのは、鮭川歌舞伎の演技のレベルの高さである。役者は全員歌舞伎が本業ではなく他に自分の仕事がある人がほとんどである中、公演の本番一ヶ月以上前から毎晩稽古を重ねるそうだ。立ち方や声の出し方、台詞の言い方など細部に至るまで座長さんが指導している。舞台で演技を目の前で見たときは、気迫溢れる中に丁寧さもあり、役者さん一人一人の鮭川歌舞伎に対する愛情や伝統を守りたいという思いが感じられた。

・もがみを経て分かった鮭川の魅力

もがみに参加する以前は言わずもがな鮭川歌舞伎であると思っていたが、今となってはこれだけにはとどまらないと思った。まずは鮭川の豊かな自然と食べ物である。2回目のもがみでロードバイクでサイクリングした際、目の前に広がる田畑や地域全体を囲う雄大な山々が私をどこか懐かしい感覚に陥らせた。田舎にしかない独特で幻想的な雰囲気で心がリフレッシュされてくれる。また食べ物もなめこや鮭といった鮭川でとれた食材が中心で、旅館では新鮮で美味しい料理を楽しんだ。そして私がもう一つ魅力に感じたのは、村の絆の深さである。そう考えたのは定期公演の楽屋の中である。役者さんはもちろん、子供歌舞伎の子供たちや、保存会のご高齢の方、そのお孫さんやご両親の方、皆が和気あいあいと楽しそうに公演の準備をしていた。鮭川では何気ない風景なのかもしれないが、若者や子供が高齢の方と普通に喋ったり、大人の方が自分の子供に限らず遊んであげたりお世話をしてあげているという光景が、私にとっては涙が出そうな程嬉しく感じた。都会で生まれ育った私はこのような地域性にずっと憧れていた。この絆の深さというのも鮭川歌舞伎が250年という長い月日の間続いてきた理由なのだろう。

・鮭川村の課題・考察

鮭川の課題は知名度の低さである。上記でも述べたとおり、鮭川歌舞伎というのはとても本格的で、東京の歌舞伎座に負けないくらい素晴らしいものである。しかしそもそも歌舞伎というもの自体があまり人々の生活の中には浸透していない。まずは「歌舞伎は少しとっつきにくい」というイメージを払拭するために、子供歌舞伎の公演を鮭川だけに限らず山形県内各地の小学校で行ってみてはいいのではないかと考えた。子供でも分かるような内容の演目であれば誰が見ても理解できると思うし、将来歌舞伎をやりたいと思う子も出てくるかもしれない。後継者や費用の問題もあるがいずれにしてもまずは山形県内での鮭川歌舞伎の浸透を最優先にして、県全体で支援や応援をしていくべきであると思う。

地域教育文化学部　Kさん

1. 鮭川歌舞伎の定期公演に参加してみての感想

地歌舞伎というものがどのようなものなのかを知らず、また、保存会の人々は働きながら歌舞伎を保存していると事前に調べていたため、演技を仕上げるのは大変だろうと思っていたので、想像以上の技術の高さと完成度に驚いたと同時に感動した。また、地域の人々の関係が深いことや、保存会の方々の情熱が伝統芸能を守っていることを痛感した。

2. 調査研究でわかった鮭川歌舞伎の過去

川口芝居は、村社・八幡神社で行われていた。
上大淵芝居は、住吉千手観音で行われていた。八鍬銀七（後に、市川銀十郎の名をもらう）が、市川団十郎に弟子入りを願い入れ、上方で修業をし、地元に持ち帰る。貴重な台本は多数残っているが、書いた本人が自分に伝わるように書いているので、実質的には口承文化であり、体の動きやセリフは見聞きで覚えていたそう。
京塚芝居は、愛宕神社で行われていた。土を盛り上げて作った土舞台の周りに、長木を組んで骨組みを立て、萱を編んで作った大垂（おんだれ）を被せていた。また、幕の開け閉めも行っていた。観客は御座に座り、食べ物や酒を持ち込んで楽しんでいたようである。出店も出ていたことから、娯楽性が窺える。当時は、指導者がおり、世代間に伝えていたそう。
石名坂芝居では、戦時中に徴兵などで人が減ってしまい、昭和21年に再開されたが、芝居が難しいことと、人員不足により、青年団活動という踊りに切り替えられていき、最終的には昭和31年に解散となった。現在の鮭川歌舞伎は、京塚芝居が主となっている。

3. 鮭川歌舞伎の長所

4つの芝居が集まったことで衣装が豊富であり、残っている台本も多い。熱意のある人が取り入れたうえに、

現在受け継いでいる方々にも情熱がある。戦争という困難があっても途絶えなかったことと、貴重な道具が残っていること。鮭川村という、地域の方々の関係が深い地で、娯楽として根付いているところ。

4. 鮭川歌舞伎の課題

衣装や道具が多い分、それらのメンテナンスに人員も費用もかかる。指導者・義太夫の技術は、困難ではあるが、後継していかなければならない。過去に芝居をしていた神社に人の手が加えられておらず、歌舞伎自体の保存に対して、起源の地も守っていければ良いと思う。

医学部　Iさん

1. 学んだこと

戦前に発足した鮭川歌舞伎は戦争等により一時中断しながらも、地元住民によって長く大切に継承されて今に至る。かつて豊作などを願う神社への奉納を起源として始まったが、当時使用されていた神社や舞台は現在では使用されておらず、跡地だけが残っている。

川口、上大渕、京塚、石名坂の四か所で別々に発足した歌舞伎を統合し、今の鮭川歌舞伎が成り立っている。鮭川地域に歌舞伎伝承された地区が密集したのは、川と文化から生活が生まれており、川というものに対する文化が伝わる道筋があるからである。鮭川村は最上郡の最北に位置し、最上川の支流である鮭川に沿って市町村が形成された。川を通して最上川本流の中央の文化が鮭川村に入り込み、郷土芸能の定着が図られた。このような支流に根差す文化には地元住民によって何百年も継承され続けるものがあり、紅花など最上川本流のみのハイライトが当たりやすい文化とは異なる存在意義を発揮している。

2. 課題と解決策

歌舞伎の担い手の後継者不足が大きな課題となっている。また着物やかつらなど、歌舞伎の衣装は高額なものが多く、その費用を村からの援助や地元住民の捻出によって賄っているため財源の不足も課題の一つである。これらの課題解決のためにも、鮭川歌舞伎の知名度を上げることが第一の目標であると私たちは考えた。

知名度向上のプランとして、芸工大の学生と協力して鮭川歌舞伎を題材にした絵本や歌舞伎メイクのビデオを作成し多くの目に触れてもらうこと、鮭川歌舞伎にちなんだグッズを増やしお土産を充実させること、また「会いに行けるアイドル」として美形の歌舞伎俳優である地元住民との交流の機会を設けることなどを考えた。

また、鮭川歌舞伎は公演に合わせて稽古や準備を行うため、歌舞伎にまつわる活動が休止する期間が一年に何度かある。それを考慮し鮭川そのものの知名度を上昇させるため、実際に自分たちが経験して素敵だと感じたロードバイクを用いた村内のサイクリングの実施や、広大な田んぼを生かした田んぼアートを行い、有名人と提携し彼らの顔をデザインすることで、鮭川と地理的に離れた人々にも多く鮭川村を知ってもらう機会を提供できるのではないかと考えた。

3. 感想

郷土と伝統芸能の密接な関わり合いを間近で体験した初めての機会だった。地域住民の文化に対する愛着や、文化に見出す価値の高さを実感することができ有意義であった。鮭川歌舞伎は郷土文化の一つとして、公演料を取らず地元住民の有志で毎年開催されている。それを行うのがどれだけ大変で労力を要することか、一回目のフィールドワークで歌舞伎の運営に携わった際に痛感した。二回目のフィールドワークでは鮭川歌舞伎の過去の姿を知る年配の地域住民の方々から話を伺い、方言を聞き取るのに苦労したが、少しずつ姿を変えながらも郷土文化の良い部分を受け継ぎながら進化する鮭川歌舞伎の片鱗に触れた。指定文化財に登録された鮭川歌舞伎だが、その魅力を知る人はまだまだ少ない。都市部に人口が集中する現代社会で、こういった地域に根差す文化の素晴らしさをどう発信していくべきか模索するのが面白かった。

医学部　Tさん

1、鮭川歌舞伎に参加してみての感想

鮭川歌舞伎を鑑賞し、さらにスタッフとして運営に携わる中で鮭川歌舞伎が現代まで長年受け継がれてきたのは、鮭川村の風土に大きく関係しているのだと感じた。日本全国を見渡せば、伝統的な芸能が存在した土地は多くある。しかし、その中で現代まで脈々と受け継がれているものはそう多くはない。鮭川村では村民同士の距離が近く、地域のコミュニティーが密であると感じた。公演中の様子について言えば、舞台に多くの観客がおひねりを投げ入れたり、掛け声をかけていたりと観客側からも歌舞伎を盛り立てようという意欲が感じられ、村民全体で鮭川歌舞伎を愛しているのだと思った。こうした村民の姿勢なしには現代まで地歌舞伎を保持するのは困難であっただろう。また、こども歌舞伎教室を立ち上げたことにより、村の多くの子供たちが地歌舞伎に触れる機会が生まれたことも見逃せない。これによって実際に大人になって鮭川歌舞伎に参加したという方もいらっしゃり、村の歌舞伎を存続したいという思いがひしひしと感じられた。

2、鮭川歌舞伎の課題

歌舞伎に使用される道具や衣装はどれも高価なものばかりで、きちんとした管理も必要なため多くの経費がかかっている。現在は村からの助成金などにより運営を行なっているものの、県の指定文化財に指定されたことで他市町村や他県への出張公演も増えたので決して財政的に余裕があるわけではない。さらに、近年こども歌舞伎に参加する男児が減少しており、将来の鮭川歌舞伎の担い手が少なくなってしまうのではないかと懸念されている。

3、鮭川村の長所

鮭川村には鮭川歌舞伎にとどまらず、多くの魅力的な部分が存在した。まずは豊富な自然である。一面に広がった田園風景や、1000年以上の歴史を有する杉の木など見ているだけで気持ちを安らかにしてくれる。また、食べ物が非常に美味しく、村内で採られたきのこや果物、そして「鮭」などを楽しむことができる。そして何よりも村民の方々がとてもあたたかい。いつでも優しく村や歌舞伎について語ってくださり、旅館での対応も非常に心に残っている。

4、まとめ

フィールドワークを終えた今、もっと多くの方に鮭川村の魅力を知ってもらい、足を運んでほしいと感じている。中でもやはり鮭川歌舞伎を一度は鑑賞していただきたい。先述の課題の克服方法を含め、このプログラムに参加した私たちにできることを考え、あたたかく迎えてくださった鮭川村の方々に還元していければと考えている。

医学部　Sさん

1. 感じたこと、学んだこと

今回、私がこのフィールドラーニングに申し込んだのは歌舞伎という伝統芸能に興味を持っていた、実際にこの目で歌舞伎を見てみたかったという希望が強かったためである。これまで地歌舞伎というものがあること自体知らず、歌舞伎というのは東京で行っていて数限られた人のみが役者になれるというイメージを持っていた。しかし今回のフィールドラーニングを通していかに鮭川歌舞伎が鮭川村の人たちに親しまれているのかを肌で感じることができてとても感動した。

初回2日間は年に1度の定期公演会の準備、運営を主に行った。保存会の方のお話も聞き、改めてこのような伝統を維持していくことの大変さを感じた。観客の呼び込み、後継者の育成、お金。一つの鬘には約30万円かかるらしい。高いことの想像はついていたが予想していた以上で驚いた。当日には様々な方々からご祝儀をいただいており、また村の人たちが互いに「〇〇さん！」と話しているのを見て、村の一体感と村に愛されている歌舞伎であると思った。公演は予想以上で地歌舞伎がこれほど本格的だとは思っていなかった。子ども歌舞伎では子どもの保護者などがその場で子どもたちにリアクションもしており客と役者の距離の近さを感じた。そしてそれによって後継者の確保にも繋がっているというのは両者にとって良いことなので素晴らしいと思う。また当日は村の人だけでなく観光客も多く、初めて鮭川村に来たのだがほかにどのようなスポットがあるかなどを聞く人もいた。村の中だけでなく、外部からも人気があり、それは鮭川歌舞伎の強みだと思う。

2回目の2日間では主に聞き取り学習を通して鮭川歌舞伎の起源の歴史を学んだ。もともと四座あった鮭川歌舞伎、その実際の舞台を訪れてここで歌舞伎を行っていたのだと実感できた。座によってはもう話のできる人がいなかったり、もう台本などが残っていないところだったり、逆に今回台本を新たに見せてくださるところもあったりして改めて伝承することの大切さを感じた。

2. 課題の発見とそれに向けての取り組み

今回のフィールドラーニングを通して私たちはまず鮭川歌舞伎の弱みとは何かについて話し合った。四座の一つ、早口ではもう伝承できる人がいないということもあり、いかにして歴史などを残していくか、絵本などを作ってみるのはどうかという話し合いにもなった。また二回目の際にロードバイクに乗った経験がとても楽しかったことからロードバイクで四座を巡るという案や、役者と観客の距離が近い点を活かして定期公演の当日のパンフレットに役者の普段の仕事などのプロフィールを載せるという案も出た。これらの案を深めていき、企画を練っていこうと思う。

医学部　0さん

１.鮭川歌舞伎について私が感じたこと：現地での聞き取り調査を通じて、村を流れる「鮭川」が歌舞伎成立のキーワードであると感じた。交通の要所や運搬の拠点は川のかたわらにあり、古来文明は川とともにあった。鮭川で歌舞伎が発達したのも、そこに川があったからではないかという話は大変興味深く、また納得できるものだった。加えて、演者と観客の近さが鮭川歌舞伎の特徴の一つだと思った。講演の最中、客が役者へおひねりを手渡しする光景も見られた。もともと歌舞伎は大衆向けの娯楽で、現代の一般的な歌舞伎より庶民へ開かれたものであったと聞く。鮭川歌舞伎はその様相を色濃く残しているのだろうと感じた。

２.現状から見えた鮭川歌舞伎の課題：後継者不足と資金不足が最大の問題であると話を伺った。後継者問題については、20～30代の「次世代の担い手」はある程度いるものの、教える人材がいないため、特に深刻だということだった。

また歌舞伎の知名度の方が高く、鮭川村の知名度が低いことを、職員の方が問題点として挙げていた。歌舞伎の行われている場所について知られていなければ、客足も伸びにくいと思う。

３.課題解決のために：歌舞伎に限定せず、鮭川村そのものの知名度を上げることが最重要であると考える。村の魅力を日本国内・海外に発信し、村内と村外の人をつなげることで、鮭川歌舞伎と村外の人がつながり、歌舞伎の後継者不足や資金面の問題が改善されると考える。フィールドワークで村内の絆を感じた。このつながりの強さを、村外に広げることはできないだろうか。

具体案として、他市や他県に「出張鮭川村」のようなブースを作ることを挙げる。今回のフィールドワークでは演者として鬘や着物、化粧を体験した。ただ眺めるだけではなく、伝統文化の「体感」によって、鮭川歌舞伎に更なる興味がめばえ、今後の発表や事業案の作成に取り組む意欲が湧いた。また地方の物産展が都市で多くの賑わいをみせていることから、このような村の出張が伝統文化だけでなく村の名産品の発信にも有効であるといえる。

今回の活動で、ネットでは分からない事を現地で体験し、学ぶことの大切さを学んだ。現地の方々の人柄に触れ、話を伺わなければ知り得なかった事が数多あった。人手不足や資金不足の中、村外へ赴くのは難しい点があるだろう。しかし村外の人が、鮭川の魅力を「実際に肌で感じる」機会が増えれば、課題は大きく解決へ向かうに違いない。

医学部　Kさん

１．鮭川村と歌舞伎の継承について

今回のフィールドワークでは実際に鮭川歌舞伎に参加し、地域の方の話を直接伺ったことで鮭川村のたくさんの魅力を知ることができたと思う。一回目のフィールドワークでは実際にメイクをして舞台に立たせてもらうことができた。地歌舞伎と聞いて私が想像していたよりはるかに本格的な舞台で、村の人々の鮭川歌舞伎に対する熱意を感じた。鮭川歌舞伎は江戸時代におこり、第二次世界大戦あたりまで四座に分かれていた。戦争が終わり、衣装や台本も多くのものが損失している中で、地域住民自ら一座に統合した新しい形で歌舞伎を復活させようとした。地域の方が「一座に統合したことが伝統を引き継いでいくことだったと思う」とおっしゃっていた。現在も地区の小学生よる子供歌舞伎などの取り組みを通じて、後継者を育てようとしている。こうした自発的で柔軟な住民の働きかけこそが伝統を継承するために大切なことだと学んだ。

２．鮭川歌舞伎の課題・解決策

二回目のフィールドワークでは、鮭川歌舞伎の課題や解決策について話しあった。

・鮭川歌舞伎の弱みは県から補助金が出ないため村の財源で高額の衣装やかつらを賄わなければならない。

・20～30代の後継者はいるが、40代の方や、小学生の男の子で子供歌舞伎に参加する人が少ない。

主にこの2点が挙げられた。村内、村外の双方への知名度を高めることが解決につながるのではないかと考えた。村内での知名度を高めることは主に後継者育成につながる。小学生向けに鮭川歌舞伎の成り立ちについての絵本を山形の地元の芸工大生に協力してもらい作ることや、歌舞伎公演のパンフレットの役者紹介を充実させて、役者さんの普段の村民としての生活が分かるようなものにする等の企画が考えられる。一方、村外での知名度を高めるというのは、鮭川歌舞伎に絞らず、鮭川村自体の知名度を高めて、観光産業を充実させることによって村自体の財源を増やすことにつながる。鮭川村の自然を生かして、昔歌舞伎が奉納されていた神社をロードバイクで巡ったあと、歌舞伎公演を見るようなツアーのプランや広い田んぼを利用して、田んぼアートを作ったら話題になるのではないかという案も出た。今回のフィ

ールドワークで鮭川村には美しい自然、あたたかな地域性、おいしい食べ物など多くの魅力があることが分かったのでこれを活かした企画を考えていくことができると思う。

子供との触れ合いの場になり、子供にとっては地元の魅力に知り、お年寄りを敬うきっかけになる。私が戸沢村で感じたことの一つにお年寄りがパワフルなことがあったが、それは子供から活力をもらっているからではないかと思った。これは少子高齢化が進むこの地区で、その状況を逆手に取ったとても前向きな動きだと感じた。

私はこのフィールドワークで、もがみの問題点ばかり見つけて帰ってくるのではなく、良い点もたくさん見つけることが出来て良かったと思っている。今回実際に戸沢村を訪れてみて、少子高齢化が進んでいても、その状況をうまく利用してお年寄りの活気づけや、子供の教育につなげているのはこの地区だからできたのだと感じた。

戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生き様に学ぶ

活　動　状　況

○実施市町村：戸沢村

○講　　師：北の妙創郷大学　学長　菊地清一
乙夜塾　塾長　門脇憲一
古口地区自治　会長　寺内恵一

○訪　問　日：令和元年 5 月 25 日(土)～26 日(日)、6 月 22 日(土)～23 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部 3 名、地域教育文化学部 1 名、理学部 1 名、医学部 3 名、工学部 6 名、農学部 1 名

以上 15 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】５月２５日（土）	【１日目】６月２２日（土）
08:00　山形大学発 10:00　古口公民館着 10:15　開校式 11:00　座学（古口の歴史、共育活動等） 12:00　昼食 13:15　農作業体験（箒キビの作付け）、炭窯、メダカ池の整備等 17:00　入浴（ぽんぽ館） 18:30　夕食交流（地域の皆さんと） 20:30　振返り 22:00　就寝	08:00　山形大学発 09:50　古口公民館着 10:15　開会式 10:45　笹巻づくり 12:00　昼食（地域の皆さんと） 13:00　ほたる祭り準備、リハーサル等 17:00　夕食（そうめん） 18:30　ほたる祭り開会 19:45　ほたる祭り終了 20:00　もらい湯（地域の方の家で入浴） 21:30　振返り 22:30　就寝
【２日目】５月２６日（日）	【２日目】６月２３日（日）
06:00　起床、朝食準備（自炊） 07:30　朝食 08:30　前日の作業と同様 12:00　昼食（地域の皆さんと） 13:00　ほたる祭り企画会議 15:00　公民館清掃 15:20　閉会式 16:00　古口公民館発 18:00　山形大学着	06:00　起床、朝食準備、昼食用おにぎり作り 08:00　朝食 09:00　ほたる祭り後片付け 10:00　炭焼き体験、ピザづくり 12:00　昼食（おにぎり、ピザ、焼き芋） 13:00　ものづくり（わら細工） 14:50　公民館清掃 15:10　閉校式 16:15　古口公民館発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Iさん

私はこのプロジェクトの実習に行く前、参加メンバーとうまく交流できるか、活動の中で自分の意見を主張できるかがとても心配でした。しかし、前半の活動に参加してみると、班員はじめ、サポーターの先輩や地域の方々がとても温かく接して下さって、交流はもちろん意見交換も理想の形で行うことが出来ました。

そのような環境で臨めた前半では、初めに戸沢村についての歴史を座学で学び、その後農作業体験をしました。戸沢村の歴史に関して、昔は2年連続の冷害や浸水があり自然災害に悩まされたことや、困窮していたため娘の身売りが横行した時期があったということを聞いて、自分らの県内でこのような歴史を持つ地域があったことにとても驚きました。しかし、そのような歴史を持つことから、身につけるものを手作りで作る文化が発達し、「来る者拒まず」の精神が生まれたということを聞き、戸沢村の農村復興に対する強い意志を感じることが出来ました。

農作業体験では薪割りと屋根の補修をしました。私は今までどちらもやったことがなかったのですが、地域の方がお手本を見せて下さった際、自分も出来るだろうと思いました。しかし、いざやってみると言葉では説明できない感覚的なところに難しさがあり、プロの感覚の凄さを感じるとともにこの方々から様々な事を学びたいと強く感じました。

一ヶ月後の後半では、炭焼き体験、わら細工、ホタル祭りをしました。

炭焼き体験やわら細工では地域の方から方法を教えて頂いて実際にピザやわら細工を完成させました。

ホタル祭りは今回のプログラムのメインということで、実習前半から企画づくりを始め、それから一ヶ月間昼休みや放課後にみんなで集まって構想を練り、使用する物を作り、そして臨みました。準備は念入りにしてきたつもりでしたが、本番当日になってからも修正箇所が見つかり、不安は多くありました。また、時間配分や小さな子供を含んだ地域の方の反応なども気がかりで、不安要素が無くなることはありませんでした。しかし、本番は子供たちや地域の方が私たちのプログラムに興味を持って下さり、大きな盛り上がりを見せて大成功に終わりました。このことについて考えてみると、祭りのプログラムの随所で臨機応変に対応できたからだと思います。

今回のプログラムを通して、僕は村の伝統の素晴らしさと仲間と協力する重要性を学びました。これらの収穫はただ大学生活を送っているだけでは得難い物であるように感じられたので、今回のプログラムに参加して本当に良かったと思いました。

人文社会科学部　Sさん

私は今回、最上郡の戸沢村で計2回のフィールドワークを行ってきました。このプログラムを選んだ理由として、単純に農業体験やピザ焼き体験に興味を惹かれたのもありますが、過疎地域の現状と対策をこの目で見たいと感じたからです。なので、私はそれを意識して活動に臨みました。

第一回目のプログラムでは、午前中の座学から戸沢村の人口減少や水害、古くから庄内地方と最上地方を結ぶ水運の要であったなどの歴史を学びました。特に私が興味をもったのは、そうした問題を解決するために戸沢村が行なっている対策でした。戸沢村では子供と大人のつながりを増やし、村を活性化する政策が多々なされていて、高齢者の方が地元の小学校のクラブ活動に参加したり、農作業指導で学校を訪れたりと高齢者と学校の密接な関係を築き、過疎対策として国際結婚を行政主導で行なったりと、過疎地域の現状と対策を具体的に知る良い機会となりました。

そして、こうした戸沢村の政策に力添えをするという形で、学生主体の「ほたる祭り」を企画し、開催しました。ほたる祭りを開催するにあたって、まずは企画会議から始まりました。対象が主に小学生であるため、小学生向けのコンテンツを組むと同時に、私たちがこの企画で何を伝えたいかというコンセプトを掲げて、単純に楽しい企画で終わらないように案を練りました。その中で私たちが導き出したコンセプトとして「協力」を元に、学生と地域の子供達がペアを組み作成するスライム作りや、高齢者の方や会場にいる方全員が参加して行う○×ゲームなどを企画し、実施することになりました。2回目のフィールドワークまでの約一ヶ月間、私たちは定期的に集まり、企画成功に向けて入念に準備を整えてきました。そして当日では、二度リハーサルを行い、修正を重ね、迎えた本番には思っていた以上に最高の出来になったと感じます。

今回のフィールドワークではほたる祭りの開催を通して、企画することやそれを実施することの難しさを知りました。企画会議ではそれぞれが意見を出し合い、それを一つにまとめるのに時間がかかったり、当日までの約一ヶ月の間、具体的な内容を一つずつ丁寧に考えて、準備する大変さを痛感しました。こうした体験を大学一年生で経験できることはこれからの大学生活をより良いものにする上でも大切な経験であったと感じます。

人文社会科学部　Nさん

私は、5月の25，26日と6月の22，23日の2回にわたって戸沢村を訪れフィールドワークを行いました。最初は正直あまり「何を学びたい！」とかいう明確な目標を持たず、なんとなく参加してしまったという節がありました。しかし、戸沢村の方たちが私たちに多くのことを伝えよ

うとしてくださり想像以上に多くのことを学ぶことができました。まずは戸沢村の状況を知ることができました。戸沢村は、一般的にいわれる少子高齢化が加速している地域でしたが、多くの高齢者の方々がなんとか打開しようと希望を持って努力している現状は、まさにタイトルにふさわしい幸齢者の元気印を見ることができました。フィールドワークの内容としては戸沢村の方々と一緒に農作業体験を行い、高齢者の方々の熟練したスキルを見ることができたり、長年の生活の知恵などもまじまじと感じることができました。このようなスキルが将来役立つときが来るのだろうなと考えました。
また、私がびっくりしたのは食事です。昼食も夕食もとんでもない量のご飯が出てきて、後半は食トレのような感じでした。おいしかったけどきつくて一つの思い出になったと思います。
そしてこのフィールドワークのメインイベントはほたる祭りという地元の交流イベントの企画・運営でした。ほかのフィールドワークにはないように、1回目と2回目の間の一か月に何度もミーティングを行いほたる祭りを成功させるために準備を行ってきました。その中で仲間とのきずなも生まれ、仲良く楽しくフィールドラーニングを行うことができた要因になったのかなと思います。ほたる祭り本番当日のリハーサルでは、やはり最初からはうまくいかず、修正ポイントが多くありましたがピアメンターの先輩や高齢者の方のアドバイスをいただき、仲間の対応力のおかげで本番までに何とか修正することができました。ほたる祭り本番には多くの小学生やお母さん方、高齢者の方々に来ていただき最初はどうなるか不安でしたが、子供たちも高齢者の方々も意欲的に私たちの考えたイベントに参加してくれて、最後には子供たちの楽しかったという声聞けて非常に大きな達成感を得ることができました。このフィールドラーニングを通して自分たちで企画・運営を行いイベントを成功させる難しさと達成感を学ぶことができました。大人になっても絶対に必要になってくるスキルなので、この時期に感じることができたということに感謝したいです。そしてこれからの大学の授業に生かしていきたいです。

地域教育文化学部　Iさん
今回私が参加した二回の戸沢村訪問と約一か月の活動は、自分にとって多くの学びと喜びや達成感を与える貴重な体験であった。そしてこの活動は若者である自分たちにできること、高齢者の方だからこそできることがそれぞれ存在するのだということを考えるきっかけになった。
　まず、一回目の活動では、初めに村の幸齢者の方から戸沢村の教育への取り組みについて話をしていただいた。戸沢村では、地域の学校づくりに力を入れていて、幸齢者と子供のかかわりが大事にされていることがわかった。このような地域に貢献しようとする意気込みや、子供たちに受け継ぐべき技術・知識を持つ幸齢者の方々に感銘を受け、自分がこれから教育について学んでいくうえで貴重な話を聞くことができたと感じた。そして、農作業や薪割り、炭窯づくりでは一朝一夕にはいかないような長年培ってきた技術に圧倒された。同時にそのような活動を、コミュニケーションをとりながら教わり、仲間たちと共有し、汗を流した経験は達成感のあるものだった。そしてこのプログラムの大きな課題であるほたる祭りの企画では、一から様々な案を練り、「協力」というテーマを設けた。この話し合いで、スライムづくりと戸沢村についての〇×クイズを企画した。一人ひとりが意見を持ち寄り、よりよい企画ができた実のあるものとなった。
　一回目の活動後、ほたる祭りに向けて一か月の準備期間があり、そこでの時間はグループのメンバーとの交流の時間でもあった。企画や準備を通して、自分たちがするべきことを考えさせられると同時に今回のテーマである「協力」を自然と行えるよい時間だったと思われる。
　二回目の活動では、メインであるほたる祭りを行った。私は初め、この祭りが成功するかとても緊張していた。しかし、本番ではメンバー同士で助け合い、何より子供たちや幸齢者、自分たちも楽しむことができた。そしてスライムづくりや〇×クイズを通して子供と幸齢者のコミュニケーションを促し、私たちも戸沢村の方々と深くかかわることができた。この経験から、自分たちで物事を企画することの難しさと楽しさ、成功した時の達成感、仲間がいることの心強さを味わうことができた。
この全体の活動を通してもう一つ感じたことは、人とコミュニケーションをとりならご飯を共にする何とも言えない温かさだ。ご飯だけではない。さりげない時間の会話が私の心に強く残っている。戸沢村でのフィールドワークに参加できたからこそ体験できたものであると思う。この活動を通して得られた学びや貴重な体験、出会いを日々の糧にして、この学びをさらに深めていきたいと感じた。

理学部　Nさん
私たちのプログラムは、戸沢村の古口で二回のフィール

ドワークを行った。二回目の訪問の時にほたる祭りを開催する活動がメインの活動だった。一回目はほたる祭りの前段階として、戸沢村の知識をつけるとともに、幸齢者の方がたと親睦を深める活動を行った。一回目と二回目の間の一か月企画会議準備を行い二回目の訪問に挑んだ。二回目の訪問では、一日目にほたる祭りを行い、二日目には伝統的な炭焼き窯を使ったピザ作りと、わら細工体験をした。

ほたる祭りを企画するうえで、テーマを協力と設定した。現代の課題として、世代間交流の減少があげられる。その中で戸沢村では、世代間交流を促す活動が行われていた。ほたる祭りもその一環であり、世代間交流を意識するとともに、幸齢者から子供たちへの一方通行の交流ではなく、相互に親睦を深められるように、テーマを協力とした。また、私たち学生も参加することで得るものがたくさんあった。結果として、ほたる祭りはテーマにそった形で実行できた。プログラムとしてスライムづくりと○×ゲームを行った。まず、スライムづくりで協力して制作を行うことで一体感が生まれた。ただスライムを作るだけでなく、スライムを使って蛍を作ったため、達成感も生まれた。次に一体感が生まれた中で○×ゲームを行うことでさらなる交流が生まれた。特別ルールとして、子供たちが高齢者や、地域の人、学生に相談できるようにしたことで、子供たちから大人にアプローチをするという環境を作り出した。この活動で、学生を含め参加者全員が異なる世代と相互に交流ができた。これまでの戸沢村での活動では大人からアプローチしてやらせるという活動だったが、子供たちからアプローチする機会を作ったことで、相互に親睦を深められた。

私はこの、戸沢村でのフィールドラーニングに参加し実際に体を動かして活動することで、机に向かって勉強しているだけでは学べないことを学んだ。ほたる祭りの企画は一筋縄ではいかなかった。グループメンバーと議論し試行錯誤して考えたほたる祭りに、地域の方々が楽しそうに参加してくれた時はこの上ない達成感を感じた。学生一人一人の臨機応変な活躍と、地域の皆さんの協力があったからこそほたる祭りは成功した。一人では大変なこと、できないことも協力者がいれば達成できるということを身をもって体感したほたる祭りだった。

一か月前は赤の他人だったメンバーがフィールドラーニングを通して仲間と呼べるような存在となった。これは話し合いを進めていくうえでお互いに意見を伝え、それぞれが本気でいいイベントにしようとした結果だ。今後もこのような経験を大切にしていきたい。

医学部　Sさん

私たちのプログラムでは、戸沢村の古口地域にて、2回のフィールドラーニングを行いました。第一回は、古口地域の歴史について地域の方から講義して頂き、その後、農作業や炭窯の補修作業などを行いました。第二回は、ほたる祭りの開催・運営を行いました。

私は、このプログラムを始める前に、マイナスな感情しか持っていませんでした。私たちのプログラムでは「ほたる祭り」というイベントを企画・開催することがメインの学習のひとつなのですが、そこにかける時間、労力、失敗するのではないかという不安など、心配事を多く抱えていました。しかし、フィールドラーニングを通して、その不安を凌駕するやりがいや喜びに気づくことができました。多くの学びがあった今回の授業ですが、私にとって特に学びの多かったほたる祭りについて、重点的に書きたいと思います。

私たちは、第一回の後半で「ほたる祭り」の企画会議を行いました。ほたる祭りというのは、地域の方々に楽しんでもらえるイベントを学生たちで開催するものです。どうしたら子供たちに楽しんでもらえるのか、どうしたら高齢者の方々にも参加してもらえるのか。話し合いを進めていく中で、私たちの主催するほたる祭りのコンセプトは「協力」に決まりました。学生・高齢者・子供が共に考え、活動することで、異世代間の交流を深め、互いが互いの必要性を再確認しようというものです。そこから私たちは、スライムづくりと○×クイズを企画しました。スライムづくりは、学生を含めた参加者全員が共同で作業できるという点、作業が子供でもできる単純なものである点から決まりました。また、それぞれのグループでつくったスライムを、用意した台紙にひとつにまとめることで、大きなホタルの絵を完成させるという内容も加えました。多くの人が関わり、ひとつのものを作り上げるという体験を、子供をはじめとした参加者全員に提供できた点は、理想的な企画であったと感じました。○×クイズでは、子供しか知らない問題・高齢者しか知らない問題を出題することで、お互いに聞き合い、答え合う機会を作り出し、異世代間のコミュニケーションを促すことができました。

準備の過程は、議論と試行錯誤を繰り返すような決して楽なものではありませんでしたが、自分たちで企画したものを自分たちで作り上げる作業は、終わってみればこの上なく達成感のあるものでした。また、自分がしたことで誰かに喜んでもらえること、今回で言えば子供たちに「楽しかった！」と言ってもらえたことですが、すべてが報われるような気持ちになりました。仕事のやりがいというものを学べた気がしました。

今回のフィールドラーニングは、机に向かって勉強しているだけでは学べない多くのことに触れることができた、貴重な学びの機会になりました。

医学部　Kさん

私たちの班は戸沢村の古口に5月の下旬と6月の下旬に訪問した。1回目の訪問では最初に座学で戸沢村について学んだ。戸沢村は「学びのまち」を目指して様々なことに取り組んできた。地域の持つ教育力を学校へ、学校の

持つ教育力を地域へと動き始めた結果、「学校と地域の垣根が低くなった」という声が多く出た。また、この地域では高齢者のことを幸齢者と表す。幸齢者が放課後子供たちにワラ細工を教える「乙夜塾」を結成した。ところがワラ細工のワラの準備がなかったため、「田んぼの学校」を開校してワラの確保に努めた。その他にも「メダカの学校」、「山の学校」、「土の学校」も開校し、地域の人々の共同作業で学区内の里地里山を蘇らせた。私は2回の訪問を通して、古口の地域の方同士の強い繋がりを感じた。幸齢者の皆さんは地域の子供たちのことをよく知っており、気軽に話していた。人口が少ない村だからこそ、地域の繋がりは大切であると感じた。

座学の後は農業体験をした。杭打ちや炭窯の小屋の屋根の修理、薪割りを行った。どれも今までやったことがない事で、慣れるまでに時間がかかり身体が痛くなったが、他ではできない貴重な体験をすることができた。

1回目の訪問2日目は主にほたる祭りの企画を行った。私たちは今回のほたる祭りのテーマを「協力」とし、どのようなプログラムにすれば子供たちと幸齢者と私たちが協力し合えるかを考えながら話し合いを進めた。

2回目の訪問では最初に笹巻きづくりを体験した。ご飯を笹の葉に包んで結ぶ行程が予想以上に

難しかった。午後はほたる祭りのリハーサルをした。リハーサルをして新たな問題を見つけ、それを本番までに直すということを繰り返した。このような試行錯誤の結果、ほたる祭りは成功したと私は思う。スライム作りで私たちは地域の子供たちと協力してひとつのほたるの絵を完成させ、○×クイズでは子供たちと幸齢者の方々との協力を生み出すことができた。最後に、楽しかった人と聞いて、子供たちが「はい！」と元気に答えてくれたとき、とても嬉しかった。⑭はフィールドラーニングの中でも大変なプログラムだと最初は思っていたが、大変さを経験した分、喜びがとても大きかった。2回目の訪問2日目は炭窯でピザ作りを行った。炭窯は地域の方々が2、3日前から温めて下さっていたらしい。午後はワラ細工を作った。ワラを一本ずつ組み合わせて虫かごにする作業は想像以上に難しく、しかし地域の伝統に触れているような気がしてとても充実した時間だった。2回目の訪問の夜にもらい湯をして、地域の方のお話しをたくさん聞くことが出来た。

ほたる祭りを通して、物事の企画の仕方、仲間との協力の大切さを学んだ。今回学んだ多くのことをこれからの学校生活に生かしていきたい。

医学部　0さん

・主な活動日程

＜一回目＞　一日目　開校式

一人一分半ほどの自己紹介。

自己紹介は自分をPRするいい練習。

座学（古口の歴史、共育活動など）

インターネットや書籍を駆使しても得られなかった情報が詰まっていた。

戸沢村は国民健康保険が初めて認可された村。

戸沢村は昔から水害に苦しめられてきた。そのため豪雪への対策も兼ね建物の一階部分はコンクリートで作られ二階部分から住居という作りになっていた。

農作体験（炭焼き小屋や柵の修繕）

地域の方の見様見真似でやってみたがはじめはうまくいかず。

地域の方は簡単そうにやっているがとても難しかった。

若さや体力も大切だが熟練の技術も大切だと学んだ。

やっていくうちにコツがわかり上達！うれしかった。

ぽんぽ館にて入浴

温泉横で温泉の熱を利用したバナナ栽培をみることができた。

二日目　農作業体験（畑の耕うん、枝豆の種植え）

耕うんは力仕事で大変で難しかった。

薪割り体験

前日にやった杭打ちと要領は同じだったが薪はなかなか割れなかった。

ほたる祭り企画会議

「協力」をテーマに企画を練った。

閉会式

＜二回目＞　一日目　開校式

笹巻づくり

笹巻は昔から伝わる笹の葉のなかにもち米をつめた保存食。

うまく包むのが難しかったが楽しかった。

ほたる祭り準備やリハーサル

本番に向けて修正を重ねた。

ほたる祭りの開催

このプログラムのメイン行事。

地域の方々、子供たちとスライムづくりや○✖ゲームを行った。

ゲームの中に地域の方々、子供たち、大学生の「協力」を盛り込んだ。

同じグループの人見知りな女の子が「今日は楽しかった人―？」という問いかけの時に手を挙げてくれてとてもうれしかった。

もらい湯
地域の方のお家で入浴。
地域の方の温かさに触れた。

二日目　農作業体験（畑の雑草取り）
前回植えた枝豆が芽を出していてうれしかった。

ピザづくり体験
生地から手作りのピザづくり。
炭焼き窯で焼いた手作りピザは絶品だった。

炭焼き体験

わら細工体験
初めての体験で楽しかった。
その人によって出来上がった作品。

閉会式

・フィールドワークを通しての感想
まずフィールドワークに参加する前は友達がいなかったのでとても不安だった。しかしこのプログラムの目玉であるほたる祭りに向けて大学に帰ってからも協力して取り組む課題があり、協力して取り組む中で男女問わず固い絆ができた。また地域の方々にたくさんのことを耳や目を通して教わったり食事を共にしたり交流する中で中を深めることができた。実際に戸沢村を訪問し地域の方々の温かさに触れられこのプログラムに参加してよかった。

工学部　Kさん

これから、戸沢村で何をして、何を感じたかを書いていきます。

戸沢村訪問1回目

まず、戸沢村行きのバスに乗るときに戸沢村訪問のメンバーが初めて揃いました。そのとき私は一言も話せませんでした。私はコミュニケーションが苦手なのでオリエンテーションの自己紹介のときも上手く自己紹介できていませんでした。到着してバスを降りていたときはもうみんな話ができていてすごいと思いました。

到着して、今度は村の幸齢者のみなさんに対する自己紹介がありました。時間は1分とのことでしたが、1分話が持ちませんでした。そのつぎに座学がありました。座学は自己紹介の後だったので気が楽でした。そこで、戸沢村では戸沢村にあるものから村のいいところを探してみたり、よそ者を受け入れるという私の閉鎖的な村のイメージと違う事が聞けました。

昼食のときに、戸沢村の婦人会の人が私の隣に座って話しかけてくれました。私は話があまり上手でないのですが、その人の話口調が優しくて少し緊張が解けました。

午後は小屋の建て直しをしました。私はコミュニケーションが取れず、何をしたらいいかわからなかったのですが、そこでも戸沢村の人、幸齢者の方が私に話しかけてくれました。

夜には、もう一度自己紹介をしたり、お話して打ち解けようということだったのですが、まだ自分からはコミュニケーションはとれませんでした。

次の日は畑仕事と薪割りをしました。これは特に話すことも無かったので順調に作業ができました。

戸沢村訪問2回目

この日はホタル祭りという、学生が自ら企画して子供達に遊ばせる祭りの日でした。この日までに、第1回の戸沢村訪問からみんなで何回も集まって、準備したものでした。

幸齢者の方にこうした方がいいのではないかと言われた事はありましたが、結果としては、子供が楽しんでくれて大成功に終わってよかったです。

次の日は、ホタル祭りが終わり、安心して楽しく作業ができました。私は畑仕事では雑草抜きが楽しかったです。その後にピザ作りをしたのですが、この頃にはだいたい、みんなと話せるようになりました。最後にわらの虫かごを作って山形大学に帰りました。

私はこのフィールドワークで、戸沢村の人たちの、優しく、思いやりのある、気さくな人柄に触れられて良かったと思いました。私のようなコミュニケーションが苦手な人にも温かく迎えてくれた戸沢村の人たちに感謝します。

工学部　Hさん

僕は、フィールドラーニングに行く前とても緊張していたのを覚えている。なぜなら、初めから知っている人や友達がいなかったからだ。そんななか1回目のフィールドラーニングが始まった。戸沢村の幸齢者の方はとても優しく、最初の座学では戸沢村の歴史について詳しく教えてくれた。炭窯作りでは釘の打ち方や、まきの割り方などとても丁寧に教えてくれて助かった。また、2日目の枝豆の農業体験では、普段なかなか体験できない豆まきをした。豆まきにもちょっとしたコツがあり、丁寧に教えてくれた。午後には、ほたる祭りの会議があり、コンセプトを地域の方々との協力に決め、どのように祭りを成功させるか真剣に話し合いをした。しかし、時間が足りず次のフィールドワークまでに何度か集まることになった。ここが、他のフィールドワークと違う活動であると思う。少し大変である代わりに、何度か集まるにつれて、どんどん仲良くなれ、深い友情関係を築くことができた。そのおかげで、2回目のフィールドワークがとても楽しみになった。2回目のフィールドワークでは、まず笹巻作りをした。初めての体験で、最後のひもで結ぶところなどは少しコツが必要でかなり苦戦した。

そして、夕方からは、がんばって計画をしたメインイベントのほたる祭りが始まった。当日は、天候が雨で来場者数が少なくなる気がしたものの、たくさんの地域の方々がきてくれて、とてもうれしかった。そして、ほたる祭りが始まった。僕は、6班を担当することになり、ちゃんと子供達とコミュニケーションをとることができるのか、とても不安だったが、先輩やグループの人からアドバイスをもらったおかげで、たくさん子供達とコミュニケーションをとることができた。また、本番前にスライムにまだ色をつけたことがないというハプニングはあったものの、無事巨大ほたるスライムが完成して良かった。〇×ゲームでは、子供達と幸齢者の方々とのコミュニケーションをとるいい機会を与えることができて良かった。2日目には、枝豆畑の雑草とりや、ピザ焼き、わら細工体験など、ほたる祭りが成功して終わったおかげか、みんな緊張感がぬけ、とても最高な1日だった。フィールドワークを振り返ると、1番印象に残っているのは、みんなで計画し大成功を収めることができたほたる祭りだ。このほたる祭りのおかげでグループのみんなと深い友情関係を築くことができたので、この授業を履修して良かったなと心の底から思っている。

工学部　Mさん

私は今回の二回のフィールドラーニングを通して学べたことが多くあった。

まず、一回目のフィールドワークでは薪割りや農作業体験をしてみて今までやったことのない体験だったが地元の方たちの補助により何とかやり遂げることができた。そんな中、体育会系の部活をやっていた自分のほうが明らかに筋力はあるはずなのに地元の方々がやっていたようにうまく薪を割れず苦労した。その理由を地元の方に聞いてみるとただ力ずくでやるだけではだめで長い経験によって得られる知識やコツも必要になってくると教えていただいた。私はこの言葉から何かを長い期間続けることの大切さを学べた。

次にほたる祭りの企画についてだが一回目のフィールドワークの時から「協力」というコンセプトのもと企画し始め、昼の時間や講義が終わった後に集まり、一つのイベントを完成させるという作業は想像以上に大変だった。それは全員ができるだけ完成度の高いものを作り上げようとするために意見が分かれ、多くの意見の中からメリット、デメリットを考えると一つの意見にまとめることが難しかったりといろいろなことがあった。しかし全員が真剣になって考えた結果、本番のほたる祭りでは参加していただいた幸齢者と子供たちが「協力」してスライムで作ったほたるの絵を完成させ、私たちが企画したゲームを楽しんでくれた。私は今回のほたる祭りを通して真剣に議論を進め一つのことを成し遂げる大切さを学べた。

また、ほたる祭りを通して私が戸沢村の課題だと思ったことは地元に小学校や中学校があるにもかかわらず幸齢者と村の子供たちのかかわりが弱いことだ。克服するため、私は今回のほたる祭りのようなイベントを今までよりも頻繁に開催するべきだと考えた。なぜかというと今回のほたる祭りの間、協力することで子供たちが幸齢者から楽しみながら会話をすることでより親密な関係になっていく様子が見て取れたからである。これからもほたる祭りのようなイベントを積極的に開催すれば幸齢者と子供たちがもっとかかわりを持つようになるのではないかと思った。

最後に、私はこのフィールドワークで、ご飯の間にも方言の種類と違いを教えてもらうことができたり、過去の大雨で村が水没しそうになり村中でたくさんの車が壊れてしまったこと、浸水被害の実際の状況とその大雨からわかった教訓などプログラムに書かれていないことも学ぶことができた。これらの現地に行かないと分からないことも学べたので私にとってこの四日間はとても意味の大きいものだった。

工学部　Kさん

・一回目の活動

一日目の最初に、座学で古口地域の歴史について学びました。その際、わからなかったことや、疑問に思ったことは、メモを取り、その日の夜に調べました。その後、小屋の屋根の修理をしました。夜は、ぽんぽ館で入浴しました。「ぽんぽ」は、戸沢村の方言で「お風呂」だそうです。二日目の午前中は、枝豆の種上と、薪割りをしました。一日目も二日目も、普通の生活ではできない体験でした。普段使わない筋肉を使いとても疲れました。自分たちより何倍も働いているのに、疲れてない地域の人たちを見て、技術や工夫を感じました。午後からは、ほたる祭り企画を考えました。

・二回目の活動

初めに、笹巻づくりをしました。笹の葉でもち米をまいた保存食で、つるして保存します。笹の巻き方やひもの結び方がわからなく、地元の人に何度も聞いてしまいました。その後、ほたる祭りのリハーサルをして、細か

なとこを訂正し、最後の最後までよりよくできるよう話し合いました。夜は、もらい湯をしました。もらい湯というのは、2，3人ずつに分かれて、地域の人の家で入浴することです。飲み物やお菓子を用意してくれてました。中には、メロンを食べた班もあったそうです。地域の人たちのやさしさや温かさを感じました。二日目はピザづくりとわら細工をしました。生地を作るのはとても疲れたが、一から作ったピザはとてもおいしく、疲れを忘れさせてくれました。

・課題と解決策

現代社会の中で世帯間交流が減ってきています。戸沢村では、通学合宿やメダカ池管理など、以前から世帯間交流のイベントが行われてきました。今回のほたる祭りでは、世帯間の交流を図りたいと考え、コンセプトを「協力」に決め企画しはじめました。どうすれば協力し合えるか考えた結果、〇✖クイズとスライムづくりに決まりました。〇✖クイズでは、それぞれしか知らないような問題を出し、考えたり話し合ったりすることで協力し合えるようにしました。スライムづくりでは、みんなで一つの作品を作ることで協力してもらえるようにしました。

・感想

ほたる祭りの一か月前から企画を考え始めました。何度も昼休みや放課後に集まり、話し合いをしました。自分はスライム班だったのですが、スライム班は、最後にまとめる際、スライムの硬さはどれくらいが適切か試行錯誤しました。本番は、みんなが想像してたよりも成功に終わったと思います。準備の段階はつらかったけれど、それ以上の達成感を味わうことができました。

このほたる祭りを通して、グループの人たちと絆ができたと思います。このフィールドワークをとってよかったです。

工学部　Kさん

今回私たちが参加したこのプログラムでは戸沢村の古口の地域を5月の下旬と6月の下旬の2回に分けて訪問した。

1回目のフィールドラーニングの1日目は古口の歴史や行っている活動についてお話して頂いた。「来るものは拒まず去る者は追わず」という村の考え方がとても印象的だった。この考え方が国際的な活動を行っている根源になっているのだなと感じた。そして午後からは炭窯の整備を行った。

2日目の午前中は前日に引き続き炭窯の整備と畑を耕して枝豆を植える作業を行った。午後からは2回目のフィールドワークのメインであるほたる祭りについて計画した。このほたる祭りでは学生たち自身が計画から運営を行うということで最初はとても戸惑った。この日の活動ではテーマと企画内容について決めた。しかし具体的なことは決まらず後日集まって決めることにした。企画は2班で〇×クイズとスライム作りのそれぞれ分かれて考えた。私はスライム作りについての計画を行う班で、高齢者の方々と子供たちそして学生たち自身が協力し合ってスライムを用いて1つの作品を仕上げるのがよいと思いほたる祭りということでほたるの形にすることにした。決めた後も何回も集まり試行錯誤を繰り返した。このプログラム自体が協力なのではないかと思うくらい班員と協力し合えてとても良い経験をさせてもらえたと感じた。

そして2回目のフィールドワークの1日目は午前中に笹巻づくり、午後からは今まで計画してきたほたる祭りを運営した。ほたる祭りでは天候が悪くあまり地域の方はいらっしゃらなかったが、かえって1人1人とコミュニケーションを取りやすく協力というテーマに沿った形で進められて良かったのではないかと思った。プログラムの最初はスライム作りで打ち合わせでは絵の具の分量について確認を行っておらず心配していて実際に黒のものは固まりにくかったようだが、臨機応変に協力し合い補っていてこの活動を通して私たちが学んだことが実際に生かされたのではないかと実感した。〇×クイズでは子供たちだけではなく高齢者の方々も協力し合っていてとても良かったと感じた。祭り全体としては問題点もあったとは思うが結果としては成功に終わったと思う。それはやはり参加者全員が協力したからだ。今回のテーマ設定は本当に良かった。

2日目は枝豆畑の雑草抜きを行い、お昼はピザを作った。午後からはわら細工を作った。

今回の活動を通して企画運営を行う際には仲間と協力することと臨機応変に対応を行うことが必要であるということを学んだ。このような経験を今後の大学生活や今後の人生に活かしていきたいと思った。

工学部　Hさん

私はこのフィールドワークを通して戸沢村の魅力に気づくと同時に自分に足りないことを確認できたと思います。

私たちはこのフィールドワークで二回にわたって戸

沢村に宿泊しました。そしてそこで行った枝豆の種植え、薪割り、炭焼きなど普段何気なく生活していては出来ないような体験をさせてもらいました。その中で、薪割りに使うハンマーが折れてしまったのですが、それを買ってくるでもなく直してもう一回使えるようにしてしまったのを見て、この地域の方々の技術や工夫、そして物に対する意識の違いを身をもって感じました。この授業を取っていなければこういうことに気づくことは無かったと思います。

そして、今回で最も大変だったのはほたる祭りの企画でした。初め何も無い状態からどのようなことをお客さんに経験してほしいのか、それにはどんなことをすればいいのか。戸沢村にいなかった期間も班のメンバーで集まり、企画について話し合いをしました。正直、ほたる祭りが終わるまでずっときちんと成功するのか不安でした。ですが、ほたる祭りを実際に行い来てくれた方々が笑顔で帰ってくれたことで、自分たちが何も無いところから作ったものが成功という結果を残したことが本当にうれしかったです。そして、このようなことを普段からしている社会人の人達がどれだけ大変なおもいをしているのかというのがよくわかりました。これも普段から考えていることですが、実際にやってみないとわからなかったことだと思います。

休日に行くということもあり大変でしたが、終わってみれば実の多い経験だったと思うことができます。そして、この経験を通してわかった自分に足りないことは、他人とのコミュニケーションです。この授業は中学や高校の時の修学旅行とは違い、仲の良い人と同じ部屋に泊まるというわけではなく、完全に知らない人の状態から始まります。ほたる祭りの話し合いの時、私はまだ知り合ってあまり話した事が無いということもあり、積極的に意見を出すことができませんでした。これから就職してこのような機会はいくらでも出てくるのだろうと思いますが、その時に今と同じ状態では企画の足を引っ張りかねません。なので、私のこれからの課題は他人とのコミュニケーションが気負いなくできるようになることです。

この授業で気づいたことや考えたこと、失敗したことはきっと一生役に立つと思います。私はこの授業を選んで良かったと今では思えます。

農学部　Nさん

戸沢村では、幸齢者が子供にわら細工や田んぼづくりを教えるといった活動が積極的に行われてきたことや、食事交流の時の幸齢者たちの何気ない会話、ほたる祭りの時の地域の方の名前を把握し呼び合っているところから、この村の地域ぐるみで世代間のつながりを大事にしていると感じた。また、笹巻づくりやわら細工づくり、炭出し、薪割など初めての体験をたくさんさせていただいたが、私が全然できないでいるとそれを見ていた幸齢者は交代して笑顔でもう一度教えてくれたことや食事交流の時のこの村ならではの山菜料理を嬉しそうに紹介していたことから自分たちのやっていることに自信と誇りを持っていると感じた。機械化が進む世の中で、手作業を続ける幸齢者のこだわりも、この表情を見ればわかる気がした。この技術は長年の経験がなければできない、それを大事にしているのだろうと思う。

見つけた課題としては、笹巻やわら細工、村ならではの山菜料理などは、作られているところは少なく、作り方を知っている方も少ないことだと思う。この大切な伝統を途絶えさせないためにも、子供たちに伝えていく活動はこれからも続けてほしいと思うし、このフィールドワークも続けてほしいと思った。そして私たちは今回の貴重な体験を大学でしっかり伝えていくことが大事だと感じた。個人的に料理など作り方を教わったものは家族にも作ってあげたりしておいしさを広めたいと思った。

戸沢村の訪問で学んだこととしては、祭りの企画でまず目的、伝えたいことを明確にし、そこに向かって話し合う過程の大事さを学んだ。私たちに与えられた使命はほたる祭りの企画で各々が自分の意見を出し、それぞれの意見をまとめ、より良い祭りを作り上げることだった。私はもともと人と話し合うことは得意ではなく自分の意見を積極的に出すことやまとめることが苦手だったが、今回は自分の疑問に思ったことを発言したり、紙にまとめて話し合いが不足しているところを話に挙げたりと積極的に動くことが出来た。そして祭りで、人前で自分の伝えたいことを伝えることができた。これからプレゼンテーションをするうえでも社会に出てもこの過程はきっと役立つと思うので自分の意見と他人の意見を大事にし、考え、まとめ、入念に確認作業も行っていくことは続けたいと思う。今回は運営をするうえで予定をあらかじめ決めていたことは成功させることはできた。しかし、本番では予想外のことも起こり、班員が臨機応変に対応している姿を見て、これからは予定をしていたことだけではなく臨機応変に対応する応用力も大学生活の中で養っていきたいと思う。

里山保全と山菜料理

活　動　状　況

○実施市町村：戸沢村

○講　　師：NPO法人田舎体験塾つのかわの里事務局及び地元講師

○訪　問　日：令和元年 5 月 18 日(土)～19 日(日)、6 月 22 日(土)～23 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部 3 名、医学部 3 名、工学部 2 名、農学部 4 名　以上 12 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】５月１８日（土）	【１日目】６月２２日（土）
08:00　山形大学発 10:00　戸沢村農村環境改善センター着 10:05　オリエンテーション 10:20　そば打ち体験 12:20　昼食 13:20　山菜採り（わらび・うど等） 　　里山自然観察 16:20　振り返り 17:00　民泊先へ移動	08:00　山形大学発 10:05　戸沢村農村環境改善センター着 10:10　山菜採り（みず・ふき等） 11:00　山菜料理（みず汁、みずのたたき、ふきの肉巻き、ふきの炒めもの等） 12:30　昼食 13:30　杉林の間伐・除伐 16:20　振り返り 17:00　民泊先へ移動
【２日目】５月１９日（日）	【２日目】６月２３日（日）
09:00　戸沢村農村環境改善センター集合 09:10　山菜料理つくり（わらびのお浸し、ウドの煮物、天ぷら、ごま合え等） 12:00　昼食 13:00　キノコの菌植え 15:20　振り返り 16:00　戸沢村農村環境改善センター出発 18:00　山形大学着	09:00　戸沢村農村環境改善センター集合 09:05　車出発 09:20　角川の大杉見学 09:50　杉の台入り口 　　トレッキング開始 11:50　浄の滝到着、自然観察 　　昼食 14:00　浄の滝出発 14:40　車出発 15:05　戸沢村農村環境改善センター到着 15:10　振り返り 16:00　戸沢村農村環境改善センター出発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Tさん

計4日間のフィールドワークでの体験は私たちが普段できないものであるため、とても貴重であったと感じる。その体験を通して戸沢村の自然など魅力的な面を数多く見つけることができた反面、村が抱える課題も見つかった。

1回目はわらびやうど、2回目はみず、ふきなどの山菜取りを行った。山菜取り自体はそう難しくないと思うが、異なる種類の山菜をとってしまわないようにするのが注意すべき点だと思う。地元の方に山菜取りをツアー化してみたらどうだろうかという提案をしてみたが、安全面の確保が難しく実現は厳しいという返答があった。その背景には山菜をとれる方の高齢化が進み引率が難しいという面もあるため、若い人材確保も課題として挙げられると思う。

１回目の終わりには幻想の森に行った。一面の原生林は壮大で、どこか神秘的な雰囲気を感じさせた。看板があったり足元に木材のチップが敷き詰められていたりと整備されていたと思う。森までの道路はマイクロバス程度の大きさの車しか通行できないため、そこを整備すれば観光客をさらに呼び込めるのではないかと思った。しかし、道路拡張は自然破壊につながるし、観光地化しすぎるとマナーの悪い観光客による森の破壊などにより保存が難しくなるという問題もあるため、調整が課題になってくると思う。

2回目の2日目は浄の滝トレッキングに行った。滝までの道中は険しかったが、自然の豊かさを肌で感じることができた。事前に調べてはいたが、実際に滝を目にするとその規模と水量に驚いた。とても魅力的であり、険しい道中を経てでも来る価値があると思った。しかし、そうはいっても道中は足場が不安定な場所が数多く存在し、私たちのような若者はまだしも高齢者や子供のトレッキングは相当危険が伴うのではないかと考えた。そのため、景観を損なわない程度に道を整備することが課題として挙げられると思う。個人的には、獣道程度でいいので足場を確保することが必要だと思う。

計4日間の体験を通して、戸沢村の課題について考えることができた。大きな課題として挙げられるのは、人材確保と村の受け入れ態勢の確立である。そのためにもPR活動を活発化させ村に人を集めることが必要だと思う。個人的に地元の方に話を伺ってみたが、ツアーを企画しても地方客が村に来るまでの飛行機や電車等の交通機関の手配が難しいとおっしゃっていたので、村の中での活動だけに目を向けるのではなくもっと広い視野から考えることも課題の一つになると思う。

人文社会科学部　Sさん

今回のフィールドワークでは主に戸沢村の自然と自然の保護について多くのことを学ぶことができた。その中で戸沢村の魅力を感じる一方で、課題も見えてきた。

今回のフィールドワークでは山菜とりを行った。１回目と２回目でとれる山菜が全く異なることに驚いた。時期によって様々な山菜がとれる戸沢村の山はとても貴重であると思う。しかしながら、講師の人の話によると戸沢村は高齢化が進んでおり、山菜をとれる人が減少しているので山の資源を十分活用することができていないとのことだった。これは非常にもったいないことだと思う。人間が適度に手を入れることで自然の環境にも良い影響があるからだ。これは戸沢村だけでなく地方の村の多くが高齢化による人手不足の問題を抱えている。解決のためには若い人々が定住したいと思うように戸沢村の魅力を発信していくとともに、若者の定住を支援する取り組みを行っていくことが必要だと思う。

また幻想の森と呼ばれる原生杉の森や日本の滝百選に選ばれている浄の滝にも今回のフィールドワークで行った。どちらの景色も素晴らしく、観光名所に十分になり得ると感じた。幻想の森の地面には木材のチップが敷き詰められていた。話によると戸沢村の人が定期的に整備しているとのことだった。これは里山保全の一環であり、環境が壊されないために役立っていると思った。ただ森に行くまでは小さい車でしか行くことができず、大型の観光バスなどは入ることができない。これは幻想の森を観光名所として観光客を呼び込むのに問題になると感じた。だがバスが入れるようにしようとすると周囲の環境が破壊されてしまうため、観光と自然保護の両立が課題であると思う。浄の滝は到着するまで危険なところが何か所もあって子供や体の弱い人には厳しいのではないかと感じた。講師の人の話では時期が来ると戸沢村の人で道の植物を払ったり、川に橋をかけたりするそうだ。しかしながらそれだけでは不十分だと思う。観光名所として人を呼び込むには幻想の森と同じくバスの問題もあるが、道中の崩れそうなところの補強、傾斜が急なところに階段を設置などするひつようがある。こちらも観光と自然保護の両立が課題である。

今回のフィールドワークを通じて見えた戸沢村の課題をまとめると、豊かな資源に恵まれているものの高齢化による人手不足により十分に活用ができていない。また観光客を呼び込むためには整備が必要であり、それによって自然が破壊されてしまうので両立が困難だということだ。

人文社会科学部　Sさん

・このプログラムに参加しての感想

今回このプログラムでは主にそば打ち、山菜採り、山菜料理、キノコの菌植え、杉林の間伐・除伐、角川の大杉見学、幻想の森見学、浄の滝トレッキング、民泊を体

験した。

計4日間の体験の中で特に1回目、2回目ともに行った山菜料理が印象づいている。山菜料理を作るためには山菜の下処理が必要で、その処理にかなりの時間がかかっていることがわかった。手間暇かけておいしい山菜料理ができることに感動した。

もう一つのメインプログラムである里山保全では杉林の間伐を行った。80年かけ、やっと木材として使用できることや間伐作業に失敗すると自分の方に木が倒れてきたり他の木に引っかかってしまったりするため1人での作業は危険であることを知った。

民泊では地元の方からの様々なお話をたくさん聞かせていただいた。その中で自分の地域との共通点を見つけ嬉しく思った。今回、このプログラムに参加したことは大変貴重で重要な経験になったと感じている。

・このプログラムを通して見えてきた課題

まず、問題点として挙げられるのが若い人たちの不足である。例えば、2回目の杉林の間伐では、材木資源があるものの力のある若い人たちが少ないことで、過去に植えた材木をうまく有効活用できないということが起こっていた。山菜においても、山に入って採るには知識と体力が必要であるが、採る人がいないため出荷用ではなく自分達が食べるだけの分だけ採るという風になっていた。戸沢村には70代でも現役という方が大勢いらっしゃったが、今後は、若者の誘致が必要となる。

次に、観光資源に対する認知度である。戸沢村には浄の滝をはじめとする観光資源が豊富にあった。しかし、その認知度としては低く、観光者らしき人物をほとんど見かけなかった。若者の誘致と認知度アップにはともに多くの人が利用するSNSでの活動が有効的だと考える。

そして、観光地の整備である。今回のトレッキングの道は前日の雨により道がほとんど無い、もしくは滑りやすく危険な場所が多々あった。今後ある程度は整備されると地元の方がおっしゃっていたが、幻想の森や浄の滝を年齢などに関係なく誰にでも訪れることのできる観光地として利用するにはさらに整備が必要になってくる。自然を破壊しない、自然との兼ね合いを考えた整備が必要である。

医学部　Nさん

1. はじめに

私は二度の一泊二日の戸沢村での農村体験学習を通じて地方と呼ばれる地域が抱える様々な問題や課題を目にしてきた。そこで今回のレポートでは戸沢村で発見した課題とその解決策について以下まとめていきたいと思う。

2. 戸沢村で見つけた課題

戸沢村内を移動している際に木々で緑に覆われている山肌から土砂が露出している部分がところどころ見えた。戸沢村の方々にお聞きしたり、中間学習で過去の新聞記事で調べてみたところ昨年8月に大雨による浸水、土砂崩れの被害があったということが分かった。

二回目の杉林の間伐、除伐の活動を行った際、戸沢村の案内役の方がおっしゃるには森は大量の水を保ち水源にもなることができるがここ最近は若者の流出、高齢化が原因による木々の管理を行う人たちの後継者不足でなかなか手入れを行えない日が続いていた、とのことだ。

以上2つの問題を合わせて考えてみると本来貯水機能を持つ森林が人手不足により管理を行えない日が続き、本来の機能を発揮することができず土砂崩れの一因になったと推測することができる。

二回のフィールドラーニングを通して私たちは中型のハイエースに乗って移動した。大型のバスが通れるほどの道幅はなく男子は後ろの荷物入れのところに乗って移動していた。また目的地までの道中はあまり整備されておらずとても揺れたのを覚えている。

観光客を誘致するにはツアーの大型バスが通れるような道を整備する必要がある。ただどのようにその費用を工面するのか、またどのようにそのインフラ整備の費用を回収していくのかという問題がある。

3. 挙げられた課題への解決策

私は以上で取り上げられた課題のうちインフラ整備の費用回収に絞って解決策を講じてみることにした。そのうえで自然を押し出して成功している富士山や屋久島を参考にして宿泊施設の充実さを発信することを提案する。上のような観光スポットはどこも宿泊施設が整っていてそこでの宿泊費や食事費でお金を集めていることが分かった。

私たちが使った戸沢村の民宿もとても清潔感があり、ご飯もおいしくとても温かく迎えられた。ホテル顔負けの場所であることを実感した。またおしゃれなカフェもありそういった施設の魅力も発信してなんとか戸沢村にお金を落としていってもらう人を多くしその一部をインフラ整備の費用に充てるのがいいと考えた。

豊かな自然を押し出した観光スポットと宿泊施設の2本を柱として観光客を誘致していって戸沢村を再興させることを提案する。

医学部　Yさん

今回のフィールドワークでは戸沢村の自然について様々なことを学ぶことができた。戸沢村の自然は美しく、また県内に住んでいるものとしてはこの雄大な自然をいつまでも守っていきたいと感じた。しかし、戸沢村についてはまだ課題も多く、存続していくことも大変で、問題も多いということを学んだ。

私たちは１回目と２回目の両方に、ワラビやウド、ミズなどの山菜をとりに言った。時期によって食べられる山菜は異なっており、それらを自分たちですぐに取りに行くことができて、調理するというのは、普段の生活ではなかなかできないことであるので、魅力的なことだと感じた。しかし、戸沢村では高齢化が進んでいるため、山菜取りなどの体力が必要な仕事はできる人が減っており、自然を有効活用できていないという話を聞いた。戸沢村の本来の魅力を守るため、もっと沢山の人に戸沢村に来てもらって、PRしていくことが大切なのではないかと感じた。

また、幻想の森にトレッキングに行ったり、浄の滝と呼ばれる滝を見に行ったりもした。幻想の森は原生林で、自然の力を大きく感じさせる場所で、また浄の滝についても間近で見てみると離れていたところでも水しぶきが飛んできて風圧も感じられ、その雄大さに圧倒された。しかし、そこに行くためには小さな車で行くしかなく、大型観光バスなどで行くことはできなかったり、またその景色を見に行く道中も安全面が保証されているわけではなく、これでは他県から観光客を呼ぼうにも難儀してしまうということは想像に難くなかった。とはいっても、整備に重点を置きすぎると本来の自然の魅力が失われたり、また資金の調達も大変であるため、そういった点のバランスをどうすればうまくいくのかを考えていくことが、戸沢村にとって大切なことだと感じた。

２回のフィールドワークを通して、山形県には観光名所としてふさわしいような、魅力あふれる場所がたくさんあることが分かった。しかし、まだ知名度は低く、仮に注目されても安全面の保証もなされていない以上、交通の便が悪く、ただPRしていくだけでは限界があると感じる。いろいろな人を呼び込むためにはどうすればいいのか、何が足りていないのかを考えたうえで戸沢村のことを知ってもらう必要があると思った。

医学部　Iさん

フィールドワークを通し、いままで訪れたことのなかった戸沢村の自然や人々について多くのことを知ることができた。この地域に魅力を感じるとともにいくつか考えたい課題も見つかった。

●山菜採り・山菜料理

１回目ではわらびとうど、２回目ではみずとふきをメインに、実際に自分たちで山の中に出向き、山菜を採り、地元の方に調理法を教えていただきながら料理した。

採集の際は山菜があたり一面に生えている様子とその種類の多さに驚いた。それらを料理してみると思っていたよりも癖がなく、食べやすかった。

課題として、たくさんのおいしい山菜が戸沢村で採れることをあまり人に知られていないことがあげられる。私たちのような大学生のフィールドワークのように学生向けの企画だけでなく山菜採りツアーなどの一般対象の企画も設け、SNSなども用いながら幅広くPRすべきだと思う。

●トレッキング

幻想の森や浄の滝、角川の大杉など、戸沢村の大自然を見ながらトレッキングを行った。道中険しい場所もあったが、前もって写真で見たものより実際の風景は素晴らしいもので、自分の目で見なければわからない戸沢村の魅力を感じることができた。

山菜と同じく、PRが足りていないことが課題の１つとしてあげられる。トレッキング入口までの交通の便の悪さや浄の滝までの道の険しさは人を呼び込むうえでマイナスになると感じた。観光ルートの整備も課題の一つだと思う。

●きのこの菌うえ・杉の間伐除伐

どちらも短時間体験するだけなら楽しいが、長時間やるとなるととても大変な体力仕事だと思う。また、今回は大人数での作業だったが、少ない人数で行うとなったらかなりの重労働だろう。

このような感想を持った上で、若い働き手の確保が大きな課題であると思った。今村にいる若者が外へ出ていかないようにするとともに、外から新たに若い働き手を確保する必要があると思う

どの活動でも、課題としてPR活動の活性化があげられる。働き手不足解消のために人を呼ぶにしても、戸沢村の良さを世の中に知ってもらえなければ人は集まってこないだろう。また、宿泊施設や交通面にも力を入れ、人を迎え入れる準備を行うことも大切だと思う。

私もフィールドワークの発表やSNSを用いて、戸沢村の良さ、田舎の良さを少しでも広められたらと思う。

工学部　Tさん

キーワード：山菜料理、里山保全、人口減少、高齢化、民泊

1.目的・概要

自然豊かな戸沢村角川地域の里地・里山を守り、豊かな資源を利用する活動に取り組む。また、ナラ枯れ防止に資するキノコの原木としての利用、杉林の間伐・除伐、山菜採り・山菜料理作りなどの活動の体験、山岳信仰で栄えた角川地域のパワースポット「角川の大杉」「浄の滝トレッキング」を行う。（共生の森もがみプログラム案内、2019）

調査日　2019年5月18,19日　6月22,23日

調査場所 戸沢村

講師　ＮＰＯ法人田舎体験塾つのかわの里事務局及び地元講師

2.はじめに

近年日本の地方では、少子高齢化・過疎化等が問題となっている。

私が今回フィールドワークを通して訪れた戸沢村でも高齢化が進んでいるのが課題の一つである。一方で、村は四方を山に囲まれ自然に恵まれており、資源が豊富であることが明らかとなった。

そこでこのレポートでは、戸沢村の豊富な自然も活用した戸沢村の魅力発進方法について提案する。

3.外国への情報発信

観光客を呼び込む一番の目的はその土地でお金を使ってもらうことにある。

日本政府観光局（JNTO)の統計データより、訪日外客数（総数）の累計は2014年から2018年の間で13,413,467人から31,191,856人へと年々増加している。

戸沢村では農家民宿を行っており、その地での生活を体験しながら料理を味わい、会話を楽しむことができる。今回フィールドワークで実際に民宿を体験して、また行きたいと強く思った。またそば打ち体験は水のきれいな戸沢村ならではの体験であり個人個人の個性がそばに表れ、楽しみながら仲良くなれたことを実感した。

上記のことから、民宿を中心として戸沢村の魅力を海外に向けても発信することにより、観光客を呼ぶことができ、地域の活性化につながると考えた。

4.外国人観光客を呼び込むデメリット

一方で、ただ人数を呼び込めばいいわけではないという見解もある。幻想の森を訪れた際、根を踏んだり上る行為は木を痛めてしまうことも明らかとなった。また英語を始め多言語での対応可能な人財も必要となってくる。対策として「パンフレット・看板に英語での注意事項を載せる」「地元の人が同行する」などを提案する。

5.終わりに

このレポートでは、農家民宿を取り上げ、戸沢村の豊富な自然も活用した戸沢村の魅力発進方法について提案した。その結果、外国人観光客が増加傾向にあることが明らかとなった。

しかし、民宿をはじめ、人材確保については明らかにできなかった。

よって、人手不足の解消法を今後の課題として検討していきたい。

引用文献・資料

日本政府観光局

（JNTO)https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/

参考文献・資料

井下千代子著『思考を鍛えるレポート・論文作成法［第二版］』慶應義塾大学出版会、2015年3月

工学部　Mさん

戸沢村で、そば打ち体験、山菜料理、キノコの菌植え、民宿、幻想の森見学、杉林の間伐・除伐、角川の大杉見学、トレッキング、浄の滝見学といったたくさんの貴重な体験をしてきた。その中のいくつかを取り上げて紹介する。

始めに山菜料理では山に山菜を採りに行くことから始まった。山菜が生えている場所にたどり着くまでに斜面を登り続けたり、暑い中での作業だったりして大変だったが、山菜を見つけて採るのが楽しかった。山菜は下処理をきちんとしなければくせの強い味が残ってしまうことが分かった。山菜料理はどれもとても美味しく、２回目を通して約１０種類ほどの料理が完成した。一番美味しかったのはみず汁で、さばとの相性がとても良かった。班員でどれを誰が作るか分担して行ったため、自分が作ったのを美味しいと言われた時は嬉しかった。山菜の種類や特徴を覚えることは、もし山で遭難した時にどれが食べられるか判断することができるため、今回の活動で様々な種類の山菜を学べて良かった。

杉林の間伐・除伐では、大きな杉の木が倒れていくのは迫力があった。間伐・除伐を行うことで里山を管理していて、生態系の維持にも繋がっていることが分かった。さらに土砂崩れの災害を防ぐこともできる。戸沢村は去年の８月、豪雨によって土砂崩れが起こった。その災害を防ぐための里山管理が人手不足で間に合っていないそうだ。これは大きな課題だと考えた。また、除伐した後の放置してしまう杉の木の活用方法も考えたい。

最後に私たちは浄の滝に行った。前日の雨により山道は滑りやすくなっていて、決して平坦な道のりではなかったが、辛くて心が折れそうだった時に班員と声を掛け合い協力しながら浄の滝にたどり着いた。滝は今まで見た滝の中で一番綺麗で迫力があり、疲れた体も癒やされた。しかし、滝にたどり着くまでに一歩間違えれば崖の下というような危険な箇所がいくつかあった。そこで、

道の安全面の確保と道中に、滝まであとどのくらいかかるかの目安や、危険箇所を観光客に教えるような看板を立てておくのが良いと考えた。だが、整備にお金がかかり、その分をどうやって還元できるのかを考えていきたい。

戸沢村は本当に自然が豊かで心が和んだ。民宿は初体験だったが、美味しいご飯をたくさん出してくださったり、話しかけてくださったり、私たちを優しく受け入れてくださって嬉しかった。私は新庄市出身だが、戸沢村のことはあまり知らなかった。同じ最上にもこんなにも良いところがあるのだと気づけて本当によかった。また足を運んでみたいと思う。

農学部　Kさん

今回の授業で２回戸沢村を訪れた中で様々な経験をする事が出来た。

一度目の訪問では「そば打ち」「山菜採り」「山菜料理」「きのこの菌植え」「幻想の森見学」をした。一度目の訪問で特に印象に残ったプログラムは山菜採りである。今まで山菜を自分で採取し料理をすることが無かった。それどころか山に入り活動をするという事自体があまり経験の無い事であったために新鮮であった。林道のすぐ傍までわらびを始め、よもぎやうど等といった様々な山菜が生い茂り、我々の様な素人が採取していてもビニール袋がすぐにいっぱいになった。少し人里を離れ山に入るだけでこんなにも資源があるのかと驚いた。

しかしその様な資源も少子高齢化の進む戸沢村では活かしきれない現状もある事も事実だ。

例としてわらびを挙げる。わらびの価格をネット販売で調べた結果ばらつきはあれども500gあたり800~1500円と相当な価格が付けられていた。もしあの量を販売に回していた場合大きな利益が得られたのではないかと思わずには居られない。

二度目の訪問では「山菜採り」「山菜料理」「間伐による森林の保全」「トレッキング」「学校を再利用したカフェの訪問」を行った。

二度目の訪問は全体を通して山の中を動き回ることが多かった様に思う。普段立ち入る事のない原生林に入る事はとても大変だったがそれ以上に楽しかった。特にトレッキングで何度も滑落しそうになりながらも橋を持ったり紐で支えたりと全員協力したどり着いた景色は忘れえぬ素晴らしい物であったと印象に残っている。

二度のフィールドワークを通して様々な体験を通し様々な戸沢村の魅力を感じると共に課題もまた見えてきた。

様々な課題の根幹を成すものとして少子高齢化や人口減少が挙げられると考えられる。

課題の解決策の一つとしては引っ越して来て貰う事が考えつくが、いきなりその結果は生まれ得ないと考える。結果を導く為の前段階で戸沢村について興味を持って貰う策を考えた。

一つ考えた事は「山菜カフェ」や「山菜博物館」といった施設だ。今日山菜を食べる機会は多くない。その為興味を持つ人が居るのではないかと考えた。先駆者が居るかもしれないと検索をかけたが出て来なかった為唯一性も確保出来ている。加えて商業に利用する程には人手が不足しているとは言え、その様な利用には足るだろうと考える。

他にも解決策は有るだろうが、一つ一つ試していく必要があるだろうと考える。

農学部　Sさん

今回のフィールドワークでは、山菜採り、山菜料理、間伐、トレッキングなどを通じて、戸沢村のいいところや課題について考えることができた。

まず、山菜採り、間伐では、人手不足や村の高齢化という問題に気づいた。山菜はどれも山奥の、途中の道も険しく高齢の方が採りに行くにはとても大変なところに生えている。山菜の見分け方や下処理など、そのような知識を次の世代に伝えていかなければならない。間伐ももちろん山の中で体力が必要だ。しかし、戸沢村では小学校が合併するなど、若い人が減っており山菜を採る人も間伐や猟など自然の中で仕事をする人が減っている。私は今まで山菜をあまり食べたことがなかったが、とても美味しかった。もっと山菜の美味しさを伝えていきたいし、採る人がいないために食べることができなくなってしまうというではとてももったいないと感じた。間伐や猟が行われないと、自然のバランスも崩れてしまう。また、災害にも繋がるためとても大きな問題だと感じた。

1回目に幻想の森に行った。人の手が加えられていないスギが沢山生えており、とても綺麗で神聖な雰囲気の場所だった。2回目のトレッキングで行った浄の滝も、雪がまだ残っており滝の周りに霧がでていてとても綺麗だった。どちらも、観光地として人を呼び込むには最適な場所だと感じた。しかし、幻想の森までの道は細くて整備もされていなくて大型の観光バスは入ることができない。小型の車でないと入れないという問題があった。浄の滝も、滝までの道のりは本当に大変だった。山奥の道無き道を行く、という感じで危険も伴う。どちらも本当に綺麗で絶対に行くべき場所だったが、幻想の森は大勢で行くことはできず、浄の滝は高齢の方や子供には危険だと感じた。幅広い年齢の沢山の方に訪れてもらうためには整備が必要だと感じた。しかし、道を舗装するにはお金もかかるし、なにより自然を破壊しない程度にしなければならないから少し難しいだろう。

今回私が戸沢村のフィールドワークで感じた課題は、人手不足、道の整備、PR不足だ。戸沢村は自然が豊かで村の方々も温かくとてもいい場所だ。もっと沢山の人に訪れてほしい。だが、実際私もこの授業に参加しなければ知らなかったと思う。豊かな自然を利用した楽しそうな

イベントも沢山行われていた。観光地の整備などに力を入れて、SNSなどを利用して国内にも海外にももっとPRしていくことが必要だと感じた

農学部　Mさん

ぽつぽつとある家、広がる田、3階を超える建物など見える範囲にはない。奥に崩れた跡の生々しい崖をむき出しにした山があり、山は奥へ奥へと連なっている。自然あふれる風景がそこにはあった。

4日間、この角川で私たちは多くの体験をした。以下に簡単に記す。

１回目の1日目、5月18日、そば打ち体験を行った。私たちの作る蕎麦は下手であったが、角川の名産物とその歴史に触れる。もう一つ、山菜採り。少し拓けた場所で、ワラビ、ウド、ヨモギを採った。大量であった。2日目、その採った山菜を料理する。ワラビはお浸しに、ウドは煮物に、ヨモギやタラの芽を天ぷらにした。生のままでは、あれ程くせの強いウドなどは案外茹でるだけで食べ易くなるのである。そして最後になめこの菌植えを行う。キノコの菌植えは予想以上に地道な作業である。それ故の楽しさもあるが。

2回目の1日目、６月22日、今度は山菜採りから始まる。道なき道を切り分け潜り抜け、小さな沢のほとりのミズ、そして田の土手のフキを収穫。帰って、直ぐに料理に移る。ミズの味噌汁、たたき、お浸し、フキの肉巻き、炒め物、そして天ぷら。フキの肉巻きは、フキの清涼感ある味が肉のしつこさを軽くする非常に美味な一品である。すごく気に入った。続いて、杉の間伐に行く。これが恐ろしい重労働である。その重労働の割に切った木の活用法がないという。ただ、それでも、木を切らねば生態系に悪い影響がある。2日目、浄の滝のトレッキングである。道中は割愛するが、崩れた道と雨相まって大変であった。ただ、着いた先の景色は筆舌に尽くしがたい絶景である。山から戻り、飲んだカフェオレが体にしみた。

こんな、充実した4日間を通して感じることは、人手の不足による資源の減少である。山菜や、なめこ、杉も昔は多く生産していたが人手の不足に伴い減じている。これは、角川の魅力を損なう一因でもあり、観光の減退も伴う。何か、新たな切口での人手の確保が必要だろう。また、浄の滝のトレッキングの際、講師の方に言われた言葉ではあるが、観光の結果として最終的にはそこから報酬が生まれる必要がある。しかし、浄の滝のトレッキングだけではそれは生まれない。私も、交通機関の少ない角川なので送迎タクシーや、登山用具の貸し出しで報酬を得る方法も考えたが、それでは十分でない。これも、何か新たな方法を考える必要を感じる。

農学部　Sさん

●一回目の一日目

午前に蕎麦屋「三左衛門そば」にてそば打ち体験をさせて頂いた。蕎麦粉は戸沢村で育てたものを使っているとのことだった。戸沢村はソバを育てるのに気候があっているそうでソバが名産品だとご主人が仰っていた。調べてみると戸沢村には蕎麦屋は５軒ほどあった。

午後には近くの山へ向かい、ワラビやウドを採取した。ワラビは短草の平原に、ウドは少し湿った林の近くに主に生えていた。引率の方から、山菜を毎年一定数採るためには、採りすぎないことや、深い林になったり荒れ地にならないよう整備をすることが重要であるとの話を聞いた。

●一回目の二日目

午前には前日採った山菜を利用した料理を作った。手伝ってくださった方から、山菜を料理に使うには下ごしらえが重要なこと、また昔は山菜の塩漬けを保存食として利用していたことを知った。

午後にはまず「幻想の森」と呼ばれる、樹齢千年を超える天然杉が多く生える森に連れて行って貰った。蛸足上に幹がうねった老木や、桜と杉の融合木には驚いた。引率の方によるとこの森は日本でも屋久杉に匹敵するほど珍しいものだが、森までの道が細く大型バスが入れないため観光資源として生かせていないとのことだった。

次にキノコの菌打ち体験をさせてもらった。体験中に、戸沢村はキノコが育ちやすい環境で、かつてはキノコの一大産地であり、大量にキノコを生産していたが、今では廃れてしまったとの話を聞いた。

●二回目の一日目

杉林の伐採体験を行った。戸沢村近辺にはかつて植林された人工林が多くあるが、林業の衰退に伴い今では手入れが行き届いていないとのことだった。放置された人工林は木の密集により地表に光が届かなくなるため土が痩せていき、貯水能力が失われ土砂災害の原因となる。実際戸沢村は去年、過去百年間は無かったと言われるほどの大規模な土砂災害にあっており、これは放棄された

人工林が原因とのことだった。

また、戸沢村は古くは狩人が多く、山言葉や物忌み等の信仰など独自の文化を築いていて、昭和５０年代には百名以上の狩人がいたとの話も聞いた。しかし今では狩人は高齢化により十名程にまで減少し、結果猿やイノシシといった農害獣が増え、深刻な被害を及ぼしているとのことだった。

●二回目の二日目

まず「角川の大杉」と呼ばれる樹齢約１３００年の巨大な杉を観光し、次に杉の台と呼ばれる主にブナやトチの混合林にてトレッキングを行った。樹相の変化や独自の植生が非常に興味深い場所だった。その後、「淨の滝」と呼ばれる巨大な滝を観光しに行った。舗装道路から滝までは30分程だが道が悪く、行くまで難儀したがとても壮麗な滝であった。付近ではメノウなどの鉱物も採取できるとのことだった。

その後高齢化と人口減少の進む戸沢村をどう活性化させるか引率の方も交えて話をした。引率の方によると、戸沢村に一度来てもらった方からの評判は良く、何度も来てくれる方は多いが、まず村に来てくれる人が少ないことが課題だとのことだった。

班員から「幻想の森」や「角川の大杉」、「淨の滝」といった観光資源をどうにか生かせないかという意見が出た。しかし、予算不足のため道路整備ができず、大型バスを呼び込むことができないということ。そして予算をかけて道路を整備しても村にお金を落としてもらうシステムを構築しないと意味がないという問題が出た。

現状では、戸沢村の人口減少を食い止めるには、ソバやキノコや山菜といった特産品や、「幻想の森」や「角川の大杉」、「淨の滝」といった戸沢村にしかない観光資源を、都会とは違いのどかで牧歌的な雰囲気を味わえるといった情報と共に何らかの方法、SNS等で広く宣伝することが良いのではないかと考えた。

伝承野菜栽培と角川のパワースポット巡り

活　動　状　況

○実施市町村：戸沢村

○講　　師：NPO法人田舎体験塾つのかわの里事務局及び地元講師

○訪　問　日：令和元年６月８日(土)～9 日(日)、7 月 13 日(土)～14 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部３名、地域教育文化学部３名、理学部２名、工学部２名、農学部２名
以上 12 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】６月８日（土）	【１日目】７月１３日（土）
08:0　山形大学発 10:00　戸沢村農村環境改善センター着 10:05　オリエンテーション 10:20　そば打ち体験 12:20　昼食 13:20　伝承野菜栽培体験 （エゴマの播種・からとり芋の定植 16:20　振り返り 17:00　民泊先へ移動	08:00　山形大学発 10:00　戸沢村農村環境改善センター着 10:10　えごま苗の定植 12:00　昼食（角川里山カフェ・すっぺや） 13:00　野菜の播種 野菜苗の定植 16:20　振り返り 17:00　民泊先へ移動
【２日目】６月９日（日）	【２日目】７月１４日（日）
08:30　旧角川中学校集合 08:45　車出発 09:20　浄の滝上がり口到着 09:30　浄の滝へトレッキング開始 ヒメサユリ等の観察 12:00　昼食 12:40　浄の滝出発 13:10　車出発 13:40　角川の大杉見学 14:20　車出発 15:10　戸沢村農村環境改善センター着 15:20　振り返り 16:00　戸沢村農村環境改善センター出発 18:00　山形大学着	09:00　戸沢村農村環境改善センター集合 09:05　車出発 09:20　えごま搾油所視察 水田の畑地化団地野菜栽培見学 11:00　昼食つくり 12:30　昼食 14:00　畑の管理作業 15:10　振り返り 16:00　戸沢村農村環境改善センター出発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Mさん

私は今回のフィールドラーニングを通して、この活動に参加していなかったらおそらく一生出来なかったような体験をして、戸沢村の魅力にも沢山触れることができた。

主に行ったものは農作業の体験だ。里芋や白菜、大根などの普段から馴染みのある野菜や最上伝承野菜であるからとり芋、エゴマの種をまき、苗を植えた。出来上がった野菜に馴染みがあっても種や苗の状態を見るのは初めてで、これがあの野菜になるのかと思うと植えていて感慨深い気持ちになった。また、1回目の活動のときに植えた里芋とからとり芋の苗が2回目に行ったときに成長しているのを見て、当たり前のことかもしれないが少し感動した。今回は12人でやったが、暑くて晴れた日だったのとほぼ手作業だったためかなりの重労働だった。農家の方は、機械を使用しているとはいえ大人数で作業することは無いと思うので改めて農業の大変さと同時にその大切さ、農家の方へのありがたみを感じた。畑地化計画地で話を聞いた時は40代ぐらいの方々が今農作業をしていると仰っていたため、考えていたよりは高齢化の問題は深刻ではないのかと思ったが、このまま順調に世代交代をしていけるようにするのも課題だ。

次に、角川の大杉の見学とトレッキングの体験だ。事前学習で角川の大杉を調べ、直径や高さを数値で知ってはいたのだか実際に見てみると想像していたより迫力があった。また、御池へのトレッキングは自分にとってかなり貴重な体験だった。あのような山の中に行くこともほぼ初めてだったが、ほとんど道がない上に雨のせいで滑る山の急斜面を登ったり少し足を踏み外したら落下の危険があるような細い道を通ったりしたことは本当に初めてでインドアな自分はきっともう経験することはないだろうと思った。パワースポットという言葉に惹かれてこのプログラムを選んだが、そこに辿り着くまでにここまで大変だとは全く考えていなかった。しかし、そうして辿り着いた御池には写真などでは感じ取れない、実際に行かないとわからないような良さがあり、苦労した甲斐があったと感じた。御池周辺にはモリアオガエルやルリイトトンボなど珍しい生物がいた。特にルリイトトンボは普通のトンボと違って身体が青く、とても綺麗で驚いた。このような場所はもっと観光客が訪れやすいように道路の整備を必要があるのではと思ったがそれは自然を破壊することになってしまうという話を聞き、観光地化はそんなに簡単な問題では無いのだなとわかった。しかし、せっかく魅力的な場所なのにあまりにもそこに辿り着くまでの道がわかりにくい気がしたためそれは課題だと思う。道に何も案内が無いと初めて来る観光客は不安に感じて引き返してしまうと思うため、看板を立ててこの先何mに何があるという情報を載せれば自然破壊をすることなく、より観光客が訪れやすくなるのではないかと考えた。

この4日間で自然の風景は勿論、蕎麦屋さんや民宿、旧校舎を利用したカフェ、最上伝承野菜など戸沢村には十分魅力的なところがあるとわかったのでその魅力をどう上手く伝えていくかが問題になると感じた。

人文社会科学部　Aさん

私は今回このプログラムで戸沢村に足を運んでみて、村の魅力について知るとともに伝統を継承していかなければならないと感じた。プログラムの通り伝承野菜栽培を体験する活動が多く、農作業について自分が考えるよりもさらに大変だと気づいた。気温が高い中、エゴマの播種、定植やからとり芋の定植を全て手作業で体験して、人手は多かったはずなのにかなり時間がかかった。このことから、人口が減少している戸沢村において農作物の生産を維持していくためには後継者などの課題があると感じた。しかし、1回目の訪問で定植したからとり芋が2回目に見た時に大きく成長していて、植物を育て成長を見守ることの魅力に気づいた。この経験をより多くの若い人に体験してもらうことで、伝承野菜栽培の継承に興味を持つ人が増えてくれるのではないかと考える。

また、戸沢村の観光地である角川の大杉や御池を訪れた。角川の大杉は、実物を見ることで写真では感じることができないほど圧倒された。幹の周りは10人以上でやっと囲むことができるくらいの大きさで、木が高すぎて写真に全体を写すことができなかった。御池は、たどり着くまでの道が本当に大変だった。私たちが訪問する前日の大雨の影響で、予定していた道を歩くことができなくなり、案内なしでは行くことができないほどの道のりをかなりの時間をかけて歩いた。登りも下りも急でとても怖かったが、目的地に着いた時は達成感があり、目の前に広がる広大な御池とそれを取り囲む緑に感動した。こんなに状況が整っている時に来たのは初めてと現地

の方が話してくださるくらい晴れていて、同時に希少な生き物を見ることができてよい経験になった。この中にも課題として、目的地までの道のりを知っている人は少ないことが挙げられる。行き先を表す看板などがないため、私たちも先頭について行かなければ迷ってしまうと感じた。これでは観光客が観光地に訪れることは簡単ではないため、こんなにも魅力ある場所を知ってもらうのは難しい。そして行き方を知っている若い人は少ないので、伝える人がいなくなってしまうのではないかと考えた。これを防ぐために環境を破壊しない程度の開発と、次の世代につなげていく方法を見つけていかなければならないと感じた。

そして今回、一回目、二回目を通して同じ民家に宿泊させていただいた。出迎えてくださった夫婦はとても優しく頂いた食事はどれもおいしくて、自分の祖父母の家に泊まっているような安心感があった。ここもまた魅力だと気づいた。私たちが普段生活している場所ではなかなか体験できない戸沢村に来てこそのものだと感じたので、民泊の良さも広めていきたい。

今回このフィールドラーニングを通して、実際に自分の目で見て体験をしてみることの大切さに改めて気づいた。農作業の大変さや自然の壮大さ、そして戸沢村の人々のあたたかさには触れてみなければわからない。だからこそ、より多くの人に知ってもらい経験してもらうことで魅力を伝えていきたいと感じた。

私はこのプログラムで戸沢村のことを初めて知ることができて、貴重な体験をたくさんさせていただいて本当に感謝している。この二日間があったからこそ自分の視野を広げることができたと感じている。これからは、小さなことにも目を向けて気づくことを目標に行動していきたい。

人文社会科学部　Sさん

今回、このフィールドワークをやってみようと思ったきっかけは、少子高齢化や人口減少など様々な問題を抱える市町村に実際に足を運んで、身をもって様々なことを体験し、課題発見をしようと思ったからだ。また、私は宮城県仙台市出身であるため、なかなかこのような体験ができないと思い挑戦しようと思った。

今回訪れたのは、戸沢村だった。一回目の活動は人生初のそば打ち体験からだった。そば粉と小麦粉の割合は８；２であり、少しずつ水を加えていった。固まりになるまで混ぜた生地をこねる際の技法として「菊練り」というものがあり、完成した形が菊のように見えることから名付けられたそうだ。生地を広げる作業や切る作業は非常に難しかったが、このような貴重な体験ができて本当に良かった。次の活動は伝承野菜栽培だった。まず初めに、戸沢村の特産品であるエゴマの種まきを行った。エゴマは、別名ジュウネンと呼ばれており、食べると10年寿命が延びると言われている。私はこれまで農作業というものをあまり体験したことがなかったので、大変さを身をもって経験することができた。民泊先の田中さんの家では、ご夫婦そろって非常に優しく、親身になって接してくれた。お二方からは、戸沢村の歴史や、人口減少問題、高齢者問題についての様々な話を聞くことができた。二日目は、角川の大杉見学や御池の見学をした。大杉は、人が10人いないと囲むことができず、写真では伝わらないほどの迫力だった。また、御池までの道のりは、足元が悪い中だったが無事到着することができた。最も印象的だったのは、御池に生息する、瑠璃色トンボと呼ばれる青いトンボだ。非常に綺麗だった。また、カエルの産卵シーズンだったので、カエルもたくさん見ることができた。次に、二回目の最初の活動は、野菜の種まきやエゴマの定植を行った。昼食は、近隣の中学校の一部を利用して経営されている「すっぺ家」で頂いた。すっぺ家は主に、子連れのお母さま方の憩いの場として利用していただくために経営されているそうだ。二日目は、エゴマの搾油所見学をした。えごま油は、無添加で体にいいと聞いた。血圧低下や中性脂肪をなくす効果がある。搾油機械は韓国製で、過去には戸沢村に韓国からたくさんのお嫁さんがきて、それをきっかけに、えごま油が発展していった。えごま油を使用した加工品はたくさんあり、えごま油を世に普及させる努力もみられた。

今回のフィールドワークを通して、実際に足を運んでみないとわからないことや経験をすることができた。特に、戸沢村の方々は非常に温かく、とてもいい印象を持った。今回の活動を機に、人口減少問題や少子高齢化問題などをさらに深く掘り下げて考えていく必要があると感じた。

地域教育文化学部　Kさん

私が今回、この戸沢村の「伝承野菜栽培と角川のパワースポット巡り」を選んだ理由は、一つは、パワースポット巡りに惹かれたからだ。二つ目は、私は静岡県出身で割と都会出身である。その為あまり農業というものに触れたことがないからだ。また、伝承野菜の栽培を体験することは今後おそらくないだろうと思ったのでこのプログラムをやってみようと考えた。

一回目のフィールドワーク、はじめに「8割そば」のそば打ち体験をした。粉の混ぜ方・そばのこね方・棒での伸ばし方・包丁で均等に切る技術、すべて職人技であることがわかった。また、そば打ちの時に聞いた話で一番びっくりしたのが、その日の気温・湿度また、手の温度で水の量が変わるということだ。それを見極めることが出来るというのはすごいと思った。次に、エゴマの播種、からとり芋の定植を行った。からとり芋の苗はとても里芋と似ている。見分け方は、茎の部分が里芋は緑色だが、からとり芋は赤紫色になっているのが特徴なのでそこで見分けることが出来る。久しぶりの農作業はとても大変だった。

二日目は御池のトレッキングに行った。まず、角川の大杉を見に行った。大人10人でも囲めないほどの大きさで高さも42mありすごかった。前日が雨だったため地面がぬかるんでおり歩くのが大変だった。御池ではルリイロトンボ、トウホクサンショウウオ、モリアオガエルを見ることが出来た。また、モリアオガエルの産卵シーズンだったので、実際に卵を産んでいるところなどを見ることが出来た。御池は神聖な場所なのでその周りで肉・魚などを食べてはいけないと聞いたときにしっかりとそのような管理をしているため生き物がたくさんいるのだと言うことがわかった。

二回目のフィールドワークでは、一日中農作業を行った。単純作業を黙々と行うつらさを味わうことが出来た。そのため、農業用の機械がどんどん出来ている理由もわかるような気がした。また、農業の大変さがわかったからこそ感謝しなくてはいけないと思った。

二日目はまずエゴマの搾油所の見学に行った。現在は昨年の水害によってエゴマが不作だったため、油は絞られていなかった。機械はすべて韓国製だった。それには理由があり、エゴマは韓国との繋がりがあることがわかった。韓国から嫁いできた方が日本でもエゴマが食べたかったことが戸沢村では始まりだったことを知った。また、エゴマはすべて余すことなく食べられることを知った。

つぎに、農地改善のお話を聞いた。現在戸沢村では高収益作物の作付けの拡大など新しいことに挑戦しているということを知ることが出来た。

今回のフィールドワークで私は、初めての体験などいろいろすることが出来た。また、戸沢村の住人の方々はとても優しく、これからも文化、技術を受け継いでいってほしいと感じた。そして、戸沢村の現在持つ課題なども若い世代の自分たちが考えていかなければいけないと感じた。

地域教育文化学部　Kさん

私が、今回このような体験型の授業を選んだ理由として、はじめは単にパワースポット巡りが楽しそうだなと思ったからでした。今回雨の影響でパワースポットである浄の滝を見に行くことはできなかったのですが、私がこの計4日間で得られたものは、パワースポットのパワー以上に大きかったのではないかと思います。

伝承野菜栽培は、第一回目の二日目、第二回目の二日間計３日間で行わせていただきました。
最上の伝承野菜は数がとても多く、その中でもエゴマは第一回目で種植えし、第二回目で定植をしました。大きくなっているとは思っていたものの肌で成長を感じるととても嬉しくなりました。伝承野菜ということでこの栽培方法も代々受け継がれてきたのかと思うと本当にすごいと思いました。私たちの班は人数が多かったのですがそれでもたくさんの仕事があり、炎天下での重労働は正直大変でした。農家の方々はこの仕事をもっと少人数で毎日行っているのかと思うと、農業の担い手が減ってきている原因の一つなのかなと思いました。戸沢村を知ってもらうためにエゴマから知ってもらえればいいのかなと考えました。そこで私たちは新パッケージを作り、もっとこの商品が手に取りやすくなれば良いと思いました。

さらにこの最上伝承野菜を使ってカフェすっぺえ屋さんでは、使われていない小学校の校舎を借りて料理を提供していました。私たちはそこで最上伝承野菜である角川カブを使ったサバパスタや山菜のサラダなどをいただきました。地元の方がその日に持ってきてくれたタケノコが入っていたりなど、地域の方々との近さ、あたたかさが感じられました。ここの店主は、元々東京に住んでいて、田舎にいきたいと思いイタリアンレストランをやめてこの戸沢村に来ました。町おこしをするために休みもなしに活動をする姿に私はとても刺激を受けました。このカフェは戸沢村の憩いの場となっていて、とても素敵でした。ここの土地は人が来づらく、外からはあまり人が来ないということだったので、ただ待っているだけでなくSNSやホームページなどを使用して、この最上の伝承野菜を使った料理で広めていったらよいのではないかと思いました。もっとこのおいしさをたくさんの人に知って欲しいです。

今回のフィールドランニングでは、まず第一に、人はこんなにもあたたかいものなのかとすごく感銘を受けました。民泊先の田中さんをはじめ、たくさんの方が今回関わってくださったのですが、どの方も他の土地から来た私たちをあたたかく迎えてくださりました。この戸沢村の人とのつながりもみんなに知って欲しいです。さらに、角川の大杉や御池、浄の滝、今神温泉など観光地としても十分魅力あるものもたくさんあるので、ぜひいろんな方に戸沢村を訪れて欲しいです。本当に良いところでした。

地域教育文化学部　Dさん

私は当初、単純に野菜栽培とパワースポット巡りをして

みたいという思いだけでこのプロジェクトを選択した。戸沢村という村がどのような村かも知らなかったが、いざ訪れてみると魅力がたくさんある村だと感じた。
１回目のフィールドワークでは、そば打ち体験、からとり芋・エゴマの定植、トレッキングを行った。その中でも、トレッキングで行った御池は、もっといろいろな方々に知ってもらいたいと強く思える場所だった。御池までの山道は、非常に険しく大変であったが、道中ではカエルやヤモリトンボなどの生き物がいたり、大きいカエルの卵を目の当たりにしたりと、生き物の生命力を感じられた。険しい道のりの先にある御池の景色は、本当に美しく、感動した。自然が作り出す絶景をもっとたくさんの人に見てもらいたいと強く思った。トレッキングを通して、御池までの道のりの中で看板を増やし、御池まで辿り着きやすくしたり、山道を整備することが課題としてあげられた。戸沢村の役員の方にそのことを伝えたところ、山道を良くしたいという思いはあるが自然破壊に繋がる可能性があるということを教えていただき、自然を守るためには様々なことを考慮しなければならないため、１つ１つの解決策を考えることが難しいと感じた。
２回目のフィールドワークでは、野菜の種植え、カフェすっぺ家での昼食、エゴマの搾油所、水田の畑地化団地野菜栽培見学を行った。カフェすっぺ家さんでは角川かぶという伝承野菜を使った料理を頂いた。料理を食べることで、戸沢村の伝承野菜の味や魅力を知ることができた。すっぺ家を経営している鈴木さんは、東京で働いていたが何か地域のためにと戸沢村で地域おこし協力隊として働いていたそうだ。そして現在、地域の方々で気軽に集まれる場所、外部からの人々と地域の人々がコミュニケーションが取れるような場所作りたいという思いからすっぺ家を経営しているとのことだった。
私は、鈴木さんの行動力に非常に刺激を受けた。誰かがこのような決断をし、地域のために働くことで地域活性化に繋がるのだと強く感じることができた。水田の畑地化団地野菜栽培見学では、直売所や各々の場所に様々な種類の野菜を出荷できるよう、様々な種類の野菜を同じ場所に栽培し、高規格道路を建設中であった。道路を作ることで物流を発展させられる期待があるとして、まだ始めたばかりの事業のため今後の発展が戸沢村の活性化にどのように繋がるか楽しみだと感じた。
２回のフィールドワークを通して、今まで経験したことのないことを１度に経験できた非常に良い機会であった。若者が減少している戸沢村であったが、実際に行ってみると魅力的な村であり、戸沢村でイベントなどがあれば足を運び、力になりたいと感じた。

理学部　Nさん

今回私がこのプログラムに参加しようと思った理由は二つある。一つ目は、野菜づくりといった農作業の経験がほとんどなく、ましてや伝承野菜栽培はやったことがなかったので、経験してみたかったからだ。私は東京都出身で都会育ちであるため、とてもこのような活動をしてみたかった。二つ目は、パワースポット巡りである。東京のパワースポットや観光地は、建造物などの人工物が多く、浄の滝や御池といった自然のパワースポットがあまり存在しないため、他のプログラムにも農作業体験はあるが、このプログラムを選択した。

一回目のフィールドワークでは、戸沢村の伝承野菜であるえごまの播種、同様に伝承野菜であるからとり芋の定植、そば打ち、また予定では浄の滝へのトレッキングだったが変更して御池へのトレッキングを行った。そば打ちは一度だけ経験があって、ある程度のことは知っていると思っていたが、そば粉と小麦粉の割合によって呼び方が変わり、香りや味が全く異なることを深く感じた。伝承野菜のえごま、からとり芋の播種、定植では、職員さんの指示はとても簡潔で簡単なものであったが、実際にやってみると足腰、腕に負担がかかった。また、その日は曇りであったが、炎天下で行うことを想像すると単純な作業でも相当な重労働だと身に染みた。パワースポット巡りである御池へのトレッキングは、農作業より大変であった。前の日に雨が降った影響で道が悪く、何回か滑って落ちそうになったりして、精神的にも疲れた。しかし、道中での大杉、モリアオガエルとその卵、ルリイトトンボなどを観察することができ、貴重な体験ができたと感じる。

二回目のフィールドワークでは、えごまの苗の定植、野菜の播種、えごまの搾油所見学、畑地化団地での野菜見学を行った。一回目の異なり、二回目の定植などは炎天下の中で行われたため、一回目以上に疲れました。えごまの搾油所では、初めてえごまが韓国と深くかかわることを知りました。また、事前学習等で話は聞いていましたが、様々なえごまの商品を見られました。畑地化団地では、野菜栽培での経営の方法や補助金などの金銭的な話を聞かせていただいた。戸沢村で様々な野菜も栽培されていることを知り、戸沢村の農家さんや職員さんがとても工夫し、様々なことに挑戦していることがわかった。

また、二回ともお世話になった民泊の田中さんご夫婦にピザ体験や戸沢村の歴史やこれからの話など、貴重な体験をたくさんさせていただいた。

この活動を通して、パワースポットといった自然、民宿などの田舎ならではの良さを感じられた。また、人口問題、後継者問題やトレッキングの道の整備などの解決、改善策を考えて、更なる活動をしていくと共に、このような現状を家族などに伝え、見分を広げることが私たちにできることだと考える。

理学部　Tさん

今回のフィールドラーニングでは、戸沢村の角川地区

で伝承野菜の栽培とパワースポット巡りをしました。

1回目の活動ではエゴマの種まきとからとり芋の定植とパワースポットを巡りました。

僕も青森県の農村地域で育った身ではあるのですが農作業そのものの経験はあまりなかったので、種まきなどはとても新鮮な体験でした。また、からとり芋の定植はフィルムに穴をあけたり苗を植えたりなど作業そのものはシンプルですが終わった時にはかなり疲れがたまってしまいました。

パワースポット巡りでは、浄の滝のトレッキングができなくなったという事で、御池に急遽変更になりました。御池のトレッキングでは道中にあった長倉の大杉や今神温泉などがあり、御池ではモリアオガエルやルリイトトンボなどの動植物があり、とても貴重な自然資源を見ることができました。

2回目の活動では野菜の種まきや野菜の管理、エゴマ油の搾油所の見学、鞭打野地区の畑地化計画地域の見学をしました。

野菜の種まきや管理は炎天下の中行われたためとても疲れました。エゴマ油の搾油所の見学ではエゴマと韓国と戸沢村との関係と歴史や搾油の方法やその機械を見させていただきとても貴重な経験ができました。また、鞭打野地区の畑地化計画地区の見学では戸沢村の農業の方法や経営のシステムが変わってきていることがわかりました。

また、民宿の方々には“たくさん”のご飯をごちそうしていただきました。

そして、この戸沢村の人口が減少し少子高齢化が急激に進んでいることや若い人がなかなか引っ越してこないことなど今の戸沢村が抱えている深刻な問題などを聞きました。これからを生きる世代としてこういった現状を少しでも議論していきたいと思いました。

今回のフィールドラーニングを通して、本業として農業をしている方々の大変さや苦労を4日間の体験ではありますが垣間見ることができました。また、御池のトレッキングなどの自然資源や観光資源の活用や保全のやり方を見ることができました。そして、畑地化計画地区の見学で農村地域の活性化の方法を見ることができ、僕の地元でもこういった地下灌漑などの手法を参考にできたらいいなと思いました。

とても貴重な経験をすることができて良かったです。

工学部　Aさん

2回のフィールドラーニングを通して、感じたことは多々あった。まず一つは自然についてだ。御池へのトレッキングや角川の大杉を見て、触れて、今までは正直、森や畑には虫が多く苦手意識があった。しかし、森には実際に自分自身が行ってみないとわからない自然の迫力があり澄んだ空気や虫の鳴き声など五感を全部使って自然という存在を全身で感じられた。そうしたことで精神的にリフレッシュをすることができて、これから森林浴というものを積極的にしていきたいと思えた。また、畑作業では一日の中のわずか数時間しか作業していないにもかかわらずその日はどっと疲れがたまった。しかし、その分自分達で植えた苗が２回目に訪れたときに成長していて愛着がわき、できれば収穫まで行いたいという気持ちになり農業の楽しさや苦労の一端を知ることができた。

２つ目は角川の方達の温かさだ。行く先々で出会う方々はみんな朗らかで親しみやすく親切なお人柄だった。とりわけ民泊では私は初体験であったのでどういったものか分からなかったのだが、泊めてくださった方がとても親切で、そして美味しい地元の料理もふるまってくださって民宿の良さを知ることができた。また、最上伝承野菜であるエゴマの搾油所を見学させていただき、エゴマは戸沢村では大昔、栽培されていたがいったん途絶え、韓国から嫁いできた人たちからもう一度広まったという経緯を知り“最上伝承野菜”というだけに少し意外に思った。４日間の活動を通して角川の魅力を知り、周りにも広く広めて活気づいて貰いたいと思った。そこで、トレッキングコースの道をもっと整備してたくさんの人が訪れやすいようにすればよいのではないかと考えた。しかしただ人をたくさん呼ぶだけにはいかない。自然を観光地化しすぎると自然保護の問題が出てくるという。訪れる人がたくさんいることはとても重要なことだが、同時に戸沢村の魅力を削ってしまうのは違うことだと思う。このバランスを考えて村を活気づけようとするのはとても難しい問題だと思った。また、地域おこし協力隊で神奈川から戸沢村に移住し、伝承野菜を使った料理を振る舞うカフェを営む店主さんにお話をいただいた。移住する動機や移住してからの苦労、よかったことを伺うことができて、そういった生き方もがあるのかと自分の将来の選択肢を増やすことができた。今回、フィールドラーニングを通して様々な貴重な体験をすることができた。是非機会があればまた訪れたい。

工学部　Tさん

私は今回のフィールドラーニングを通して、戸沢村、特に角川地区の良い面と悪い面の現状を改めて知ることができた。私はこの角川地区出身であるが、大学生になって他県の人たちと一緒に活動をすることで、新しい側面から地域を見直すことができ、より現実的にこの地域の課題を捉え、考えることができたと思う。

まず、角川のパワースポットと称した「浄の滝」と「御池」だが、今回、浄の滝は道が崩れてしまったので、私たちは御池に行くことになった。御池は天然記念物の生物や、ブナの原生林がありとても貴重な場所になっているが、道中は険しい道のりとなっていた。そのうえ、入り口へ行くのにも砂利道を車で長い時間がかかる。これらのことから、多くの人に魅力を知ってもらうためにはもっと行きやすくするための整備が必要と感じたが、道路整備と自然環境とを両立が課題となる。

次に、伝承野菜栽培と関連して戸沢村の農業について述べる。戸沢村は「農地耕作条件改善事業」に」取り組んでいる。これは高規格道路建設のために区画整理された土地で国、県、村からの補助金を出して、畑を営んでもらおうという内容だ。戸沢村は高収益作物であるネギ、ニラ、パプリカの生産額が低い。この事業でそれらを拡大しようという狙いがある。さらに、昨年の豪雨で不作になってしまった名産の「えごま」は、この土地なら水害の被害が少ないので安定した収穫を見込めるという。この事業に村が力を入れて取り組んでいるのは、高規格道路が通ることですぐそばにインターチェンジができることに期待感を持っているからだと言っていた。

現在建設中である高規格道路とは、戸沢村古口―新庄市間を結ぶ道路のことである。さらに酒田方面にも伸ばされる予定であるという。この道路の津谷インターチェンジに産直市をつくることで、集客を図れるのではないだろうか。これが実現できたら文字通りの「産地直送」になるだろうし、村内の他地区の農家も出品先が増えてより村に貢献できることになる。従って、産直市の具体的な計画を練り、開通後すぐに開店ができるぐらいの準備が必要であると感じた。私たちも集客方法や、そのための設備を考えたりして貢献していきたい。

２回のフィールドワークを通して私は「角川をどう後世に残していくか」という課題を見つけた。これは単純な問題ではないが、この地で生まれ育った私にはとても重要な課題だと考える。上記の高規格道路と産直市が注目されれば、戸沢村が栄え、角川地区での生活も楽になるのではないか。そして角川の伝承野菜を産直市に出品して、伝承野菜のよさを広めていけたら良いと思う。これらのことを踏まえ、角川地区だけでどうにかしようと思わず、戸沢村全体や、隣の新庄市などと連携した地方行政が今後必要になってくると考えた。

最後に、今回の活動を経て、私は角川地区の端の集落までずっと残っていてほしいという思いが強まった。そのために、近い将来に私たちの世代が先代の取組みを引き継ぎ、発展させていくことで、故郷に恩返しできるようになりたい。

農学部　Kさん

伝承野菜栽培では、最上伝承野菜であるエゴマの播種・定植、からとり芋の定植を体験した。

もともと戸沢村では、エゴマの栽培が行われていたが、時代の移り変わりとともに栽培が衰えた。しかし、韓国から嫁いできた女性たちがキムチの材料として育て始めたことで、安全・安心な食用油を自給したいという農家の有志たちの目に留まり栽培が復活した、という歴史を学んだ。搾油所の機械はハングル文字で書かれていて、戸沢村と韓国の意外な繋がりに驚いた。油やドレッシング、パウダー、葉味噌、お菓子などの様々なエゴマ関連商品があり、戸沢村がエゴマの栽培や、販売に力を入れていることがわかった。

一回目のフィールドラーニングで山中の道なき道を歩き、御池へのトレッキングを行った。御池は神秘的で魅力的な場所であった。私は、このような自然に触れる機会を観光に結び付けられるのではないかと考えた。しかし、村の方は道路や散策路の整備により、生態系が壊れることを懸念しており、環境保全と観光業の両立の難しさを痛感した。

二回目のフィールドラーニングの水田の畑地化団地野菜栽培見学でお聞きした、農地耕作条件改善事業について、国からの補助金だけでなく、村や農家の方々もお金を負担し、村全体で事業に取り組んでいることが分かった。現在の戸沢村には１品目で１億円以上の生産額を見込める農作物がないため、市場で戦うには競争力が弱いことが課題としてあげられる。事業はまだ始まったばかりで、生育が不十分なものがあったり、補助金に頼ったり等、改善点は様々あるが、高収益作物の栽培拡大や、地下灌漑の整備等が生産力の向上につながればいいと思った。また、畑地化計画図を見ると、エゴマの栽培面積が広くあったため、私は最上伝承野菜の生産力向上も期待したいと思った。

「高規格道路が開通したら道の駅や産直のようなものを経営できたら」というお話を聞き、道の駅や産直のようなところで、新鮮な地元の野菜の購入を好む人は多くいると思うため、農作物の生産が安定したら、いつかはそのような事業も実現してほしいと思った。

私は今回のフィールドラーニングの中で、民泊を体験できたことも強く印象に残っている。温かく迎えてくださり、初めて訪れたとは思えないほど居心地が良かった。また、二回目に訪れた際、「おかえり」と言われたことがうれしく感じた。「また泊まりたい！」と思えるほど、民泊の温かさ、楽しさを味わえた。しかし、初めは知らない土地の知らない民家に泊まることに対する抵抗は少なからずあるのではないかと思ったため、民泊の良さ

を伝える方法についても、今後、自分自身が向き合っていきたい課題の一つとし、考えていきたいと思う。

農学部　Yさん

私の地元は現在人口増加が著しく、私が小学生だった頃800人弱であった私が通っていた小学校の全校生徒が、来年には2000人になるらしい。過疎化が進んでいる地域の人からするといいことに思えるかもしれないが、私の地元には土地がない。府立の高校を別の市に移してそこに中学校を移転することになっている。街がタワーマンションで埋め尽くされている。対して、戸沢村には土地があるが人は少ない。戸沢村に行ってみて田舎の人のあたたかさ、自然、おいしいもの、様々な魅力があった。若者人口を増やすことに貢献したいと感じた。しかし、田舎出身の多くの若者は都会へ行きたがる。そして都会出身のものの多くは便利さに慣れてしまい都会に留まりたがる。田舎の良さをいかしたまま人口を増やすには若者ではなくファミリー層をターゲットとし、子育てしやすい環境を作り上げることが考えられるが、村単位でそれを行えるのか私にはわからない。そこで私は、住んでもらう前にまずは戸沢村に来てもらうにはどうすれば良いかということを課題とした。村の人の話を聞いたところ、学校行事で来る学生、海外から農業を学びに来る人、トレッキングをしに来る人など人は結構来るようだ。しかし戸沢村といっても角川は奥地にあるということもあり、気軽に観光で行きやすい場所ではない。車がないと移動しづらい場所でもある。だが、貰ったパンフレットを見てもタクシーやバスはあるがレンタカーがない。車を借りて自分の運転で移動したい人も多いだろうからレンタカーを借りることができたらもっと気軽に行きやすいと感じた。また畑仕事をしてみて、慣れない動きで疲れたがいい汗をかくことができたと感じたとともに、1回目に植えた苗が2回目に行った際に大きくなっていて、目に見える成長に感動した。週末に友達と来て畑仕事をして、その後すっぺ家さんで自分たちが栽培に携わった野菜を使った料理をいただけるようなプログラムがあったら参加してみたいと感じた。近年趣味として週末にシェア畑などで野菜栽培を楽しむ人が多いという話を目にしたこともあり、こういったプログラムに人が来るのではないかと感じた。しかし、県外から来てもらう場合毎週来てもらうわけにはいかないので、シェア畑ほど長期的なものにはできない。種をまく→苗を定植する→収穫の3回程度のプログラムなら参加しやすいだろう。他人事のようであまりいい書き方ではないかもしれないが、今まで田舎をここまで身近に感じたことがなかった私にとって二回のフィールドラーニングは新しい世界を見ることができた貴重な体験であった。

第二部　授業記録

○後期「フィールドラーニング-共生の森もがみ」プログラム

１．七所明神伝説と地域活動のあり方を探る　・・・・・・・・・・・・・・154
２．新庄伝統の民俗文化を体験しよう～隠明寺凧と昔語り～　・・・・・159
３．謎を解き郷土料理を作ろう＆商店街のオリジナルマップ作り　・・・163
４．森と人との共存を考えるⅡ～山間地の文化を探り地域振興へ～　・・169
５．最上町の人・自然・文化に触れよう②　・・・・・・・・・・・・・・176
６．里地里山の再生Ⅱ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・180
７．子どもの自然体験活動支援講座２　・・・・・・・・・・・・・・・・185
８．人と自然をつなぐ環境保全活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・193
９．里山保全とキノコ料理　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・197
１０．創作太鼓と冬の里山ぐらし体験・・・・・・・・・・・・・・・・・204

七所明神伝説と地域活動のあり方を探る

活　動　状　況

○実施市町村：新庄市

○講　　師：七所明神の環境を良くする会　代表　叶内克和

○訪　問　日：令和元年 11 月 2 日(土)～3 日(日)、令和 2 年 1 月 11 日(土)～12 日(日)

○受　講　者：短期留学生 3 名、地域教育文化学部 1 名、理学部 1 名、工学部 5 名　　以上 10 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】１１月２日（土）	【１日目】１月１１日（土）
08:00　山形大学発 09:35　セブンイレブン新庄新町店着 09:50　お宮着（宮内） 開講式　オリエンテーション 10:00　説明 「七所神社の環境を良くする会」の活動 11:00　講話 「七所明神の由来」について 12:00　昼食（同一の場所で食事） 13:00　巡検　「七所明神巡り」 16:30　お宮到着 17:00　夕食　懇親会 BBQ 19:00　宿泊先へ	08:00　山形大学発 09:30　セブンイレブン新庄新町店着 09:40　お宮着　オリエンテーション 10:00　御祭燈祭の準備 12:00　昼食 13:00　御祭燈祭の準備 15:00　地域住民、子ども達との交流 16:00　もちつき体験 17:00　御祭燈点火 御祭燈祭　夕食 （御祭燈に願いを託す催し） 19:30　御祭燈祭終了 宿泊先へ
【２日目】１１月３日（日）	【２日目】１月１２日（日）
09:00　お宮着 萱刈り作業（御祭燈用） 10:15　昼食準備 芋煮準備　作ってみよう 12:30　昼食　後片付け 14:00　絵馬製作 15:20　次回活動の説明 及び御祭燈祭のブースについて企画立案 16:20　お宮発 16:40　セブンイレブン新庄新町店発 18:00　山形大学着	09:00　お宮着 御祭燈の後片付け 10:00　伝統工芸（はけご＝小物入れ）製作体験 11:00　昼食準備 炊飯作業　作ってみよう 12:00　昼食 13:00　伝統工芸（はけご）製作体験 15:00　活動に参加しての感想と提言 16:20　お宮発 16:30　セブンイレブン新庄新町店発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

短期留学生　Rさん

最初は先輩がこの地域体験の授業が面白くて、ぜひ参加してみてくださいと言われたので、好きなプロジェクトを選んで、新庄に来たわけである。二回の体験はただ4日間ですけど、今まで食べたことがなかった食べ物をいろいろ食べさせていただいて、本当に美味しくて、幸せに感じました。そして、前回で７書明神を巡りながら、神社に関することや新庄の歴史ももっとわかって来た。それも自分のこのプロジェクトに参加する理由なのである。在日の留学生として、その国の歴史や文化がわからないと、日本語もなかなか上手になれないと思う。次はそれぞれに二回の体験で感じたことや考えさせたことを述べたいと思う。

第一回のときは主には七所神社を巡ることを通じ、新庄市の歴史や神社のことがわかってきた。日本にくる前に、日本に神社やお寺が多いというイメージを持っている。実際に来てみたら、どこにも神社があるような気がしたのである。しかも、みんながよく神社に礼拝をしに行っている。特にお正月のとき、列が並んでいるほど賑やかである。フィールドランニングの授業で新庄には「７所神社」という長い歴史を持っている神社があるとわかったのである。事前学習を通じ、７所神社の由来や知識が少しわかった。実際に行ってみたら、思ったより面白く、素晴らしいと感じた。昔、中国でもお寺に行く人が多かったが、今の時代となり、お寺に参りに行くがだんだん少なくなってくる傾向にあるようであった。うちの母は毎年2、3回ぐらいお寺へ参りに行くことになっているので、私もお寺や神様にすごい敬意を持っている。時代が変わったからといっても、神社などのような昔から伝わってきた文化遺産は捨てるわけにはいかないと思う。経済が発展させるために、伝統的な宝物を捨てるなんて、もったいないと思う。新庄市の７所神社の存在が新庄市または山形市にとって、大事な遺産だと思う。神社を守ることに力を入れて、発展させるのが文化への継承だと思う。

第二回の時は主に「おさいとう」という祭りを行った。そして、地域の住民からはけごの作り方を教えていただき、はけごを作ってみた。今年は雪が少なく、残念だったが、納豆汁などいろいろな山形の食べものが食べられ、幸せで楽しかったである。古い祭りからいろいろ勉強になった。儀式の支度をし、そして儀式の様子を見て、日本は昔のことをきちんと守ってきたと感じた。それが最も敬ったところなのである。

四日間はあっという間に過ぎたが、みんなの笑顔がなかなか忘れられなく、永遠に心に刻んだ。自分もフィールドランニングの授業を通じ、いろいろ勉強になって、素晴らしい経験だと思う。もし機会があったら、また参加したいと思う。

人文社会科学部　Kさん

今回このもがみの授業を受けて、観光客としてじゃなくて、もがみ住んでいる人たちと一緒に4日生活したと感じました。この四日間で教科書で学べないことを身につけました。文化とも言語ともたくさんの体験経験できました。

外国人としてみると、新庄というところは振りのところを言えますが、時々親しく感じて、台湾のお爺さん住んでいるところとよく似ています。面白いことに、新庄のおじさんたちから感じた性格も似ています。優しい見えない優しさと、酒を飲んでみんな集まって喋るとこもそっくりです。

こんな暖かいところはなんで人が少なくなったのかがもがみで考えました。特に御祭灯祭が行われる時、想像した画面と全然違って、来る人が少ないから、ちょっと寂しかったです。

では、このイベントが人が少ない原因少し考えました。

まず、一番大きいな問題は宣伝の不足だと思います。思い出したら、最初事前調査の時、御祭燈祭ということはなんだと知りたいですが、それに関する資料は少ないし、書いてもとても簡単な紹介だけです。今新庄市ホームページを見ると、雪まつりのイベント紹介もまだ2019年度のインフォメーションですので、新庄市以外の人がもしイベント了解したくても、よくわからないです。新庄市内の宣伝はどうなるかわからないですが、市内の市民たち一緒に参加するのも大事なことだと思います。人が集まったら、もっと大きなイベントになるし、有名になるかもしれません。

しかし、宣伝ということも難しいことですね。特に新庄市にいる時、ほどんと年寄りの人と子供だけです。

今に科学進歩で、SNSで宣伝だけでかなり効果があるはずですが、もし年寄りの人たちあまり携帯利用していなかったら、それも問題点になります。この問題点は少子化と若者の人口の過疎化に関われますが、それはすぐ

変えることではないですから、自分が考えた解決方法は、学生たちがボランティアとしてスマホやパソコンなど使えない人に教えます。また、ネットの宣伝の手伝いもできるという方法です。

地域教育文化学部　Kさん

今回は私が参加した「七所明神伝説と地域活動のあり方を探る」というプログラムは、1回目は11月に、2回目は１月に行われた。短期留学生の私は、九月の時に山形に来たばかりで、日本の神社とお寺の拝み方はよく知らなくて、１回目までには神社に行ったことはなかった。日本の神社と民俗についてもっと知りたい、山形の人々と交流したいと思って、新庄市のこのプログラムを選んだ。

1回目の時に、１日で7所の神社に行ったとは想像以上のことだった。地元の先生から七所明神の伝説を聞いて、七所の神社はそれぞれが神様の七つの体の部分ということにまずびっくりした。神様の体の一部分も神社になるのだって不思議に思った。そして、先生から神社とお寺の拝み方を学んだ。まず、鳥居から入るということは神様の世界に入るという意味で、参道の真ん中は神様の道だから、真ん中で歩かないようにも注意しなければならない。そして、水で手と口を洗って、神社の社殿に行く。二礼、二拍手、一礼という流れで神様に拝む。地元の人との交流で日本の宗教観についても改めて理解した。生まれてから神社に行き、クリスマスの時はキリスト教徒になる、死んだらお寺に入るという多宗教な民族だと認識したのだ。

2回目の時に、御祭燈祭を体験して、様々な地元の料理を食べた。みんなで食事の準備をしたり、御祭燈祭の用意をしたりして、一息つく暇もないくらい忙しかった。しかし、御祭燈祭点火した時に、炎炎とした炎を囲んで見たり笑ったりした時に、一日中の疲れに代わって、興奮と感動の気持ちが溢れてきた。そして、2回目の時の食事は納豆中心の料理で、納豆汁、粘りうどん、餅つきなどなど、山形の独特な料理を味わえることができた。一番印象残ったのは納豆汁で、納豆を潰して味噌みたいなものにして、野菜などと一緒に煮込んで出来上がるという料理だ。納豆の匂いもしない味濃くて美味しい料理だった。納豆でそんなに様々な料理ができるのを初めて知った。

今回のプログラムで、何人かの日本人の学生達と新庄市の人々と交流できて、本当に貴重な思い出だと思う。山形の人々はどんな生活を過ごしているのか、何を食べているのかを知るようになった。そして、最後の感想会で、地元の人が今回のプログラムは最終回だと教えて、これからはどんな形で人を新庄市に引きつけるのかを考えている。小さな町でも、愛する、将来のことを心配しているという地元の人々に感心した。一期一会、新庄市で過ごした四日間は一生忘れられない思い出になる。

理学部　Iさん

①新庄で学んだ初めての体験について

初めての体験の一つに郷土料理があった。納豆を中心とした食文化や馬がっき、芋煮などの料理だ。

その味付けも独特で思ったよりも甘さを感じた。原因としては気候の影響だろう。寒冷地域の住民は体内温度を上げるためによく糖分を摂取するという。私の地元の埼玉は温暖な地域でよく汗をかくので味付けは塩っけが多い気がする。次に、神社の中で集会を開くということが初めての体験だった。神社というのは宗教施設であり中には気軽に入るものではないと認識していたためだ。

七所明神は地元住民のみに奉られている神社であり管理のために建物の中を管理する必要がある。

神社を管理する側の視点を得ることができたのは貴重な経験だった。おさいども初めてだった。

萱という植物を見るのも初めてだったし、おさいどの準備、儀式を経験するのも初だった。中でも印象に残っているのはおさいどとは神を帰す儀式だということだ。前年度に所有していた御守りなどに神が宿っているのでその神を帰し新年を迎えるそうだ。一人に対して神は重複してはいけないということだろう。また、今回のフィールドラーニングでは雪がほとんどなかった。珍しい年に当たったようだ。地元の方も困惑していたが除雪しなくてすむならいいのではないかと思った。

しかし、雪があって当たり前の生活をしてきた方々にとってはいつもどおりでない状況に不満があるようだった

②活動を通して見つけた課題と解決策について

まず、七所明神の環境を守る会の目的は会を存続して七所明神を守り続けることである。しかし、環境を守る会のメンバーの年齢層は４０代を超える層がほとんどだ。しかも男性しかいない。よって、課題は２０～３０代のメンバーを増やすこと女性メンバーを増やすことだ。この課題を解決するためにはメンバー間で増員する意思を固めること、増員したメンバーの面倒を見ることだ。守る会の方々の印象は似た人たちが集まっているという印象だった。飲酒や喫煙をするメンバーが多かったが、若い世代は飲酒や喫煙に対して抵抗感がある場合も考えられる。そういった自分たちと価値観の異なる人と共同作業ができるかどうかも話し合いの議題になるだろう。また、若い世代を引き込むためにはなぜ神社を守らないといけないのか、その理由に魅力が足りないと感じた。ずっと続けてきたから、守らないといけないからでは理由として不十分と感じる。仮に神社がなくなって困る人は誰なのか、どんな影響が出るのか、神社がなくなったら集まる場所はなくなってしまうのか。

それらをメンバー内で真剣に検討すれば、外部の人間に頼ることなく解決できるのではないか。

一例として私たちは、七所明神で初めての体験をさせ

てもらい新鮮な時間を過ごすことができた。その時間を地元の方に提供できたら自然と人が集まると思う。メンバーのかたは料理が上手だとかんじたので本格的で

なくていいので家庭で作れる海外の料理を作れるようになりそれを広告にすれば例年より参拝客数が伸びるのではないだろうか。

工学部　Kさん

今回のフィールドワークを通して私は一部ではあるが新庄のいいところを知ることができ、非常に貴重な体験をすることができた。特に印象に残ったことはいくつかある。1つは地域とのコミュニケーションの取り方である。1つの場所に人が集まりコミュニケーションを取り合う。このような集まりは私の地元にはなかったのでとても新鮮に感じられた。とても温かい雰囲気を味わえました。御祭燈についても市役所の人たちが取りまとめるのではなく自身たちで萱を刈りまとめて準備をし、当日もそれぞれが役割を持って仕切っていた。このことから地域住民同士の仲がとてもいいのだなと感じた。そして時間がたつにつれ新庄の人々は皆とても親切であることに気付きました。どんなことでも丁寧に教えてくださり様々な新しい文化・歴史について触れ合うことができました。そのほかにも私たちが困っているときも積極的に話しかけてくださり場を和ましてくださいました。そのためとてもこの講義に関する課題等に取り組みやすかったです。ほかにも新庄市の郷土料理がとても印象に残りました。特にひっぱりうどんと納豆汁が衝撃的でした。

このプログラムを通して私が考えたこの神社を守っていくための課題はこの七所明神の行事の参加する若い人たちを増やすことであると考える。私たちが会わなかっただけでいるのかもしれないが、今回このプログラムに参加した中ではあまり若い人たちが見受けられなかったように感じた。そのため若い人たちを増やすのが一番の課題であると考える。この課題を解決するためにはまず周辺地域への情報の発信力である。この周辺に住んでいる若い人や住民がこの行事のことを知らなければ参加することはない。そのため事前に各家庭にまわって行事について呼びかけることが必要なのではないかと考えた。そうすることで若者が増えるのではないかと考える。もう一つ感じた課題がある。それは女性の少なさである。今回のプログラムに参加してくださった方々のほとんどが男性であった。男性だけ集まることが悪いというわけではないが、女性がいないと若者やこどもが参加しにくいのではないかと考えた。解決策としてはこれもまた同じように発信力が大切になってくる。それと同時に拡散することによってより人が集まってくるのではないかと考えた。

最後にこのプログラムを通してこの新庄市、七所明神を盛り上げていくには特に「発信力」「拡散力」が大切なのではないかという考えに至った。

工学部　Sさん

今回のフィールドワークを通して私はとても貴重な体験ができたと思う。特に印象に残っている行事としては、新庄市の方々との共同作業である。今回のフィールドワークの主な行事であった郷土料理の体験料理では、山形県で昔から伝統的に食べられている郷土料理を堪能することができた。私の地元は、山形県の鶴岡市であるので、玉こんにゃくや、納豆汁などは馴染みがあるが、馬ガッキやひっぱりうどんなどの郷土料理はほとんど食べたことがなくとても美味しい料理であったため、帰省した際にでも家族と共に食べようと思った。また、納豆餅に関しては、今回のフィールドワークで初めて郷土料理と知った。これだけ美味しいものを全国の人はほとんど知らないということがわかったため、もっとこの料理を全国に広めていきたいと思った。2日目の午後に作ったはけごでは、私が不器用なため、作ることに苦戦していたところ、地元の方が最初から丁寧に教えてくださり、最終的には自分が想像していた以上のはけごを作ることができ、地元の人の温もりも同時に感じることができた。御祭燈祭では、1回目のフィールドワークで刈り取った茅を自分たちで組み立てて、夜にそれを燃やして、神主に祀ってもらうものであったが、とても神秘的であり、新庄市の伝統的な祭りを身近に体験することができてとても感動した。今年は暖冬で雪が全くと言ってもいいほど降っていなかったため、自分たちが前もって考えてきたゲームを地元の子供達と一緒に遊ぶことができなかったのは少し残念であった。

実際に新庄市のプログラムに参加して感じた事は、新庄市には若い人の活躍があまり感じられなかったことだ。私たちが今回関わった新庄市の方々で20代や30代の人はほとんど見られなかったと思う。実際に行った行事自体はとても楽しく印象に残るものであったが、もっと日頃から新庄市を盛り上げていくのであれば、若い人が積極的に行事に参加したり、新庄市を盛り上げるような活動を行なっていかないとダメだと思う。また、今回は

厳しかったが、もっと雪がたくさん降ることのアピールをしていくべきだと思った。新庄市は山形でも飛び抜けて降雪量が多いため、毎年行なっている御祭燈祭以外にも雪を使った行事もできたらとても面白いと思った。

工学部　Sさん

今回このフィールドワークに参加して非常に貴重な体験をすることができた。特に印象に残ったことは２つあり、1つは郷土料理である。芋煮や馬ガッキ、ひっぱりうどんや納豆汁など様々な郷土料理があり食べたことのないものばかりで非常に新鮮だった。郷土料理はその地域の気候的な面が多く関わっていると思う。そのため、冬に雪が大量に積もる分、長期に亘って保存のきくものが多く、昔の人の知恵と発想が色濃く残っている食べ物ばかりであるという印象を受けた。

２つ目は御祭燈祭についてである。今回のプログラムのメインであった御祭燈はどんど焼きという呼び方では聞いたことがあったが、いままで私は体験したことがなかった。自分たちで萱を刈ってそれを組み立て御祭燈の準備をして神主さんが行うお祓いにも参加し、地域の伝統や文化に触れることができた。この行事には地域住民の方も多く参加していて、この地域の伝統行事であることが再認識できた。あいにくの天気で私たちが企画していた出し物は行えなかったが、他の面で地域の方々と交流できたと思う。一回目のフィールドワークの時は新庄の方々との交流が少なかったが、二回目では一緒に準備をしたり御祭燈祭の運営をしたりしたことで多く交流する機会があった。

実際にこの地域に行って感じたこととしては、定期的に集まれる場所がありそこが神社であることが非常に面白いと感じた。定期的というのが重要だと思っていて、地域住民の横の繋がりを築けるし神社を守っていくこともできるからである。横の繋がりというのは私の地元ではあまりない気がする。現在よりも昔の方が地域住民の繋がりが強かったイメージがあり、それが今でも残っていたので今後も残していかなければならない文化のようなものだと思う。神社であるということに関しては、私は神社というものは宗教施設であり、神聖な場所であるため普段は人が立ち寄らない参拝するための施設であると思っていた。

しかし、今回行った宮内の七所明神では宗教施設であると同時に、地域の人々が集まる集会場的な役割もしていた。また、七所明神はこの地で非常に古くから信仰されているものであるので今でも根強く残っている。そのため、今後も残していかなければならない施設であると思う。そのような意味で人々が集まる集会場であることは重要であると考える。なぜなら人が集まる場所であればその施設を維持していくための手入れをするであろうと思うからである。

私が感じた課題としては神社を守っていくことが必要であると考える。この理由としては、失礼かもしれないが、今回携わって頂いた地域の方々が若い方が少なかったという点と隣町の方も仰っていたように女性の方がいなかったという点である。若い人が少ないと世代交代が難しいであろうし、女性の方がいないと子どもたちも集まらないと思う。逆に子どもたちがそこに行く習慣ができれば守っていかねばならない場所になりうるので解決できるかもしれない。また、若い世代の人々、いわゆる20～30代の人員を集めることが解決手段の1つであると思う。そして、神社の周辺に住んでいる住民を呼び込むことも必要になっていくであろう。

新庄伝統の民俗文化を体験しよう～隠明寺凧と昔語り～

活　動　状　況

○実施市町村：新庄市

○講　　師：隠明寺凧保存会　事務局長　佐々木　新一郎
　　新庄民話の会　会長　佐藤榮一　ほか

○訪　問　日：令和元年 11 月 2 日(土)～3 日(日)、令和元年 11 月 16 日(土)～17 日(日)

○受　講　者：短期留学生２名、人文社会科学部２名、工学部１名　　以上５名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】１１月２日（土）	【１日目】１１月１６日（土）
08:00　山形大学発 09:30　新庄市民プラザ着 09:35　オリエンテーション 10:15　講義『隠明寺凧の歴史について』 　　講師　佐々木新一郎（隠明寺凧保存会） 12:00　昼食・休憩（各自） 13:00　新庄市民プラザへ移動 　　隠明寺凧制作体験（絵付け） 　　講師　隠明寺凧保存会 16:00　振り返り 16:20　宿泊先（山屋セミナーハウス）へ	08:00　山形大学発 09:30　市民プラザ着 09:45　オリエンテーション 10:00　講義『昔話とは』 10:15　講義『新庄・最上の昔話』 11:00　方言を学ぶ 12:00　昼食・休憩（歴史センター） 13:00　旧矢作家住宅へ移動 13:15　昔語りを聴いてみよう 　　語り：新庄民話の会 14:00　ふるさとの民話語りに挑戦 　　※自分の古里に伝わる民話を１話語ってもらいます 15:30　振り返り 16:00　宿泊先（山屋セミナーハウス）へ
【２日目】１１月３日（日）	【２日目】１１月１７日（日）
08:30　宿泊先出発 09:15　新庄市民プラザ着 09:30　隠明寺凧制作体験（組立） 　　講師　隠明寺凧保存会 12:00　昼食・休憩（保存会と一緒に） 13:00　凧揚げ（最上中央公園）～15：00 　　※雨天時はセミナーハウス体育館 15:15　ワークショップ 　　『隠明寺凧の課題と解決策を探る』 16:15　振り返り 16:30　新庄市民プラザ発 18:00　山形大学着	09:00　宿泊先出発 09:00　市民プラザ着 09:15　新庄伝説の地巡り（バス） 12:00　昼食・休憩（各自） 13:00　ワークショップ 　　『昔話を作ってみよう』 16:00　振り返りとまとめ 16:30　市民プラザ発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Mさん

今回の共生の森もがみで、私は二つの伝統文化を体験した。それは隠明寺凧と昔語りである。私は上記2つのことを殆ど知らなかった。しかし、体験して抱いた感想はとても楽しかったということだ。

ところで、これら2つには共通の問題点を2つ抱えている。

一つ目は、知名度が低いということ。

二つ目は、知名度が低いことで、伝統文化を継承するための若手の人材育成が出来ないということ。

一つ目の問題から見ていこう。

知名度が低いということは、その文化は認知されず、ゆくゆくは消えてしまうという問題を抱えている。

この問題を解決するために文化継承に力を入れる地方自治体は様々な活動を行なっている。それは今回活動に協力していただいた、新庄市も同様である。

例えば隠明寺凧保存会では小学生などに隠明寺凧を普及したり、子供向けの大会を催すなどを行っている。

これに加えて私達が行ったディスカッションでは、youtubeなどやSNSを活用するなどの意見が出た。

二つ目の問題を見ていこう。

文化継承と言っても簡単な話ではない。例えば上記で挙げた小学生に何かを普及するにもそこに行くまでの交通費も自腹だし、給料が出るわけでもない。そして当然時間もかかる。

しかし、平日に小学校に行って何かを教えるということが社会人に出来るだろうか。これはかなり難しい。

ここで見えてくる問題は、一般社会の生活と文化継承の生活を両立するのはかなり困難であるということである。

このように活動に参加して講師の方などに話を聞くと文化継承は難しい課題があることが分かった。しかしこれは活動に参加して一番強く思ったことなのだが、その文化に携わっている人は、その文化にとても誇りを持っているし、本当に愛しているということだ。

この活動に参加してこういった地方民族文化を継承したいと思えた。

文化を継承することは重要であるか？

こう聞かれたら皆が重要であると答えるだろう。

しかし、なぜ重要なのかと聞かれたら答えることは難しい。

しかし、このような地方民族文化に関する活動に参加した我々のような人が、文化の重要性を考え直し、文化を継承することが大事だと思った。

人文社会科学部　Tさん

2回のフィールドラーニングの感想として、隠明寺凧は奥が深いと感じた。隠明寺凧の歴史を学んでいくと、狩野探幽という人物が隠明寺凧の始まりの人物であり、凧の絵柄は全部で30種類以上になるということを知った。代表的な絵柄として「般若」があり、「般若」と言われて連想するのはお面のようなものだが狩野派の影響で日本幽霊のような非常に珍しいデザインになっている。ここで疑問に思ったのは、今の時代、レーザー加工やデザインプリントなどを駆使して手軽に凧を作れるのではないか、と考えたが、直接手で描いた凧は太陽の光で透けて見えたり裏までしっかり色が入ったりしてこれが伝統凧の基本だということを学んだ。実際に自分が作った凧をあげてみて何より達成感を味わうことができた。これは地道に作った人にしか感じることができないものだとその時に思った。昔語りについては、子供の頃から聞きなじみのある昔話を方言で語ってみたり聴いてみたりした。正直慣れ親しんでない方言で聞くとわかりづらかったが、逆に集中して聞くことができそれが面白さに変わった。また、現地の人の方言には情があり昔話の世界観に入り込んでしまった。旧矢作家という場所で囲炉裏を囲み、照明も昔をイメージした明るさの中で昔話を聞くことは普段の生活では絶対にできない貴重な体験だと感じた。さらに、昔話には始めと終わりに結句という決まった言葉があることも面白いと感じた。

今回のフィールドラーニングを通して共通の課題ではないかと思ったのは、後継者不足だ。隠明寺凧は小学校の親子参加の課外授業で凧つくりを体験してもらってはいるもののそのあと意欲的に続ける人が少ないこと、昔語りは現代の若者が方言そのものを恥ずかしいものだと思い込んでいることが主な原因としてあげられる。解決策として、授業という半強制的な形ではない点や若い世代が手軽にできるきっかけづくりが大事だという点をふまえて、隠明寺凧だけではなく他の伝統遊びとコラボして「昔遊び教室」のようなものを作ること、

SNSなどを多用し若い世代が日常生活でも目に届くようなところで大々的に広告・宣伝することを提案したいと思う。しかし、そもそもの問題点として、仮にSNSなどで若者が広告・宣伝を目にしたからと言って自ら体験してみようとする意欲が芽生えるかどうかという難しい疑問が考えられるが、そういったときに実際に体験した若者と同年代にあたる我々が何らかの形で発表などをして直接伝統的な民族文化の奥深さ、楽しさを伝えることが1番効果のあることなのかもしれないと考えた。

人文社会科学部　Sさん

今回のフィールドラーニングで私たちは新庄市隠明寺凧と昔語りを体験した。

一回目の隠明寺凧では凧を作り、凧を揚げたが、ほとんど凧揚げたことのない私たちは最初隠明寺凧の歴史を教わり、隠明寺凧を作り始めるが、竹を貼ったり、糸を結んだりするのが難しくて、相当器用な人か凧が好きな人でないと何度も何度も同じ作業はできないと思った。

そこで一回目の二日目で直面する問題は民族文化をどうしたら伝承できるのかということだ。市内では中小高学校で授業の一環として、取り入れてはいるが、いかんせん受験内容には入らないから、やっている時は楽しくてもその場限りのものになってしまうのである。そして、私なりに考えた民族文化の伝承において一番難しいところはやはり、将来性が感じないことである。どんなに興味を持ってもらおうとお金にならないことは自分だけならともかく家族にも迷惑かけてしまうものなのである。直面するのはまず、どうしたら民族文化を経済に結び付けるか、それからなぜ民族文化は伝承しなければならないのかを見つめなおすことだと思った。

二回目では昔語りや方言を体験したが、ここでは若い人たちが方言喋れるのはもう非常に少なくなっていて、このままでは方言はいつかなくなってしまうことである。自分の故郷の台湾でも同じような状況になっていて、自分の家でも祖父母は方言を話し、両親は祖父母と話すとき方言で話すが、ほとんどは中国語で話していて、それで孫の代でももうみんな方言が話せなくなっていた。

台湾では小学校の授業の一環として、方言の授業を取り入れているが、週一時間という非常に短い時間なので聞き取りはできても話すのは難しかった。それに誰も方言を話さない環境にいるから、再び広まるのは非常に難しい。

日本でも台湾でも同じような状況になっている中、なぜ方言を残す必要があるかというのは今回のフィールドラーニングを通して、方言の温かさを感じ、昔語りでも方言を使ったほうが趣があると思った。

このプログラムを通して、私は自分がどれだけ自分の地元の文化を知らないかを知り、新庄の人たちはどれだけ自分たちの文化や言葉を大切にしているのかを知った。日本を知り、山形を知るために留学し、フィールドラーニングを取ったが、自分の知らなかった文化を知ることも大事だが、自分の地元の文化をもっと知り、いかに伝承されてきたか、これからはどうやって伝承していくのかを考えねばならないと思った。

人文社会科学部　Sさん

今回のフィールドラーニングは最上の新庄市で、凧を作り、昔話を方言で交流した。この四日間で、先生たち、市役所の方や友達からいろいろなことを勉強した。

一回目では、私は凧を作る時、本物の般若、伝統的な合図、の迫力を感じ、凧揚げを体験した。それに、凧保存会に勤めている佐々木先生から隠明寺凧の歴史や由来を聞き、凧の作り法を学んだ。その反面、難しいこともある。凧を作るとき、糸結ぶ方法や細かい作業、製作が難しいので、何回もやり直した。二日目の終わる直前、みんなで凧の伝統を伝える方法三つ考えた。それは、無償で奉仕する保存会を収益化すること、凧以外の伝統の遊びとコラボレーションや、Youtubeあるいは他のメディアを活用して、凧のことをみんなに伝えることだ。この二日間を過ごした後、私が一番印象に残ったことは、佐々木さんが凧に夢中になって人生を話している時のキラキラな目だ。なぜなら、私は特に好きなものとか、趣味とか全くないから。ただ、子供の頃小さい夢で、今までそれを追いかけてきたのは本当にすごいと思う。

二回目で、私は新庄弁の面白さに夢中だった。例えば、方言の「け」は食べなさいと痒いの二つ意味があり、「べらとってなんぼた」というには全部でいくらですかということで、「てててて」というのはやばいということだ。すべて面白かったと思う。他には、笠地蔵と山車の祭りの起源地へ行って、由来を聞き、土に叫ぶ人、松田甚次郎、の生平と事績を聴いたり、土舞台を見たりした。一番印象に残ったことは、旧矢作家住宅で炭焼きを見ながら、方言で昔話を交流することだ。方言を教えた渡辺さんは普通の教室で昔話を話すのは昔話の感じがないって、やさしい顔で美味しい手作りお菓子やコーヒーを準備してくれた。学生なのにお客様みたいにあしらわれた

のは本当に感謝している。あんなに寒い日に、みんなは炭火を囲んで、先生の昔話を真剣に耳を傾けたのはこの授業を受けないと体験できない経験だと思う。

この四日間、佐々木さん、渡辺さん、新庄民話の会会長、武田さんや、市役所の方などから、皆は本当に自分の文化を大切していることに気付いて、感動した。これから、自分も台湾の文化の保存や次の世代に伝えることを努力したいと思う。

工学部　Hさん

今回のフィールドラーニング共生の森もがみでは、「新庄伝統の民俗文化を体験しよう～隠明寺凧と昔語り～」というプログラムを行って、たくさんの貴重な体験ができたのだなと思った。具体的にどのような活動を行ったかというと、まず一回目の一日目に新庄市に昔から伝わる隠明寺凧について詳しく知ることができた。そして、その隠明寺凧を実際に作ろうという取り組みを行った。一回目の二日目には、その隠明寺凧を完成させて、自分の手でそれを飛ばすという体験をした。隠明寺凧を作る過程では、版画から絵を和紙に刷って、絵の具で色をつけて絵は出来上がるのだが、凧の骨組みを組み立てるのにとても苦戦した。新庄市の講師の方に指導してもらいながらなんとか作り上げることができた。そしてその隠明寺凧を実際に飛ばしてみて、飛んでいる自分の凧を見たときはとても感動した。この活動を通して、隠明寺凧をどのようにしたらたくさんの人に知ってもらえるかなどをみんなで考え、自分たちには何ができるのだろうかということについても考えることができた。一回目の活動で得られたものは、隠明寺凧の良さ、隠明寺凧を作ることの楽しさ、そして隠明寺凧を飛ばす感動が得られたことである。二回目の活動では、一日目に、新庄市の昔語りの人たちに昔話を語ってもらいそれを聞くという活動をした。最も印象に残っている昔話は、般若の話である。さらに自分たちが持ち寄った自分たちの住んでいるところの昔話を自分たちで語るという活動をした。自分が語った昔話は、宮城県の昭和町というところの昔話で、「おさんこきつね」という物語である。そして二日目には、新庄市の伝統的な名所をバスで見て回ったり、自分たちの手でちょっとした昔話を作ろうという活動を行った。そして作った昔話を語るという活動をした。自分たちが作った昔話は、悪いことをしたら必ず自分に返ってくるということをテーマに物語を作った。実際に作ってみて、難しいなとは思ったが、仲間と協力して作りきることができた。二回目の活動で得られたものは、仲間と協力することの大切さ、そして昔話というものはとても面白いものなのだということである。

これら二回の活動等を通して、学んだことは、自分が実際に目で見て、聞いて、体験をすることで、感動、喜び、達成感などは体験をしてみなければ得ることができないということである。短い活動期間であったが、もう二度と体験できないであろう貴重な体験ができて本当に良かったと思う。

謎を解き郷土料理を作ろう＆商店街のオリジナルマップ作り

活　動　状　況

〇実施市町村：新庄市

〇講　　師：最上のくらし舎　吉野　優美　他

〇訪　問　日：令和元年 11 月 16 日(土)～17 日(日)、12 月 14 日(土)～15 日(日)

〇受　講　者：人文社会科学部 3 名、理学部 2 名、工学部 4 名　　以上 9 名

〇スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】11 月 16 日（土）	【１日目】12 月 14 日（土）
08:00　山形大学発	08:00　山形大学発
09:30　新庄信用金庫万場町支店	09:30　新庄信用金庫万場町支店
10:00　万場町のくらし着	10:00　万場町のくらし着
10:10　開講式　オリエンテーション	10:10　振り返り
10:15　説明	11:00　商店街町歩き
「万場町商店街と郷土料理」	12:00　各自商店街店舗にて昼食
11:00　町歩き	13:00　打ち合わせ
12:00　昼食 in のくらし	13:30　郷土料理謎解き（聞き取り）
13:00　郷土料理謎解き（聞き取り）	15:00　食材買い出し
14:00　聞き取り内容まとめ	16:00　夕食づくり開始
15:00　食材買い出し	18:00　夕食
16:00　夕食づくり開始	19:00　宿泊先へ
18:00　夕食	
19:00　宿泊先へ	
【２日目】11 月 17 日（日）	【２日目】12 月 15 日（日）
09:30　のくらし着	09:30　のくらし着
10:00　フォトジェニックポイント探し	10:00　マップ作成
11:00　昼食場所検討会議	12:00　昼食 in のくらし
12:00　各自昼食	13:00　マップ作成
13:00　マップ作成	15:00　商店街へ配布
（作成班と素材集め班に分かれる）	15:30　活動の感想等
15:30　活動の感想と次回の説明	16:15　新庄信用金庫万場町支店
16:15　新庄信用金庫万場町支店	18:00　山形大学着
18:00　山形大学着	

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Iさん

Ⅰ序論

本レポートでは私たちが新庄市万場町で行ったフィールドラーニングについて述べる。フィールドラーニングを行う上で二つの課題が与えられた。一つ目は郷土料理を作ること、二つ目は万場町でフィールドラーニングを行う中で自らのはぐれメタル（町の良いところ）を見つけることだ。

これらの課題を行うために私たちは実際に万場町を歩いて回り、町の人々とコミュニケーションを取りながら郷土料理に必要な材料やレシピを教えてもらった。また商店街を散策する中で自分たちが抱く商店街のイメージと実際の商店街を照らし合わせ商店街の良さや課題について考えた。

Ⅱ本論

①商店街の良さ

実際に万場町商店街を散策して商店街の良いところを多く発見した。まず一番の魅力は店の人との距離が近いということだ。必要なものを伝えることで商品やその使い方を教えてくれるだけでなくサービスをしてくれる店が多かった。実際に私たちが郷土料理を作るときにも様々なアドバイスや手助けをしてもらった。まようなコミュニケーションを楽しめるのが商店街の何よりの魅力だと思う。

②課題点

主に課題だと思う点は人が集まらないということだ。商店街を実際に回ってみて魅力的なお店が多いと感じたが人通りが少なく活気がないと思った。また人が少ないために休日も店を閉めているお店が多かった。現在ではコンビニやスーパーで楽に買い物ができるため商店街に足を運ぼうとする人が減ったのかもしれない。

③解決策

この問題を解決するためには商店街のそれぞれのお店の魅力を発信して人々に身近なものとしてみてもらう必要があると思った。そこで私たちは万場町商店街のマップを作った。このマップはインターネット上で見ることができお店の基本情報から実際に感じた魅力まで記してあるため見た人が興味を持つだけでなく身近に感じると思う。また若者の興味を引くためにツイッターやインスタグラムなどのSNSで拡散するなどの策を考えた。

Ⅲ結論

今回のフィールドラーニングで万場町商店街と深く関わってみて今まで気づかなかった商店街の魅力を感じることができた。それとともに商店街に人を集めたり地域を活性化したりすることは想像以上に難しいと思った。これから自分自身も商店街やそのほかの地域に関わりのあるものを利用して新しい発見をしたいと思った。

人文社会科学部　Sさん

Ⅰ.序論

これから、もがみのフィールドワークで学んだ内容や課題解決の過程について記していく。

私たちの主な活動は、万場町の多様な店をデジタルマップ上に表していくというものである。万場町の方々に協力していただき、万場町の良さが伝わるようなマップを作製できるよう心がけた。

ほかの活動としては、新庄ないしは山形の郷土料理を自分たちだけでつくること、万場町のはぐれメタルを各自見つけることがあげられる。はぐれメタルとは、ドラゴンクエストをやったことのある人にはおなじみの、あまり遭遇できないことで有名なレアモンスターのことである。万場町の穴場や貴重なものをはぐれメタルと形容し、それらを見つけられるよう努力した。

Ⅱ.本論

序論で述べた郷土料理を自分たちで作る活動を通して、万場町の商店街の人々は気さくでとても優しく、店にもよい品物が揃っていることがわかった。しかし、私たちは土日であるにもかかわらず人通りがかなり少なく、活気がないことに疑問を抱いた。また、シャッターが閉じてある店もかなり多いことにも気が付いた。これは新庄市に便利なスーパーが増え、商店街よりもスーパーを利用したほうが便利であると考える人が多いためだと考えられる。

そもそも万場町の魅力に気が付かないと商店街を利用する人は増えないため、どんな店があるのかをデジタルマップ上にまとめ、それぞれの店の良さを発信できるようにした。ネット上で見られるため、だれもが気楽にアクセスできることや、様々な情報をコンパクトにまとめることができることがこのデジタルマップの強みである。店の特色、写真、営業時間、定休日、電話番号などの詳しい情報を載せて、店の詳細がわかるようにした。

このマップをもっと知ってもらうために有効な手段としては、やはりSNSが挙げられるのではないかと考える。私たちのような若者はよくSNSを利用するため、TwitterやInstagramなどはマップを通して万場町を伝

えることができる絶好の場だからである。これで、少しでも万場町に興味を持ってくれる人が増えていくのではないかと考える。

Ⅲ. 結論

今回のもがみの集中講義を通して、万場町のようなすばらしい商店街が人々にほとんど知られていない状況にあるのは悲しいことだと感じた。たしかにスーパーのほうが便利であるかもしれないが、買い物をするたびに店の方と会話できる楽しさはスーパーではなく、商店街でしか感じることができない。今回のフィールドワークでそのことを痛感した。

私の地元は新庄だが、まだこのような古き良き商店街が新庄にはあるのだなと思った。万場町を発信する今回のような活動にやりがいを感じたため、機会があれば自分の地元をより多くの人に知ってもらえるような活動にも参加していきたい。

理学部　Iさん

今回のフィールドラーニング共生の森もがみでの経験を踏まえ、最上地域の可能性を再認識することができたと思います。私の出身は山形県最上町、今回参加したプログラムが実施された新庄市の隣の町です。自分の地元で行われるフィールドワーク、一体どんなことを学びどんな体験ができるのだろう、そんな心持ちで臨んだ計二回、四日間の授業。結果から言えばすべてが新たな発見でした。目にするもの耳にするものの多くが知らないことばかりで、しかし、それは良いことばかりではなく、過疎化や高齢化といった問題などもそうでした。実際、日中の商店街を歩いてみて聞こえるのは冷たい風の吹く音や車のエンジン音ばかりで、到底賑やかとは言い切れない現状がそこにはありました。その光景は私の地元の最上町でもよく見られるもので、万場町商店街が抱える問題は決して他人事ではないのだと改めて感じました。しかし、いざ商店街の店々を訪ねてみるとどうでしょう。突然訪ねてきた見ず知らずの学生相手にも優しく対応し、親身になって相談や交渉に乗ってくれるような方がほとんどでした。私は、それこそがもがみの良さだと強く考えています。狭いコミュニティで長年の付き合いを経て築かれた、地元の人たちの強い絆。商店街だからこその強みにすることができるはずだと私は考えました。しかし、これを生かしていくには外側から覗いただけではあまり伝わることのない、というのが難しいところです。そこで、私たちはプログラムを通しグループで話し合いを深め、商店街も強みともいえる人間関係の温かさを自らで発信していく手立てを考えました。今や誰もが日常的に目にするインターネットやSNS、それらをうまく活用し商店街の魅力を伝えていこうという、いかにも学生らしいアイディアです。しかしながら、長らく続いてきた商店街の歴史が時代に沿って新たな形で魅力を発信していく、というものはもがみ全域で今後取り組めるものだと思います。そして、その取り組みを可能にしていくのは今後もがみの未来を担っていく若者たちです。私は今回のフィールドワークを通して得た経験を活かし、もがみの活気あふれる賑やかな未来を創る、その一員になれたらいいと強く考えています。

理学部　Sさん

I. 導入

私たちは最上集中講義に参加する上で2つの課題を与えられました。1つ目は自分のメタルスライムを見つけることで、2つ目は郷土料理を作ることです。（メタルスライムとはドラゴンクエストに出てくるモンスターのことで経験値が多く貰えるレアモンスターのことです。）

郷土料理を作るために、料理に必要な道具、材料、作る手順を地元の人に聞きこみをしました。また、自分なりのレアキャラ的なものを見つけるために万場町商店街を散策しました。そのなかで土曜日にも関わらず外には人が歩いていない商店街の状況に気づきました。

商店街の状況として、お店はまだあるもののシャッターを閉めてしまっているお店も多く見られ、車が通るだけの静かなシャッター街となってしまっていました。

II. 本論

①商店街の課題

商店街に立寄る人が少ないという課題に対してどうして商店街が廃れてしまったのかを考えました。

(1)他に利便性のある道路が建設されたため、そもそもこの商店街を通る必要がない。

(2)店を経営する人がいなくなり、商店街の良さがなくなってしまった。

(3)商店街の良さは残っているものの、その良さが伝わっていない、伝わらなくなった。

(1)に関しては人通りの少なさに対して車通りは一般的な量で特に少ないとも感じなかったため理由としては不適切と考え、(2)も実際聞きこみをしていく上で商店街の魅力は無くなっていないことが分かりました。

そこで私たちは(3)の商店街の魅力が伝わっていない

もしくは伝わらなくなってしまったのではないかと考えました。

②課題解決に向けて

商店街の魅力を広げるために私たちインターネット上でマップを作ることにしました。商店街の人達は私たちよりもずっと年配で、インターネットに弱くアナログのマップは作れても、ネットでのマップ作成は難しいのではないかと考え、わたしたちにしか出来ないことをしようということでインターネット上で作成することにしました。また、このマップを制作する上で新しくここの商店街に遊びに来る、泊まりに来る人を対象としました。

A)インターネット上のマップで作り、伝えることのメリット

・ネット上で作ることによって道路や建物などの原型があるため正確に作ることができる。

・写真などを載せることでどのような店なのかを詳しく知ることが出来る。

・ネット上で作ったため、保存や共有、閲覧が簡単になる。

B)インターネット上のマップを作り、伝えることのデメリット

・ネット上で保管されているため、受け手側に何らかのアクション(Webを見る、QRコードを読み取るなど)を強いることとなり、見てくれない可能性が大きくなる。

III.まとめ

私たちは活動を通して現在の商店街の現状を知ることが出来ました。その解決策として今回はインターネット上でマップを作成したが、そのマップにもメリットとデメリットがあることがわかりました。

課題解決に向けて今回はインターネット上でマップを作るという方法を取りましたが商店街の良さを広げるために伝える手段は誰を対象にするのかということによって大きく変わることもわかりました。

今回のもがみを通して私は万場町のような商店街があるという現状を知ることが出来ました。また、それと同時に地域を活気づけることの難しさも分かりました。このもがみ集中講義に参加するまでは地域のことには興味がありませんでしたが自分の街にもこのような商店街があるのか興味を持つようになりました。今後はこのような地域おこしにも参加したいと思いました。

工学部　Wさん

Ⅰ　序論

本レポートは新庄市万場町商店街を中心として活動したフィールドワークについて記す。

私たちはフィールドワークで2つの課題を与えられた。1つ目は郷土料理を作ることで、2つ目はフィールドワークをする中で自分が思う自分なりの新しい発見を見つけることだった。

私たちはその課題を達成するために、今回の基点である万場町商店街を散策した。散策する中で自分なりの新しい発見を探しながら、商店街の人たちにインタビューをし、郷土料理を作るために必要な材料や道具、作る手順を学んだ。散策中、土曜日にもかかわらず商店街のにぎわいが欠けていることに疑問を抱いた。

商店街にはたくさんの店が建ち並ぶが、シャッターがしまっているお店も多く、車通りは少しあるものの、静かなシャッター街になっているように見受けられた。

Ⅱ　本論

はじめに私たちは商店街のにぎわいがなぜ欠けてしまったのか考えた。まず考えたのは、今買い物をするときにはコミュニケーションはあまりとらなくていいため気楽に買い物が出来るが、商店街では店主ときちんと話さなければいけないため、買い物しづらいと思う人が出てきたかもしれないということだ。

他に考えたのは、お店はたくさんあるのににぎわっていないため、商店街の良さに気付いていない人が多く、商店街の魅力が伝わっていないかもしれないということだ。

これらの課題を解決するために私たちは、万場町商店街のマップを作ることにした。マップを作りそれを広めることで万場町商店街に来てくれる人を増やせるのではないかと考えた。マップはすべてインターネット上で作り、写真やお店についての説明を見やすく出来るようにした。また、大学生の視点から作ることで、若い層の人たちにも興味を持ってもらえるようなマップづくりも心がけた。インターネット上で作ったため、閲覧や

保存、共有などがしやすく、SNS上で拡散することも容易で、たくさんの人に見てもらいやすく出来るようにした。マップの内容に興味を持って万場町商店街に訪れてくれる人を増やせるのではないかと思う。

Ⅲ　結論

今回のフィールドワークで万場町のような商店街があることがわかった。お店がたくさんあって良さがあるにも関わらず、人通りが少ないのが現状である。そのため私たちが作ったマップをSNSなどで拡散することで、万場町商店街に訪れる人が増えるのではないかと考えた。フィールドワークを通して、地域おこしは難しく、大変だとわかった反面、地域おこしに興味も持った。今後も自分の地元などでも地域おこしに協力したいと思う。

工学部　Ｉさん

1.序論

はじめに、本レポートでは新庄市万場町におけるフィールドワークを経て感じたことや考えたことを記す。万場町には商店街があり、シャッター街ではなく今でも続く店が多いと言うのが特徴である。私は商店街と聞いて、客が多く来ていて賑やかな場所というのを想定した。しかし、万場町の商店街は、店はありいい人が多いのにも関わらず、客は少なく、またシャッターが閉まっている店も見られた。そこで私はなぜ客が少ないのかと思い、どうしたら人が増えるようになるのかを課題として考えることにした。

2.本論

⑴人が少ない理由

人が少ない理由は、最近のコミュニケーションの少ない買い物に慣れてしまったことが原因なのではないかと考える。商店街の買い物は近年のものと違い、会話を通して買い物をする必要がある。会話をしないと買い物ができないことは面倒臭いと考える人が多いのではないかと考える。

また、商店街の前の道路をただの交通手段としてしか使っていないために、商店街という存在にあまり気付いていないのではないかと考える。実際にフィールドワークを行った際にも、車通りは多いもののその車が商店街に止まることは少なかった。これらの理由が、万場町の人が少ない原因なのではないかと考える。

3.課題解決のために

課題について私ができることを考える。私たちがフィールドワークで作ったオリジナルマップを多くの人に知らせることで、万場町に来る人を増やせるのではないかと考える。私たち大学生が作ることで、若い人たちの視点で考えることができる。私たちが作ったマップを万場町に初めて来る人や知らない人たちにも理解してもらえるように、万場町へのアクセスや目印になる写真を記載する工夫を加えると良くなると考えた。また、作ったマップをSNSで拡散することで膨大な宣伝力になるのではないかと思う。さらには、私たちが行った郷土料理作りをイベントにすることで山形に対する理解を深めるとともに、万場町に来る人を増やすことができるのではないかと思う。

4.まとめ

私は、万場町でのフィールドワークを通して商店街の実態を知った。それは、商店街の人が少なくなっているという現状だ。そこで、どうしたら人が増えるようになるのかということを課題として考えることにした。人が少ない理由として、商店街での買い物を面倒くさいと思う若者の増加や、万場町が単なる通過点でしかないことがある。その解決策として、私たちが作ったマップを改善してSNSに載せることで万場町に来る人が増えるのではないかと考えた。このフィールドワークを通して、万場町が抱える問題に対して自分たちで解決することの難しさや、グループ活動で地域に貢献する楽しさを知った。

工学部　Ｎさん

Ⅰ序論

本レポートは新庄市万場町商店街を中心として行ったフィールドラーニングを記す。私たちには二つの課題が課せられた。一つ目は数少ないヒントの中、万場町の人に聞き込み調査を行い郷土料理を作るということ。２つ目は万場町商店街のオリジナルマップデジタルを聞き込み調査にもとにネット上で作るということである。そして更なる課題として自分だけが思う万場町の良かった思ったポイントを見つけるということが追加された。

Ⅱ本論

まず、郷土料理のお題は、「納豆汁」「引きずりうどん」「芋煮」であった。最初のヒントとしては料理名のみしか説明されないので、自分たちで万場町の人の聞き込み調査によるアドバイスをもとに料理を作っていった。万場町の人はとても暖かく私たちのことを受け入れてくれ、日を重ねるごとに会話が弾むようになった。私たちが調理器具がないと困っていた時に、快く器具を貸してくださった。また、ここの聞き込み調査の時に感じたのが、万場町商店街の人（客）の少なさである。

ここで私たちはこの魅力がある万場町商店街にもっと人を集める必要があると思った。そのために二つ目の課題、オリジナルデジタルマップ作りで完成したマップを利用することで、万場町に初めて来る人に向けて万場町には魅力があることを知らせ、その魅力がある場所やものにたどり着きやすくし万場町にさらなる興味を持ってもらうようにした。そうすることでまた万場町に来てもらえると考えたからである。したがって、デジタルマップに関しては万場町の魅力が一目で見れるようにすることを意識して作成した。

また自分だけが思う万場町の良かった思ったポイ

ントとして私が見つけたのは、みんなで作った郷土料理をみんなで囲んで男女年齢問わず食べたということである。あのような体験は、万場町のような近所にの人が非常に気さくな方々でないとできないことだと思った。

Ⅲ結論

私は万場町商店街を実際に目で見て、予想していた以上に人がいなくシャッターが閉まっている状況を体験した。そのような状況を見て、何とかしなければならないと思い、このような取り組みを行った。やはり厳しい状況でも、何かアクションを起こさないと進歩はしないので少しでも万場町に対して行動を働きかけられたのは個人的にはうれしかった。

工学部　Kさん

序論

本レポートは新庄市番場を中心としてフィールドワークを行った活動について記す。私たちは活動するにあたって課題が与えられた。それは、郷土料理作りと自分なりの何か新しい発見をすることだ。郷土料理を作るにあたって必要な材料や器具などを商店街の方々に教えてもらった。その中で商店街にもかかわらず人通りがとても少なく、日曜日には休んでいるお店も多く閉まっていてシャッター街になっており少し寂しいような風景になっていた。

本論

人が少なくなった理由としては、ほかの地域の発展や万場町から出ていく人の増加により若者の姿は見なくなってしまい昔から住んでいる高齢者だけが残ってしまっている状態になっていることが上げられると思います。また、今はスーパーがあるのでコミュニケーションをとらなくても買い物ができてしまうが商店街にあるお店ではコミュニケーションが必要になってしまうため買い物しづらいというお客さんも少なからずいるのではないかと思います。商店街にはスーパーとはまた違った良さがありそれに気づいていない人もいると思います。

課題解決のために

私たちはマップ作りをしました。初めて万場町を訪れた人やゲストハウスに中～長期滞在者のために提供し、買い物などをしてもらい街を活性化させようと考えました。そのマップは紙媒体ではなくデジタルのものでインターネットを活用してもらう形のものです。現地の住民が作るのではなく若い世代の私たち大学生が作成することによって若者にも焦点を当てたマップ作りができると思います。また、インターネットの利点として保存もできますし、友達と共有してもらうこともできます。SNSで拡散することもできるので世の中に広めるには適正だと考えました。これを通して万場町に訪れる人が多くなればなと思います。

まとめ

私はフィールドワークを通して万場町が抱える問題について知ることができた。その課題を解決するために、インターネットを駆使して万場町のマップを大学生の目線で作ることでより若者も増えるのではないかと考えました。また、地域の町おこしの大変さも知ることができた。決して簡単なことではなく継続して取り組むことで成し遂げるものだと思います。難しさも知りましたが町おこしの楽しさも知ることができまた町おこしをする機会がありましたら積極的に参加していきたいと思います。

森と人との共存Ⅱ～山間地の文化を探り地域振興へ～

活　動　状　況

○実施市町村：金山町

○講　　師：遊学の森案内人会ボランティアのみなさん及び地域住民

○訪　問　日：令和元年 12 月 14 日(土)～15 日(日)、12 月 21 日(土)～22 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部 2 名、地域教育文化学部 3 名、理学部 1 名、工学部 3 名、農学部 1 名
以上 10 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】１２月１４日（土）	【１日目】１２月２１日（土）
08:00　山形大学発 10:00　遊学の森着 10:10　オリエンテーリング 10:30　うどん打ち 12:00　昼食 13:30　夕食づくり 16:30　移動 17:00　お産土様　歳灯 19:30　夕食交流 20:30　終了、入浴 21:30　ふりかえり	08:00　山形大学発 10:15　オリエンテーリング 10:30　スノートレッキング 12:00　昼食 13:00　雪遊び発表会 16:00　終了 16:30　移動（ホテル） 19:00　少年番楽奉納 ※変更もある 　　児童交流（夕食）※変更もある 20:30　入浴 21:30　移動、ふりかえり
【２日目】１２月１５日（日）	【２日目】１２月２２日（日）
06:00　起床、雪かき 08:00　朝食 10:00　遊学の森でリースづくり 12:00　里山バイキングで昼食 13:00　ぶどう蔦でペンダントづくり 14:30　終了、ふりかえり 15:45　解散 18:00　山形大学着	06:00　起床、雪かき 08:00　朝食 10:00　オリエンテーリング 10:30　餅つき、門松づくり 12:00　昼食（餅） 13:00　なし団子づくり 14:30　終了、ふりかえり 15:45　解散 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Sさん

このフィールドワーク1回目は、そば打ちやお産土様歳灯の見学、リースやストラップ作りをした。2回目は、少年番楽の見学、餅つきや門松づくりで地域の方と交流した。参加後に私は、参加前に私が持っていた、いわゆる「山間地域」のイメージが金山町には良い意味で当てはまらないなという感想を持った。今までこのような地域は、人口が少なく静かで、子供が少なくにぎやかさが無い、雪が多く除雪が大変である。などネガティブなイメージしか持っていなかった。これらは単に外部から見たイメージでしかなく、実際に訪れて、関心を持って調べてみないとわからないことがたくさんあった。

金山町には、イベント（雪まつり、チェーンソーアート、少年番楽、ツールドカムロ、産業まつり）がたくさんある。これは町にある自然環境の魅力とその活用方法をきちんと把握していないとできないことだと思うし、町の内外から人を呼び込む工夫がなされている。また、確かに子供の人数は少ないが、みんなとても元気で、大学生との交流も盛んである。町全体で景観づくりに取り組んでおり、居心地の良い場所を提供している。私は金山町に外部からの来訪者という気持ちで参加したが、地域の人と話す中で、大学生が来てくれると雰囲気が明るくなる、と言っていただき、喜んでもらっていることが嬉しかった。

また、お歳灯や少年番楽で、伝統行事の見学に参加させていただいた。伝統行事が衰退、消滅しているというのは普段からよく聞く話である。お歳灯に参加した際、大人の方に質問をすると、皆さんがその行事の意味や歴史を知っていて、私たちに説明してくださった。私たちも出身地に行事などがあるが、その概要を外部から来た人に説明する知識は持っていない。さらに、実際に子供たちと交流することで、人数の少なさを目の当たりにさせられた。今回の参加で、自分はこの活動や、日々の学習において受け身になりすぎていないか？ということを常に考えさせられた。歳灯や番楽見学後の夕食交流やクラフト作業の間には、地域に住む皆さんとお話しする機会を設けていただいた。しかし1回目の参加では、交流の機会を十分に活かしきれていなかった。地域の課題は何か、自分が住民になったつもりで考えることができていなかった。

また2回目の活動で印象に残ったのは、人と自然の付き合い方についてである。昼食では源流で釣れたイワナを頂き、その後の森林散策では、ペットボトルでできた、ハチを捕まえる道具を木につるしていることを知った。生態系や森を守ろうと言うのは簡単だが、人がどこまで介入してよいのか、生態系を崩さぬようバランスをとるにはどうしたらよいのだろうかと思った。

今回の参加で、主体的に学ぶとはどういうことなのかを考えた。自分で尋ねたりして学ぼうとしなければ単なる参加で終わってしまう。改めて、今後の自分の学習について考えていこうと思う。

人文社会科学部　Mさん

第1回の1日目は、まずそば打ちを行なった。自分自身そば打ちは初体験であったので、全くうまくはできなかったが、そばを美味しく作るには、素早く打たないと乾燥してしまい固まらなくなることや、そば粉の多いそばの方が美味しいそばが出来上がるなど、多くのことを学ぶことができた。

次に、柳原地区のお歳灯に参加した。お歳灯をする日は3体いる神様のうちの1体である山の神が戻ってくる日であり、地域の方々は赤飯を持ってきて祝うのだという。この行事には子供からお年寄りまでが参加していて、私の地域よりもつながりの強い地域だと感じた。また、柳原地区の方々は年齢に関係なく方言を使う方が多いようにも感じた。

２日目は、まず雪掻きを行なった。新しく降った雪はなかったが、道路の脇の固まった雪を掻いた。私も山形出身ではあるが、雪掻きをするほどの地域ではないので、苦労した。ダンプを主に使い、腰を入れて押すことを学んだ。

次に、遊学の森でリース作りを行なった。ここでは、山の木の実や葉を用いて作った。木の実には多くの種類があることを知った。自然のものを大いに使う文化が残っている金山町らしい素晴らしい風習だと感じた。

続いて、ヤマブドウの蔓でペンダント作りを行なった。金属でできたありふれたペンダントとは違い、蔓の香りや質感が良くて良いペンダントが作れた。金山町では、ヤマブドウの蔓でカゴなども作っているという。これも、自然のものを使って生活用品を作るという風習が残っていて良いと感じた。

第2回の1日目は、まずうどん打ちを行なった。そばとは違って、感想することはなかったが、全て均等に麺を切

ることができなかった。
次に、スノートレッキングを行なった。ここでは、橇（かんじき）という、雪の上を歩いても沈まない民具を履いて歩いた。雪の上ではほとんど障害なく歩くことも走ることもできたが、アスファルトの上だと歩きにくかった。完全に雪しかない場所だととても役立つものだと思った。
続いて、少年番楽を見た。獅子舞や剣を持っての踊りであった。実は、金山町には少年番楽には2種類あり、小学校が併合した後に一方の番楽がなくならないかの懸念があるという。
２日目は、まず餅つき・門松作りを行なった。杵と臼で餅をついたのは幼稚園以来であったが、うまくつくことができた。門松は、紐の結び方など複雑な工程ばかりだったが、うまく作ることができた。
最後に、なし団子を作った。なし団子は、翌年の豊作を祈るために行う行事と知った。うまく木に刺し、綺麗に飾ることができた。
このフィールドラーニングを通して、私たち若者には、今伝統を残している金山町のような地域から、これから先に伝えていかなければならないものがたくさんあると感じたし、伝えていくべきものを知ることができた。グループでまとめて、良い発表ができるようにしたい。

地域教育文化学部　Sさん

この度、金山町でのフィールドワークを通して私が特に感じたことは、現状維持の難しさである。金山町にはたくさんの伝統行事や伝統文化が存在するが、中には人口減少などによりその行事を残すことが困難になっているものがあると知った。私は、現状維持のために、あるいは地域発展のために何ができるかを考えさせられた。私がこの「現状維持の難しさ」を特に感じたのは、金山町の伝統文化である番楽について聞いたときである。実際に地域の子どもたちが番楽を披露してくれた時、その迫力と踊りに感動した。しかし、年々子どもの数自体が減ってしまっていて、番楽をする子どもが減っているという事実があった。さらに、金山町の番楽は地域で二つに分かれているそうだが、人口減少で小学校が統合するため、番楽も一種類になってしまうということである。この時、どちらの番楽を残すのかという問題も発生する。

また、地元の人に金山町の改善すべきことを伺ったところ、「若者が町から出て行ってしまい、戻ってこない」「戻ってきても大体の人の就職先は町役場しかない」「豪雪地帯で雪かきが大変だが、雪の活用法はないのか」といった声があった。慣れてはいるものの、やはり雪が多いことは地元の人々を苦しめる要因の一つであるようだった。雪を使って地域活性化を図るため、様々な案を出した。これらを地元の子どもたちに提案したところ、「楽しそう」「やってみたい」という意見を得られた。ここで感じたのは、コミュニケーションの大切さである。金山町について地元の方に話を伺うにしても、子どもたちに提案するにしても、自分からコミュニケーションを取らなければならないということである。フィールドワーク一回目の時はなかなか自分から話しかけられなかったため、コミュニケーションの大切さをひしひしと感じた。
そして特に印象に残っているのが、地元の方に、「どうしてボランティアをしているのか」と尋ねたときである。その方は、「たくさんの人と出会い、相手から様々なものを吸収している。こうやって話していて、私が大学生からボランティアをしてもらっているようなものだ。これも何かのご縁である。」とおっしゃった。私にはない考えだったため、とても驚き、「ボランティアは他人への奉仕」という私の中の先入観がなくなったので、やはり話してみないと何も始まらないのだなと感じた。

私は普段、たくさんのもので溢れる便利な社会で生きているが、このフィールドワークで、この地域に対して自分に何ができるのだろうかと考えるきっかけをもらった。金山町の番楽の保存に関しても、雪を使った町おこしに関しても、完全な解決策を見つけたわけではないが、自分にもできることはあると思い、金山町の方からの意見をもとに、さらに考えを深めていきたい。

地域教育文化学部　Wさん

今回のこのフィールドワークを通して、金山町の素晴らしい自然や伝統を直接肌で感じ、体験できた。フィールドワーク1回目にリース作りとストラップ作りを行い、2回目には、門松作り体験を行った。金山町の自然の植物を利用した工作で、作りながらその植物の匂いや触感も感じることができた。このようなことは普段の生活の中では体験できないことなのでとても貴重な体験でした。また、ストラップ作りは、真室川の山野に自生している山ぶどうのつるを使った伝統的な工芸品である。山形県の真室川伝統工芸品つる細工研究会の方々がこの伝統を継承しているグループで、ストラップの他にも、ペンダントやバッグなども制作していた。
そして、フィールドワーク1回目のお歳灯、2回目の少年番楽奉納、なし団子づくりを体験した。お歳灯は年末に行う行事で、町民の方々が持ってきたお供え物やお賽銭を町の子どもたちで分け合っていた。番楽は32年も続いている伝統行事であり、金山町の数少ない子どもたちの迫力ある踊りにとても感動を覚えた。なし団子というのは、木に紅白の団子や飾りをつけながら五穀豊穣や豊作を
願う行事である。
今回の活動で金山町ならではの伝統ある行事に参加することができ、とてもよかった。このようなたくさんの行事やイベントに参加し、地域の方々との交流を通して、金山町のプラス面、マイナス面があることを感じ、課題

発見をすることができた。金山町のマイナスな面として、人口減少が著しいことや雪が多く雪かきが大変であることがあげられる。しかし、金山町という地域ならではの景観や伝統があり、地域の方々とのつながりが強いというプラスの面がある。今回のキーワードである「地域振興」をこの金山町と重ね合わせてみると、やはり、金山町ならではの自然を使用したもの作りや歴史あるもの作りをもっとたくさんの人々に知ってもらい、ここに訪れてみたいと思ってくれるようにすることで「地域振興」へとつながるのではないかと思う。今回のフィールドワークで金山町のたくさんの魅力や良さを発見することができ、その魅力や良さをどのようにして形として表すのが効果的か、どのようにして町全体を盛り上げていくか、などといった課題と向き合っていくとともに、今回のフィールドワークの課題として雪遊びのテーマを考えさせられた内容も踏まえ、今後の話し合いを通して考えを深めていきたい。そして金山町を訪れた意義についても考えながら、有意義な発表になるようにしたい。

地域教育文化学部　Kさん

私は、今回のフィールドラーニングから、プログラム名にもある地域復興について考えた。

まず、１回目のフィールドラーニングでは、初めて自分でそばを生地から作って食べた。また夕食も自分達でカレーと玉こんを作り、お歳灯の様子を見学させていただいた。その後地域の方々や子ども達と手作りカレーを食べながら交流を行った。金山町の自然の素材を利用したリース、ペンダント作りも行った。２回目では、うどん作り、スノートレッキング、少年番楽の見学をさせていただき、番楽を行った児童との交流を行った。また門松作り、なし団子作りを行った。その中で、私自身が感じたことは「ものを作ることの楽しさ」そして「地域内で受け継がれている伝統の素晴らしさ」である。

私達はフィールドラーニングの間たくさんのものを作った。もの作りの楽しさに関して私が感じたことは、自分たちで生地をこね作ったそばやうどんの方が普段食べるものよりおいしく感じ、また自分の手で作り上げ一つの作品となったリースなどにはとても愛着を持つことが出来るということだ。作っている時間は楽しく感じ、完成したときは達成感を感じた。金山町の子ども達も学校の授業の中では図工が好きらしく、これはもの作りが楽しいと感じているからだと考えられる。次に、地域内で受け継がれている伝統の素晴らしさはどういうことかというと、私達はお歳灯と少年番楽を見学させていただいたが、その際に金山町に住んでいる方々からお話を伺うことが出来た。金山町に住んでいる方々はお歳灯を何の目的を持って行っているのかをしっかり理解しており、また番楽を伝承していきたいという気持ちを確かに持っている。しかし、私の住んでいる地域には何も伝統的な行事は残っていないし、残っていたとしても私は知らない。このことから、伝統を受け継ごうという強い意志がないと受け継いでいくことが困難であると感じるとともに、金山町の伝統が今まできちんと受け継がれていることに感動を覚えた。

これらのことから、私はもの作りと伝統行事を生かして、テーマである地域復興を行っていくのが良いのではないかと考えた。今回現地に赴いたことで、金山町には良いところがたくさんあることが分かったが、町として見るとあまり活性化されている印象は少ない。今回感じることが出来た観点を大切にして、今後さらに考えを深めていきたいと思う。

理学部　Nさん

4日間の活動を通して、私は金山町が持っている魅力と課題について、向き合ってきた。まずはこの町が持っている魅力について、振り返りたいと思う。

フィールドワーク1回目の1日目、私たちは「遊学の森」についてから間もなくしてそば作り体験をさせてもらった。初めての体験でわからないことも多くあったが、そば作りの先生はとても親切に教えてくださった。また、地域の方々とリースやペンダント、門松などを作る活動や少年番楽を奉納し子供たちと交流する機会もあった。どの活動も金山町や町外から来た方々との交流を持つことができ、みなさん話しかけてくださったりどのように作っていけばいいのかアドバイスをくださったりした。フィールドワークの活動すべてを通して、地域の方々の温かいやさしさに触れることができた。これがこの町の持っている大きな一つの魅力だと考える。この街がもつ魅力の二つ目はやはり広大な自然だろう。その中でも特に私は、満天の星に目を見張った。1日目の夜に行った歳灯のとき、空を見上げたら星空が広がっていた。私はプラネタリウム以外で満天の星を見たことがなかったのでとても興奮した。ほかにもリースづくりの時に使った葉っぱや松ぼっくりは金山町や周辺地域で採取したものだったという。たくさんの可能性をもつ広大な自然は、金山町の大きな強みといえるだろう。

次に、この町の抱える課題点について考えてみる。大

きな課題としては人口、特に子供が少ないということが挙げられる。そこからいくつかの課題につなげて考えることができる。一つ目は雪かきの負担だ。2日目の朝、多くは積もっていなかったためきちんとした形では行えなかったが、雪かきを体験させてもらった。硬くなった雪をスコップでのける作業は私たち若者にとってもきつい作業であり、真冬に老人が雪かきをするというのはとても大変な作業であることが容易に想像できた。地域の方のお話では、朝に家の前の雪かきをした後、会社の雪かきをして、と一日の体力をほとんど雪かきで使ってしまうそうだ。また、人口が少ないという問題から派生して住民のネットワークの狭さを感じた。狭いネットワークのデメリットとして、凝り固まった考えに固着してしまい、新しい考えや柔軟なアイディアが生まれにくいというものが挙げられる。そうすると、地域振興に関しても有意義な意見を企画、実行しにくくなってしまうというのが問題だ。また、子供が少なく少子高齢化が進んでいるというのはいまや地方の小さな市町村ではどこも問題になってはいるが、町にある伝統伝承の担い手がいなくなってしまうという問題がある。

これら魅力と課題点、それぞれと向き合い、私たちは活動期間中にそれぞれの考える地域振興の案をポスターを使って発表した。全員が真剣に考え、問題と向き合った意見を発表することができたので、良い案がいくつもあった。これらを最後の活動報告会に向け総まとめし、まとめ活動を含め今回のもがみの活動を最後まで、有意義なものにしていきたいと思う。

工学部　Aさん

1. フィールドラーニングを通しての感想

今回の活動ではまず初めに、そば打ちやうどん打ちをそれから歳灯、スノートレッキング
番楽奉納の見学、小中学生との交流、リースづくりペンダントづくり、餅つき門松づくり、なし団子づくりを行った。そば打ちやうどん打ちでは力加減が難しく職人の繊細さがよく分かった。歳灯では火を囲んで町の人から歳灯の伝説について話を聞くことができ、とても興味深かった。スノートレッキングでは、雪の上で動きやすいように工夫されたかんじきという履物をはいて雪の上を歩き回った。とても歩きやすく、自由に動けて楽しかった。番楽奉納では小さいこどもも激しい動きを長い間続けていて、練習の努力が見て取れ、とても感動した。小中学生は元気で優しいこどもが多く、あまり人見知りなどせず話してくれて嬉しく思った。リースづくりやペンダントづくりなどでは地元で継承され続けている伝統工芸品を実際に作って深く知ることが出来て良かった。

2. 課題

私がこの活動を通して課題として感じたのは地域の少子高齢化である。この少子高齢化によって豪雪地帯である金山町は、雪の除去を行う人員の不足が起こっている。地域の人も雪に関して話をするときは、雪かきが大変であると嘆いていた。二日目の活動で子供から一学年の人数が30人ほどであるといった話を聞いたときは、少子化の部分がより顕著にあらわれていると感じた。

3. 課題に対する探究

私はこの課題に関して、少子化に観点を当てた。少子化に関して、一番の理由として挙げられるのは若者が地域外へ流出してしまうことがあるだろう。流出の原因として地元の企業が少ないということや都会等に比べて特に若者の興味を引くイベントが少なく、そういった魅力を求めて地域外へ出て行ってしまうことがあると私は考えた。今回町の人に話を聞いた際、若いころに都会の方へ出ていたが、Uターン就職をしてこの町に戻ってきたという人に出会った。それを聞いて私は若者をずっとこの地域にとどめさせておく必要はなく一度都会の方へ送り出しても若いうちに戻ってこさせるように出来れば結果的に若者の減少を減らすことができると考えた。しかし現状、都会に出た後に戻ってくる若者は少ない。これに対する解決策として二つの案を考えた。その解決策の一つ目として私はUターン就職を多くしてもらえるようにすることが良いと考えた。働き手は就職の際、有名企業などに就職したいと考える人が多い。その理由に知名度が高いことがあるだろう。その点、地方にある企業には知名度があまり高くないものが多く町の人に聞いてみても、詳しく知らないという人が意外と多かった。そこで、若いうちから地元の企業について関心を持たせるために、こどもをターゲットの中心として企業のPR活動、作業体験等を多く行っていくことが良いと考えた。二つ目の解決策として、豪雪地帯の金山町ならではの雪を使った独自のイベントを行い他の地域の人々の関心を集めることが良いと考えた。その際に地元の食材を使った料理をふるまえばさらに地元の魅力が伝わるだろう。この二つの解決策から若者の地元への関心を強くし、少子化を少しでも減らせるのではないかと考えた。

工学部　Iさん

金山町フィールドラーニングでの体験と感想

１回目の第１日目はまずそば打ちから始まった。外二八そばというそば粉１ｋｇに対し中力粉２００ｋｇの分量でそばを作った。作る部屋が暖房などで乾燥していたため、水の量を調整するのが難しく、僕の班のそばはのすときにバラバラになってしまい、そば作りの難しさを実感できた。金山町は冷涼で昼夜の寒暖差が激しいためそばの実がよく育つそうで、とてもおいしかった。

午後はお歳灯にいった。お歳灯という行事はどのようなものか気になったため、訪れた金山町の人に聞いてみると、一年に一回、地蔵様、山の神、産土様の三か所を訪れ、勧進を行う行為といっていた。勧進とは幸福をみんなに分け与える行為であるそうで、町民がお供え物として持ってきたご飯などの約半分を子供たちとかが持っていったり、お賽銭を子供たちで分けたりしていた。子供たちに聞いてみると1560円ほど貰っていて大変うれしそうだった。

２日目は人生初の雪かきから始まった。屋根から落ちたと思われる雪を水路に落とした。水路に落とすとすぐに雪が解けた。土の上に積もった雪をとるときはきれいに剥がれず難しかった。あまり積もっていなかったため楽で、楽しかった。

リースと山葡萄樹皮のストラップづくりでは、最上川や真室川の山野に自生する植物の恵みを利用した伝統工芸を体験することができた。僕はセンスがないので、地域の人に教えてもらいながらいい作品を作ることができ、温かい人たちと楽しく活動できた。

２回目の第１日目はうどん作りからだった。そばとは違い弾力がすごく生地が力を入れても伸びず切るのも大変だった。三上さんが金山町で養殖しているイワナを差し入れしてくれ、とても大きくおいしかった。

その後、スノートレッキングを行った。僕は事前学習でスノートレッキングを調べていたため、スノーシューで行うことと思っていたが、昔のかんじきと呼ばれるものを靴に縛り付けて行った。かんじきはコンクリートなどの雪が積もっていない所では非常に歩きにくかったが、雪の上だと埋まらず、真ん中の出っ張りが雪に刺さるため踏ん張りもきき走ることもでき、普通の靴よりだいぶ楽だった。

雪遊び発表会では、一日目に子供たちと触れ合った際、冬は外で遊ばず、家でゲームなどインドアな生活をしていると話していた。そのため、子供たちのための遊びではなく、金山町は交通の便が悪いため車での移動になると思い、僕は外部からくる車を運転できる世代に向けたイベントを一週間考えた。僕は案としてコスプレスキーと雪上ライブを提案した。

少年番楽奉納の時間では、金山地区に住む親御さんと金山町での生活について聞いた。ほとんどの人が新庄市で働き、新庄市内で生活用品や食材を買っているそうだ。また、小学校の実態についても聞き、学年が違う子同士が一緒の教室で学ぶハイブリットクラスしかなく、再来年にはが統合される話を聞いた。過疎地域に住む大変さを感じることができた。

2日目は餅つきや門松づくり、なし団子づくりを行った。すべてが初めてだったため、お正月の伝統行事を行うことができ貴重な体験だった。

今回の体験で、自分の育った環境とは全く違う環境でいろいろと体験し、貴重な経験だった。これから金山町を盛り上げていくために、僕たちが感じた町の良さを考え、他の市町村と差別化できるいい案をまとめ、提案できるようにしていきたい。

工学部　Sさん

金山市でのフィールドワーク一回目の一日目は、そば打ちを行った。自分が小学生だったころにそば打ちをした経験があったので、すこしはうまく打てるのではないのかと考えていた。ところが、水の量、そば粉の混ぜ方など繊細な技術が多々必要であることを知ることができた。中でも一番大変であったのが、いかに早くそばを切る所までもっていくことができるかというところである。自分たちは時間がかかってしまったため乾燥してしまい、形が崩れてしまった。しかし、一番大事なことはどれだけ細くそばっぽくできるかであることだと感じた。次にお歳灯というという三体の神のうち一体の神が山へ戻るという日であり、その日に子供たちが赤飯を持ってきて祝うというものである。地域のお年寄りから子供まで多くの人が参加しており、自分の地元よりも人と人とのつながりが強く温かい町であるなと感じた。

二日目の早朝に雪かきをした。地元の静岡では雪はほとんど降らず、風花が舞うと子供たちが大はしゃぎして喜ぶような地域でボーと生きてきた自分にとって、雪かきというも早朝からで重労働であり、一人暮らしのお年寄りには大変な作業であるなと感じた。次にリース作りや、ヤマブドウのつたを使ったペンダント作りを行った。金山市の自然のものを使って都会ではあわえないものを味わうことができた。

二回目の一日目はうどん打ちをした。そばよりも神経質にやらなければならないわけではなかったので自分向きであると感じた。うどんを食べている際、イワナや揚げ豆腐の差し入れをいただきとても美味しかった。金山市は自然豊かで疲れをいやすにはとてもいい場所であると感じた。次にスノートレッキングをした。かんじきという雪の上が歩きやすくなるものをつけて雪の上を歩いた。その中で雪国ならではの知恵が垣間見えたきがした。雪遊びの発表会では班員から様々な考えが出た。その中で自分は自分たちと同じくらいの世代の人たちが楽しめるようなスポーツを三つほど紹介した。家に帰りもう一度考えなおした時、AIなどの工学部的な要素を取り入れ雪かきや地域の利便性の悪さを克服できるの

ではないかと考えた。夜は少年番楽の少年たちと触れ合った。そこで番楽が途絶えてしまう可能性が高いこと小学校が統合してしまうぐらい子供がいないということなど金山市が抱えている問題が明らかになった。子供たちと遊び、番楽を観て、何としてでも番楽を復興させたい、人口減少を解決したいという思いになった。また、子供たちと触れ合ったことで子供たちからエネルギーをもらい、フレッシュな気持ちになったと同時に年老いたなということを実感した。二日目は門松づくり、なし団子づくりという行事に参加した。地域の伝統的な行事に触れ合うことができた。

今回このフィールドワークに参加して、地域の人々の心の温かさを感じた。子供たちも元気でぼくたちのようなよそものにも快く話を聞いていただいたり、自分たちの質問に対しても丁寧かつ分かりやすく説明してくださり、さらにプラスαの情報をいただいたりと地域の人の懐の大きさ温かさをしった。また、地域一丸となっている感じが伝わってきた。親子ずれなどは住みやすそうであったが、どうしても自分たちのような若者は遊びには来そうだが住むまではいかないだろうというのを感じた。なので、どうしたら若者が住みついてもらえるかを考えていくのがこれからの僕たちの役割であると感じた。

農学部　Yさん

今回、フィールドラーニング共生の森もがみで金山町を訪れ、活動を通して、学んだことは積極的に行動をしなければ学ぶことは少ないということです。一回目の活動では、そば打ち体験やお歳灯と言われている伝統的な行事に参加させていただき、地域の方と交流する機会がありましたが、聞くことに躊躇してしまい、結果的に金山町のことや他に聞いてみたいと思っていたことがうまく聞けず活動が終了しました。二回目の活動では、一回目の活動の反省点を踏まえて、児童交流や昼食の際に積極的に話す姿勢を意識し、活動に取り組み、地域の方と交流する中で様々なことを聞くことができました。地域の方に自分が感じたことや疑問に思っていることを伝えた際には、親切に話をしてくださり、質問したこと以上に多くのことを知ることができ、金山町に暮らす人の温かさを感じました。一回目に比べ、二回目の活動では、積極的に行動することができ、多くのことを知ることができたため、積極的に自ら行動に移す大切さを改めて学ぶことができました。

次に、学んだことをもう一つ挙げると、立場に立って考えるということがあります。金山町を訪れて、私は森や山に囲まれて、自然豊かで景色が良いという印象を持ち、また、そこが金山町の魅力の一つであると考えていました。しかし、実際に金山町に住んでいる方に話を聞いてみると、「森や山、そこに広がる風景は、生活している中であまり感じることはなく、魅力と呼ぶことができるのかどうか難しい」とおっしゃいました。金山町に住む人にとって、私が印象に持ち、魅力であると考える森や山などの自然、風景は当たり前になっていることを感じました。金山町に暮らす人と外の地域から金山町を訪れる人の見え方の違いを感じ、その地域の魅力や問題点、そのことを活かしたアイデアを考えるうえでは、実際にその地域に住む人の考え方や意見などを理解し、その立場に立って、考えていかなければならないと思いました。金山町が抱える問題の一つに少子化があり、また、若い世代の人がどんどん金山町から出ていくことに対してどう考えているのか尋ねてみると、「進学などで地元を離れ、県外に就職することは、仕方がないことではあるが、本音としては地元に戻ってきてほしい」という地域の方の思いがあることが分かりました。魅力や地域の方の考え方や意見、問題点などを考慮して、その地域について発信していくうえで、地元の方に向けてなのか、またはその地域以外に住む方に向けてなのかで目的や発信していく内容が変わってくると思いました。

最後に、上記の内容をまとめると、一つの物事について深く考えていくには、積極的に自ら行動に移し、良い面と悪い面、他の人の考え方や意見、立場を理解し、一つの考え方にとらわれず、広い視野で考えていく必要があると活動を通して感じました。今後、積極的に自ら行動することを意識して、様々な立場から考え、自分の意見を出すことを課題として、活動を通して得た経験を活かしていきたいと思います。

最上町の人・自然・文化に触れよう２

活　動　状　況

○実施市町村：最上町

○講　　師：冒険家　大場満郎・地域の方々
　　最上町芸術文化団体協議会

○訪　問　日：令和元年 11 月 2 日(土)～3 日(日)、令和元年 11 月 30 日(土)～12 月 1 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部 1 名、地域教育文化学部 1 名、医学部 1 名、工学部 2 名
以上 5 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】１１月２日（土） 08:00　山形大学発 09:30　新庄駅着 10:00　中央公民館着オリエンテーション 　ワイルドエドベンチャースクールに参加 （野菜収穫販売体験等町内小学生との交流） 12:00　昼食 引き続きワイルドエドベンチャースクールに参加 16:00　ワイルドエドベンチャースクール終了 16:30　中央公民館発 　途中スーパーにて夕食などの買い出し 17:00　宿舎着	【１日目】１１月３０日（土） 08:00　山形大学発 09:30　新庄駅着 10:00　中央公民館着オリエンテーション 　ワイルドエドベンチャースクールに参加 12:00　昼食 引き続きワイルドエドベンチャースクールに参加 15:00　ワイルドエドベンチャースクール終了 16:00　中央公民館発 　途中スーパーにて軽食などの買い出し 16:45　宿舎着
【２日目】１１月３日（日） 09:00　宿舎出発（朝食付き） 09:30　大場満郎冒険学校着 　大場満郎さんの講話・問題提起（12 月 1 日に問題提起の答えをききます） 12:00　昼食（赤倉スキー場与平治にて） 13:00　封人の家・分水嶺・富山馬頭観音見学 16:00　中央公民館発 16:30　新庄駅発 18:00　山形大学着	【２日目】１２月１日（日） 09:30　宿舎出発（朝食付き） 10:00　大場満郎冒険学校 　石釜によるピザ作り体験 12:00　昼食（手作りピザ） 13:00　大場満郎さんの講話・懇談 15:40　冒険学校発 16:30　新庄駅発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Sさん

私のグループはフィールドワークで大場満郎冒険学校でのエドベンチャ―スクールの活動を主に行った。大場満郎冒険学校は冒険家の大場満郎さんの設立した冒険学校で、エドベンチャ―スクールでは最上町の小学生が地域の方々と野菜栽培、米作りなどの自然体験活動を行っている。今回私たちはエドベンチャ―スクールの畑で育てた大根や里芋を収穫し、町内でリヤカーを引きながら１件１件訪問し野菜の販売を行った。その活動を通して私は子供からご高齢の方まで年齢関係なく自然にコミュニケーションをとっている姿が印象に残った。人口が少ないからこそ人とのつながりが密接で、それは最上町の方々のあたたかさにもつながっているのだと感じた。このエドベンチャ―スクールは将来大切なことを最上の自然での体験を通して学ぶという貴重な経験のできる他にはない素晴らしい活動だと感じた。この素晴らしい独自の活動を最上町内の方々だけで行ったままで終わらせるのはもったいないとも感じ、最上町以外の多くの人にこの活動を知ってもらいらいたいと感じた。

しかし、現在冒険学校は人手不足が深刻で大場満郎さん1人で運営している。そのため満郎さんは多くの人にこの活動を知ってもらいたいと思ってはいるものの、冒険学校の運営に精一杯で情報発信に多くの時間を割けないとおっしゃっていた。このことから大場さん一人での今以上の情報発信は難しい状況だといえる。そこで私たちが何かエドベンチャ―スクールを多くの人に知ってもらう手助けができないかと考えた。

その解決策として私たちはSNSの活用を考えた。現在大場満郎冒険学校のホームページはありそのホームページ内で大場さんは情報発信を行っているが、ホームページだけではこの活動の認知を高めることは難しい。そこでツイッターやインスタグラムで大場満郎冒険学校のアカウントを作成し、エドベンチャ―スクールの活動の様子の写真や動画を掲載し、自然体験活動に興味のある親を対象に発信活動を行う。またアカウント内に自分たちで作成したエドベンチャ―スクールや最上町のPR動画を掲載し、エドベンチャ―スクールをきっかけに最上町の認知度も高めたいと考えた。

地域教育文化学部　Aさん

私は最上町を訪れ、地域の人や子供たちとの交流、そして最上町の歴史的な建造物の見学を行った。

1回目は冒険家の大場満郎さんが開催しているワイルドエドベンチャースクールに参加し、子供たちとともに野菜の収穫体験をした後、収穫した野菜を地域のお祭りと、リアカーで販売するお手伝いをした。ワイルドエドベンチャースクールとは、田植え、スノースポーツ、野菜栽培など子供たちが普段体験することが出来ない出来事を体験できる自然体験イベントである。初めて参加した際、私は地域のお年寄りと子供たちの仲の良さに驚いた。年の差を感じることなく、互いの知識を教えあっている姿に感銘を受けた。また、野菜を販売するために一軒ずつ家を訪ねた際、お年寄りと子どもたちが顔見しりであることに驚いた。これは少子高齢化が進んでいるという面も感じられるが、一方で地域のコミュニケーションが良くとれていることを示していると感じた。２回目の参加の時も子供たちは常に笑顔で大人たちと交流していたり、私に地域の文化を教えてくれた。２回の参加を通して感じたことは、最上町の広く豊かな自然の中で行われるワイルドエドベンチャースクールに参加している子供たちは生き生きとして、自然に対する興味と知識が豊富にあるということだ。子供たちが自由に発想を広げ、身をもって体験できるこのスクールにもっと多くの小学生が参加して、幼いうちから自然の大切さを学ぶべきだと感じた。

しかし、現状はワイルドエドベンチャースクールに参加する子供は主に地域の小学生たち、大場さんの北極・南極横断に使われた道具を見ることが出来る冒険学校に訪れる人が減少しているという問題がある。現在、冒険学校は大場さんが1人で経営しているため、人を呼び込むための方法にも限りがある。また、現在の若い世代に大場さんの偉業が伝わっていないことも訪れる人の少ない理由に挙げられる。そこで1人でも手軽にでき、若い世代の親たちが生活やイベントの情報を手に入れやすいSNSに情報を提示することで、多数の目に触れ、子供の自然体験などに興味を持つ親を引き留められる

のではないかと考えた。

この2回の活動で、大場さんが教えてくださった人生の生き方や、最上町での自然体験によって私自身の価値観が広くなったと感じている。もっと多くの人が最上町に訪れ、楽しく良い経験が出来るよう、自分にできることから始めたいと思った。

医学部　Kさん

私は、今回のフィールドワークで、最上町の方々が自然に触れることをいかに重視しているかを感じた。封人の家では、屋根の表面の方を少し削りながら、下の方に新しい屋根の素材を入れ、素材をできるだけ有効活用できるようにしていたり、建物が悪くならないようにずっと囲炉裏に火を焚いて燻して保存していたりした。また、馬頭観音の神社では、昔の人が馬をとても大事にして、功績をたてた馬のための碑をたてたり、後ろにあった山や、境内の御神木を拝むと自然のパワーを得られる、と神主さんが教えてくださったりした。また、大場満郎さんのお話も、自然の一部になることで心が穏やかになる、ということであったり、自然な状態で飼育された鶏の卵は他のところの卵とは別物であると言うお話であったり、冒険で、自然の雄大さを直にみることで自分とは何者であるのか、ということを知りたかったとおっしゃったりしていた。ワイルドエドベンチャースクールもその名の通り、子供たちが自ら野菜を育て、収穫したり、人力で火を起こしてみたりと自然のふれあいを通した情操教育である。現在、都会に住む人が増え、自然にほとんど触れずに育つ子供も多い。そのような状況なので、ワイルドエドベンチャースクールのような自然とふれあう機会を与えることは重要であり、それを望む保護者は少なくない。だから、大場さんもおっしゃったように、冒険学校のことをより多くの人に知ってもらうことは、大変良いことだと思う。しかし、現在参加者のほとんどは同じ小学校に通う生徒であり、その地域のためだけの活動のようになってし まっている。もちろん、毎回の活動に参加し、メンバーが固定しているからこその一緒に活動している大人のかたと子供の結束感も大事なことなので、それはそれで良いと思う。他の地域の子供 達、特に県外の子供達は毎回の活動に参加することはかなり難しいと思う。そこで、夏休みや冬休み等の長期休暇の際に何日か泊まり込みの活動を行うと、最上町の今まで一緒に活動してきた子供達との関係を保ちつつ、他の地域の子供達の活動もできると考える。その時期ならば、保護者も時間が取りやすいので、参加してみようという気になるのではないかと思う。先程も述べたように、最上町には自然と共存してきた歴史を感じられる場所が多くあるので、地域で協力して、それらも見学できたらより大きな収穫になる。問題はこの事をどのように世間の保護者や子供達に発信していくかだが、それに関しては活動発表会で発表していきたいと思う。

工学部　Mさん

私が参加したプログラムは最上町を知るということで、実際に最上町に行って人・自然・文化に触れてきました。まず、1日目に行ったことは「ワイルドエドベンチャースクール」への参加です。ワイルドエドベンチャースクールとは、日本の冒険家大場光郎さんが開校した冒険学校で行っている自然と触れ合う体験を行うものです。そこで、私たちは、野菜の収穫と販売を行いました。小学生とともに活動をしたのですが、みんなで協力し合い地域の方々ともたくさん触れ合うことができました。やってみて感じたことは、最上町は、お年寄りの方々と子供たちとの距離がとても近く、地域の中でも住民同士のコミュニケーションがとてもよくとれていてとても驚きました。この環境こそが、子供たちの活発性に結びついているのだと思いました。2日目は、封人の家・分水嶺・富山馬頭観音を見学しました。最上町の歴史ある文化財に触れ、地域の歴史を感じることができました。3,4日目はともに大場光郎さんのワイルドエドベンチャースクールの活動を行いました。そこでは、ドリームキャッチャーづくりと火起こし、どんと焼き、ピザづくりなどを行いました。どれも普段できないような体験で子供のころに戻ったかのように楽しむことができました。

このようにたくさんの活動を行った中で、私が一番印象に残ったことは、大場光郎さんの講話です。大場さんは、農家から、自分のやりたかったことをあきらめきれず、自分の道を突き進みついには南極・北極単独徒歩横断という偉業を成し遂げました。そんな大場さんの話を聞いて、私は自分の考え方の視点や世界観が変わりました。「やらずに後悔するならやって後悔」この言葉がとても胸に響きました。今回の体験を通してこの冒険学校がもっと多くの人達に広まってほしいと感じました。しかし、この冒険学校は今、大場さん1人で経営しており広げるためには難点がたくさんあるそうです。そこで今回私たちは、「最上町の魅力の一つである冒険学校をどうやって多くの人達に発信するか」を課題にし、活動することにしました。解決策として挙げられたのはSNSを利用し、

情報を発信するというものです。今の時代、人の目につきやすいSNSにわかりやすく写真や動画を載せ、また、申し込みなどを気軽にできるようにしたいとも考えました。今後、この冒険学校が多くの人に広がって子供たちが価値のある体験をし、また最上町の自然や歴史に増える機会が少しでも増えればよいと思いました。

工学部　Wさん

今回フィールドラーニングを二回行うことで感じたことは地域のお年寄りや子供たちの距離がとても近くていいと感じた。理由としてはワイルドエドベンチャースクールというイベントで地域の子供とお年寄りが一緒に同じ目線で物事を取り組んでいて畑での野菜の収穫やその収穫した野菜を地域のイベントで販売していたことや、台車を引いて町の中を回り野菜を売っていたからである。具体的には野菜の収穫の時は子供たちがお年寄りに収穫の方法を聞いてたくさんの野菜を収穫していたことや、野菜の販売のイベントでは子供たちの元気の良さを生かしてたくさんの家に回り多くの野菜を売ることができていた。このように両関係が欠かすことのできない関係となっていてその関係の中でイベントを行っていたのでみんなが笑顔で楽しくイベントを行っていたので距離が近くていいと感じた。またこのワイルドエドベンチャースクールでは日頃の生活では子供たちが体験できないようなことを言葉で話すのではなく実際に行って体験することによって子供たちの楽しい思いで作りはもちろん子供のころからたくさんの経験を積むことができて素晴らしいイベントだとも感じた。

このイベントに参加して思ったことはもっとたくさんの子供にこのイベントに参加してほしいと私は感じた。子供のころにたくさんの経験をすることはとてもいいことだと私は考えるからだ。しかしこのように素晴らしいイベントがあってもなぜあまり人が来ないのだろうかとも私は考えた。イベントの主催の大場満郎さんのお話を聞くと昔はいろんな地域から人が集まってたくさんの参加者がいたという。しかし今はなぜ人が来ないのだろうかということを私は自分なりに考えてみた。人が来なくなった理由の一つはほかの地域に情報が回っていかなくなったからではないかと私は考えた。昔は大場満郎さんのニュースが多く取り上げられていたこともあり多くの地域の人にイベントの情報がいきわたり興味を持って参加する人が多くいたのだと考えられる。しかしいまあまり大場満郎さんのことがニュースに出回らなくなってしまい、結果情報がほかの地域に行かないためイベントの参加人数が減ってしまったのではないかと感じた。そのためこの課題を解決するためには現代に合った方法で情報を流していくのが最適だと考えた。昔はテレビを見る人が多くいたが、いまはスマホ社会になってしまったため情報の多くがスマートフォンから得るような時代になっている。そのためテレビなどよりもSNSなどを利用することによって写真や行っていることの情報を流すことによってこのイベントのことを多くの人に知ってもらえるのではないだろうか。現在都会などに住んでいる親で子供に自然体験などを行わせたいという人は多くいる。そのためそのような人たちの目に留まれば参加者がほかの地域から来てくれるのではないかと私は考えた。

里地里山の再生Ⅱ

活　動　状　況

○実施市町村：舟形町

○講　　師：堀内ファーム会員及び地域住民

○訪　問　日：令和元年 10 月 26 日(土)～27 日(日)、令和元年 11 月 16 日(土)～17 日(日)

○受　講　者：地域教育文化学部２名、医学部２名、工学部２名　　以上５名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】１０月２６日（土）	【１日目】１１月１６日（土）
08:00　山形大学発 09:15　舟形町役場着 09:30　開講式 　　舟友祭見学、芋煮づくり（舟形中学校） 12:00　昼　食 13:30　里芋収穫体験 17:00　夕　食（農村環境改善センター） 18:30　入　浴（若あゆ温泉） 21:00　就　寝（農業体験実習館）	08:00　山形大学発 09:15　舟形町役場着 09:30　大根、白菜等収穫体験 12:00　昼　食（農村環境改善センター） 13:00　大根、白菜収穫体験 17:00　夕　食（農村環境改善センター） 18:30　入　浴（若あゆ温泉） 21:00　就　寝（農業体験実習館）
【２日目】１０月２７日（日）	【２日目】１１月１７日（日）
07:00　起　床 07:30　農業体験実習館出発 08:00　朝　食（農村環境改善センター） 09:00　里芋収穫体験 12:00　昼　食（農村環境改善センター） 13:30　里芋収穫体験 16:10　農村環境改善センター発 16:45　舟形町役場発 18:00　山形大学着	07:00　起　床 07:30　朝　食（農業体験実習館） 09:00　森の積木広場　（舟形小学校） 12:00　昼　食（農村環境改善センター） 13:30　大根、白菜等収穫体験 15:30　閉校式 16:10　農村環境改善センター発 16:45　舟形町役場発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

地域教育文化学部　Kさん

・活動を通しての感想

今回のフィールドラーニングでは主に農作業を体験させていただいた。里芋やネギ、大根、白菜と様々な野菜の収穫の体験活動を通して、初めて農作業の大変さを実感した。舟形町は若い人たちの町離れや高齢化が進んでおり、私たちはたった四日間の農業体験で農作業の苦労を実感したが、このような農作業を高齢の方々が毎日行っていると考えると、とてもすごいことでありなんとか若い人たちの農業従事者を増やすことができないか、などと考えるきっかけとなった。私は、山形県出身だが舟形町にはこの活動で初めて訪れた。舟形町には多くの特産品があり、また景色がとてもきれいなところだと感じた。町民の方々も暖かく迎え入れてくれた。このような場所を残していきたい、広めたいと強く感じされる活動であった。

・舟形町の課題

一日目の活動中で、今回私たちを迎えてくださった堀内ファームの方にお話を伺う機会があった。そこで課題であると感じたのは、人口減少と高齢化、後継ぎ不足、農作放棄地などである。集落の存続と農地の保全のために堀内ファームでは、野菜の生産や私たちのような学生の受け入れ、首都圏での芋煮の提供やしょうてんがいでの出品、農作業、農地の整備サービスなどを行っている。しかしそれでも、舟形町は高齢化に伴い、自分の力では農地を維持できないと農地を手放し耕作放棄地となり、農業の衰退により若者を中心として町を離れていき後継ぎの不足や人口の減少へとつながっている。若い人たちの町離れを防ぎ、関心をどう舟形町や農業に向けるかが大きな課題となると考えた。

・課題解決のために

課題から考えられることは高齢化が進むことで、連鎖的に農作放棄地の増加から農業の衰退、若い人たちの町離れが起こってしまっていることである。これらを解決するには若い人の農業従事者を増やすことや農家一人当たりの負担を減らす方法を考えなければならない。しかし、ほかの地域や県から新たに人口を舟形町に入れるのは難しいと感じた。そのため、大事だと思うことは舟形町に住む小中学生などの若い人たちの町離れを防ぐことである。今回の活動では小学生と触れ合う活動があったが、子どもたちから地元愛を感じられることも多かった。その地元愛を継続させるためにも、農業体験を盛んにしたり、地域の大人の人たちとの交流を持たせるような活動を行ったりしていくことが重要であると感がえた。

地域教育文化学部　Yさん

地域の人々についての感想：

少子化：

中学校が1つである。高校がない。学生の人数もすくない。学生の人数と比べて学校が大きと私が感じた。具体的に言うと平成26年に、学校が800人までに入るとは可能だが、124人が入学した。これが確かに少子化の症状と言える。1つの課題は大きい過ぎの施設は効率的ではない。高熱水が大型の施設で費用が向上する。

学校を小さくする、又は高校と同じように他の町と集るしかない恐れがある。

高齢化：

舟形町の農家は高齢の傾向がある。農村環境改善センターの写真を見ると若い顔が少なかった。農家の高齢かのため、農業の方法の工夫が必要である。パイプハウスなどの温かい栽培や機械化が約立つだが、まだ不足している。

若い農家を増やせばいいと考えられるが、出来にくいことだと私はかんがえる。実用的手段は恐らく機械化の研究、又は海外からの労働者の移住することだと私は考える。なぜなら、高齢化が農業に限らず、日本全国の問題であるので、他の産業にも若い人材がいる。機械化と共に高齢者の支援も必要と考える。トレファームなどの高齢者向けの栽培も増やせばよいだろう。

環境問題についての感想：

プラスチックを利用するが多いと感じた。マルチとパイプハウスがあった。畑で不明物を燃やすことも見た。舟形町だてではないだが、農業の環境への悪影響が確かにあるため、注意が必要であろう。

観光産業について：

観光産業が頼れる産業だと私は思わない。確かに観光の経済力が高いであるが、季節性もあるし、ある所の人気さが急に変わる可能性が高い。例を挙げればアイスランドの観光産業の最近のブームが最近に弱くなって来た。

参考文献：

https://skift.com/2019/09/11/the-rise-and-fall-of-icelands-tourism-miracle/

https://www.nikkei.com/article/DGXMZO34383850R20C18A8000000/
http://www.town.funagata.yamagata.jp/docs/2019031300018/files/sougousennryaku31.pdf&ved=2ahUKEwj44fe5u4TmAhWq-GEKHa5oD9wQFjAKegQIARAB&usg=AOvVaw0dS4haKOSVGBeZbkUi-1dJ

医学部　Iさん

感想

今回の四日間のフィールドワークで、私ははじめて本格的な農業体験をした。実際に作業してみて、農作業は体力と集中力を多く必要とするとても大変な仕事であることがよくわかった。まだまだ若い私達が数時間やっただけで大変だと感じる作業を高齢の農家の方々が毎日長い時間作業していると考えると、苦労がよくわかるのと同時に、高齢化が進むことによる農家への大きな影響も感じられた。一方で、雪室野菜という雪国ならでは製法で美味しい野菜を作っているという農家の人々の工夫も知ることができた。

また、農作業以外にも、小学校の行事に参加させてもらったり、中学校で芋煮を提供するお手伝いをさせてもらったりと、舟形町の人々と関わりながら、町おこしのため、様々な取り組みをしているということがわかった。舟形町の皆さんの役に少しでも立てるよう、町の課題やその解決策について考えたいと思った。

課題と解決策

今回のフィールドワークを担当してくださった舟形町の大山さんに伺ったお話を踏まえて考えると、舟形町の課題として高齢化、人口流出、それによる農家の後継者不足や農作地の手放しが挙げられる。これらの課題を解決するには生産年齢人口の減少を止め、できるならば増やす必要がある。

大まかな解決策として、舟形町の若者に街にとどまってもらうようにする、進学就職で外に出てしまった人々を呼び戻す、舟形出身ではない人を呼び込む、という三つの方法が挙げられる。

私はこの中で、舟形町の若者に街にとどまってもらうようにする方法に注目した。今回のフィールドワークでは小中学校での活動に参加させてもらった。小さいうちから地元の良さを知ってもらうというのは良い取り組みだと思う。しかし、最も力を入れるべきは進学就職の一歩手前にいる高校生に向けたPRだと思う。彼らに食や遊びにより、地元の良さを改めて知ってもらうことはとても効果的だと思う。また、舟形での就職を考えてもらうために、多くの職場の紹介を丁寧に行なったり、賃金や労働環境面で魅力を出したりするのも良い取り組みとなると思う。

人口減少問題を解消するためには、まず舟形町で生まれた若者に残ってもらうことが最優先だと思う。

医学部　Mさん

１．フィールドワークを通しての感想

私がこのプログラムに参加した理由は、私の両親が農業用の機械を売る会社を祖父母とともに営んでおり、小さい頃から農業に関わってきたからというものである。多くの野菜の収穫体験、地元の小中学生との交流等、私の将来にとってプラスになる経験をすることができた。野菜の収穫体験では、機械化が進んでいる中手作業で収穫を行うことによって普段は得ることができない達成感を感じた。地元の小中学校訪問では、間伐材の積み木や芋煮を用いた交流により舟形町の子供たちの置かれている状況を実際に見ることができた。また、「共生の森もがみ」に参加することで普段は関わることのできない他学部の人との活動もでき、自身の交流関係も広がったように感じた。

２．課題

このプログラムを通して私は舟形町の様々な課題を自分の目で見た。一番大きく感じたことは「少子高齢化」である。一語で括ってはいるが、舟形町では「少子化」と「高齢化」のどちらも深刻な問題であることが目に見えて分かった。

一回目の活動では舟形町内で最も高齢化が進んでいる集落を見せていただき、改めてその重大さを認識できた。地元の子供たちとの交流においては、舟形町内唯一の学校であることを考慮した上で拝見したため、その人数の少なさに驚いた。

３．課題解決に向けて

この現状を見て、舟形町の課題として私は「少子化」に焦点を当てた。解決策として、「若者の流出を防ぐ(留まってもらう)」「舟形町から出ていってしまった若者に戻ってきてもらう」「舟形町以外の出身者の誘致」が考えられる。しかし、あくまで個人の考えであることと現実味を考慮した上で、「舟形町からの若者の流出防止」を考えることとする。

具体的には、地元の小中学生に田舎、厳密には舟形町に興味を持ってもらうことである。舟形町には高校がないため、中学校を卒業すれば町の外に出てしまうことは必

然である。私は、この高校時代にこそ舟形町外への流出の原因があると考える。地元の魅力について深く興味を持たないうちに町外へ出てしまうため、将来舟形町に残るという選択肢が薄れてしまうのではないかと考えた。今回のフィールドワークで、地元の野菜を使った芋煮を振る舞っていたり、間伐材を材料にした積み木を使って遊んだりと地元に魅力を持ってもらうような取り組みを拝見した。このような取り組みをもっと活発にすることができれば、小さい頃から舟形町の魅力を知り高校卒業後も舟形町に残りたいと考える若者も増え、舟形町の人口流出を抑えることができると私は考える。

工学部　Yさん

私が、今回のプログラムを選んだ理由が２つある。１つめは、せっかく山形大学に入学したので、山形ならではの授業を受講したいと思った。２つめは、地元が大阪ということもあり、都会で育ったので畑もほぼ見たことがなかったからだ。

今回のプログラムで舟形町の最も重大な問題は少子高齢化と過疎化と耕作放棄地だ。

少子高齢化については、１回目のフィールドラーニングでは舟形小学校の舟友祭に参加し、その生徒数の少なさに驚いた。また、２回目のフィールドラーニングでの森の積木広場に参加し、やはり生徒は少なかった。

過疎化については、舟形町の集落が９世帯しかなく、１８人ほどしかいないことでかくにんした。

耕作放棄地については、町をみると畑を整えていないところが多くみられた。

これらの問題はすべて過疎化からくるものだ。よって、過疎化について考えようと思う。

私が思う過疎化の原因は第一に高校がないことだ。しかし、おそらく高校から家を出ることはないと思うので、大学進学や、就職から若者が離れていると考えられる。そこで、就職先を増やすことで出て行く人と新しく来る人が増えると思う。舟形町では、新しく取り組んでいる農業関連の企画がある。たとえば、雪むろ野菜だ。雪むろ野菜とは、雪下に寝かせて春に収穫する越冬野菜のようにでんぷん糖化で野菜を甘くする。そしてその雪むろ野菜を出荷できるルートを作っている。

このように舟形町ならではのよさを生かした事業を展開することで舟形町の名前を他の地域に知らせることができるとともに新しい働き口が生まれる。

私の今回のフィールドラーニングでの感想は、はじめての農作業だったので何も知識がなく、実際にやってみるとこんなにも大変だったのかということだ。今までは、スーパーに並ぶ野菜しか見たことがなく、野菜に土がついている状態ですら数回見た程度で、もっと調理しやすい形に加工してほしいとさえ思っていた。しかし、実際に畑に入って、作業をしていると収穫作業だけでもすぐに根を上げてしまうほど大変なものだった。また、このような重労働を高齢者にさせているのかと思うと、今までの自分の考えは改めなければならないと思った。もっと農業に若いころから興味を持って、どういうことをしているのかを学ぶ機会を設けたいと思った。

工学部　Tさん

前期のフィールドワーク最上に参加してみて、この経験は、今後の役にたつと思いました。舟形町のフィールドワークを選んだ理由は、山形県にきて一度もいも煮をまだ食べたことがなかったので、食べてみたかったこと。地域の方々との活動を通して、山形というところ知っていきたいと思ったからです。

１回目の１日は、舟形中学校の文化祭、舟友祭に参加させて頂きました。見学してみて、文化祭で展示されている作品達は、舟形町で文化的に大切にされているもの達のような気がしました。見学して驚いたことは、舟形中学校の全校生徒の数です。人数は少ないですが、その分、先生と生徒のコミュニケーションが深いものだと思いました。そして、私達は、地元の材料を使ったいも煮を食べました。郷土料理や地元の食材を食べる行為は、地産地消推進計画からなのかなと思いました。

１回目の2日目は、里芋の収穫しました。里芋掘りは、とても大変なものでした。掘って運ぶのは、とても重たくて一人でやることは難しかったので、地元の方は、これをやってるのかと思うと、とてもすごいと思いました。人数がいた分、早く終わりましが、これを地元の方は一人でやっていると思うと本当に尊敬ものでした。

２回目の1日目は、ねぎを取って植え直す作業の手伝いをしました。ねぎ一本一本が立派で、カゴに入れると針山のようでした。これまで立派なねぎを、雪の寒さから守るため、収穫した後に植え直すというのは、手間のかかる作業だと思いましたが、これが、雪国での工夫なのだなと思いました。

２回目の2日目は、小学生のレクをお手伝いする、森の積み木広場の活動をしました。檜を使った積み木を小学生に使って貰うものでした。子供たちにとっての未来の舟形町は、とても華々しいものでした。森の積み木広

場は、舟形町の子供たちの協力性を育てる授業だと思いました。

全体的に舟形町で、生活してみて思ったことは、都会のような便利さは得られないし、少子高齢化社会で若いもののパワーが少ないという不便と思ってしまう点が多々ありました。

だが、地元の食材や、教育の環境は光るところがあります。地元の食材は、安い値段で、美味しいものが食べられることが衝撃的だし、地域特有の美味しさがあると感じました。そして、教育もUターンを期待できるような教育でした。地元の食材での教育や、地元の文化の教育。どれも行き届いてると感じました。これは、Uターンを望めなくても豊かな人格形成がされるだろうと思いました。

今、Uターンの教育は、ある程度されてると思いました。ただ、流れをせき止めるだけでは、人口の流出は、免れません。私は、Iターンの制作ももっとやっていくべきだと考えます。今、人口が減って、ほとんど人がいない地域もあると聞きました。ということは、多くの空き家が存在するということです。その空き家を使ったり、使われていない畑を使うことでIターンを望めると思います。自分は自分、他人は他人の現代社会に疲れてしまった人にとって、人と人との繋がりの舟形町は、心の癒しになると思います。

子どもの自然体験活動支援講座２

活　動　状　況

○実施市町村：真室川町

○講　　師：山形県神室少年自然の家職員

○訪　問　日：令和元年 12 月 14 日(土)～15 日(日)、令和 2 年 1 月 11 日(土)～12 日(日)

○受　講　者：短期留学生 2 名、人文社会科学部 1 名、地域教育文化学部 1 名、理学部 2 名、
工学部 5 名、農学部 1 名　以上 12 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】１２月　１４日（土）	【１日目】１月１１日（土）
08:00　山形大学発 10:00　神室少年自然の家　着 オリエンテーション 12:00　昼食 地域体験　～「人」と「文化」～ 夕食づくり 20:00　入浴 21:00　「伝承文化ふれあいキャンプ」の企画運営 内容と進め方について 22:30　就寝（館内泊かテント泊）	8:00　山形大学発 10:00　神室少年自然の家着・打合せ 10:50　わんぱく探検隊～冬の巻～ 出会いのつどい・シュラフ・テントづくり 12:00　昼食 雪上活動① 夕食づくり 雪上活動② 21:00　就寝（テント泊） ミーティング
【２日目】１２月　１５日（日）	【２日目】１月１２日（日）
6:00　起床　　朝食　準備 9:20「伝承文化ふれあいキャンプ」開始 みんなで遊ぼう 10:00　あったか料理づくり 昔語りを聞こう 13:00　注連飾り（しめかざり）作り 15:00　別れのつどい　後片付け・ふりかえり 16:00　神室少年自然の家発 18:00　山形大学　着	6:00　起床　　テント・シュラフ干し 7:30　朝食 雪上活動③ 12:00　昼食 12:30　別れのつどい 13:15　子ども解散　　後片付け・ふりかえり 16:00　神室少年自然の家発 18:00　山形大学　着

授業記録

〇活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Tさん

今回私が参加した「子どもの自然体験活動支援講座」は、12月と1月に行われた。1回目は「伝承文化ふれあいキャンプ」のスタッフとして、2回目は「わんぱく探検隊」の班付スタッフとして、子ども達の自然・伝承文化体験による感性の向上や自立支援を目標に活動した。

1回目の活動では、子どもの体験を支援するというよりは、私達も子ども達と一緒に伝承文化を体験するという感じだった。お年寄りの方達に注連飾りの作り方を教えていただいたことや、注連飾りに使用する縁起物の由来、ぼたもちについて等、知らなかったこと・考えたことのなかったことを学べた。一方で、自分にとって良いことばかりでなく良くないこともあった。お年寄りの方達との会話があまり出来なかったことや、子ども達の作業に介入し過ぎたことだ。自分の作業ばかりで、普段関わることの少ないお年寄りの方達と過ごす貴重な機会を活かすことが出来なかった。また、子ども達に注連飾りの作り方を上手く教えられず、結局私がほとんど作ってしまうことがあり、人にものを教えることの難しさを改めて知った。

2回目の活動では、外での活動が多く、私達も手作りのスキーや遊びで子ども達と楽しんだ。今回は小学3・4年生対象だったのだが、役割分担や行動がてきぱきしていて、かつ人の話をしっかり聞く態度をみせる子どもが多く、上級生の雰囲気を感じた。また、雪山トレッキングや雪遊びをしているとき、「それ使って登ると良いよ」「そこは危ないよ」等お互いに声掛け・注意喚起しながら活動していて、協力と自立が十分出来ていると感じた。私自身の事としては、子ども達の活動をサポートする事に関してはそれなりに出来ていたとは思うが、自グループ間の親睦を深めることの手伝いは出来ていなかった。男子同士・女子同士では仲良くしていたのだが、男女間での関わりをあまり見たことがなかった。もう少し盛り上がるような雰囲気作りを心がけるべきだった。

今回の講座を通して、私達の中で、人手不足が課題にあるのではないかと考えた。神室の事業では募集人数よりも参加希望人数が多く、抽選を行っている状況である。さらに、子ども達をサポートするためには多くの人手が必要で、常にボランティアを募集している状況でもある。よって、人手が今よりもさらに充実すれば、より多くの子ども達に体験活動の場を提供出来るのではないかと考えた。解決策としては、山形大学以外の大学にも同じような講義を行ってボランティアを増やすこと、定年退職した元教育関係従事者に協力を呼びかけること、ボーイスカウトと連携することが挙がった。

前期・後期ともにこの講義を受講したが、とても良い経験になった。神室には私も大変お世話になった過去があり、沢山の子ども達にこの素晴らしい体験をして欲しいと思っている。そのためにも今回出た課題の解消に微力ながら協力していけたらと思う。

地域教育文化学部　Nさん

私は子どもと接するなかで、自分の長所と短所を再確認することができた

まず長所は圧倒的な優しさである。昔から私は「利他主義」をモットーに過ごしていたこともあり、普段から自分より他人の利益を尊重した行動を心がけている。それが子どもを前にすると、子どもの遊びにいくらでもついていけるという形で表れた。他の学生の様子を見ていると「休み時間なのに休めない」と自分の時間がないことに不満げであったが、私は自分より子どもの利益を優先する癖がついているため、喜んで子どもの相手をできるのは自分の優しさゆえだと思った。そして、子どもと遊べば遊ぶほど、子どもからの信頼を得られることがわかった。

一方で短所は優しすぎるからこそ叱れないという点である。私は注意する際も優しく指摘することしかできないため、子どもが刃物で遊んでいても止めることができず、軽い切り傷を負わせてしまった。もし自分に叱る力があれば、そのような怪我をさせずにすんだのかもしれないと後悔した。

このように見てみると、私にとって「優しさ」というのがキーワードなのだとわかった。改めて自分の子どもとの接し方スタイルを振り返ってみると、うまくなじめてなさそうな子を気にかけてあげたり、相手の話を最後まで聴いてあげたりといった優しさ重視の対応だった。これまで自分のなかでは「面白さ」重視の対応をしてきているつもりだったが、実際にできている行動は優しさ由来のものが大半である。つまり、自分の強みはどちらかというと優しさであると言える。

この活動を通して、自己理解が一層深まったように思える。幼児・児童はわれわれ青年よりも感情的に動くため、青年にとって抑圧されている、食事前後の挨拶などのやったほうがいいことや、どんぐりを踏みつけて

粉々にするなどのやらないほうがいいこと、あるいは「チョコ食べたら虫歯になるから食べない！」と言うなど青年なら考えもしないようなことを彼らは当然のようにやっている。さらに、子どもとはそのような浅慮な存在かと少し軽視してしまっていたが、「手伝ったほうがいいですか？」とみずから考えて仕事に買って出るなどといった社会的スキルを持っている子もいた。そうした子ども達の態度に私は新しい世界を見たような衝撃を受けた。身近な大学生とだけではなく、そのような子ども達と交流をすることで、この活動は自分らしさというものを考える契機になると思った。

地域教育文化学部　Iさん

私は今回のフィールドラーニングを通して、今まで体験しなかったことや日常生活では経験できないことをたくさん学びました。最初は日本語能力を高めるという目的を持ってこのプログラムを参加しましたが、この活動の中でコミュニケーション能力が高められただけではなく、人や自然との出会いを楽しむことができました。そして、一生に役に立つことを身につけて、自己啓発もできて良かったと思います。

1回目のフィールドラーニングで、親子たちや老人クラブの人たちなどのさまざまな世代との触れ合いを中心に、いろいろな活動が行われました。まず、しめ飾りを作っていた時、老人の山形弁がわからなくて非常に困ったことがあります。しかし、老人が根気よく優しく教えてくれて、手仕事が苦手の私なんて最後みんなの協力のおかげで、いくつかのしめ飾りができました。しめ飾り作りを通して、伝統的な日本文化と触れ合い、日本の先人たちの知恵と工夫が感服しました。また、親子と一緒に料理を作った時、お互いに楽しそうな様子を見て雰囲気も暖かくなりました。そして、中国語と中国文化に興味を持つ親たちと出会って、いろいろ話してくれて嬉しかったと思います。さらに、今までキャンプをしたことがないので、テント泊も初めて体験したことです。テントを組み立てることが協力性の高い活動と思います。ですから、1回目の時、私はテント泊が2回目の子供たちにとって必ずいい経験になると思いました。

2回目のフィールドラーニングで、主に雪上活動を中心にしました。私は中国北方の出身なので、地元でも雪がたくさん降っています。しかし、1日目の山登りのトレーニングの時、真室川町の降雪量に驚きました。雪の中の山登りは想像以上面白かったです。子供たちと一緒にいると、なんかやる気が出てきた感じがあります。最初、自分は子供が苦手だということを痛感したので、うまく話せませんでした。多分自分が言語の壁という難関を恐れていたので、声をかける勇気もないです。しかし、3、4年生の子供たちはちょうど好奇心旺盛の時期なので、私に対して積極的なコミュニケーションをとる姿勢を持つということが感心しました。テント泊の時も、中日子供の違いを発見しました。大学生でさえ戸惑うテント泊の組み立てる作業だが、日本の子供たちは失敗を恐れず、まず自分が考えながら作ってみました。その後、友達と一緒に協力して完成しました。多分中国は甘えん坊な子供が多いので、私は日本の子供の自立性と協力性に驚きました。フィールドラーニングの中で、自分から考えたり、挑戦してみたりすることが最も重要だと思います。私も雪遊びの活動を通して、子供と少しずつ親しくなりました。別れの時、三年生の女の子に「お姉ちゃん、来年まだここに来るの」と言われたから、気持ちが寂しくなりました。最後、子供が笑顔で手を振って帰る姿を見て、たった1泊2日の活動でも、子供も自分自身も成長していくだなと実感しました。

神室少年自然の家が存在している意義は「体験を通して学ぶ・集団を通して学ぶ」ということだと思います。所長さんの話によると、「新しい時代は一体どのような時代ですか？多分AIが普及している時代、国際交流がさらに発展していく時代、自分らしく生きていける時代...」私もこのプログラムで少し考えました。「新しい時代に、若者はどのような姿勢を持つべきだ？」未知な状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」と体験を通して学ぶことを日常に「かえす力」が大切だと思います。

地域教育文化学部　Hさん

二回分のフィールドラーニングを通じて、多くのことを学んだ。神室少年自然の家で子どもたちと一緒にやりがいのあることをたくさんした。子どもの自然体験支援の現状だけでなく、活動中にチームワークの力を感じた。そして、日本の伝統文化の魅力を実感して、非常に有意義な体験だった。

一回目のテーマは伝承文化ふれあいキャンプである。事業の狙いは幼児、小・中学生とその保護者、大学生、地元の老人クラブなど、様々な世代が一緒に「遊ぶ・食べる・作る」体験を通じて、伝承文化にふれながら世代間の交流を深めることである。イベントでは、お年寄りや子どもたちとぼたもちを作ったり、地元の伝統文化で

ある真室川音頭を体験したり、注連飾りを作ったり、山形大学の大学生が企画したゲームをしたりして楽しんでいた。様々な世代の子どもたちと遊ぶことで、子どもたちの活発さや可愛らしさを感じた。同時に子どもの介護の難しさも感じた。私は子どもが大好きだが、子どもとの付き合いが苦手だった。当時私が配属されたグループには三歳の子供がいて、どうやってあんな小さな子とコミュニケーションを取ればいいのかわからず、ずっと悩んでいた。これは私が足りなかったところで、後でこの欠点を直したいと思う。また、今回の活動にもいくつかの問題点がある。例えば、当日このキャンプに参加した親子はたくさんいたが、人手不足ですべての子供を配慮することができなかった。このように子供たちがみんな良い体験がすることを保証できなかった。次に、施設不備の問題がある。ぼたもちを作っていたとき、みんなで洗面所で野菜を洗ったり、お皿を洗ったりしていたが、洗面台スペースが小さくて、蛇口も設置不足で人員が混雑してしまった。そのため、適当にスタッフの数を増やし、必要な施設の整備を強化し、子どもたちのためにより良い参加環境を作っていくべきだと思う。十分なスタッフの指導と良い活動施設があることで、子どもの自然体験支援の発展を推進ことができる。

二回目のフィールドラーニングのテーマはわんぱく探検隊（冬）である。事業の狙いは自然体験や共同生活体験を通じて、自然の良さや仲間の大切さなどを感じ取り、自主性や協調性を育むきっかけを作ることである。活動の内容は雪山登り、テント設営、竹スキー作り、雪遊びなどがあった。これらの活動は本当に子どもたちの自立力とチームワーク力を鍛えていたのだ。竹スキーを作った後、小学校四年生の女の子は自分で竹スキーを完成して満足していると言った。これは今回の活動の意義の一つだと思う。自分の努力でことを成り遂げるのは素晴らしことだと思っている。しかし、一回目の活動と同様に、二回目の活動も施設をサポートする側の人手不足の問題がある。

したがって、私達のグループは検討して、いくつかの解決策を得られた。例えば、他大学との連携でボランティアを増やし、定年退職した校長先生に協力を呼びかけるなど。各方面の協力を通じて、神室少年自然の家はますます良くなり、子どもの自然体験もますます良くなると信じている。

理学部　0さん

私は、今回の子どもの自然体験活動支援講座で神室少年自然の家に行き子どもたちのサポートをするとともに山形の文化にふれた。この活動では、子どもたちが「考える、判断する、伝える、協働する」ことを促すようにその場を仕掛けていくことを目標に活動した。

一回目の文化伝承ふれあいキャンプでは、関栗老人クラブの方々と参加者の家族の方々としめ飾りやぼたもちを作ったり真室川音頭を踊ったりした。私の班では３歳の男の子とそのお母さん、老人クラブの方とともに活動し、老人クラブの方が教えてくださったことを子供にもっとわかりやすく説明しながら一緒に制作などを行った。３歳の子供は思っていたより自由で難しい活動も多く、真室川音頭の途中で走り回ったり座り込んだりしてしまいお母さんが困惑する場面があった。その時私は「一緒に踊ろう」と声掛けをして踊ることを促していたが、みんなが踊っているのを横で見ながら一緒にお話するだけでお母さんのサポートになったのではないかと思った。一回目の活動では真室川町の文化に触れながらいろいろな世代との関わり方を学んだ。

二回目のわんぱく探検隊では、小学校３，４年生と雪山登山、雪中泊、雪遊び、竹スキーづくりを行った。子どもたちは、自分の意見を言う子と全く言わない子に分かれていた。雪山登山で、墨汁を使って雪に班の目標を文字で書くミッションがあった。そこでは私が一人一人にどんな目標がいいか聞いてそれをまとめたが、子供たち側からも雪に字を掘る係とそこに墨汁を流す係に別れたらどうかという提案をしてきて、よく考えているなと感心するとともに子供たちの意見を尊重したいと思った。また、一度嫌なことがあると機嫌が直らなかったり言うことを聞かなくなったりしていて、その時の対処をもっと自分で考えたりその子の友達に協力してもらえばもっとスムーズに解決できたのではないかと思う。二回目の活動では子どもたちとの協同や考えること、判断することを促すことができた。

私達はこの活動を通して、神室少年自然の家は常にボランティアを募集していることとわんぱく探検隊は毎回参加希望人数が多く、抽選を行わないといけないということを知った。このことから、神室少年自然の家の課題は人手不足であると分かった。この課題に対して、私達はボーイスカウトと連携してサポート側を増やすことや学校の先生を辞めた方々に声をかけて神室少年自然の家のスタッフになってもらうこと、大学と連携したボランティア活動の参加者や回数を増やすことを提案する。

理学部　Aさん

私はこのプログラムの二回の活動を通して様々な体験をした。端的に言えば一回目の活動ではしめ縄作り、餅作り、真室川音頭をしました。しめ縄作りでは、前の日からご老人の方々と準備をすることで次の日に子供達に楽しくしめ縄を完成させることができるだけでなく、私たち大学生とご老人の方々との仲を深めるのに役に立った。真室川音頭では、参加者全員で一緒に音楽に合わせて踊ることができた。特に私は事前学習で真室川音頭について調べてきていたのに、踊りを覚えることにとても苦戦しました。餅作りでは、基本的に大学生は子供達の安全に対する注意が仕事で、料理は子供とその親がしていた。どの活動も子供達は楽しそうで最後のアンケートでもとても楽しかったと書いてくれる子が多くて私もとてもうれしかったが、一つだけ問題点があった。それはどの活動でもご老人の方々が子供達に教えてあげる機会が少なかったことである。今回こどもは親同伴で活動に参加いていたため、子供が困った際には親が助けてしまっていた。これではせっかくご老人の方々に来てもらった意味がなくなってしまいます。今回の活動中に気づくことができなかったためその場で退所することができなかったが、解決策として、親には見守るだけに専念するようにお願いをし、子供達には困ったらご老人の方々に聞くように言うべきだと私は考えました。
次に二回目の活動内容は雪山登り、竹スキー作り、雪上遊びでした。二回目の活動で私たちが気をつけなければいけないことがあり、私たちが安易に子供達に教えない、子供達が自ら動くようにする」ということでした。なので、雪山登りでも子供達が行きたい道を行かせるつもりだったが、自分たち大学生の後をついてきてしまい、子供達が自分から動くようにすることができなかった。しかもこの時私たちが先に進みすぎて班の一人の子がはぐれてしまう事態が起こった。この時大学生の一人は班の最後尾にいなければいけなかったと反省した。
すべての活動を通して、気づいたことはこの神室少年自然の家には職員さんがとても少ないと感じた。今回の二回の活動でも私たちも授業ということがあるが基本的に大学生が子供達とふれあっていた。なのでこれの解決策としては、大々的にボランティアの募集を呼びかけるや他大学との連携した単位互換や高校の授業にボランティアを組み込むなどして、ボランティアに関わったことのある人を増やしていく子とが必要だと思います。

工学部　Sさん

私は、この授業を通して真室川町という町に身近に触れることができたり、少年自然の家という施設についてさまざまなことを考える機会があった。１回目の授業では、1日目に2日目子どもたちにしめ飾りの作り方を教えるために老人クラブの方々にご指導いただいた。2日目、その成果を出し、子どもたちに教えたり、一緒にぼた餅を作ったり真室川音頭を踊ったりした。１回目の授業で感じたことは、この少年自然の家という施設は子どもたちだけでなく、高齢者の方々、そして自分たちのような若者にもとても有意義な場所であるということだ。１回目の授業では2日とも老人クラブの人と関わって話す機会が多かったが、老人クラブの会長は、このように子供達の活動に協力することが楽しみだと話していた。このように、高齢者の皆さんが子供のために協力したり、集まって活動すること自体が、高齢者にとってのいい刺激で、楽しみであるのだと思う。実際集まっていた高齢者の方々はいきいきしていて楽しそうに見えた．さらに、そうやって高齢者と話して一緒に活動することが自分たち若者にもとてもいい体験だった．いろいろな知識、価値観などに触れることが出来たからだ。1日目は、子供、大学生、お父さんお母さん、高齢者と言った、さまざまな年代の人たちが一緒に協力して活動した．そのこと自体が滅多に出来ない体験で、自分自身も刺激を受けた．もちろん子供たちもそうであるし、高齢者の方々もそうであると思う．
２回目の授業は、神室少年自然の家についたそばからすぐに子供たちと合流し、一緒に活動をし、同じご飯を食べ、一緒お風呂に入って、一緒のテントで寝て、また一緒に2日目活動をする．と言ったように、ずっと子供と一緒という状況だった。その中で自分は、子供達と接する難しさを感じた。すごく明るく喋る子もいれば、あまり喋らない子もいてそんな子に積極的にコミュニケーションを取ろうと試みるが、明るい子に、遊ぼうと手を引っ張られてあまり話せないなどのこともあり、平等に接したいがそう出来ない難しさを感じた。そして、子供達には自主的に自分たちで考えて行動して欲しいとうのが今回の活動の狙いでもあったので、どこまで力を貸すべきなのか、貸さないべきなのかその加減が大変だった。だが、思った以上に子供達は自分たちでできる力を持っていて驚かされることもあった。初めの頃は緊張していた子でも徐々に自分を出せるようになってきて、体験の風を吹かせるとこができていたと感じた。
このように私は、この少年自然の家という施設がとても重要な施設だと実感した。子供達が貴重な体験をできるということをイメージしていたが、携わっていくにつれもっと深いことを感じることが出来た．私はもっと少年自然の家の重要性を沢山の人に知って欲しいと思った。フタッフも少ない状況であるのでもっとボランティアを受け入れたりして、自分がした体験をいろんな人に感じて欲しいと思う。

工学部　Yさん

私は今回、１回目のフィールドワークを行い、日頃経験しないような体験したり、地域ならではの伝統や文化に触れることが出来ました。また、普段では関わること

のない幅広い年代の方とコミュニケーションをとることが出来たり、子どもの関わり方などを学ぶことも出来ました。

１回目のフィールドワークでは、地域の親子や老人クラブの方々や神室少年自然の家の職員の方々と、しめ縄づくりやぼた餅づくりや真室川音頭をしました。しめ縄作りでは、老人クラブの方々と前の日から一緒に教えていただきながら土台作りをしました。老人クラブの方にただ作り方を教えてもらうだけでなく、一つ一つの形の意味や、なぜこのように作るのかの由来なども合わせて教えて頂きました。山形の人は、私の地元である茨城の人と違ってなまりが強く、何を言ってるのか分からない時もありましたが、神室少年自然の家の職員方が私たちにわかるように言い直してくれたりしてくださるなどの、みんなでコミュニケーションをすることで楽しくしめ縄づくりをすることが出来ました。ですが、次の日の親子とのしめ縄づくりでは、集中力が続かない小さい子ども達が途中で作るのを投げ出してしまったり、子供にわかりやすく作り方を説明したつもりでもあまり理解できていなかったり、と自分でもどうすればいいのか分からなくなりました。改めて子どもたちのそれぞれの状況に合わせて、説明したり、みんなが最後まで楽しく作れるようサポートしたりすることの難しさを感じました。また、ぼた餅づくりでは、みんなで協力しながら楽しく作ることが出来ました。作ってる最中は、お母さん達ともたくさん話すことが出来て、班のメンバー以外のいろいろな方とコミュニケーションを取れました。そして最後は、夜、テントを張り、大学生のみんなでテントで寝ました。テントを組み立てたこともテントで寝たこともなかったので、貴重な体験でした。

この活動を通して、私が感じたことは、今の子供たちの成長の過程においてこのような活動は必要であるなと感じました。神室少年自然の家では、教育目標として、”自然と科学に関する豊かな体験活動を通じて感性を高め、いのちをつなぎ学びを通して地域とつながる青少年の育成を図る”を掲げているそうです。この活動をすることによって、普段関わることのできない年代の方と触れ合ったり、普通に生活をしていたら知ることも出来ないような伝統文化や自然に触れたりする機会がたくさんあるなと感じました。今の子どもたちは、なかなかそう簡単にそういう経験をすることが出来ていないと私は思います。なのでこう言った経験をすることで、子どもたちもより豊かな子になるなと感じ、神室少年自然の家の方々が掲げている教育目標は、未来の子供たちをよりよくするために今後私たちも考えていかなければならないと思いました。また、私の地元にはこういう機会を与えてくれる場所がありませんでした。なので、もっと国を上げて、こういう場所を増やし、ボランティアの数をさらに増やすために、SNSを使ってかつどうをひろめたりするなどしてていけたらなと思いました。

工学部　Sさん

私はこのプログラムの計２回、４日間の活動を通して小学生との触れ合い方だけでなく、山形もがみの伝統文化など数多くのことを学んだ。1回目初日の伝統文化ふれあいキャンプ前日では地元の老人クラブの方々に縄をなうところを実際に見せてもらったり、注連飾りの土台となるしめ縄を自分たちで作ったりした。自分が知っている注連飾りとは異なった形をしており、縄の材料となる植物を河原に取りに行ったり自分で栽培したりしているという地元の方の話を聞いたことと合わせてとても新鮮な体験ができた。2日目の伝統文化ふれあいキャンプ本番では小学生たちも参加しておはぎを作りや注連飾り作り、真室川町に伝わる真室川音頭の見学と体験などを行った。これまでおはぎとはきな粉やあんこで食べるものだと思っていたため納豆で食べるという全く食べなれない味に驚いた。

２回目のわんぱく探検隊～冬～では雪山のトレッキングや雪中テント泊、竹スキーや園芸用土の袋を使ったそり滑りなどのアクティビティを行った。雪が少なくとても滑りやすくなっていた斜面を登ったり、1日目の夜に各自で作ったオリジナル竹スキーでバランスを崩さないように滑ったりと日常生活ではまず味わえないような雪に囲まれた経験をすることが出来た。

これだけ色々な活動が出来るとやはり小学生たちにも人気になるようで次回のイベントにも参加したいと言う子がたくさんいたが、同時に友達と一緒に申し込んだが自分だけが抽選に当たってしまい友達は参加できなかったという子もいた。とても楽しくかつ普段は体験できないような貴重な経験を得られるこのようなイベントに参加できない人がいるのは勿体なく、募集定員を増やせない人員の少なさがイベントを運営する神室少年自然の家の課題だと考えた。子供たちが自然と触れ合うことを目的とした活動である以上、安全の確保は重要であり職員一人当たりが見る子供の人数を増やすというのは良い解決策とは言えないだろう。そのため単純に子供の面倒を見られる人数を増やすことが必要となる。そこでイベントの時のみボランティアとして人を集め

るという対策を考えた。例えば山形県内には地域教育学部を擁する山形大学、人間科学部子ども教育学科を擁する東北文教大学などが存在しており、そこの学生を単位取得可能な実習授業などの形でボランティアとして募集すれば学生側も実際に子供を相手に活動するという経験を得られ人手不足も解消するのではないだろうか。ほかにも真室川町には３つの小学校があり、そこを定年退職した元教員にボランティアをお願いすることも可能かもしれない。

貴重な体験が出来て自然に親しむよい切掛けとなるであろうこのようなイベントを一人でも多くの子供が楽しめるようになればいいと考える。

工学部　Iさん

私は神室少年自然の家で２回のフィールドラーニングを行った。そこで、人との関わりの大切さや様々な体験学習の場を作り出している少年自然の家の重要さ、子供との関わり方など沢山のことを学んだ。１回目の実習時に、所長の金田さんより神室少年自然の家のあり方などについてお話を頂き、教育目標が「考えざるを得ない、判断せざるを得ない、伝えざるを得ない、協働せざるを得ない状況から何をしていかなければならないかを自ら考え生きていく力をつけること」であることを知った。私は自然の中での様々な活動を通して人と関わり、自ら考え、自分の意思で行動する体験は成長していく上で大切なことだという考えを持っていたため、金田さんのお話に共感した。なぜ私がこのような活動を体験することが重要だと感じているかというと、これまでに体験した自然の中での様々な体験が心の強さや考える力、行動力などを育ててくれたという実感があるからだ。実際に２回の実習を通して関わった子供達が仲間や大学生などと協力して考え、自ら行動している成長した子供達の姿を見ることができた。そのことから、私は自然の中でいつもと違う環境に肌で触れ、自ら考え行動することの大切さを再実感し、この学びの場をもっと広めていきたいと感じた。しかし、そのような活動ができる場所は限られている上に、その場を提供するスタッフが足りていない現状を神室少年自然の家の職員の方からお聞きした。今回私たちが参加した自然体験活動も定員内に参加者を収めるために抽選を行ったということでスタッフを増やすことができればもっと参加者や企画自体の数を増やせるのではないかと感じた。そのため、スタッフ確保を今後どのようにしていくかが自然体験活動を広めていく上での課題だと考えた。その課題の解決策を２つ挙げる。１つ目は、私たちが行ったような大学の授業との連携の強化である。沢山の大学と連携を取ることが出来れば一定数のスタッフを確保することができ、その授業をきっかけにボランティアのリピーターを増やすことができるのではないかと考えた。２つ目は、自然体験活動をメディアに取り上げてもらうことで知名度を向上させ、参加者とともにボランティアの募集を積極的に行うことである。スタッフ募集を目にする人数を今よりも増やすことが出来れば興味を持ってくれる人が今よりも出てくるのではないかと考えた。私は今回初めてスタッフとして自然体験活動に参加させていただき、スタッフとして考えさせられたことや学んだことが数多くあった。そしてすごく楽しむことができ、充実した時間を過ごすことが出来た。これからボランティア活動を継続させて自然体験活動を広めていくと共に、子供の学びの場をサポートし、自分自身も成長させていきたい。

工学部　Uさん

今回私は「子供の自然体験活動支援講座２」に12月1月の二回1泊2日で参加した。

1回目の「伝承文化ふれあいキャンプ」の1日目は老人クラブの方々にしめ縄づくりを教えてもらいながら一緒に作った。夜にはテントを張るという体験もした。2日目には老人クラブの方と近所の親子と一緒に真室川音頭を踊ったり牡丹餅を作ったりした。いつも大学で勉強していると大学生や教授としかコミュニケーションが取れないので年配の方や近所の子供たちと遊べる機会は本当にありがたく年配の方にはもちろん、子供からも学ばされることがたくさんあってまだまだ学ばされることばかりだなと思った。1日目は老人クラブの方とお茶をしながらゆっくり話す機会があり学校の話や昔やっていた仕事の話などをしておばあちゃんの家にいるくらいゆったりとした時間を過ごすことができた。2日目では1日目とは雰囲気が変わって小さな子と一緒に走り回ったり一緒に料理して小さな子がけがをしないように注意を払ったり気が休まらなかったけど1日目とは違う楽しさを味わうことができた。

2回目の「わんぱく探検隊・冬」では1回目の幅広い年代の人との交流ではなく小学校3, 4年生というピンポイントな学年との交流だった。午前中から雪山に上ったり外でテントを張ったり一緒にご飯を食べたり全力で遊んだりすべてのことをみんなと一緒に行動した。普段大学生と一緒に同じ行動をしても自分とスピードはあま

り変わらないし、やることも自制心があるのであまり突拍子もないことは起こらないけど3, 4年生の子たちと一緒に行動すると同じ事をしていても早い子、遅い子、雪山を楽しんで上る子、怖がっていやがる子など様々なみんな個性があり自分たちもこんな時があったんだなと思うと学校の先生や、親も大変だったんだなと思った。私の班では雪山を上る際に高いところが怖いという子がいて最初班になじめずにいたが2日間同じテントで寝たり一緒に同じご飯を食べたりお風呂に入ったり遊んだりして最後には「まだみんなと一緒にいたい、まだ帰りたくない」と言ってくれてずっと一緒にいて同じことをすると自然と仲良くなれるんだと思った。
今回の4日間の中で私たちは神室少年自然の家は人手が充実していないのではないかと考えた。わんぱく少年隊などのイベントは抽選になっていて応募した全員が参加できるわけではないということを知りもっと人手を充実させることができればもっと子供たちが楽しめる環境が整うのではないかと考えた。
私は今回の4日間でたくさんのことを学び子供たちとともに自分自身も成長できたと思っている。
この講義に参加することができてたくさんの人と出会えて交流できていい機会となった。これからもこの講義で学んだことをどこかで発揮出来たらいいなと思う。

農学部　Nさん

私は今回もがみのプログラムを通してたくさんのことを体験し、いろいろな年代の人と関わることで、人とのつながりの大切さを学んだ。

一回目の活動では、しめ縄作りで老人クラブの年配の方、班活動をともにした親子と一緒に活動をした。近年様々なものが機械化していく中でしめ縄のように人の手で作られ続けてきたものは、やはり趣があった。わらの匂いを鼻、手触り、耳で感じることで実際に体験しないと分からないことがあると知った。出来た作品は1人1人違い、個性が表れるものになった。いくら同じものを作っていったとしても全く同じものは出来ない。世界にたった一つのものを作ることにすごく意義があると考えた。このような手で何かを自分自身の力で作るという行為は受け継ぎ続けていかなければならないと思った。本やインターネットなどで学ぶのもいいが、実際に作ったり、関わっている人から経験したことを聞くことによる感動にはかなわない。また、ぼた餅作りや真室川音頭体験でも同じことがいえると思った。

二回目の活動では、一回目よりも年が少し上の子供たちと一緒に冬のわんぱく体験隊として活動をした。今回は、何でもかんでもやってあげるのではなく、「子供たちが自ら考え、行動する」を頭に置いての活動だった。雪山探検では、子供たちは普段の生活であまり雪に関わらなく、嫌だ、無理などのマイナス発言を言い続けていた。しかし、時間が経つにつれて、だんだん自分から前に進むようになり、少し遅れている子がいれば応援や励ましの言葉をかけていた。中には、こうした方がいいというアドバイスをしている子もいた。子供たちの考える力、実行する力には圧倒された。これも実際に自然を相手にして活動をしたからこそ起こった出来事だと思う。

この二回の活動を通して、いろいろな年代の人や文化、自然と関わることは子供の成長過程においてとても重要なことだと分かった。しかし、参加したい子供たちに対して大人の数が少ないのが現状だ。これの解決策として私たちのような若い世代がボランティアなどとして積極的に関わっていくことが求められることが分かった。また、このプログラムを経験した子供たちが大きくなって地域のために一時的でも戻ってくることが求められると考える。このような素晴らしい体験が出来るものをなくさないために行動を起こしていかなければならないと思った。

人と自然をつなぐ環境保全活動

活　動　状　況

○実施市町村：鮭川村

○講　　師：鮭川村自然保護委員会　会長　高橋　満

○訪　問　日：令和元年 11 月 9 日(土)～10 日(日)、令和元年 11 月 16 日(土)～17 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部 2 名、地域教育文化学部 2 名、医学部 1 名　　以上 11 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】１１月９日（土）	【１日目】１１月１６日（土）
08:00　山形大学発 10:15　米地区公民館着 　　開講式 11:00　鮭川の自然について（講話） 12:00　昼食 13:00　村内保全箇所見学 16:15　農家民宿まつ乃着	08:00　山形大学発 10:15　米地区公民館着 10:30　米湿原について（講話） 12:00　昼食 13:00　環境保全体験 16:15　農家民宿まつ乃着
【２日目】１１月１０日（日）	【２日目】１１月１７日（日）
09:00　農家民宿まつ乃発 09:10　米地区公民館着 　　環境保全体験 12:30　昼食 13:30　環境保全体験 16:00　米地区公民館発 18:00　山形大学着	09:00　農家民宿まつ乃発 09:10　米地区公民館着 　　環境保全体験 12:30　昼食 13:30　環境保全体験 15:15　感想発表 15:45　閉講 16:00　米地区公民館発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Kさん

今回の活動を通して最も印象に残ったことは、環境を整備することがいかに大変かということだ。私たちのグループは、鮭川村での湿原の環境保全活動を行った。鮭川村にはギフチョウなどの虫を含む多くの天然記念物が生息しているが、特に湿原には希少な動植物が数多く自生する。「環境保全」と言われても、参加する前はその言葉に漠然としたイメージしか持っていなかった。しかし、実際に鮭川村を訪れ、そこでの活動の様子を肌身で感じたことで、この地域の自然を守っていくことが生半可なことではないと実感した。鮭川村の湿原は土砂崩れによって土地が少し乱れていたため、山からの水が川のように流れてしまっていた。そこで、私たちはまず湿原を流れる水をせき止める作業を行った。言葉で表すのは簡単だが、実際に経験しないと分からない苦労がそこにはあった。伐採された草や折れた太い枝を拾い集め、水の上に積んでいく。その後、土でさらに水をせき止めた。何度もかがみながらぬかるんだ泥の土地を往復しなければならないので、足腰の力が必要である。別の日には、木道の整備を行った。湿原に来た人が安全に歩けるように、皆で重い角材を運んだり、持ち上げたりして調整した。作業を進めるうちに、水の流れがほとんどなくなり、田んぼのようになり始めた。湿原というものに今まで縁がなかった私はこの様子を見て、こうして湿原が出来上がっていくのかと感動した。春には自分たちが整備した湿原にたくさんの生き物が住むのだという喜びが感じられた。身体的な疲れは伴ったが、鮭川村の自然の尊さを感じることができる貴重な経験となった。

私が今回の活動を通して考えた地域の課題は、環境保全のための人員不足である。上に挙げたように、自然環境を整備することは自分たちが思っていた以上に体力がいることだと分かった。これだけ大変な作業を、高齢の方が多い村の方々のみで行うとなると、相当な苦労に思われた。そこで、私が考えた対策は、山形大学の学生にボランティアという形で環境保全活動に参加してもらうということだ。現在山形大学にはいくつかのボランティアサークルがある。就職活動の役に立つということもあり、ボランティアに励みたいと考える学生は少なくない。そうすれば、保全活動がより活発になり、若い人々が環境保全や最上地区に興味を持つきっかけになると考えた。

人文社会科学部　0さん

フィールドラーニングでの感想

今回のフィールドラーニングでは最上地方の鮭川村のプログラムに参加した。事前学習として鮭川村の人口について調べた後に実際にフィールドラーニングに行った。事前学習をしたもののほとんど鮭川村については知らない状況で参加したため、実際に行ってみて知らないことをたくさん知ることができた。具体期には、鮭川村はギフチョウとヒメギフチョウの混成地であるということ、ザゼンソウの仲間でアオザゼンソウという希少性の高いザゼンソウがあることなどがわかった。新しい知識を身に付けた後で活動をすると、実際に花を見つけることができた。

さらに、鮭川村の米地区の湿原の環境保全活動を行った。先日の大雨の影響で散策用の木道が流されてしまったため、それの修繕、また、湿原地帯を広げるために小川の水をせき止めるダムづくりをした。木道の修繕では湿原まで木道を運ぶ必要があり、みんなで協力をして木道を運んだが学生の私たちでもとても大変だった。ダムづくりでも、水をせき止めるために木を運んだ。これも学生の私たちでもとても大変だった。

全体を通して、大変な作業が多かったがその分達成感を感じられる活動であった。知らなかったことを知ることができ、鮭川村について興味を持つことができた。

地域の課題について

今回の活動はやはり学生の私たちでもとても大変な作業が多かったが、普段鮭川村の方々がやっているということを考えると高齢化が進んでいる地方では、さらに大変であるという課題がある。

また、ギフチョウやヒメギフチョウ、湿原など今後保護する価値があるものがたくさんあり、そのものが興味を持たれないという課題もある。実際に同じ県に１８年間住んでいる自分でも知らないことがたくさんあった。

その課題の解決法について

上にあげた２つの課題について考えたとき、解決法として興味を持ってもらうということが１番であると考えた。興味を持ってもらう方法としてまず自分たちと同じ大学生をターゲットにしてボランティアを募るということを考えた。これはまず、鮭川村に来てもらうという目的で行うものである。自分たちも実際に行ってみたことによってたくさんの魅力を知ることができたためにこのような解決方法を考えた。

地域教育文化学部　0さん

１．フィールドラーニングでの感想

一回目一日目は、鮭川の自然についての講話から始まった。鮭川村の美しさの象徴であるギフチョウ、ヒメギフチョウや、アオザゼンソウ、トキソウ、ミズチドリなどの湿原の美しい植物の存在、そしてそれらを守るための村の人々が行っている活動について知ることができた。活動とはすなわち環境保全活動のことであるが、具体的には、ギフチョウとヒメギフチョウの食草であるサイシンの保守のための除草、湿原保全のための葦刈りとダム造り、観光のための木道設置などである。午後からは村内保全箇所見学ということで、実際に活動場所に訪れ、活動内容を説明してもらい、村の人々の熱意を感じると同時に、環境保全活動について想像以上に興味を持つことができた。

二日目は、実際に環境保全活動を行った。木道整備のための木材を二人がかりで運び、湿原を作るために水をせき止めてダムを造った。木材はとても重く、運んだ後は手がしびれるほどだった。湿原作りでは刈った草を何回も往復して運び、泥だらけになりながら木の枝や板をたてて水をせき止めた。学生の私たちでさえ大変な重労働だと感じたことを、村のご高齢の方が行っているのはすごいことだが、環境保全活動には若者の参加が必要だと強く感じた。

二回目のフィールドラーニングは、神奈川大生との活動だった。一日目、午前中に環境保全活動で草運びとダム作りを行い、午後からは米湿原について、ギフチョウとヒメギフチョウなどのお話を伺った後、米湿原を今後どのように保全していくかなど、鮭川村の今後の課題と解決策について議論した。最初はみんな控えめだったが、「最初はどんどん思ったことやアイディアを出して、後からグループ分けするといい。」という先生からの助言を皮切りに、たくさんの意見やアイディアが飛び交った。神奈川大生がいるからこそのアイディアも出て、とても充実した良い議論になった。

計四日間のフィールドラーニングで、鮭川村の美しい自然のことや、それらを守っていくための環境保全活動について、実際に体験することで深く学ぶことができ、とても充実した活動を行うことができた。その中で見えてきた課題や、それに対する解決策を学生主体で活発に議論し合えたことはとても良かったと思う。また、班員同士とても仲良くなれたことや、村の人々の温かさを感じることができたことなど、全ての活動や出来事を通して、このフィールドラーニングに参加して良かったと思う。

2．地域の課題と解決策

課題として、環境保全活動を主体となって行っている人々の高齢化があげられる。私たち学生でも大変だと感じる作業を、これから先もご高齢の方が続けて行くのは難しい。鮭川村の美しい自然を守って行くには、環境保全活動への若者の積極的な参加とその継続が不可欠である。そこで解決策として、まずは若者が鮭川村に興味を持ち、実際に訪れてもらうきっかけを作ることが必要であると考えた。神奈川大学のグローバルな環境を利用し、留学生向けの、環境保全活動も含めた鮭川村への旅行プラン。村の中高生に運営してもらう、鮭川村の公式インスタグラムアカウント。今流行のハーバリウム作り体験は、村の人にも興味を持ってもらえた。素敵な案はたくさん出たが、予算などの問題もあり、それを実現化することが最大の課題である。アイディアを出すだけで終わらせず、ぜひ実現化に持ち込みたい。

地域教育文化学部　Nさん

◎フィールドラーニングの感想

1回目の1日目は現地の方から鮭川村自然委員会のこれまでの活動についてのお話を聞いた。鮭川村は、村の天然記念物に指定されているギフチョウ、ヒメギフチョウの混生地であるため、それらの保護活動のためにも湿原の保全活動に非常に力を入れていることが分かった。その後、様々な自然と触れ合うことができた。特に印象に残っているのはトトロの木、夫婦杉などとも呼ばれている小杉の大杉である。この木の根元には山神様が祀られており、自然と村での信仰を結びつけて大切にされ続けているということが分かった。

2日目は実際に米湿原に行き、環境保全活動に取り組んだ。まず初めに木道を運ぶ作業をしたが、想像以上に重たく学生二人でもかなり負担の大きい作業であった。また、湿原に様々な生き物が生息できるように小さなダムを造った。水が流れている所に木の枝を置き更に草を乗せたり泥で押し固めたりすることで、水をせき止めて小さな湿原を作ることができた。これに更に雪が降り積もれば重みでしっかり固定されるためより頑丈なダムが出来上がるそうだ。春頃になればここにカエルなどが生息するようになると考えられている。実際、他の場所ではトンボ、カエル、エビなど事前学習でも学んだように生物の多様性が見られた。

2回目の1日目は再び米湿原に行った。前回自分たちが作ったダムが決壊していなかったため頑丈なダムを作ることができたように思える。その後、現地の方からギフチョウ属の具体的な保全のお話を聞いた。ギフチョウ属は深山よりも里山に多く生息しているため、里山が荒れるとギフチョウ属の数が必然的に減少してしまう。だからこそ、里山の自然を保ちギフチョウ属を守っていくためにも環境保全活動が非常に重要になってくるのだ。実際に鮭川村ではギフチョウ属が生息する地域の方々に呼びかけて自主的に保護活動を行った結果、ギフチョウ属の増加傾向が見られるようになったそうだ。具体的にはヒメギフチョウはトウゴクサイシンという草しか食べないため、地域の方々がその周りに生えている草を刈って保護することで混生地を維持することが可能になっている。

2日目も米湿原に行き、木道の整備などを自主的に行いながら、現地の方のお話を聞いた。現地の方によると、地域の方々が従来の保全活動を行うことを制限されないように、天然記念物の指定やラムサール条約の登録をしないようにしているそうだ。また、多くの人が湿原の植物を踏むことで逆に湿原が荒れてしまう事態を防ぐためにも、環境保全活動のボランティアは最大で30人程度にしているそうだ。このように鮭川村では地域の方々で湿原の自然を守っていくことを第一に考え保全活動を継続的に行っているのだと分かった。

◎地域の課題と解決策

地域の課題としては、学生でも負担の大きな作業を鮭川村では高齢の方々が中心となって行っている点が挙げられる。そのため鮭川村の湿原を守っていくにはやはり若者が環境保全活動に取り組む姿勢が求められると思う。まずは今回の私たちのように保全活動を行い、これを機に鮭川村や保全活動に対して関心を持ってもらい、何かしら地域に貢献できるようにする。そして、最終的には鮭川村の環境保全活動を後世に継承し、湿原の自然を維持していくことが重要であると思う。

医学部　Aさん

・フィールドラーニングでの感想

11月9、10日と11月16、17日の二回に分かれて鮭川村へフィールドラーニングに行った。

一回目では、一日目の午前は開講式の後、鮭川の自然についての講話を聴いた。午後は、鮭川村の村内の保全箇所をまわって見学した。夕飯後は、ミーティングなどをした。二日目は午前に環境保全体験として木道となる木を運んだり、水をせき止めるダムを作ったりした。午後はまた保全体験をし、その後展望台へ行った。

二回目では、一日目の午前に環境保全体験をした。午後は保全体験の続きをしてから、公民館へ戻って米湿原についての講話を聴き、米湿原をどのようにアピールしていくかについて話し合いを行った。夕飯後にはミーティングなどをした。二日目は午前に保全体験を行った。昼食後、大平山に登り、戻ってから話し合いと感想発表をして、閉講となった。

この4日間では、鮭川村の自然についてしっかり学ぶことができたのでよかったと思う。特にギフチョウやヒメギフチョウ、その他多くの絶滅危惧種が鮭川村にいることを学べた。また、活動の中で特に印象に残っているのは草や木の枝などで簡単なダムを造るなどして水をせき止めたことだ。少し時間がたってから見に行くと、水が溜まっており、湿原のような風景になってきたことに少し感動した。今回は班員全員が初対面だったが、一緒に活動していくうちに協力して保全活動や話し合いなどを行うことができたので、班員には感謝している。

・地域の課題

地域の課題としては、環境保全に携わる人々の高齢化が挙げられる。今回、実際に環境保全活動を体験したが、かなり体力を使うものだった。学生の自分たちでさえそうなのだから、慣れているとはいっても村のお年寄りの方々もきついだろうと思われる。鮭川村では、人口減少と高齢化が進んでいる。将来的に高齢化により環境保全活動が十分にできなくなることや携わる人が少なくなっていくことが起きてしまうことが問題となると考えた。

（資料：人口・世帯数｜鮭川村 http://www.vill.sakegawa.yamagata.jp/sakegawa/introduction/51）

・課題に対する提案、解決策

解決策としては、鮭川村に保全活動を担う次の世代として若者を呼び込むことが必要だと考える。若者を呼び込むためには、鮭川村のいいところを知ってもらうのが大事であり、そのきっかけとして興味を持ってもらえるように工夫することが必要だ。例として、きれいな植物が豊富な鮭川村においてドライフラワー作製など自然に触れる体験を作ることやおいしい食べ物などをPRすることなどで興味を持ってもらうことを提案する。

里山保全とキノコ料理

活　動　状　況

○実施市町村：戸沢村

○講　　師：NPO法人田舎体験塾つのかわの里事務局及び地元講師

○訪　問　日：令和元年 12 月 14 日(土)～15 日(日)、令和 2 年 1 月 11 日(土)～12 日(日)

○受　講　者：人文社会科学部 2 名、地域教育文化学部 1 名、理学部 1 名、医学部 2 名、
工学部 1 名、農学部 4 名　　以上 11 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】１０月２６日（土）	【１日目】１１月１６日（土）
08:00　山形大学発 10:00　戸沢村農村環境改善センター着 オリエンテーション 10:15　車両で移動(三左衛門蕎麦屋へ) 【そば打ち体験】 12:15　昼食・休憩 13:15　車両で移動(本郷真木山へ) 【雑木の伐倒】 16:00　振り返り 17:00　農家民宿へ移動	08:00　山形大学発 10:00　戸沢村農村環境改善センター着 【キノコ料理つくり】 12:20　昼食・休憩 13:40　車両で移動(本郷真木山へ) 【杉の間伐】 16:00　振り返り 17:00　農家民宿へ移動
【２日目】１０月２７日（日）	【２日目】１１月１７日（日）
09:00　戸沢村農村環境改善センター集合 09:15　車両で移動 【角川の大杉見学】 10:15　浄の滝へ出発 12:15　浄の滝到着 【散策・昼食】 13:15　浄の滝出発 14:00　駐車場到着 14:30　改善センター到着 【休憩・振り返り】 16:00　戸沢村農村環境改善センター発 18:00　山形大学着	09:00　戸沢村農村環境改善センター集合 【キノコの菌植え】 11:45　車両で移動（すっぺ家へ） 昼食・休憩 13:15　車両で移動（改善センターへ） 【木工クラフト】 【振り返り】 16:00　戸沢村農村環境改善センター発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部　Tさん

1．1回目の活動での感想や課題

1回目の戸沢村での活動では最初にそば打ちを体験した。実際にそばを作る作業の中で難しい作業がたくさんあり普段食べているそばはこのような大変な過程が経られていることがわかった。その次の雑木の伐倒ではナラの木などが、虫の媒介する病原菌が原因で倒れていきそれが原因で土砂災害が起き戸沢村に被害をもたらしていることを知った。戸沢村での少子高齢化が進む中で木を守っていくのは大変難しく、それが課題であると感じた。浄の滝付近の景色は絶景で登山の苦労が報われた気がした。浄の滝に行く途中の道では危険な部分がありそこを整備する必要があると思ったが登
山の達成感との兼ね合いもあり難しい問題だと思った。

2．2回目の活動での感想や課題

2回目の活動では最初にキノコ料理作りをした。原木なめこは普段家で食べているなめこより一回り大きく驚いた。キノコの味もとてもよくて普段では振る舞われないようなおいしいきのこ料理を食べることができた。午後のきのこの菌植えでは1回目の活動で切った木を使っての作業だった。木に穴を開けそこに菌がついている小さな木を打ち込むという作業だった。木を切る作業を含めると大変な作業だと感じた。杉の間伐では間伐をすることで太陽の光が地面に行き渡り植物が育つことにより地面の保水力が強くなり土砂災害が防げることを教えて貰った。しかし林業の衰退により間伐を行う人が減ってきており土砂災害を防ぐために間伐は重要であり課題であると思った。木工クラフトではフクロウを作った。これも普段は体験できないもので楽しかった。

3．課題の解決法や提案

間伐を行う人が減っている問題に関しては地元の人が仰っていた、自動で間伐を行う機械の導入が解決法だと感じた。機械を使うことで効率的に間伐ができ、また土砂災害も防げると思う。また、浄の滝付近の道を整備することによって一般の人がもっと親しみやすくすることも実際に登ってみて必要だと感じた。浄の滝付近の道は険しいところが多かったのでより多くの人を招くためには道を整備する必要があると思った。また木工クラフトでは使う木を自分たちが切った木を使いクラフトを行うという工程を加えるとより面白い作業になりそうだなと思った。また原木なめこを中心としたきのこをもっとアピールすることも活性化につながると思った。

人文社会科学部　0さん

今回、戸沢村の角川地区に行き里山保全とキノコ料理というプログラムテーマのもとで、戸沢村の良さや地域の抱える問題について考えることができた。

第１回目の活動では、初日に三左衛門蕎麦屋さんでのそば打ち体験と本郷真木山で雑木の伐倒を行った。２日目は角川の大杉を見学し、その後、浄の滝トレッキングを行った。

そば打ち体験では、戸沢村に近い肘折火山が噴火してできたシラス台地という地形がそば栽培に非常に適しており、香り高いそばが採れることや、角川の大杉は樹齢約1300年という非常に歴史のある樹木で、県の天然記念物でもあるといった話をお聞きして、戸沢村の魅力を感じることができた。浄の滝も険しい道のりだったが滝の美しさだけでなく周りの木々が紅葉していて景色がよく素晴らしい観光地だと感じた。

第２回目の活動では、初日にキノコ料理つくりとキノコの菌植えを行い、２日目に杉の間伐と木工クラフトを行った。

杉の間伐では、定期的に間伐を行わないと土砂崩れなどの自然災害が起こる原因となるため必要な作業ではあるものの、危険な作業であり労力がかかることや、建築でコンクリートなどが使われるようになり、杉の材木としての価値が年々下がっていることなどから現在手入れされておらず、手付かずになっているという現状を知った。

今回のフィールドラーニングで特に感じたのは杉の間伐、雑木の手入れといった里山保全に関する問題だ。杉やナラなどの雑木といったたくさんの資源があるにもかかわらず、それが使われることなく放置され、さらに自然災害にもつながるという問題はいち早く解決しないといけない問題だが、戸沢村の若者離れによる高齢化やそれに伴う労働人口の減少、材木として使うための搬出する際の林道の整備など様々な問題があり、整備のためには労働力やお金もかかることからこういった問題を解決していくのは容易なことでないと感じた。

ただ、戸沢村ある手付かずの自然に触れ合うという体

験は現代の人々にとって貴重な体験であると感じる。チェーンソーを使い行う杉の間伐などはどこでもできるものではなく林業にもっと興味を持ってもらうためにもこういった体験活動を開いていくのもよいと思う。

また、浄の滝や角川の大杉といった歴史的な名所をもっと整備していき観光地化させることで観光に来る人を広く呼び込むことや、戸沢村の魅力を広めていくことも可能なのではないかと考えた。

地域教育文化学部　0さん

今回の戸沢村でのフィールドラーニングを通して、自然豊かな戸沢村にとても魅力を感じたとともに、自然が多いからこその厳しさや資源としての活用の難しさを学んだ。

1回目の活動ではそば打ち体験、雑木の間伐、角川の大杉見学、浄の滝散策を行った。特に印象に残ったプログラムがそば打ち体験であった。そば打ちは初めてであったがお店の人が丁寧に教えてくださりとても美味しいそばを作ることができた。村民の少なさからお客さんの少なさにつながるのが悩みの種と聞いた。お店の経営のためにも、多くの人にこの貴重で楽しい体験をしていただくためにも、体験した私たちがSNSを用いて宣伝したりフィールドラーニングの場としてもっと活用したりしていくべきだと考えた。例えば、そばを打つだけではなく、収穫や製粉など、そばを1から作るといったものだ。より多くの作業を伴って自分で作るため、もっと美味しく感じるのではないかと思った。

2回目の活動ではキノコ料理作り、杉の間伐、キノコの菌植え、木工クラフトを行った。なかでも杉の間伐を通してたくさんのことを学び、林業の厳しさを知った。チェーンソーを初めて使い、切り始めるまでは楽に切れると思っていたが途中で引っかかったり姿勢の維持で体力を使ったりとかなりの肉体労働であった。苗を植えてから建築資材として利用できるようになるまで80年～100年ほどかかり、300本植えたうち80本程度しかその資材として利用されなく、あとの木はチップや紙の原料として利用されるらしい。また伐採を怠れば林床の草が育たずに土砂崩れが起こりやすくなるという。このように森林の管理は多くの労力、人手が必要だが今の戸沢村ではそれが厳しい。フィールドラーニングでは私たちができることは限られてくるが、農学部生の実習の場として活用することでそれが解決するのではないかと考えた。

2回のフィールドラーニングを通し共通して思ったのが、「たくさんの資源があるがそれを利用し維持していくための人手が足りない」というものだ。これを解決していくためにも、これまで以上に戸沢村を学びの場として、山形大学に限らず多くの学生を呼び込み、体験学習と地域開発を同時に行うことが重要なのではないかと思った。多くの若者が戸沢村を訪れその魅力に気付き村への移住にもつながると考えた。初めての経験ばかりで、自己の知見を広げる良い機会となった。

理学部　Nさん

私は今回のフィールドワークを通して、林業の重要性と現状、また、戸沢村の村おこしと課題について知ることができました。

まず、林業についてです。林業については、森の管理を怠ると、表面からは分からなくても内側が枯れていることや、木のふもとに日の光が行き届かず植生が発達しないため土壌が侵食されやすくなり、結果として土砂崩れが発生しやすくなるということが分かりました。林業衰退の原因として、労働に見合わない収入や、鉄筋コンクリート造りの建物の普及による用材として使われる木材の減少や、木炭や薪といった薪炭材が利用されなくなってきていることによる需要の減少などが挙げられるそうです。また、戸沢村では、資源が豊富にあっても搬入路がないことや、労働力が必要な林業が林業就業者の高齢化により若い労働力が不足しているため、林業を推進していくのは難しいのが現状です。そのため、今回の「共生の森もがみ」のような学生が現地でフィールドワークを行うプログラムを増やしていくことで、森の管理が行き届かないということが少なくなり、土砂崩れのような自然災害防止につながり、また、若い労働力不足の改善につながるのではないかと思いました。

次に、戸沢村の村おこしについてです。戸沢村では、かつて４つあった保育園・小学校・中学校がそれぞれ１つになってしまったそうです。しかしながら、廃校をリニューアルしてカフェとして再利用しています。カフェでは地元の食材を使っていて大変おいしく、廃校の小学校をカフェとして再利用するという発想は、僕にとってユニークであり、小学生に戻ったかのような懐かしい感じがしました。地元の食材を使ったカフェというのは、地産地消を促し、また、食材の運送のコストを抑えることができ、新鮮なものを食べることができるのでたいへん面白いアイデアだと思います。さらに、カフェということもあり、人を集めることができるので村おこしには

うってつけのものだと思います。

私は、今回の「共生の森もがみ」というプログラムに参加して、初めて戸沢村という場所を知りました。プログラムを通して、戸沢村の村おこしにはこのようなプログラムを増やして、まず、戸沢村のことをもっと知ってもらうということが必要だと感じました。そのためにも、小・中学校の方にも声をかけてみることや、キノコの原木をとるところから収穫までを一連のプログラムにすることによって何度も足を運んでもらえるプログラムを作ることで、戸沢村の村おこしにつなげることができるのではないかと思いました。

医学部　Sさん

私は、戸沢村に行ってみて山形の田舎を初めて見ました。戸沢村では、人口の減少などにより地域の活力が失われてしまっていると強く感じました。しかしながら、多くの自然があり、県外出身の私にとってはとても興味深い観光資源がたくさんありました。1回目の活動で強く印象に残ったのは浄の滝の見学です。紅葉のきれいな時期でもあったため、景色がとてもきれいでした。道中は整備されていないため、とても危険に感じましたが、そのような登山をしたいと考えている観光客の人も多くいると思ったので今の状況のままでも知名度が上がれば、観光客が増えるのではないかと思いました。最上川の川下りは全国的に見ても有数の紅葉を見られる観光地として知っている人も多いので、川下りと一緒に訪れてくれる人を増やせるようにしたら良いと思います。浄の滝の魅力を広めるためにも、パンフレット等で使用されている写真の画質を高めるだけでも、多くの人の関心を集められると思います。また、きれいな写真を撮れるスポットとの認識が高まればSNS等で広まり、たくさんの人たちに戸沢村を知ってもらえるのではないかと思いました。

また、二回の活動を通して感じた戸沢村の良さは、都会の人がイメージするとおりの田舎が残っており、それを体験することができると言うことです。民泊に宿泊してみて、民泊の人の温かさがすごく居心地よく、おばあちゃんの家に来たかのような安らぎとわくわく感を感じることができました。私の実家は、二世帯だったため、田舎の祖父母の家に遊びに行くことが無く、とても憧れを抱いていました。そのため、民泊の温かさから、戸沢村を自分の第二のふるさとのように感じられました。私のように、田舎の祖父母がいないひとは戸沢村でできる体験に憧れを抱いているのでないかと思います。そこで、おばあちゃんの家に遊びに行こうといったような観光スタイルも良いのではないかと思いました。その活動の中で、木工クラフトであったり、間伐や農作業の手伝いをするのも楽しそうだと思います。おばあちゃんの家に遊びに行くという感覚にすることで、観光客が何度も足を運びたくなり、リピーターが出てきてくれるのではないかと思います。

里山保全については、とても難しい課題だと思いました。実際に体験してみて、とても大変な仕事でした。しかしながら、労働に見合う収入をえることはできないという現実もあり、林業が衰退している現実もうなずけるなとおもいました。間伐等をしなければ土砂災害等も発生してしまうため、放置することはできないが、やる人もいないというのは戸沢村だけではなく全国の地方地域が抱える大きな問題なのだと感じました。これを改善するには、林業をすることのメリットを増やすことが最善だとおもいますが、なかなか難しいように思います。観光業の一環として間伐を行うことが少しでもの改善につながるのではないかと思いました。

医学部　Yさん

1. 活動内容

一回目の活動ではそば打ち体験、雑木の伐倒、角川の大杉の見学、浄の滝の見学をした。二回目の活動ではキノコ料理作り、廃校となった中学校を利用したすっぺ家というカフェでの昼食、キノコの菌植え、木工クラフトをした。

2. 活動を通しての感想

そば打ち体験やキノコ料理作りでは、戸沢村で有名な食材を使うことで戸沢村についての知識を得るとともに、なかなか出来ない経験ができて楽しかったので、もっとたくさんの人にも体験してもらいたいと思った。雑木の伐倒では、伐倒せずに木を放置しておくと土砂災害につながったり、十分に木に栄養が行き渡らなくなったりしてしまうということを学んだ。今まで木を切ることはあまり良くないことだと思っていたけれど、適度に木を切ることが人と自然が共生していくことや、効率よく林業を行うことに必要だと分かった。実際に木を切るのを見たり、木を切ってみたりして、人手がいないと大変な作業だと思った。林業のための機械は発達してきているが、戸沢村の住民は多くが高齢者であり木を切る人が不足しているので、資源はあるがそれを使う人がいないという宝の持ち腐れ状態であるということを学んだ。角川の

大杉、浄の滝の見学ではとてもきれいな景色だったし、天然記念物や保全の対象となっているものもあると聞いてこのような自然物を壊してはいけないと思った。また、浄の滝では景色はとてもきれいだったが行くまでの道で危険な場所が多くあって少し怖かったのでもう少し整備すれば観光客がもっと増えるのではないかと思った。すっぺ家は廃校になった中学校を再利用することで場所を有効活用できるし、地元でとれた食材を使った料理を使った料理を食べてもらうことでその土地についても知ってもらえるのでとても良いアイデアだと思った。一回目の活動で切った木を利用して二回目の活動のキノコの菌植えや木工クラフトを行って実際に木がどのように使われているのか知ることが出来た。

3．課題とその解決法

今回のフィールドワークを通して林業の衰退、道の整備などたくさんの課題が見えてきたが、その根本にあるのは戸沢村での少子高齢化や経済的な問題であると考えた。若い人に来てもらうためには様々な施設を作り利便性を高める必要があると思うけれど、それにもお金が必要なのでまずは経済的な問題を解決するために何かしなければならないと思った。具体的には戸沢村で出来た食材を戸沢村以外のところで売って食べてもらったり、観光資源を活かした様々なツアーや体験などをSNSなどで宣伝して観光業を発展させたりすれば良いと思った。また、私は民泊での宿泊もとても良いと思ったのでそれも宣伝したらいいのではないかと思った。

工学部　Tさん

今回の2回のフィールドワークを通して、戸沢村には自然がたくさんあるがその自然を保持することはとても大変なことだということが分かりました。

まず第一回目のフィールドワークでは、そば打ち体験、雑木の伐倒、パワースポット巡りをやりました。そば打ち体験では、そばを作ることはとても難しくたくさんの手間がかかり、訓練が必要なことが分かりました。また自分たちで作ったそばは、歯ごたえがしっかりしていて太さもまばらで、それがとてもおいしかったです。次に雑木の伐倒をやってみてとても大変な作業だということが分かりました。また里山が保全されているのは、このような作業をしてくれている方々がいるからだということが分かりました。最後のパワースポット巡りの前に大杉を見ました。樹齢1300年以上らしくとても大きく立派でした。最後に浄の滝というパワースポットへいきました。ここへは山を登って行きました。たどり着くまでの道のりはとても大変だったけれどたどり着いた時の達成感は素晴らしいものでした。歩く道があまり補整されていなかったため、観光客を増やすにはもう少し歩きやすい道にする必要があるのではないかと思った。

2回目のフィールドワークでは、キノコ料理、キノコの菌植え、杉の間伐、木工クラフトをやりました。キノコ料理は、てんぷらなど油っこいものが多かったけれどそういうときは大根おろしを食べるといいことがわかりました。大根おろしは消化を助けるので胃もたれを防ぐらしく、戸沢村ではいつも大根おろしが出てくるそうです。また、キノコの菌植えをやってみてとても手間がかかることがわかりました。そして自分たちで山に行き木を伐り菌を植えてと、すべて自分たちでやるのはとても大変だと思いました。杉の間伐では、山に行き杉を伐りました。私たちはチェーンソーで伐るのを見たが、まだチェーンソーがない時代は、のこぎりで杉を伐っていたと聞いてとてもびっくりしました。木を伐採してくれる人がいなければ自然災害につながるので、林業をやっている人には感謝しなければいけないと思いました。木工クラフト作りでは自分たちで伐った木を使うことができるので、より自然と親しめる良い機会だと思いました。

今回のフィールドワークを通して戸沢村をより深く知ることができました。今現在林業は衰退しているため、都会の人を中心に私たちが今回体験したことをツアーにして行い林業を通して里山保全の大切さやを知ってもらい、戸沢村の食べ物を食べることでもっと戸沢村に関心を持ってもらえればいいと思いました。

農学部　Kさん

今回のフィールドラーニング授業で私は戸沢村が独自の魅力を持ち、いくつかの課題を抱えていることが分かった。

一回目の活動ではまずそば打ち体験を行った。私が捏ねた生地は少し水っぽくなってしまい、また完成したそばも麺がきちんと切れていないものがあったりもしたが、自分たちで作ったこともあってとてもおいしくいただくことができた。樹木の伐倒ではナラの木にはなめこやしいたけ、サクラの木にはなめこ、といったように樹種によってしたキノコがあることを学んだ。ナラの木は人間が適切に伐採しないと木の中で発生する虫の影響で脆くなり、土砂災害が深刻化する原因になるという。二日目の浄の滝への道のりはとても険しく、雨の降った

翌日なので地面がぬかるんでいる場所もあり滑りそうになったことも何度かあったが、たどり着いた浄の滝はとても迫力があり大きな達成感を得られた。危険な道の整備をして安全にみられるようにしてほしいとも考えたが、大規模な整備にはコストもかかり、景観や達成感が損なわれることを考えると大規模な整備を行うことが正しいともいえないのではないかと考えた。

二回目の活動ではキノコ料理作りから行った。原木なめこは市販のなめこよりも二回りほど大きく肉厚でとてもおいしかった。揚げ物など一人暮らしではなかなか作れない料理を含めた多彩なキノコ料理を堪能することができた。次にキノコの菌植えを行った。１回目の活動で切った木に専用のドリルで穴をあけてしいたけの菌を大量に含んだコルク栓のような木を打ち込むといった作業だった。トンカチで打ち込む作業は力もあまり必要でなく、リズミカルで楽しいものだったので女性や子供でも楽しめるレジャー体験として提供できるのではないかと考えた。杉の間伐では間伐によって地表に光を届かせることで土砂崩れが起きにくくなると聞き、林業の木材生産といった産業以外の重要な役割を知ることができた。また最初は１０aに３００本植えた杉の木が間伐を繰り返すことで木材として伐採する１００年後には８０本程までになると聞き、林業がとても労力がかかり低収入では続けられない仕事だと理解すると同時に、１００年も成長に時間がかかるため自分で植えた木が自分では伐採することができないため、個人の事業では決して成り立たない地域で維持していかなくてはならない仕事なのだと考えた。木工クラフトでは自然の素材だけでかわいらしいフクロウを作るという活動で、木を切るのに思っていたよりも力が必要なので大人がサポートして子供たちにこのサービスを提供できないかと考えた。

私は二回のフィールドラーニングを通して戸沢村の様々な魅力と課題に気づくことができた。林業の衰退は低賃金や人口減少により担い手不足が大きな課題であり、浄の滝への道の大規模な整備は村の資金不足の面からも難しい。これらの課題を解決するためには戸沢村の人口を増やすことが一番であると考えた。戸沢村のことを周知させるために、今回見ることができた浄の滝や角川の大杉の他にも白糸の滝などの豊富な観光資源と今回体験できたそば打ち、キノコの菌植えや木工クラフトを体験レジャーとしてより活発にピーアールすることで観光産業を活性化し、戸沢村の魅力に惹かれた人が移住を検討してくれるといった形で課題の解決ができるのではないかと考える。

農学部　Sさん

このフィールドラーニング授業では、戸沢村角川地区での体験学習を通じて、戸沢村の持つ沢山の魅力と様々な問題を知ることが出来た。

一度目の訪問では「そば打ち」「楢の間伐」「角川の大杉見学」「浄の滝トレッキング」をした。

この中では、浄の滝トレッキングが特に印象に残った。浄の滝はとても風光明媚な場所で、観光地として人をもっと呼び込める場所であると思ったが、駐車場のある場所から滝までの道のりが徒歩でしかいけないうえにかなり道が悪いことや、山の麓から滝に最も近い駐車場までの道路が豪雨などによる土砂災害で年に何度も通れなくなってしまうといった問題があった。予算も限られているため大規模な開発は難しいだろうということが勿体なく感じたが、皆で簡易の橋を渡ったり、紐で支えたりと協力し、苦労して目的地にたどり着くといった体験ができるといった良さもあると思った。

二度目の訪問では「キノコ料理」「キノコの菌植え」「杉の間伐」「廃校となった校舎を利用した、カフェすっぺ屋訪問」「木工クラフト」を行った。

二度目の訪問で特に印象に残ったことは杉の間伐だった。戸沢村には、かつて植林された多くの人工林があり、そのほとんどがコスト高のため経済価値を失い放置されているということを知った。

放置された人工林は、自然林とは違い木々が密集しているため一本一本の木が貧弱で病気が蔓延しやすいため経済的価値は殆どなく、さらに土砂災害の原因ともなる。事実、戸沢村では昨年、放置林が原因の大規模な土砂災害が発生してしまった。災害を防ぐために定期的に間伐を行う互助会のような仕組みを作らなければこの問題は解決できないのではないかと思った。

二度のフィールドワークを通して多くの戸沢村の特色を知ることが出来たとともに、課題も見えてきた。様々な課題の根幹を成すものに、村の資金不足や、人口の減少や、少子高齢化があげられる。村にとって最善なのは入村者を増やすことだが、日本全体で人口減少と少子高齢化が急速に進んでいる現在、それは難しいと思われる。そのため、村のいくつかの課題を解決するための現実的な案は、観光客を増やして村の経済を活発にすることだ。戸沢村には、ソバやキノコや山菜などなど多くの特産品があり、また浄の滝や角川の大杉や幻想の森といった綺麗な観光スポットがある。これらを、魅力的なキャッチフレーズを付けてSNSなどを利用し、国内外にＰＲできたらいいと思う。

農学部　Kさん

今回参加したフィールドラーニングの授業では、最上地方の戸沢村での様々な体験学習を通して、初めて知った戸沢村の多くの素晴らしい魅力といくつかの問題を知り、考える機会になった。

一回目の訪問で私たちは「そば打ち体験」「雑木の伐倒」「角川の大杉見学」「浄の滝見学」をした。二回目の訪問では、「キノコ料理作り」「廃校を利用したカフェ訪問」「キノコの菌植え」「杉の間伐」「木工クラフト」をした。

「そば打ち体験」「キノコ料理作り」では、私はなぜそば打ちやキノコ料理をするのかと疑問を持っていたがそばとキノコが戸沢村の有名な食材だと知り、この地元でとれる食材を使用する体験することで戸沢村を知る機会になり、食を通した体験でとても楽しかった。「雑木の伐倒」「杉の間伐」では、伐倒や間伐をなぜ行う必要があるのかよく分からず、木を切ることはよくないことだと思っていた。しかし、人が手を加えずにそのまま放置しておくことは土砂崩れなどの自然災害の原因になってしまったり、木が密集することで太陽の光が当たらなかったり栄養が良く行き渡らなかったりと木にとっても、私たちにとっても良くないことが多いことを学んだ。実際に木を切ったり、戸沢村の人たちが作業を行っているのを見学して、林業が力が必要な重労働であり人手が必要だと感じた。機械を使用するにも動かすことができる人材や多くの費用がかかる。戸沢村には多くの資源があるがそれを利用することができていない、利用するための人手が足りていないと感じた。また、「角川の大杉」「浄の滝」の見学では戸沢村の素晴らしい豊かな自然を感じる事が出来た。この素晴らしい自然を感じる体験を観光地として多くの人に知ってほしいと感じた。そのためには、
角川の大杉、浄の滝までの道のりの整備が必要だと感じた。滝までの道のりはかなり足場が悪く、豪雨被害により通れなくなっている道などがあり、高齢者や小さな子供にとっては危険な道が多いと感じた。しかし、整備には多くの費用がかかるため難しい問題である。だから、今はこの道を活かし、普段体験することの出来ない自然の中を人と協力しながら歩くことなどを売りにし、観光地化することから始めることを提案したい。「廃校を利用したカフェ」のすっぺ家は戸沢村で採れた地元野菜を使った、料理を提供するカフェだ。また、廃校になった中学校を再利用することで場所を有効活用していてとても良いアイデアだと感じた。「キノコの菌植え」「木工クラフト」は木材の活用がこのような形でもできることを知った。このような体験はなかなかできない体験であるからこそ、もっと多くの人に知ってもらい体験をし、戸沢村を知るきっかけになるのではないかと感じた。
今回のフィールドワークを通して戸沢村の問題は経済的問題と高齢化があると感じた。いかに費用をかけずに若い人にも戸沢村を知ってもらうには、SNSなどで戸沢村を発信していくことで観光地化していくことにつながると考えた。また、今回戸沢村を訪問してとても感じたことが戸沢村の人の温かさだ。人々の温かさ、人と人のつながりを感じる事が出来る体験ができることを一番のアピールポイントとすることが良いと考える。

農学部　Sさん

今回のフィールドラーニングで、２回にわたって訪問した戸沢村で今まで知らなった多くのことを発見し、学び、知ることができた。まず１回目の訪問で行ったそば打ち体験では初めてのそば打ち経験をすることができた。私の出身は長野県で、地元でもそばは有名だったが今まで一度もそば打ちをしたことがなかったので今回こうした機会をいただくことができてとてもよかった。職人さんは滑らかな手つきで行っていたがいざ自分がやってみるととても難しくて、長年の経験をもとに磨き上げられた職人の技術のレベルの高さを知ることができた。私の地元では、信州そばを全国にも宣伝することができていて、知名度が高く、そば目的で観光に訪れる人がたくさんいたが、それに対して最上地域のそばは知名度が低いと感じた。最上地域全体で作り方が統一されているという特徴を持つそばを広い地域の方に知ってもらい、観光地化すればもっと戸沢村だけでなく最上地域全体の繁栄につながるのではないかと考えた。角川の大杉の見学では、1300年という長い時の間立っている大きな過ぎに迫力を感じた。幹がとても太くてこの幹のまわりを囲うには大人でも3人以上は必要なほどだった。江戸時代は、3万人以上の人がこの場所に参拝に来ていたそうで、とても古くからの歴史を持っているこの角川の大杉を守っていかなければならないと強く感じた。2回目の訪問では、民泊でお世話になったおうちの方がお手伝いに来てくださって、たくさんのお料理の豆知識や伝統野菜のお話を聞かせてもらいながら一緒にお料理をした。大きななめこの原木を味噌汁にしていただくことができてよかった。とても大きくて食べ応えがあり、本当においしかった。このような貴重な資源を持っている戸沢村は、おそらく何かのきっかけさえあればもっと繁栄とできると感じた。村の方々自身も「この村は今宝の持ち腐れである」とおっしゃっていた。杉の間伐では、人が伐採することによって隙間を作り、自然災害を守っているということを知った。上のほうが折れてしまっている木や、アカマツの木などを伐採することによってほかの元気な杉が成長しやすく、効率の良い森づくりが行えていると感じた。戸沢村には、廃校になった建物を利用したおしゃれなカフェや、木工クラフトなどによる木材の利用の工夫など、村の繁栄のための活動をたくさん行って頑張っているので、TVなどで取材してもらったりして知名度を高くし、他の人にも戸沢村を知ってもらいたい。

創作太鼓と冬の里山ぐらし体験

活　動　状　況

○実施市町村：戸沢村

○講　　師：NPO法人田舎体験塾つのかわの里事務局及び地元講師

○訪　問　日：令和元年 12 月 14 日(土)～15 日(日)、令和 2 年 1 月 11 日(土)～12 日(日)

○受　講　者：短期留学生 1 名、人文社会科学部 1 名、地域教育文化学部 6 名、
理学部 1 名、医学部 1 名、　以上 11 名

○スケジュール：

１回目	２回目
【１日目】１２月１４日（土）	【１日目】１月１１日（土）
08:00　山形大学発 10:00　戸沢村農村環境改善センター着 オリエンテーション 10:15　車両で移動（三左衛門蕎麦屋へ） 【そば打ち体験】 12:15 【昼食・休憩】 13:30　車両で移動（改善センターへ） 【雪かき・かんじきトレッキング】 【角川雪回廊物語展示絵灯籠作成企画】 16:00　【振り返り】 17:00　農家民宿へ移動	08:00　山形大学発 10:00　戸沢村農村環境改善センター着 【角川雪回廊物語展示絵灯籠作成】 12:00 【昼食・餅つき・休憩】 13:30 【角川雪回廊物語展示絵灯籠作成】 16:00　【振り返り】 17:00　農家民宿へ移動
【２日目】１２月１５日（日）	【２日目】１月１２日（日）
09:00　旧角川小学校集合 【角川太鼓の活動紹介】 【太鼓基礎練習】 12:00　昼食 13:15 【太鼓曲練習】 【振り返り】 16:00　旧角川中学校出発 18:00　山形大学着	09:00　旧角川小学校集合 【太鼓曲練習】 12:00　昼食 13:15 【太鼓曲練習】 【太鼓曲発表・修了書交付】 【振り返り】 16:00　旧角川中学校出発 18:00　山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

短期留学生　Rさん

私は、今回のフィールドラーニングで計四日間にわたって戸沢村を訪れ、最上川の様々なところを地元の方々の目線で認識することができたと思う。昔、観光客として日本に来たときは親しみがなく、よくわからなかったが、多くの人と関わりながら、実際に山形の地域の自然と文化に触れ、日本のことをより深く知りたいと思い、この授業を受講した。地元で行われるフィールドワークを通して、今まで知らなった多くのことを発見し、想像以上のものを得られた。

まず、一度目の訪問で参加したそば打ち体験では初めてのそば打ちを経験をすることができた。日本ならではのそばを打つ機会をいただくことができてとても楽しかった。そばの指導を受けて、亀裂のないような生地に作ることから麺を切ることまで学び、実際に自分がやってみるとそばの太さが全然均一にできないし、時間がかかってしまった。そば職人の技術の高さや難しさを切実に感じ、こうやってそばが出来てるのかと思うと、これからそばを食べるときもさらに味わい深くなるように思う。

次に、一度目や二度目の訪問にわたって体験させていただいた角川太鼓は、太鼓の創造と普及だけでなく、伝承を通して地域の大人と子どもとの世代間交流ができる機会を設ける団体である。今回の太鼓体験を通して、小学生から大人まで幅広い年齢層のメンバーと交流することができて良かったと思う。そして、休憩のお茶やおやつ、昼食も地元の方々に準備していただき、活動をスムーズに進めるためのサポートをしている姿を見て、住民同士の絆の強さと人間的な温かさが特に印象に残った。太鼓のメンバーのご指導のおかけで、最終的に本番の演奏は学生同士が一丸となってうまく演奏できて本当に楽しめた。日本の伝統芸能を実際に体験し、日本の文化はすごいなと感じて、こんな素晴らしい伝統をもっと多くの人に知ってほしいと思った。

そして、角川雪回廊物語というイベントにおいて展示する絵灯籠を作成した。このイベントは戸沢村角川地区の冬の名物となりつつある。今年の2月に開催される角川雪回廊物語は第6回目だが、今年は記録的な雪不足により、雪の壁を利用する雪回廊を作ることができなくなった。雪を運ぶと費用などもかかるし、場所を変更するのも結構大変なので、今年のイベントが中止になる可能性もあるという。雪目的で観光に訪れる人がたくさんいたが、気候変動の影響を受けやすい雪のイベント以外、観光客の興味を引けるような戸沢村の魅力をもっと発信していかなければならないと感じた。

また、初めての農家民宿で田中さんご夫妻にとても優しく接していただき、みんなで食卓を囲み、心温まる会話をしながら食事をしたのが、留学生の私にとって忘れられない思い出になった。今回のフィールドラーニングをきっかけに地元と同じくらい山形を好きになれたと感じた。同時に、更に日本の地域づくりに関心を持ち、この国と人の美しさを広い地域の方に知ってもらえればと思った。

人文社会科学部　Mさん

私は、4日間のフィールドラーニングを通して角川太鼓や里山暮らしを体験した。その中で戸沢村の方々と交流し、この地域の魅力を知ることができ、また通常の講義や大学生活では得ることができない様々な貴重な体験をすることができた。

まず一つ目の体験は、角川太鼓体験だ。このプログラムの中心であり一回目と二回目の二日目の二日間練習を行った。「角川太鼓を育てる会」の方々の指導の下、「またぎ太鼓」という曲の演奏全員で練習を行った。太鼓の経験がある人は少数で私もほとんど経験が無く、最初は本当に演奏を完成させることができるのか心配であった。しかし育てる会の方々に基礎から何度も丁寧に指導していただき、最後の発表会では学生だけでの演奏を成功させることができた。この活動を通して二日間だけではあったが一曲を全員でつくりあげる難しさを実感した。曲の始まりなどのタイミングを合わせることや細かいフォームなど意識しなければならないことが多く太鼓演奏を完成させる大変さを実感した。それと同時に全員で練習に取り組むことにはとても充実感があり、最後の発表会では全員で演奏を完成させることができ達成感を得ることができた。

二つ目の活動は２月に開催される角川雪回廊物語で展示する絵灯籠の作成だ。絵の下書き、木の枠も木材を切ることから作成し全員で協力して完成させることができた。私は今回初めて戸沢村を訪れこのイベントを知り、この地域では雪をただの厄介なものとしだけではなくこのように雪を活用していることを知った。また雪回廊の写真などを見てとても幻想的で綺麗でとても素晴

らしいイベントだと思い、少しだけだが携わることができ実際に見に行きたいと思った。

三つ目の活動はかんじきトレッキングだ。まずかんじき自体を見たことがなかったため履くだけでも難しかった。うまく歩くことも難しく、何度も沈んでしまったり、かんじきが外れてしまった。しかし、かんじきを履いた方が長靴よりも沈まなかったためかんじきは豪雪地帯の人にとって必要なものだというが実感できた。

他にもそば打ちや餅つきなど様々な体験を行なった。どの活動の時も戸沢村の方々は温かく接していただきたくさん交流することができた。その中で戸沢村の魅力だけではなく課題を知ることもできた。私たちにできることは少ないが今後も戸沢村の方々との交流を続けていきたいと思った。この4日間の貴重な体験させていただいた戸沢村の方々への感謝の気持ちを忘れずにここで得た経験を大学生活で活かしていきたい。

地域教育文化学部　Kさん

私は、計4日間の活動を通して最上地区の方々の温かさと、大学生活では体験できない冬の暮らしを体験させていただいた。その中でも印象に残った三つの活動について記述する。

まず、一回目の体験の一日目にそば打ち体験をさせていただいた。まだ、班の仲間との間にも緊張がある中、二八そば作りに挑戦させていただいた。粉を混ぜ合わせていく工程、一つの塊にしていく工程、練っていき、薄くのばしていく工程、麺にする工程、どれも職人の方がやっている姿を見ると簡単にこなせるように思うが、実際にやってみると一つもうまくいかず、職人の方の技術の高さを実感した。一つ一つ丁寧にやさしく教えてくださる姿勢にとても感動した。出来上がったそばは大変美味しく、再び戸沢村を訪れた際にはまた食べに行きたいと思った。ほとんどがそば打ち初体験であった私たちに対して、一から十まで教えてくださり、おいしく完成させてくださってすごくいい思い出になった。

次に、二回目の体験の一日目にかんじきトレッキングをさせていただいた。かんじきを履くことはおろか、実際に見たことすらなく、かんじきを履く時点で多くの班員がてこずっていた。いざ雪山に入っていっても、すぐにつまずいてしまったり、雪に深く足がはまってしまったりとうまく進めない中、引率の地元の方はすたすたと進んでいかれる様子を見て、雪国に住んでいる方との違いを感じた。また、かんじきが外れてしまい、長靴のまま一歩踏み出してみると、足がより深くまで沈んでしまい、雪深いところではかんじきは必須アイテムなのだと知った。

そして、一回目二回目ともに二日目は、角川太鼓の演奏に参加させていただいた。この活動では、太鼓の演奏はもちろんのこと、角川太鼓の皆さんの人柄の温かさがとても印象に残った。太鼓の演奏を指導してくださったのは、私たちより年下のメンバーばかりだったのだが、誰一人人見知りせずにたくさん話しかけてくれ、すぐに打ち解けることができた。また、大人の皆さんも休憩時間などにたくさん話をしてくださり、角川太鼓の魅力や戸沢村の魅力をたくさん聞くことができた。仲が深まったからこそ、戸沢村が抱える課題などまで真剣に話すことができたし、活動が終わってからも雪回廊祭りに向けて戸沢村との交流が続いているのだと思い、とてもいい経験になった。

今回の活動でかかわってくださったすべての方は、戸沢村への愛を持っていて、それを私たちにたくさん伝えてくださった。そのおかげで、私たちも戸沢村のことが大好きになったし、多くの魅力を知れたので、これで終わるのではなく今後も戸沢村との交流を続けていき、発展に貢献していきたいと思った。

地域教育文化学部　Kさん

私は、四日間のフィールドワークで戸沢村の伝統的な活動を数多く体験し、その活動を通して地域の方々と触れ合うことができた。その活動の中でも特に印象に残っているものが三つある。

一つ目は、そば打ち体験だ。三左衛門そばという蕎麦屋さんでそば打ちの体験をさせていただいた。そば粉に小麦粉や水を混ぜ塊にしていく作業では、その日の湿度や手の温度によって分量を調節する必要があることを教わった。さらに、一つの塊となったものをこねる作業の時には、空気を抜きつつ手のひら全体を使って押すとまとまりやすいというアドバイスをいただいた。そば打ちを初めて行った私は、塊にする際に亀裂が入ってしまったり、ばらばらになってしまったりと苦戦したが、教えてくださった方法で取り組んでみると少しずつ形にすることができた。この活動で職人の方の技術の高さを実感することができた。

二つ目は、絵灯篭作り体験だ。今回は旧角川中学校で開催される角川雪回廊物語というお祭りに展示される作品を作った。このお祭りは、雪が多く降るということをマイナスではなくプラスに捉え活用しているものであることを知り、地域の特徴を理解し生かした取り組みであると感じた。製作活動では班のメンバーで分担し、第一回・第二回の活動で計4点の作品と作品を展示するための木枠を完成させることができた。地域の方々が大切にしている伝統的なお祭りに作品作りという形でかかわることができ、光栄に思った。

三つ目は、角川太鼓体験だ。角川地域の伝統芸能である角川太鼓の演目の一つ「またぎ」を実際に教えてもらい演奏した。角川太鼓のメンバーは、地元の小学生から社会人で構成されており、幅広い年代の人に愛されていることや皆さんの情熱を感じた。実際に体験してみると、全員で一つの曲を完成させることの難しさや大変さを感じたが、その感情以上に班全員で息を合わせ演奏す

ることの楽しさや達成感を味わうことができ、貴重な体験となった。また、角川の方々の優しさに直接触れることができ、温かい気持ちになった。

この活動で私は戸沢村の様々な伝統芸能を体験し、地域の方々の優しさに触れ、たくさんの戸沢村の魅力を知ることができた。この経験から、戸沢村の魅力をより多くの地域の人に知ってもらえるように伝えていくことが重要だと感じた。戸沢村の伝統やおいしい食べ物を広めていくことで、村への関心が高まり、直接村に訪れる人を少しでも増やすことができるのではないかと考えたからだ。戸沢村の伝統が今後も受け継がれていくように、魅力を広めるという形で少しでも貢献していきたいと思う。

地域教育文化学部　Sさん

私はこの授業をうけるにあたって、山形のいいところを見つけ、山形のことを深く知るいい機会だと思った。そしてこの授業を受けてみて、山形のいいところをたくさん見つける事ができ、山形がとても好きになった。私がいままで経験したことがなかったことを経験すると同時に、人の温かさを感じることができた。

このフィールドラーニングでは、そば打ち体験、雪回廊の絵灯篭づくり、かんじきトレッキング、餅つき・だんご木かざり、角川太鼓を行った。どれもはじめて経験することだったので、経験することができてよかった。その中でも、一番印象的だった活動は、角川太鼓である。角川太鼓のみなさんの演奏をはじめて聞いたときは圧倒され、自分達にできるのかとても不安だった。実際にやってみると、リズムのとり方やアクセントのつけ方など難しかったけれど、最後には山大生だけで演奏し、曲を完成することができたのでよかったし、達成感を味わう事ができた。またこの活動では、角川太鼓のみなさんと交流ができた。小さい子から大人までの方々が私達に優しく接してくださって、人の温かさを感じた。この温かさは、戸沢村の一つの魅力であると思った。

私が今回実際に戸沢村に行ってみて課題だと思ったことは、戸沢村の認知度です。山形県の人でも知ってる人は少ないのではないかと思った。なので、私が実際に感じたいいところをたくさんの人に知ってもらいたいと思う。その解決策として私達にできることは、まず山形大学のみなさんに伝えて、知ってもらうことだと思う。そのためには、角川太鼓のみなさんに学祭で演奏していただいたり、絵灯篭の絵付け体験をしてもらって戸沢村のことを知ってもらう機会にできればいいと考える。このように、知ってもらう機会を増やしていければ地域の活性化につながると思う。

このフィールドラーニングでの活動で、戸沢村の多くの魅力を感じた。地域の方々が言っていたように、この感じた事をまだ知らない人に伝えることで、少しずつだが地域の活性化につながると思う。私はこれからも、この地域のイベントに参加したりして関わっていきたい。

地域教育文化学部　Sさん

わたしは山形大学に来たからには山形について深く知りたいと思いこの授業を受講した。戸沢村については何の知識もなかった。しかし、事前学習で調べてみると様々な魅力がある地域だとわかり、行くのが楽しみになった。実際にいろいろな体験をし、地域の方々と触れ合う中で、たくさん戸沢村の魅力を知ることができ、人々の温かさを実感することができた。

どの活動も有意義なものであり、たくさんのことを学ぶことができた。その中でも特に印象的だった体験はやはり計２日間に渡り練習した角川太鼓と絵灯篭づくりである。角川太鼓の体験では、太鼓を叩き続けることがどれほど大変で体力が必要かとてもよくわかった。大人だけでなく、小学校低学年の子どもたちも自分の背丈と同じような大きな太鼓を叩いている姿を見て少し驚いた。最初はたった２日の練習で１曲を完成させることができるのか不安だったが、丁寧に教えていただき、できないところは何度も何度も繰り返し見本を見せていただき、最終的には形になったのでとても達成感を感じた。仲間と協力してひとつのことを成し遂げるすばらしさをあらためて感じることができた。角川太鼓の阿部さんから子どもたちには太鼓を通して縦や横の繋がりを学んでもらいたいというお話があり、社会性を学ぶ場として大切な役割を果たしているということがわかった。絵灯篭づくりでは、原画を紙に写す作業、色をつける作業を行った。1枚の絵灯篭を完成させるのに何時間もかかり、想像していた以上に大変だった。しかし、完成した絵灯篭を見て、イベント当日に会場に展示されるのを見ることがとても楽しみになった。戸沢村は多くの雪が降るが、雪回廊物語はその雪を生かしたすばらしいイベントだと思った。

実際に戸沢村に行くことによって良い面や魅力的な面だけでなく、課題も多く存在することがわかった。民宿先の方がこの辺りの地域には大学生までの子どもが１人もいない、高齢者ばかりだとおっしゃっていて、少子

高齢化が大きな課題であると感じた。また、角川雪回廊物語や角川太鼓など、すばらしいイベントや伝統があるにも関わらず、それを知っている人が少ないという戸沢村自体の認知度が低いことも課題である。これらの課題をどのように解決していくのか、わたしたちにできることは何かを体験して感じたことを基にしっかりと考えることが大切だと思った。
戸沢村の魅力を知り、また、地域の方々の温かさを感じ，この村に貢献できるような活動がしたいと思った。わたしたちにできることは小さなことかもしれないが、イベントのお手伝いをしたり、戸沢村の魅力を多くの人に伝えたりしてこれからも交流を続けていきたい。

地域教育文化学部　Gさん

私は、この最上フィールドラーニングで初めて戸沢村を訪れた。生まれてからずっと山形県に住んでいながら、最上地方のことをよく知らなかった私は、この最上フィールドラーニングを通して戸沢村を訪れ、様々な良いところや、課題を見つけることができた。２回に分けて活動した計４日間で私が感じたことを記述する。

私の中で、戸沢村といえば積雪が多いというイメージだった。山形県内ニュースでも取り上げられるのはもちろんのこと、全国ニュースにもなっているのを何年か前に観たことがあった。雪は冷たい。冬は寒い。私はそのイメージが強くあまり雪の降る冬が好きではない。そのため、１回目のフィールドラーニングに向かう際、想像を超える積雪なのではないかと思い、足取りが重かった。しかし、実際に戸沢村に訪れ、雪への考え方が変わった。それは、積雪が多いことをどうにかいい方向に進めることができないか、と考えた戸沢村の方々の話を伺ったからだ。そして私は、戸沢村の冬のイベント「雪回廊物語」を知った。戸沢村の方々で描いた絵灯篭が雪で作ったメインストリートを埋める。写真を拝見した際に「なんて素敵な企画なのだろう」と感じた。私たちも絵灯篭づくりに参加させていただき、班で２つの作品を完成させることができた。作品を完成させるまでに、班のみんなと協力できたことはもちろんのこと、この作品を実際に展示されるのを見たいという気持ちになった。自分の手で絵灯篭を作成することで、もう一度戸沢村に訪れたいと感じることができる、地域おこしになる企画だと思った。

さらに、１回目・２回目の２日間にわたって体験させていただいた角川太鼓では、伝統を守る素晴らしさや幅広い年齢層の人のつながりを身をもって実感することができた。角川太鼓は、山形県のサッカーチーム、モンテディオ山形のスタジアムでも披露したことがあると聞き、戸沢村を活性化させているものなのだと知った。また、今回私たちが練習・発表させていただいたのは、20年前から残る「またぎ太鼓」というものだ。20年もの間、守られ継承されてきた伝統を強く感じた。角川太鼓の皆さんは、小学生から大人まで年齢層が幅広かった。それも角川太鼓が継承され続ける理由なのではないかと考えた。さらに、年齢の違いを感じさせない演奏に大きな衝撃を受けた。

計４日間、戸沢村で本当に様々なことを体験させていただいた。そして様々な方が私たちを心温かく歓迎してくださった。その心の温かさが戸沢村の良さなのだと感じた。だが、課題もある。少子化問題が深刻化しており、戸沢村に訪れる人が少ないことだ。こんなに素晴らしい地域があることをもっと多くの人に知ってほしい。「雪回廊物語」や「角川太鼓」をもっと多くの人の目に耳に届いてほしい。そのために私にできることは何なのか。私個人でできることには限度があるとは思うが、この戸沢村での体験を発信することはできる。こんなことを戸沢村でやっているということを広めることはできる。フィールドラーニングは終了するが、これからも戸沢村に足を運び、交流は切らさずにいたいと思う。この経験を決して無駄にしたくない。

地域教育文化学部　Tさん

＜活動を通して学んだこと＞
12/14～12/15、1/11～1/12の計4日間、戸沢村の角川という地域を訪れて創作太鼓と里山暮らし体験を行った。今回の活動で印象に残ったことは、創作太鼓である角川太鼓の演奏体験と里山暮らしでしかできないような活動である。
角川太鼓は、20年前から角川地区に伝わる伝統芸能で小学生から大人までの幅広い方たちが交流を持ちながら伝承活動を行っている。自分たちで実際に演奏してみて感じたことは、リズムが独特で音にアクセントをつけるために全身を使って太鼓を叩くこと、自分一人で音を出すのではなく、周りの人と一緒に演奏して一つの曲を演奏しているという考えをもつことなどの技術的な面から協調性などについても改めて学び、考えさせられることが多かった。

里山暮らし体験で主に行ったことは、農家民宿に宿泊すること、雪山でかんじきトレッキングをすることなどだ。民宿に宿泊することでこの地域の特徴や暮らしぶり

などをうかがうことができる。かんじきトレッキングは、豪雪地帯だからこそ体験できることである。かんじきを履いたことも雪深い場所へ行った経験も無い私にとっては一歩踏み出すのも一苦労であった。その中でまたぎを生業としている方たちは狩猟をしているということを考えると、常に危険と隣合わせで動物を探しているのだということを実感することができた。

＜感想＞

この4日間の活動を通して強く思ったことは、暮らしている人数が少ないからといって閉鎖的な方たちが多いわけでなく、むしろ短期間しか滞在することしかできない私たちを温かく迎えてくださる優しく親切な方たちが多いということである。角川太鼓でお世話になった方はもちろん、民宿の方など地域の方の温かさに触れることができた。

＜地域に対する課題の探究と提案・解決策＞

戸沢村という地域に対する課題は、認知度が低いこととリピーターが少ないことであると考えた。

上記の課題の原因は、角川雪回廊物語や船下りなど魅力度の高いイベントが多いにもかかわらず、それに参加した人たちが外部に発信することがないことや一度訪れただけで満足してしまうことなどが挙げられる。

この課題に対する私たちが実現可能な解決策は、実際に訪れて体験してきた私たち山形大学の学生たちが同じ山形大学の学生に広めることであると考えた。そのために、八峰祭で角川太鼓を披露していただいたり、雪回廊に展示する絵灯篭の作成体験を実施することで、少しでもと戸沢村という地域に関心を持ってもらい、さらに、SNSを利用してより簡単にかつ広範囲に戸沢村に関する情報を拡散することである。

理学部　Aさん

私は最上郡戸沢村で行われた計4日間にわたるフィールドラーニングでの活動を通して普段の大学生活では得ることができない貴重な体験をすることができた。

まず、今回のフィールドワークの中心的な活動内容であった太鼓体験について述べる。私たちは角川太鼓を育てる会の方々による和太鼓指導の下、「またぎ太鼓」という曲を練習した。育てる会は小学生から大人までの幅広い年齢層のメンバーで構成されており、太鼓での地域交流を通して子供も大人も共に社会力・人間性を育んでいく「共育」をモットーに地域に伝わる伝統芸能を山形県内外の様々な地域へ発信していることを知り、地域PRと共に地域交流の活発化の意味も担う素晴らしい団体であると感じた。太鼓の演奏は複数人で行うものなので、周囲の音を聴き、タイミングを合わせる必要があった。また、体力も使うため、練習は困難を極めた。しかし、太鼓を打つときの重心移動やフォームから丁寧に指導してくださった地域の方々と学生同士の団結力の向上もあり、最終的には2日間という短い期間で大学生のみによる曲の演奏を育てる会の方々に披露することができた。地元の方にも発表を褒めていただき、私は大きな達成感を感じることができた。

次に、絵灯籠作りについて述べる。今年の2月に開催される第6回角川雪回廊物語という地域イベントにおいて展示する武者やキャラクターの描かれた絵灯籠を作成した。イラストの下書き・着色はもちろん、灯籠の木枠を作るための材木をのこぎりで切断する工程まで行った。それぞれの作業をメンバー全員で分担し、絵灯籠が1つの作品として完成できたこととその出来映えに満足することができた。

最後に、そば打ち体験について述べる。三左衛門蕎麦屋では小麦粉とそば粉を２対８の割合で合わせた二八粉を使って、そば作りを行った。二八粉に水を適切な量とタイミングで加えて生地を固める。生地を練り、亀裂や凹凸のない１つの塊にする。生地を正方形に引き延ばして均一な太さで麺を切る。どの作業も素人では難しく、職人の方の手本を見習っても簡単に習得できるようなものではなかった。私は身をもってそば職人の技術の高さを体感することができた。

他にもかんじきトレッキングや餅つきなど今まで経験したことのなかった活動を行うことができた。また、農家民宿の方の話から地域の方言や文化を学ぶことができた。今回の活動を通して特に印象に残ったことは、戸沢村地域の強い団結と人間的な温かさであった。人は十人十色で一人一人考え方も異なっているが、それを把握した上でうまく団体がまとまる事が大切であると強く感じた。　　貴重な体験をさせていただいた戸沢村の方々への感謝の気持ちを忘れず、学んだことをこれからの活動に生かしていきたいと思った。

医学部　Tさん

私は、戸沢村において、主に角川太鼓の活動と里山暮らし体験をしました。里山暮らし体験を具体的にみると、雪回廊物語の絵作り、かんじきトレッキング、もち作り体験、そば打ち体験などで、初めての経験であるものが多く様々なことを学べました。一つ一つ振り返ってみま

す。

まずは、角川太鼓についてです。1回目、2回目ともに2日目に練習を行いました。角川太鼓を育てる会の方々の指導のもと、最終的には「またぎ」という曲を完成させることができました。みんなで協力して一つのものを成し遂げるという団体競技ならではの難しさを実感し、成長することができました。また、地域の人たちとの関わりのなかで人々のあたたかさや地元への想いを知ることもでき、戸沢村への愛着がよりいっそう生まれてきました。地域内での深い関係がみてとれました。

次に、里山暮らし体験についてです。雪回廊物語の絵作りでは、ほぼ初対面である班員と役割分担を明確にして効率よく活動を行えました。色塗りが基本でしたが、最終的には素晴らしい作品を作ることができ、本番がとても楽しみになりました。

そして、そば打ちや餅つきの体験では、専門の方の深い知識や技術を身をもって体感できました。特にそば打ちでは、水の量を自分の手で確かめて感覚で決めているところに感銘を受けました。これを弟子に、そしてその弟子にというように受け継がれていくのだと思うととても興味深かったです。このような伝統を大事にするべきだと思います。

最後に、かんじきトレッキングでは、高く雪の積もる雪道をかんじきで歩く経験を初めてしました。昔の人の知恵を実感するとともに自然の豊かさを体感できました。今でも使われるものということは、それだけ有用であり必要不可欠なものだと思います。ウサギの足跡も見ることができ、雪山ならではの体験ができました。

今回の実習を通して、戸沢村の良さや課題をしることができました。地元の方達が精力的にかつどうしているとはいえ、少子高齢化を迎える今、人口減少、特に若い人の減少に悩んでいる様子を受けました。若い人たちを呼ぶにはどうしたら良いのか、これこそが私たちが考えるべきことなのではないかと思います。雪回廊物語のポスターの掲示や、文化祭での角川太鼓の招待などできることからはじめていきたいです。そして、今回学んだことを今後の生活に活かしていきたいです。

山形大学エリアキャンパスもがみ運営会議委員名簿

令和2年3月31日現在

山形大学

エリアキャンパスもがみキャンパス長	玉　手　英　利	小白川キャンパス長
教育開発連携支援センター	小　田　隆　治	教　授
人文社会科学部	松　本　邦　彦	教　授
地域教育文化学部（教育実践研究科）	江　間　史　明	教　授
理学部	栗　山　恭　直	教　授
医学部	石　井　邦　明	教　授
工学部	木　俣　光　正	教　授
農学部	斎　藤　昌　幸	助　教
教育・学生支援部	松　田　敦　子	学務課長
小白川キャンパス事務部	小　山　和　佳	教務課長

最上地域

新庄市教育委員会	高　野　　博	教育長
金山町教育委員会	阿　部　由里子	教育長職務執行者
最上町教育委員会	中　嶋　晴　幸	教育長
舟形町教育委員会	齊　藤　　渉	教育長
真室川町教育委員会	門　脇　　昭	教育長
大蔵村教育委員会	有　馬　眞　裕	教育長
鮭川村教育委員会	矢　口　末　吉	教育長
戸沢村教育委員会	市　川　重　保	教育長
北の妙創郷大学	佐　藤　雄　次	事務局長
高等学校長会	柿　﨑　則　夫	代表（新庄北高等学校長）
新庄東山焼弥瓶窯	涌　井　正　和	窯元
最上地方町村会	大　友　弘　克	事務局長
七所明神	叶　内　克　和	代表

オブザーバー

山形県最上総合支庁総務課連携支援室長	浅　沼　道　生
同　　総務課連携支援室主査	坂　本　健太郎

エリアキャンパスもがみ事務局

（大学事務局）

教育開発連係支援センター	阿　部　宇　洋
小白川キャンパス事務部	平　賀　久　義、前　田　佳　恵、佃　　美　穂、日　塔　理　紗

（最上事務局）

事務局長	岸　　隆　一
事務局員	澤　野　ひろみ

エリアキャンパスもがみ研究年報2019

エリアキャンパスもがみ　令和元年度　事業報告書

令和2年（2020年）3月31日
編　集　：　山形大学エリアキャンパスもがみ

エリアキャンパスもがみ

山形大学

事務局 山形大学教育開発連携支援センター
〒990-8560 山形市小白川町 1-4-12
TEL 023-628-4720 FAX 023-628-4836
E-mail acmogami@jm.kj.yamagata-u.ac.jp